

## 基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	学部設置							
フリガナ設置者	ガッコウホウジン ジョウシヨウガクエン 学校法人 常翔学園							
フリガナ大学の名称	セツナンダイガク 摂南大学 (Setsunan University)							
大学本部の位置	大阪府寝屋川市池田中町17番8号							
大学の目的	<p>摂南大学は、時代と地域の要請に基づき、深く専門の学術とその応用を教授研究するとともに、全人の育成を第一義として、人間力・実践力・統合力を養い、自らが課題を発見し、そして解決することができる知的専門職業人を育成し、もって社会の発展と学術・文化の向上をはかることを目的とする。</p>							
新設学部等の目的	<p>「農学部」は、総合科学としての農学を支える広範な基礎科学に関する知識・技能をもって、「農」「食」「栄養」に関する社会的諸課題を自ら発見し、主体的に解決する人間性豊かな専門職業人を養成することを目的とする。</p> <p>「農学部農業生産学科」は、生物や生産環境の科学的真理の解明および生物資源と農業生産技術の開発とその高度利用を追究し、環境への負荷が少なく、生産効率の高い農業生産を実現、および新技術の開発・普及に必要な知識・技術を身につけ社会に貢献できる人材を養成することを目的とする。</p> <p>「農学部応用生物科学科」は、生物・生命の諸現象と、その背後にある原理とメカニズムを、分子から個体、集団、生態系を含む視点で深く学び、身につけた広範な知識を基に、人類が直面している食料、生命、環境に関わる諸課題の解決に貢献できる、創造力の豊かな人材を養成することを目的とする。</p> <p>「農学部食品栄養学科」は、農学の学びを基盤として、食のプロセス（農産物の生産から加工・流通・消費まで）を体系的に理解し、食・栄養・健康・医療・食育の専門的知識・技能・態度を身につけ、地域の健康と心豊かな暮らしの実現に貢献できる人材を養成することを目的とする。</p> <p>「農学部食農ビジネス学科」は、農業や食料、食品産業に関する経済・経営・マーケティングなどの専門知識を身につけ、国内外に存在する食料・農業に関する社会経済的な諸課題の解決に向けて、それらの知識を理論的・実践的に活用して貢献できる人材を養成することを目的とする。</p>							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	農学部 【Faculty of Agriculture】 農業生産学科 【Department of Agricultural Science And Technology】	年	人	年次人	人	学士（農学） 【Bachelor of Agriculture】	令和2年4月 第1年次	大阪府枚方市 長尾峠町45番1号
	応用生物科学科 【Department of Applied Biological Sciences】	4	80	—	320	学士（農学） 【Bachelor of Agriculture】	令和2年4月 第1年次	
	食品栄養学科 【Department of Food Science and Human Nutrition】	4	80	—	320	学士（農学） 【Bachelor of Agriculture】	令和2年4月 第1年次	
	食農ビジネス学科 【Department of Agri-food Business】	4	100	—	400	学士（農学） 【Bachelor of Agriculture】	令和2年4月 第1年次	
	計		340	—	1,360			
同一設置者内における変更状況 (定員の移行, 名称の変更等)	別紙のとおり							

	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
		講義	演習	実習	計					
教育課程	農学部 農業生産学科	122科目	14科目	18科目	154科目	124単位				
	農学部 応用生物科学科	118科目	15科目	16科目	149科目	124単位				
	農学部 食品栄養学科	124科目	19科目	29科目	172科目	124単位				
	農学部 食農ビジネス学科	116科目	15科目	5科目	136科目	124単位				
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等		
			教授	准教授	講師	助教	計	助手		
	新設分			人	人	人	人	人	人	人
		農学部 農業生産学科	7 (6)	1 (1)	4 (4)	3 (3)	15 (14)	0 (0)	72 (38)	
		農学部 応用生物科学科	5 (5)	3 (3)	4 (4)	2 (2)	14 (14)	1 (1)	70 (38)	
		農学部 食品栄養学科	10 (10)	4 (4)	2 (1)	2 (2)	18 (17)	4 (4)	76 (40)	
		農学部 食農ビジネス学科	7 (7)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	66 (39)	
	計		29 (28)	12 (12)	11 (10)	7 (7)	59 (57)	5 (5)	— (—)	
	既設分	理工学部 生命科学科	9 (9)	2 (2)	3 (3)	2 (2)	16 (16)	0 (0)	107 (107)	
		理工学部 住環境デザイン学科	6 (6)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	119 (119)	
		理工学部 建築学科	9 (9)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	107 (107)	
		理工学部 機械工学科	7 (7)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	85 (85)	
		理工学部 電気電子工学科	9 (9)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	81 (81)	
		理工学部 都市環境工学科	7 (7)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	76 (76)	
		理工学部 基礎理工学機構	1 (1)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	
		外国語学部 外国語学科	18 (18)	10 (10)	9 (9)	0 (0)	37 (37)	0 (0)	106 (106)	
		経営学部 経営学科	7 (7)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	71 (71)	
		経営学部 経営情報学科	5 (5)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	73 (73)	
		薬学部 薬学科	20 (20)	15 (15)	14 (14)	23 (23)	72 (72)	3 (3)	54 (54)	
		法学部 法律学科	9 (9)	7 (7)	4 (4)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	83 (83)	
		経済学部 経済学科	8 (8)	11 (11)	1 (1)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	70 (70)	
		看護学部 看護学科	7 (7)	9 (9)	7 (7)	12 (12)	35 (35)	0 (0)	47 (47)	
		教務部 学習支援センター	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	3 (3)	
		教務部 教職支援センター	1 (1)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	
		教務部 教育イノベーションセンター	1 (1)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	
		学生部 スポーツ振興センター	1 (1)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	
		国際交流センター	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	
		計		125 (125)	89 (89)	50 (50)	37 (37)	301 (301)	3 (3)	— (—)
		合計		154 (153)	101 (101)	61 (60)	44 (44)	360 (358)	8 (8)	— (—)

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計	大学全体 図書館の主たる業務は外部委託による(委託先から図書館への派遣スタッフは17人)		
	事 務 職 員		140 人 (140)	49 人 (49)	189 人 (189)			
	技 術 職 員		11 (11)	0 (0)	11 (11)			
	図 書 館 専 門 職 員		4 (4)	17 (17)	21 (21)			
	そ の 他 の 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計		155 (155)	66 (66)	221 (221)			
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計			
	校舎敷地	133,444.83m <sup>2</sup>	0m <sup>2</sup>	0m <sup>2</sup>	133,444.83m <sup>2</sup>			
	運動場用地	191,234.28m <sup>2</sup>	0m <sup>2</sup>	0m <sup>2</sup>	191,234.28m <sup>2</sup>			
	小 計	324,679.11m <sup>2</sup>	0m <sup>2</sup>	0m <sup>2</sup>	324,679.11m <sup>2</sup>			
	そ の 他	24,632.60m <sup>2</sup>	0m <sup>2</sup>	0m <sup>2</sup>	24,632.60m <sup>2</sup>			
	合 計	349,311.71m <sup>2</sup>	0m <sup>2</sup>	0m <sup>2</sup>	349,311.71m <sup>2</sup>			
校 舎		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計			
		132,561.66m <sup>2</sup> (132,561.66m <sup>2</sup> )	0m <sup>2</sup> (0m <sup>2</sup> )	0m <sup>2</sup> (0m <sup>2</sup> )	132,561.66m <sup>2</sup> (132,561.66m <sup>2</sup> )			
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体		
	72室	52室	99室	16室 (補助職員0人)	34室 (補助職員0人)			
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数		食品栄養学科の講師については、2名で教員室1室を利用 助教・助手については、複数人で助手室(3室)を利用		
		農学部 農業生産学科		13室				
		農学部 応用生物科学科		13室				
		農学部 食品栄養学科		16室				
		農学部 食農ビジネス学科		12室				
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での共用分 図書 515,847冊 〔191,201冊〕 学術雑誌 3,282種 〔2,191種〕 視聴覚資料 12,222点
	農学部 農業生産学科	2,150 [250] (1,820 [220])	26 [10] (26 [10])	9 [9] (9 [9])	17 (17)	3,273 (3,197)	9 (0)	
	農学部 応用生物科学科	2,150 [250] (1,820 [220])	11 [6] (11 [6])	5 [5] (5 [5])	12 (12)			
	農学部 食品栄養学科	2,840 [240] (2,300 [200])	22 [5] (22 [5])	5 [5] (5 [5])	9 (9)	1,767 (1,765)	17 (17)	
	農学部 食農ビジネス学科	2,980 [280] (2,320 [220])	23 [6] (23 [6])	4 [4] (4 [4])	21 (21)	1,041 (1,041)	0 (0)	
	農学部/薬学部/看護学部	0 [0] (0 [0])	0 [0] (0 [0])	0 [0] (0 [0])	0 (0)	6,088 (6,088)	0 (0)	
	計	10,120 [1,020] (8,260 [860])	82 [27] (82 [27])	23 [23] (23 [23])	59 (59)	12,169 (12,091)	26 (17)	
図 書 館	面積		閲覧座席数		収納可能冊数		大学全体	
	8,169.05m <sup>2</sup>		1,176席		639,170冊			
体 育 館	面積		体育館以外のスポーツ施設の概要					
	7,416.47m <sup>2</sup>		該当なし					

経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	申請学部全体 図書購入費には、電子ジャーナルの利用料を含む
		教員1人当り研究費等		2,035千円	2,035千円	2,035千円	2,035千円	— 千円	— 千円	
		共同研究費等		10,000千円	10,000千円	10,000千円	10,000千円	— 千円	— 千円	
		図書購入費	63,167千円	14,123千円	14,933千円	10,000千円	10,000千円	— 千円	— 千円	
		設備購入費	1,809,854千円	126,983千円	18,667千円	0千円	0千円	— 千円	— 千円	
	学生1人当り納付金		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
		農業生産学科	1,650千円	1,500千円	1,500千円	1,500千円	— 千円	— 千円		
		応用生物科学科	1,650千円	1,500千円	1,500千円	1,500千円	— 千円	— 千円		
		食品栄養学科	1,680千円	1,530千円	1,530千円	1,530千円	— 千円	— 千円		
		食農ビジネス学科	1,350千円	1,200千円	1,200千円	1,200千円	— 千円	— 千円		
学生納付金以外の維持方法の概要				私立大学等経常費補助金、資産運用収入、雑収入等						

既設大学等の状況	大学の名称	摂南大学大学院								備考
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は学称号	定員超過率	開設年度	所在地	定員超過率は平成31年3月1日現在の暫定値。
	薬学研究科 博士課程	年	人	年次人	人		倍			
	医療薬学専攻	4	4	—	16	博士 (薬学)	0.81	平成24年度	大阪府枚方市 長尾峠町 45番1号	
	理工学研究科 博士前期課程						0.88		大阪府 寝屋川市 池田中町 17番8号	
	社会開発工学専攻	2	12	—	24	修士 (工学)	0.91	平成元年度		
	生産開発工学専攻	2	12	—	24	修士 (工学)	0.87	平成26年度		
	生命科学専攻	2	10	—	20	修士 (理学)	0.85	平成26年度		
	理工学研究科 博士後期課程						0.25			
	創生工学専攻	3	2	—	6	博士 (工学)	0.16	平成20年度		
	生命科学専攻	3	2	—	6	博士 (理学)	0.33	平成28年度		
	経済経営学研究科 修士課程						0.00			
	経済学専攻	2	5	—	10	修士 (経済学)	0.00	平成26年度		
	経営学専攻	2	5	—	10	修士 (経営学)	0.00	平成26年度		
	法学研究科 修士課程						0.20			
	法律学専攻	2	5	—	10	修士 (法学)	0.20	平成9年度		
	国際言語文化研究科 修士課程						0.20			
	国際言語文化専攻	2	5	—	10	修士 (文学)	0.20	平成11年度		
	看護学研究科 修士課程						0.41		大阪府枚方市 長尾峠町 45番1号	
	看護学専攻	2	6	—	12	修士 (看護学)	0.41	平成28年度		

大学の名称	摂南大学									備考
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
	年	人	年次人	人		倍				
理工学部						1.01		大阪府 寝屋川市 池田中町 17番8号	定員超過率は平成31年3月1日現在の暫定値。	
生命科学科	4	90	3年次 5	370	学士 (理学)	0.99	平成22年度			
住環境デザイン学科	4	70	3年次 5	290	学士 (工学)	1.03	平成22年度			
建築学科	4	70	3年次 5	290	学士 (工学)	1.04	昭和50年度			
機械工学科	4	110	3年次 5	450	学士 (工学)	1.02	昭和50年度			
電気電子工学科	4	90	3年次 5	370	学士 (工学)	1.00	昭和50年度			
都市環境工学科	4	70	3年次 5	290	学士 (工学)	1.02	平成22年度			
外国語学部						1.07				
外国語学科	4	220	3年次 5	890	学士 (文学)	1.07	昭和57年度			
経営学部						1.06				
経営学科	4	170	3年次 4	688	学士 (経営学)	1.07	平成18年度			
経営情報学科	4	100	3年次 4	408	学士 (経営学)	1.06	昭和57年度			
薬学部						1.03		大阪府枚方市 長尾峠町 45番1号		
薬学科(6年制)	6	220	—	1,320	学士 (薬学)	1.03	平成18年度			
法学部						1.05		大阪府 寝屋川市 池田中町 17番8号		
法律学科	4	250	3年次 5	1,010	学士 (法学)	1.05	昭和63年度			
経済学部						1.05				
経済学科	4	250	3年次 4	1,008	学士 (経済学)	1.05	平成22年度			
看護学部						1.03		大阪府枚方市 長尾峠町 45番1号		
看護学科	4	100	—	400	学士 (看護学)	1.03	平成24年度			

既設大学等の状況	大学の名称	大阪工業大学大学院								備考	
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
	工学研究科 博士前期課程	年	人	年次人	人		倍				定員超過率は平成31年3月1日現在の暫定値。  平成29年4月から、工学研究科 建築学専攻、生体医工学専攻の博士前期課の学生募集を停止し、在学生の修了等を待って廃止。  平成29年4月から、工学研究科 都市デザイン工学専攻、機械工学専攻、生体医工学専攻、電気電子工学専攻、応用化学専攻の博士後期課程の学生募集を停止し、在学生の修了等を待って廃止。
	建築学専攻	2	—	—	—	修士(工学)	—	昭和40年度	大阪府大阪市 旭区大宮 五丁目 16番1号		
	生体医工学専攻	2	—	—	—	修士(工学)	—	平成19年度			
	建築・都市デザイン工学専攻	2	30	—	60	修士(工学)	0.88	平成29年度			
	電気電子・機械工学専攻	2	50	—	100	修士(工学)	1.21	平成29年度			
	化学・環境・生命工学専攻	2	30	—	60	修士(工学)	1.21	平成29年度			
	工学研究科 博士後期課程						0.55		大阪府大阪市 北区茶屋町 1番45号		
	都市デザイン工学専攻	3	—	—	—	博士(工学)	—	昭和42年度			
	機械工学専攻	3	—	—	—	博士(工学)	—	昭和42年度			
	生体医工学専攻	3	—	—	—	博士(工学)	—	平成19年度			
	電気電子工学専攻	3	—	—	—	博士(工学)	—	昭和42年度			
	応用化学専攻	3	—	—	—	博士(工学)	—	昭和52年度			
	建築・都市デザイン工学専攻	3	2	—	6	博士(工学)	0.33	平成29年度			
	電気電子・機械工学専攻	3	2	—	6	博士(工学)	0.66	平成29年度			
	化学・環境・生命工学専攻	3	2	—	6	博士(工学)	0.66	平成29年度			
	ロボティクス&デザイン工学研究科 博士前期課程						1.13		大阪府大阪市 北区茶屋町 1番45号		
	ロボティクス&デザイン工学専攻	2	30	—	60	修士(工学)	1.13	平成29年度			
	ロボティクス&デザイン工学研究科 博士後期課程						0.16		大阪府枚方市 北山 一丁目 79番1号		
	ロボティクス&デザイン工学専攻	3	2	—	6	博士(工学)	0.16	平成29年度			
	情報科学研究科 博士前期課程						0.79		大阪府枚方市 北山 一丁目 79番1号		
	情報科学専攻	2	40	—	80	修士(情報学)	0.79	平成12年度			
	情報科学研究科 博士後期課程						0.00		大阪府枚方市 北山 一丁目 79番1号		
	情報科学専攻	3	5	—	15	博士(情報学)	0.00	平成14年度			
	知的財産研究科 専門職学位課程						1.04		大阪府大阪市 旭区大宮 五丁目 16番1号		
	知的財産専攻	2	30	—	60	知的財産修士(専門職)	1.04	平成17年度			

大学の名称	大阪工業大学									備考
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
工学部		年	人	年次人	人		倍			定員超過率は平成31年3月1日現在の暫定値。  平成29年4月から、工学部空間デザイン学科、ロボット工学科の学生募集及び平成31年4月からの3年次編入学募集を停止し、在学生の卒業等を待って廃止。  平成29年4月から、入学定員を次のとおり変更。 工学部 都市デザイン工学科 90→100(+10) 建築学科 140→150(+10) 機械工学科 130→140(+10) 電気電子システム工学科 115→125(+10) 電子情報システム工学科 100→110(+10) 応用化学科 120→130(+10) 環境工学科 70→75(+5) 生命工学科 65→70(+5) 情報科学部 コンピュータ科学科 95→105(+10) 情報システム学科 95→105(+10) 情報メディア学科 95→105(+10) 情報ネットワーク学科 95→105(+10)  平成31年4月から、次のとおり名称変更。 工学部 電子情報通信工学科 → 電子情報システム工学科  情報科学部 コンピュータ科学科 → 情報知能学科 情報ネットワーク学科 → ネットワークデザイン学科
都市デザイン工学科	4	100	3年次5	400	学士(工学)	1.00	昭和24年度	大阪府大阪市旭区大宮五丁目16番1号		
空間デザイン学科	4	—	—	—	学士(工学)	—	平成18年度			
建築学科	4	150	3年次5	600	学士(工学)	1.02	昭和24年度			
機械工学科	4	140	3年次5	560	学士(工学)	0.98	昭和25年度			
ロボット工学科	4	—	—	—	学士(工学)	—	平成22年度			
電気電子システム工学科	4	125	3年次5	500	学士(工学)	1.01	昭和24年度			
電子情報システム工学科	4	110	3年次5	440	学士(工学)	1.02	昭和34年度			
応用化学科	4	130	3年次5	520	学士(工学)	0.99	昭和33年度			
環境工学科	4	75	3年次5	305	学士(工学)	1.03	平成18年度			
生命工学科	4	70	3年次5	285	学士(工学)	0.99	平成22年度			
ロボティクス&デザイン工学部						1.01		大阪府大阪市北区茶屋町1番45号		
ロボット工学科	4	90	3年次5	275	学士(工学)	1.00	平成29年度			
システムデザイン工学科	4	90	3年次5	275	学士(工学)	1.04	平成29年度			
空間デザイン学科	4	100	3年次5	305	学士(工学)	1.00	平成29年度			
情報科学部						1.01		大阪府枚方市北山一丁目79番1号		
情報知能学科	4	105	3年次5	420	学士(情報学)	0.99	平成8年度			
情報システム学科	4	105	3年次5	420	学士(情報学)	0.99	平成8年度			
情報メディア学科	4	105	3年次5	420	学士(情報学)	1.02	平成14年度			
ネットワークデザイン学科	4	105	3年次5	420	学士(情報学)	1.03	平成19年度			
知的財産学部						1.05		大阪府大阪市旭区大宮五丁目16番1号		
知的財産学科	4	140	3年次10	580	学士(知的財産学)	1.05	平成15年度			



既設大学等の状況	大学の名称	広島国際大学大学院									備考
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
	看護学研究科 博士前期課程 看護学専攻	2年	10人	—	20人	修士 (看護学)	0.00倍	平成15年度	広島県呉市 広古新開 五丁目 1番1号	定員超過率は平成31年3月1日現在の暫定値。  平成31年4月から、大学院心理科学研究科コミュニケーション学専攻の修士課程の学生募集を停止し、在学生の修了等を待つて廃止。	
	看護学研究科 博士後期課程 看護学専攻	3	3	—	9	博士 (看護学)	0.00	平成24年度			
	医療・福祉科学研究科 博士前期課程 医療工学専攻	2	10	—	20	修士 (医療工学)	1.05	平成21年度	広島県東広島市 黒瀬学園台 555番地36		
	医療・福祉科学研究科 博士後期課程 医療工学専攻	3	2	—	6	博士 (医療工学)	1.66	平成21年度			
	医療・福祉科学研究科 修士課程 医療福祉学専攻	2	5	—	10	修士 (医療福祉学)	0.30	平成21年度			
	医療経営学専攻	2	5	—	10	修士 (医療経営学)	0.20	平成21年度			
	心理科学研究科 博士後期課程 臨床心理学専攻	3	2	—	6	博士 (臨床心理学)	0.16	平成21年度			
	心理科学研究科 修士課程 コミュニケーション学専攻	2	—	—	—	修士 (コミュニケーション学)	—	平成21年度			
	心理科学研究科 専門職学位課程 実践臨床心理学専攻	2	20	—	40	臨床心理修士 (専門職)	0.52	平成21年度			広島県広島市中区幟町 1番5号
	薬学研究科 博士課程 医療薬学専攻	4	2	—	8	博士 (薬学)	0.62	平成24年度	広島県呉市 広古新開 五丁目 1番1号		

既設大学等の状況	大学の名称	広島国際大学								備考
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は学称号	定員超過率	開設年度	所在地	定員超過率は平成31年3月1日現在の暫定値。
	保健医療学部	年	人	年次人	人		倍			
	診療放射線学科	4	70	—	280	学士 (診療放射線学)	1.07	平成10年度	広島県東広島市 黒瀬学園台 555番地36	平成25年4月から、保健医療学部 臨床工学科及び総合リハビリテーション学科の学生募集を停止し、在学生の卒業等を待って廃止。
	臨床工学科	4	—	—	—	学士 (臨床工学)	—	平成10年度		
	総合リハビリテーション学科	4	—	—	—	学士 (総合リハビリテーション学)	—	平成23年度		
	医療技術学科 臨床工学専攻 臨床検査学専攻 救急救命学専攻	4	130	—	520	学士 (臨床工学) (臨床検査学) (救命救急学)	1.01	平成25年度		
	総合リハビリテーション学部						1.06			平成27年4月から、心理科学部臨床心理学科、コミュニケーション心理学科の学生募集及び平成29年4月からの3年次編入学募集を停止し、在学生の卒業等を待って廃止。
	リハビリテーション学科 理学療法学専攻 作業療法学専攻 言語聴覚療法学専攻	4	130	—	520	学士 (理学療法学) (作業療法学) (言語聴覚療法学)	1.11	平成25年度		
	リハビリテーション支援学科 義肢装具学専攻	4	30	—	120	学士 (義肢装具学)	0.84	平成25年度		
	医療福祉学部						0.60			
	医療福祉学科 医療福祉学専攻 介護福祉学専攻 保育学専攻	4	100	3年次10	420	学士 (医療福祉学)	0.60	平成10年度		
	医療経営学部						0.84		広島県広島市中区 鞆町 1番5号	
	医療経営学科	4	90	—	360	学士 (医療経営学)	0.84	平成23年度		
	心理科学部						—		広島県東広島市 黒瀬学園台 555番地36	
	臨床心理学科	4	—	—	—	学士 (臨床心理学)	—	平成13年度		
	コミュニケーション心理学科	4	—	—	—	学士 (コミュニケーション心理学)	—	平成23年度		
	心理学部						0.95			
	心理学科	4	90	3年次10	380	学士 (心理学)	0.95	平成27年度		
	看護学部						1.04		広島県呉市 広古新開 五丁目 1番1号	
	看護学科	4	120	3年次10	500	学士 (看護学)	1.04	平成15年度		
	薬学部						0.87			
	薬学科(6年制)	6	120	—	720	学士 (薬学)	0.87	平成18年度		
	医療栄養学部						0.94			
	医療栄養学科	4	60	—	240	学士 (医療栄養学)	0.94	平成26年度		

附属施設の概要	<p>名称：テクノセンター  目的：工学分野教育  所在地：大阪府寝屋川市池田中町17番8号  設置年月：平成11年4月  規模等：面積 691.81㎡</p>	
	<p>名称：薬用植物園  目的：薬学分野教育  所在地：京都府八幡市八幡南山87  設置年月：昭和57年4月  規模等：面積9,000.00㎡</p>	
	<p>名称：臨床薬学教育研究センター  目的：薬学分野教育  所在地：大阪府枚方市長尾峠町45番1号  設置年月：平成20年4月  規模等：面積1,584.59㎡</p>	
	<p>名称：農場  目的：農学分野教育  所在地：京都府八幡市美濃山一ノ谷1番  設置年月：平成32年4月  規模等：面積15,632.60㎡</p>	

## 同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）

広島国際大学

健康スポーツ学部 健康スポーツ学科	( 70) (平成31年3月認可申請)
健康科学部 医療福祉学科	( 100) (平成31年4月届出)
健康科学部 医療経営学科	( 90) (平成31年4月届出)
健康科学部 心理学科	( 100) (平成31年4月届出)
健康科学部 医療栄養学科	( 60) (平成31年4月届出)
保健医療学部 救急救命学科	( 50) (平成31年4月届出)
総合リハビリテーション学部 リハビリテーション学科〔定員増〕	( 50) (令和元年6月認可)
総合リハビリテーション学部 リハビリテーション支援学科(廃止)	(△30) (令和元年7月届出予定)
※平成32年4月学生募集停止	
医療福祉学部 医療福祉学科(廃止)	(△100) (令和元年7月届出予定)
(3年次編入学定員)	(△10) (令和元年7月届出予定)
※平成32年4月学生募集停止	
(3年次編入学定員は平成34年4月学生募集停止)	
医療経営学部 医療経営学科(廃止)	(△90) (令和元年7月届出予定)
※平成32年4月学生募集停止	
心理学部 心理学科(廃止)	(△90) (令和元年7月届出予定)
(3年次編入学定員)	(△10) (令和元年7月届出予定)
※平成32年4月学生募集停止	
(3年次編入学定員は平成34年4月学生募集停止)	
医療栄養学部 医療栄養学科(廃止)	(△60) (令和元年7月届出予定)
※平成32年4月学生募集停止	
保健医療学部 医療技術学科〔定員減〕	(△30) (令和元年6月認可)

## 教育課程等の概要

(農学部 農業生産学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目 共通群	農学概論	1前	2			○			5						兼10	オムニバス
	農学基礎演習	1通	1				○		3	1	1	1				集中・共同
	グローバル農業演習	2通		2			○		1						兼1	集中・共同
	スマート農業演習	3通		1			○		2							共同
	農業気象学	3前		2		○									兼1	
	森林生態学	4前		2		○									兼1	
	農業知的財産	4前		2		○									兼2	オムニバス
	小計(7科目)		-	3	9	0	-			6	1	1	1	0	兼15	
専門コア群 基礎系	化学	1前		2		○									兼1	
	化学演習	1前		1			○								兼1	
	生物学	1後		2		○					1					
	生物学演習	1後		1			○				1					
	物理学	1後		2		○									兼1	
	生物統計学	2前		2		○			1							
	小計(6科目)		-	0	10	0	-			1	0	1	0	0	兼2	
専門コア群 農業植物・栽培系	植物遺伝学	1後		2		○						1				
	作物機能形態学	1後		2		○			1							
	植物生理学	1後		2		○					1					
	植物育種学	2前	2			○			1							
	作物学	2前	2			○			1							
	野菜花卉園芸学	2前	2			○			1							
	植物育種方法論	2後		2		○			1							
	資源作物学	2後		2		○									兼1	
	果樹園芸学	2後		2		○					1					
	耕地生態学	3前		2		○			1							
	施設園芸学	3前		2		○			1							
小計(11科目)		-	6	16	0	-			4	0	2	0	0	兼1		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	農業生物・環境系 専門コア群	植物病理学	2前	2			○			1						
		応用昆虫学	2前	2			○			1						
		土壌学	2前	2			○			1						
		植物感染機構学	2後		2		○			1						
		昆虫生理生態学	2後		2		○			1						
		植物無機栄養学	2後		2		○			1						
		多様性生物学	3前		2		○					1				
		土壌微生物学	3前		2		○			1						
		植物病害管理学	3後		2		○					1				
		害虫防除論	3後		2		○					1				
		雑草管理学	3後		2		○									兼1
小計（11科目）		—	6	16	0	—			3	0	2	0	0	兼1		
実験・実習系	化学実験	1前	2					○	3		2	3		兼1	ムニバス 共同(一部)	
	生物学実験	1後	2					○	3	1	1	3		兼1	ムニバス 共同(一部)	
	物理学実験	3後		2				○						兼1		
	農場実習	2後		1				○	4	1	1	1		兼1	集中・共同	
	農業生産学基礎実験Ⅰ	2前	2					○	3		3	2		兼1	ムニバス 共同(一部)	
	農業生産学基礎実験Ⅱ	2後	2					○	3		3	2		兼1	ムニバス 共同(一部)	
	農業生産学専門実験	3前	2					○	3		3	2		兼1	ムニバス 共同(一部)	
	農業生産学実習Ⅰ	2前	2					○	4	1	1	1		兼1	共同	
農業生産学実習Ⅱ	2後	2					○	4	1	1	1		兼1	共同		
小計（9科目）		—	14	3	0	—			7	1	4	3	0	兼1		
専門総合群	応用生物系	分子からみた植物の働き	3前		2		○								兼1	
		ゲノムと生命	3前		2		○								兼1	
		生物の多様性と進化	3前		2		○								兼4	ムニバス
		動物とくらし	3後		2		○								兼1	
		微生物とくらし	3後		2		○								兼1	
		海洋生物とくらし	4前		2		○								兼1	
小計（6科目）		—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	兼6		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	食品栄養系	食品学入門	3前	2		○									兼1	
		食品の安全性	3前	2		○									兼1	
		旬の食材と薬膳	3前	2		○									兼1	
		栄養とスポーツ	3後	2		○									兼1	
		栄養と健康	3後	2		○									兼1	
		病気の予防と食生活	4前	2		○									兼1	
	小計(6科目)	—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	兼6		
	食農ビジネス系	食と農の倫理を学ぶ	3前		2		○								兼2	オムニバス 共同(一部)
		食と農の経済を学ぶ	3前		2		○								兼1	
		食と農の共生を考える	3後		2		○								兼1	
		フードシステムを学ぶ	3後		2		○								兼1	
		農業の多様性を学ぶ	3後		2		○								兼1	
		食と農の歴史を学ぶ	4前		2		○								兼1	
	小計(6科目)	—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	兼6		
	ゼミ・卒業研究	基礎ゼミナール	1前	1				○		7	1	4				
農業生産学研究		3後	1				○		7	1	4					
卒業研究		4通	6				○		7	1	4					
小計(3科目)		—	8	0	0	—			7	1	4	0	0	0		

科目 区分	授業科目の名称	配当 年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
教養科目	共通系	大学教養入門	1前	2				○				1			兼5	集中・共同
		小計（1科目）	—	2	0	0	—			0	0	1	0	0	兼5	
	語学系	日本語表現法	1前		1		○								兼1	
		基礎英語Ⅰa	1前		1		○								兼1	
		基礎英語Ⅰb	1前		1		○								兼1	
		基礎英語Ⅱa	1後		1		○								兼1	
		基礎英語Ⅱb	1後		1		○								兼1	
		実践英語Ⅰ	2前		1		○								兼1	
		実践英語Ⅱ	2後		1		○								兼1	
		英語基礎会話a	3前		1		○								兼1	
		英語基礎会話b	3後		1		○								兼1	
		中国語Ⅰ	2前		1		○								兼1	
		中国語Ⅱ	2後		1		○								兼1	
		海外語学研修	2前		2				○						兼1	集中
		小計（12科目）	—	0	13	0	—			0	0	0	0	0	兼7	
	情報系	情報リテラシーⅠ	1前	1				○							兼1	
		情報リテラシーⅡ	1後		1			○							兼1	
		小計（2科目）	—	1	1	0	—			0	0	0	0	0	兼1	
	体育系	スポーツ科学Ⅰ	1前		1				○						兼4	
		スポーツ科学Ⅱ	1後		1				○						兼4	
	小計（2科目）	—	0	2	0	—			0	0	0	0	0	兼4		
人文系	心理学	1前		2		○								兼1		
	倫理学	1前		2		○								兼1		
	哲学から学ぶ	1前		2		○								兼1		
	地誌学	1後		2		○								兼1		
	人文地理学	1後		2		○								兼1		
	文学から学ぶ	1後		2		○								兼1		
	文化人類学	2前		2		○								兼1		
	女性学	2前		2		○								兼1		
	小計（8科目）	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	兼6		



科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配 当 年 次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
教目 養科	社会系	ボランティア活動論	1 前	2		○									兼 1
		経済学入門	1 前	2		○									兼 1
		日本の政治	1 前	2		○									兼 1
		法学入門	1 後	2		○									兼 1
		経営学入門	1 後	2		○									兼 1
		観光学	1 後	2		○									兼 1
		日本国憲法	2 前	2		○									兼 1
	小計（7科目）	—	0	14	0	—			0	0	0	0	0	兼 7	
	自然系	教養数学	1 前		2		○								兼 1
		生命倫理	1 後	2			○								兼 1
		生物と環境	2 前		2		○								兼 1
		地学	3 前		2		○								兼 1
		地学実験	3 前		2				○						兼 2
	小計（5科目）	—	2	8	0	—			0	0	0	0	0	兼 6	
	キャリア系	キャリアデザインⅠ	1 前	1				○							兼 1
		キャリアデザインⅡ	2 後		1			○							兼 1
		数的能力開発	2 後		1		○								兼 1
		インターンシップ	3 通		2				○						兼 1 集中※講義
	小計（4科目）	—	1	4	0	—			0	0	0	0	0	兼 2	
	外国人留学生対象科目	日本事情 FⅠ	1・2・3・4 前		2		○								兼 1
日本事情 FⅡ		1・2・3・4 後		2		○								兼 1	
日本語読解 FⅠ		1・2・3・4 前		1		○								兼 1	
日本語読解 FⅡ		1・2・3・4 後		1		○								兼 1	
日本語文法 FⅠ		1・2・3・4 前		1		○								兼 1	
日本語文法 FⅡ		1・2・3・4 後		1		○								兼 1	
日本語表現作文 FⅠ		1・2・3・4 前		1		○								兼 1	
日本語表現作文 FⅡ		1・2・3・4 後		1		○								兼 1	
日本語総合 FⅠ		1・2・3・4 前		1		○								兼 1	
日本語総合 FⅡ		1・2・3・4 後		1		○								兼 1	
専門日本語 FⅠ		1・2・3・4 前		1		○								兼 1	
専門日本語 FⅡ		1・2・3・4 後		1		○								兼 1	
日本語会話 FⅠ		1・2・3・4 前		1		○								兼 1	
日本語会話 FⅡ		1・2・3・4 後		1		○								兼 1	
小計（14科目）	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	兼 4		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
教目養科	帰国学生対象科目	日本事情 R I		2		○									兼1
		日本事情 R II		2		○									兼1
		日本語読解 R		1		○									兼1
		日本語文法 R		1		○									兼1
		日本語表現作文 R		1		○									兼1
		日本語総合 R		1		○									兼1
		専門日本語 R		1		○									兼1
		日本語会話 R		1		○									兼1
		小計 (8科目)	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	兼4
教職課程の設置により開設する授業科目	職業指導 I	1・2・3・4 前			2	○								兼1	
	職業指導 II	1・2・3・4 後			2	○								兼1	
	理科教育法 I	2 後			2	○								兼1	
	理科教育法 II	3 前			2	○								兼1	
	理科教育法 III	3 後			2	○								兼1	
	理科教育法 IV	3 後			2	○								兼1	
	農業科教育法 I	3 前			2	○								兼1	
	農業科教育法 II	3 後			2	○								兼1	
	教育原理	2前又は後			2	○								兼1	
	教師論	1 前			2	○								兼1	
	教育経営論	3前又は後			2	○								兼1	
	教育社会学	3前又は後			2	○								兼1	
	教育心理学	1前又は後			2	○								兼1	
	特別支援教育論	3前又は後			2	○								兼1	
	教育課程論	2前又は後			2	○								兼1	
	道徳教育論	3前又は後			2	○								兼1	
	特別活動・総合的な学習の時間の理論と指導法	1前又は後			2	○								兼1	
	教育方法論	2前又は後			2	○								兼1	
	生徒指導論(進路指導を含む)	2前又は後			2	○								兼1	
	教育相談(カウンセリングの基礎を含む)	3前又は後			2	○								兼1	
	教育実習 I	3前又は後			1	○								兼5 共同	
	教育実習 II	4 通			2			○						兼5 共同※講義	
	教育実習 III	4 通			4			○						兼5 共同※講義	
教職実践演習(中・高)	4 後			2			○						兼5 共同		
地域連携教育活動 I	2前又は後			2			○						兼5 共同		
地域連携教育活動 II	2前又は後			2			○						兼5 共同		
小計 (26科目)	—	0	0	53	—			0	0	0	0	0	兼9		
合計 (154科目)		—	43	174	53	—		7	1	4	3	0	兼72		
学位又は称号		学士 (農学)			学位又は学科の分野				農学関係						

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
<p>【卒業要件】</p> <p>本大学に4年以上在学し、所定の授業科目について、必修科目43単位、選択科目81単位以上の合計124単位以上修得し、かつ入学時からの累積GPAが1.3以上であること。</p>	1 学年の学期区分	2 期
<p>【履修方法】</p> <p>1 専門科目の履修方法</p> <p>必修科目37単位、選択科目61単位以上、合計98単位以上を修得すること。ただし、つぎの条件のすべてを満たすものとする。</p>	1 学期の授業期間	1 5 週
<p>(1) 専門コア群の基礎系から6単位以上を修得。</p> <p>(2) 専門コア群の農業植物・栽培系および農業生物・環境系から36単位以上(必修12単位を含む)を修得。</p>	1 時限の授業時間	9 0 分
<p>(3) 専門総合群から20単位以上(応用生物系、食品栄養系、食農ビジネス系から各4単位以上を含む)を修得。</p> <p>2 教養科目の履修方法</p> <p>必修科目6単位、選択科目20単位以上、合計26単位以上を修得すること。ただし、つぎの条件のすべてを満たすものとする。</p> <p>(1) 語学系から6単位以上を修得。</p> <p>(2) 人文系から2単位以上を修得。</p> <p>(3) 社会系から2単位以上を修得。</p> <p>(4) 自然系から4単位以上(必修2単位を含む)を修得。</p> <p>(履修科目の登録上の上限：48単位(年間))</p>	/	/

## 教育課程等の概要

(農学部応用生物科学科)

科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配当 年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考			
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験 ・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手				
専門科目	共通群	農学概論	1前	2			○			4						兼11	オムニバス
		農学基礎演習	1通	1				○								兼6	集中・共同
		グローバル農業演習	2通		2			○								兼2	集中・共同
		スマート農業演習	3通		1			○								兼2	共同
		農業気象学	3前		2			○								兼1	
		森林生態学	4前		2			○								兼1	
		農業知的財産	4前		2			○								兼2	オムニバス
	小計(7科目)		-	3	9	0			-	4	0	0	0	0	0	兼20	
専門コア群	基礎系	化学	1前		2			○					1				
		化学演習	1前		1				○				1				
		生物学	1後		2			○					1				
		生物学演習	1後		1				○				1				
		物理学	1後		2			○								兼1	
		生物統計学	2前		2			○								兼1	
	小計(6科目)		-	0	10	0			-	0	0	2	0	0	0	兼2	
植物系	バイオテクノロジー	1前		2			○					1					
	生物系統学	1後			2		○					4				オムニバス	
	ゲノム分子生物学	2前		2			○					1					
	植物遺伝子工学	2前		2			○					1					
	ゲノム機能学	2後			2		○						1				
	植物分子生理学	2後			2		○						1				
	細胞生物学	2後		2			○					1					
小計(7科目)		-	8	6	0			-	5	0	2	0	0	0			
微生物系	生化学	1後		2			○					1					
	応用微生物学	2前		2			○					1					
	生態学	2前		2			○					1					
	微生物工学	2後			2		○					1					
	共生ウイルス学	2後		2			○					1					
	植物共生微生物学	3前			2		○						1				
小計(6科目)		-	8	4	0			-	1	2	1	0	0	0			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	動物・海洋生物系	産業動物学	2 前	2			○			1						共同
		動物機能科学	2 後	2			○			1						
		生体防御学	3 前		2		○					1				
		生物情報学	3 前		2		○			1						
		バイオインフォマティクス演習	3 後		2			○					3			
		海洋動物学	2 前	2			○			1						
		海洋生物機能学	2 後		2		○			1						
		海洋生物化学	3 前		2		○				1					
		水圏生物利用学	3 後		2		○			1						
		応用藻類学	3 後		2		○				1					
	小計（10科目）	—	6	14	0	—			2	1	3	0	0	0		
	実験・実習系	化学実験	1 前	2					○	3	2	1	2	1	兼1 他コバス 共同(一部) 他コバス 共同(一部) 他コバス 共同(一部) 他コバス 共同(一部) 他コバス 共同(一部)	
		生物学実験	1 後	2					○	2	1	3	2	1		
		物理学実験	3 後		2				○							
		応用生物科学基礎実験Ⅰ	2 前	2					○	2	1	2	2	1		
		応用生物科学基礎実験Ⅱ	2 後	2					○	3	1	2	2	1		
		応用生物科学専門実験Ⅰ	3 前	2					○	3	1	2	2	1		
		応用生物科学専門実験Ⅱ	3 後	2					○	2	2	2	2	1		
	小計（7科目）	—	12	2	0	—			5	3	4	2	1	兼1		
専門総合群	農業生産系	園芸の技術	3 前		2		○								兼1	
		植物の病気	3 前		2		○								兼1	
		植物の改良	3 前		2		○								兼1	
		昆虫とくらし	3 後		2		○								兼1	
		作物とエネルギー生産	3 後		2		○								兼1	
		生きている土壌	4 前		2		○								兼1	
	小計（6科目）	—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	兼6		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	食品栄養系	食品学入門	3前	2		○									兼1	
		食品の安全性	3前	2		○									兼1	
		旬の食材と薬膳	3前	2		○									兼1	
		栄養とスポーツ	3後	2		○									兼1	
		栄養と健康	3後	2		○									兼1	
		病気の予防と食生活	4前	2		○									兼1	
	小計(6科目)	—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	兼6		
	食農ビジネス系	食と農の倫理を学ぶ	3前		2		○								兼2	オムニバス 共同(一部)
		食と農の経済を学ぶ	3前		2		○								兼1	
		食と農の共生を考える	3後		2		○								兼1	
		フードシステムを学ぶ	3後		2		○								兼1	
		農業の多様性を学ぶ	3後		2		○								兼1	
		食と農の歴史を学ぶ	4前		2		○								兼1	
小計(6科目)	—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	兼6			
ゼミ・卒業研究	基礎ゼミナール	1前	1				○		5	3	4					
	応用生物科学研究	3後	1				○		5	3	4					
	卒業研究	4通	6				○		5	3	4					
	小計(3科目)	—	8	0	0	—			5	3	4	0	0	0		

科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配当 年次	単位数			授 業 形 態			専任教員等の配置					備 考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
教養科目	共通系	大学教養入門	1 前	2				○				1			兼 5	集中・共同
		小計（1科目）	—	2	0	0	—			0	0	1	0	0	兼 5	
	語学系	日本語表現法	1 前		1		○								兼 1	
		基礎英語Ⅰ a	1 前		1		○								兼 1	
		基礎英語Ⅰ b	1 前		1		○								兼 1	
		基礎英語Ⅱ a	1 後		1		○								兼 1	
		基礎英語Ⅱ b	1 後		1		○								兼 1	
		実践英語Ⅰ	2 前		1		○								兼 1	
		実践英語Ⅱ	2 後		1		○								兼 1	
		英語基礎会話 a	3 前		1		○								兼 1	
		英語基礎会話 b	3 後		1		○								兼 1	
		中国語Ⅰ	2 前		1		○								兼 1	
		中国語Ⅱ	2 後		1		○								兼 1	
		海外語学研修	2 前		2				○						兼 1	集中
		小計（12科目）	—	0	13	0	—			0	0	0	0	0	兼 6	
	情報系	情報リテラシーⅠ	1 前	1				○							兼 1	
		情報リテラシーⅡ	1 後		1			○							兼 1	
		小計（2科目）	—	1	1	0	—			0	0	0	0	0	兼 1	
	体育系	スポーツ科学Ⅰ	1 前		1				○						兼 4	
		スポーツ科学Ⅱ	1 後		1				○						兼 4	
	小計（2科目）	—	0	2	0	—			0	0	0	0	0	兼 4		
人文系	心理学	1 前		2		○								兼 1		
	倫理学	1 前		2		○								兼 1		
	哲学から学ぶ	1 前		2		○								兼 1		
	地誌学	1 後		2		○								兼 1		
	人文地理学	1 後		2		○								兼 1		
	文学から学ぶ	1 後		2		○								兼 1		
	文化人類学	2 前		2		○								兼 1		
	女性学	2 前		2		○								兼 1		
	小計（8科目）	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	兼 6		

科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配 当 年 次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
教目 養科	社会系	ボランティア活動論	1 前	2		○									兼 1
		経済学入門	1 前	2		○									兼 1
		日本の政治	1 前	2		○									兼 1
		法学入門	1 後	2		○									兼 1
		経営学入門	1 後	2		○									兼 1
		観光学	1 後	2		○									兼 1
		日本国憲法	2 前	2		○									兼 1
	小計（7科目）	—	0	14	0	—			0	0	0	0	0	兼 7	
	自然系	教養数学	1 前		2		○								兼 1
		生命倫理	1 後	2			○								兼 1
		生物と環境	2 前		2		○								兼 1
		地学	3 前		2		○								兼 1
		地学実験	3 前		2				○						兼 2
	小計（5科目）	—	2	8	0	—			0	0	0	0	0	兼 6	
	キャ リア 系	キャリアデザインⅠ	1 前	1				○							兼 1
		キャリアデザインⅡ	2 後		1			○							兼 1
		数的能力開発	2 後		1		○								兼 1
		インターンシップ	3 通		2				○						兼 1 集中※講義
	小計（4科目）	—	1	4	0	—			0	0	0	0	0	兼 2	
	外国 人留 学生 対 象 科 目	日本事情 FⅠ	1・2・3・4前		2		○								兼 1
日本事情 FⅡ		1・2・3・4後		2		○								兼 1	
日本語読解 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
日本語読解 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
日本語文法 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
日本語文法 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
日本語表現作文 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
日本語表現作文 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
日本語総合 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
日本語総合 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
専門日本語 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
専門日本語 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
日本語会話 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
日本語会話 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
小計（14科目）	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	兼 4		



科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配当 年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
教目養科	帰国学生対象科目	日本事情 R I		2		○									兼 1
		日本事情 R II		2		○									兼 1
		日本語読解 R		1		○									兼 1
		日本語文法 R		1		○									兼 1
		日本語表現作文 R		1		○									兼 1
		日本語総合 R		1		○									兼 1
		専門日本語 R		1		○									兼 1
		日本語会話 R		1		○									兼 1
		小計（8科目）	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	兼 4
教職課程の設置により開設する授業科目	理科教育法 I	2 後			2	○								兼 1	
	理科教育法 II	3 前			2	○								兼 1	
	理科教育法 III	3 後			2	○								兼 1	
	理科教育法 IV	3 後			2	○								兼 1	
	教育原理	2前又は後			2	○								兼 1	
	教師論	1 前			2	○								兼 1	
	教育経営論	3前又は後			2	○								兼 1	
	教育社会学	3前又は後			2	○								兼 1	
	教育心理学	1前又は後			2	○								兼 1	
	特別支援教育論	3前又は後			2	○								兼 1	
	教育課程論	2前又は後			2	○								兼 1	
	道徳教育論	3前又は後			2	○								兼 1	
	特別活動・総合的な学習の時間の理論と指導法	1前又は後			2	○								兼 1	
	教育方法論	2前又は後			2	○								兼 1	
	生徒指導論(進路指導を含む)	2前又は後			2	○								兼 1	
	教育相談(カウンセリングの基礎を含む)	3前又は後			2	○								兼 1	
	教育実習 I	3前又は後			1	○								兼 5 共同	
	教育実習 II	4 通			2			○						兼 5 共同※講義	
	教育実習 III	4 通			4			○						兼 5 共同※講義	
	教職実践演習(中・高)	4 後			2		○							兼 5 共同	
地域連携教育活動 I	2前又は後			2			○						兼 5 共同		
地域連携教育活動 II	2前又は後			2			○						兼 5 共同		
小計（22科目）	—	0	0	45	—			0	0	0	0	0	兼 7		
合計（149科目）		—	51	165	45	—		5	3	4	2	1	兼 70		
学位又は称号		学士（農学）			学位又は学科の分野					農学関係					

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
<p><b>【卒業要件】</b>            本大学に4年以上在学し、所定の授業科目について、必修科目51単位、選択科目73単位以上の合計124単位以上修得し、かつ入学時からの累積GPAが1.3以上であること。</p> <p><b>【履修方法】</b></p> <p>1 専門科目の履修方法            必修科目45単位、選択科目53単位以上、合計98単位以上を修得すること。            ただし、つぎの条件のすべてを満たすものとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 専門コア群の基礎系から6単位以上を修得。</li> <li>(2) 専門コア群の植物系、微生物系および動物・海洋生物系から38単位以上（必修22単位を含む）を修得。</li> <li>(3) 専門総合群から20単位以上（農業生産系、食品栄養系、食農ビジネス系から各4単位以上を含む）を修得。</li> </ul> <p>2 教養科目の履修方法            必修科目6単位、選択科目20単位以上、合計26単位以上を修得すること。            ただし、つぎの条件のすべてを満たすものとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 語学系から6単位以上を修得。</li> <li>(2) 人文系から2単位以上を修得。</li> <li>(3) 社会系から2単位以上を修得。</li> <li>(4) 自然系から4単位以上（必修2単位を含む）を修得。</li> </ul> <p>（履修科目の登録上の上限：48単位（年間））</p>	1 学年の学期区分	2 期
	1 学期の授業期間	1 5 週
	1 時限の授業時間	9 0 分
	/	/

## 教育課程等の概要

(農学部食品栄養学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
専門科目	共通群	農学概論	1前	2			○			3						兼12	オムニバス
		農学基礎演習	1通	1				○								兼6	集中・共同
		グローバル農業演習	2通		2			○								兼2	集中・共同
		スマート農業演習	3通		1			○								兼2	共同
		農業気象学	3前		2		○									兼1	
		森林生態学	4前		2		○									兼1	
		農業知的財産	4前		2		○									兼2	オムニバス
	小計(7科目)	-	3	9	0		-		3	0	0	0	0	0	兼21		
専門コア群	基礎系	生物学	1前	2			○			1							
		生物学演習	1前		1			○			1						
		化学	1前	2			○			1							
		化学演習	1前		1			○			1						
	小計(4科目)	-	4	2	0		-		2	2	0	0	0	0	0		
社会・環境と健康	公衆衛生学	公衆衛生学	2前	2			○			1							
		健康管理概論	2後	2			○			1							
		医療福祉論	3前		2		○			1							
	小計(3科目)	-	4	2	0		-		1	0	0	0	0	0	0		
人体の構造と機能及び疾病の成り立ち	解剖生理学	解剖生理学	1前	2			○			1							
		臨床医学概論	1後		2		○			1							
		生化学	1後	2			○									兼1	
		微生物学	1後	2			○									兼1	
		分子生物学	2前		2		○									兼1	
		臨床病態学	2前		2		○			1							
		運動生理学	2後	2			○			1							
		薬理学	3前		2		○			1							
		解剖生理学実習	1前	1					○	1				1			
		生化学実験	1後	1					○				1			兼1	共同
	微生物学実験	2前		1				○				1			兼1	共同	
小計(11科目)	-	10	9	0		-		3	0	0	1	1	兼3				

科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配 当 年 次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考			
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手				
専門科目	食べ物と健康 専門コア群	食品学総論	1 前	2			○			1							
		食品学各論	1 後	2			○			1							
		食品衛生学	1 後	2			○				1						
		食品加工学	2 前		2		○			1							
		調理学	1 前	2			○			1							
		食品学実験Ⅰ	1 前	1					○	1			1	1			共同
		食品学実験Ⅱ	1 後	1					○	1				1			
		食品衛生学実験	2 前	1					○		1		1	1			共同
		食品加工学実習	2 後		1				○	1				1			
		調理学実習Ⅰ	1 前	1					○	1				2			
		調理学実習Ⅱ	1 後	1					○	1				1			
		調理学実習Ⅲ	2 前		1				○	1				1			
	小計（12科目）	—	13	4	0			—	3	1	0	1	4	0			
	基礎栄養学	基礎栄養学	1 後	2			○			1	1						共同
		基礎栄養学実習	1 後	1					○	1	1		1				共同
小計（2科目）		—	3	0	0			—	1	1	0	1	0	0			
応用栄養学	応用栄養学Ⅰ	2 前	2			○				1							
	応用栄養学Ⅱ	2 後	2			○			1								
	応用栄養学Ⅲ	3 前		2		○			2							オムニバス 共同(一部)	
	応用栄養学実習	3 前	1					○	1	1			1			共同	
小計（4科目）	—	5	2	0			—	2	2	0	0	1	0				
栄養教育論	栄養教育論Ⅰ	2 後	2			○					1						
	栄養教育論Ⅱ	3 前	2			○					1						
	栄養教育論Ⅲ	3 後		2		○					1						
	栄養教育論実習	3 後	1					○			1		1				
	小計（4科目）	—	5	2	0			—	0	0	1	0	1	0			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	臨床栄養学	臨床栄養学Ⅰ	2前	2			○				2					オムニバス
		臨床栄養学Ⅱ	2後		2		○				1					
		臨床栄養学Ⅲ	2後		2		○				1					
		臨床栄養学Ⅳ	3前		2		○				1					
		栄養薬理学	3後		2		○			1						
		臨床栄養学実習Ⅰ	2後	1					○		1		1	1		共同
		臨床栄養学実習Ⅱ	3前		1				○		1		1	1		共同
		臨床栄養学実習Ⅲ	3後		1				○		1		1			共同
	小計(8科目)		—	3	10	0		—		1	2	0	1	1	0	
	公衆栄養学	公衆栄養学Ⅰ	2後		2			○			1					
		公衆栄養学Ⅱ	3前			2		○			1					
		公衆栄養学実習	3前		1				○		1			1		
		小計(3科目)		—	3	2	0		—		1	0	0	0	1	0
	給食経営管理論	給食経営管理論Ⅰ	2前		2			○			1					
		給食経営管理論Ⅱ	2通			2		○			1					
		給食経営管理実習	2通		1				○		1			2		
		小計(3科目)		—	3	2	0		—		1	0	0	0	2	0
	総合演習	臨地実習指導(演習)	3・4通			1			○		2	2				集中・社に 共同(一部)
		管理栄養士総合演習	4前			1			○		3	3	1			オムニバス 共同(一部)
		小計(2科目)		—	0	2	0		—		3	3	1	0	0	0
	臨地実習	給食運営実習(校外)	2後・3前		1				○		1					
		臨地実習Ⅰ(給食経営管理論)	3通			1			○		1					
		臨地実習Ⅱ(公衆栄養学)	3通			1			○		1					
		臨地実習Ⅲ(臨床栄養学)	3後・4前			2			○			2				共同
		臨地実習Ⅳ(臨床栄養学)	3後・4前			3			○			2				共同
		小計(5科目)		—	1	7	0		—		2	2	0	0	0	0
	専門総合群	農業生産系	園芸の技術	3前			2		○							兼1
植物の病気			3前			2		○							兼1	
植物の改良			3前			2		○							兼1	
昆虫とくらし			3後			2		○							兼1	
作物とエネルギー生産			3後			2		○							兼1	
生きている土壌			4前			2		○							兼1	
小計(6科目)				—	0	12	0		—		0	0	0	0	0	兼6

科目 区分	授業科目の名称	配当 年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	応用生物系	分子からみた植物の働き	3 前	2		○									兼 1	オムニバス
		ゲノムと生命	3 前	2		○									兼 1	
		生物の多様性と進化	3 前	2		○									兼 4	
		動物とくらし	3 後	2		○									兼 1	
		微生物とくらし	3 後	2		○									兼 1	
		海洋生物とくらし	4 前	2		○									兼 1	
	小計 (6 科目)	—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	兼 6		
	食農ビジネス系	食と農の倫理を学ぶ	3 前		2		○								兼 2	オムニバス 共同(一部)
		食と農の経済を学ぶ	3 前		2		○								兼 1	
		食と農の共生を考える	3 後		2		○								兼 1	
		フードシステムを学ぶ	3 後		2		○								兼 1	
		農業の多様性を学ぶ	3 後		2		○								兼 1	
		食と農の歴史を学ぶ	4 前		2		○								兼 1	
小計 (6 科目)	—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	兼 6			
ゼミ・卒業研究	基礎ゼミナール	1 前	1				○		10	4	2					
	食品栄養学研究	3 後		1			○		10	4						
	卒業研究	4 通	6				○		10	4						
	小計 (3 科目)	—	7	1	0	—			10	4	2	0	0	0		

科目 区分	授業科目の名称	配当 年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考			
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手				
教養科目	共通系	大学教養入門	1 前	2				○		2					兼 4	集中・共同	
		小計（1科目）	—	2	0	0	—			2	0	0	0	0	兼 4		
	語学系	日本語表現法	1 前		1			○								兼 1	
		基礎英語Ⅰ a	1 前		1			○								兼 1	
		基礎英語Ⅰ b	1 前		1			○								兼 1	
		基礎英語Ⅱ a	1 後		1			○								兼 1	
		基礎英語Ⅱ b	1 後		1			○								兼 1	
		実践英語Ⅰ	2 前		1			○								兼 1	
		実践英語Ⅱ	2 後		1			○								兼 1	
		英語基礎会話 a	3 前		1			○								兼 1	
		英語基礎会話 b	3 後		1			○								兼 1	
		中国語Ⅰ	2 前		1			○								兼 1	
		中国語Ⅱ	2 後		1			○								兼 1	
		海外語学研修	2 前		2					○						兼 1	集中
	小計（12科目）	—	0	13	0	—			0	0	0	0	0	兼 6			
	情報系	情報リテラシーⅠ	1 前	1				○								兼 1	
		情報リテラシーⅡ	1 後		1			○								兼 1	
		小計（2科目）	—	1	1	0	—			0	0	0	0	0	兼 1		
	体育系	スポーツ科学Ⅰ	1 前		1				○		1					兼 3	
		スポーツ科学Ⅱ	1 後		1				○		1					兼 3	
小計（2科目）		—	0	2	0	—			1	0	0	0	0	兼 3			
人文系	心理学	1 前		2			○								兼 1		
	倫理学	1 前		2			○								兼 1		
	哲学から学ぶ	1 前		2			○								兼 1		
	地誌学	1 後		2			○								兼 1		
	人文地理学	1 後		2			○								兼 1		
	文学から学ぶ	1 後		2			○								兼 1		
	文化人類学	2 前		2			○								兼 1		
	女性学	2 前		2			○								兼 1		
	小計（8科目）	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	兼 6			

科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配 当 年 次	単位数			授 業 形 態			専任教員等の配置					備 考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
教目養科	社会系	ボランティア活動論	1 前		2		○									兼1
		経済学入門	1 前		2		○									兼1
		日本の政治	1 前		2		○									兼1
		法学入門	1 後		2		○									兼1
		経営学入門	1 後		2		○									兼1
		観光学	1 後		2		○									兼1
		日本国憲法	2 前		2		○									兼1
	小計（7科目）	—	0	14	0	—			0	0	0	0	0	兼7		
	自然系	教養数学	1 前		2		○									兼1
		生命倫理	1 後	2			○									兼1
		生物と環境	2 前		2		○									兼1
		地学	3 前		2		○									兼1
		地学実験	3 前		2				○							兼2
	小計（5科目）	—	2	8	0	—			0	0	0	0	0	兼6		
	キャリア系	キャリアデザインⅠ	1 前	1				○								兼1
		キャリアデザインⅡ	2 後		1			○								兼1
		数的能力開発	2 後		1		○									兼1
		インターンシップ	3 通		2				○							兼1 集中※講義
		臨床医療演習	3 前又は後		1				○							兼1
		臨床医療実践演習	3・4 前又は後		1				○							兼1
		セルフメディケーション演習	3 前又は後		1				○							兼3 共同
小計（7科目）	—	1	7	0	—			0	0	0	0	0	兼7			
外国人留学生対象科目	日本事情 FⅠ	1・2・3・4 前		2		○									兼1	
	日本事情 FⅡ	1・2・3・4 後		2		○									兼1	
	日本語読解 FⅠ	1・2・3・4 前		1		○									兼1	
	日本語読解 FⅡ	1・2・3・4 後		1		○									兼1	
	日本語文法 FⅠ	1・2・3・4 前		1		○									兼1	
	日本語文法 FⅡ	1・2・3・4 後		1		○									兼1	
	日本語表現作文 FⅠ	1・2・3・4 前		1		○									兼1	
	日本語表現作文 FⅡ	1・2・3・4 後		1		○									兼1	
	日本語総合 FⅠ	1・2・3・4 前		1		○									兼1	
	日本語総合 FⅡ	1・2・3・4 後		1		○									兼1	
	専門日本語 FⅠ	1・2・3・4 前		1		○									兼1	
	専門日本語 FⅡ	1・2・3・4 後		1		○									兼1	
	日本語会話 FⅠ	1・2・3・4 前		1		○									兼1	
	日本語会話 FⅡ	1・2・3・4 後		1		○									兼1	
小計（14科目）	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	兼4			



科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配 当 年 次	単 位 数			授 業 形 態			専 任 教 員 等 の 配 置					備 考
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	
教 目 養 科	帰 国 学 生 対 象 科 目	日 本 事 情 R I		2		○								兼 1
		日 本 事 情 R II		2		○								兼 1
		日 本 語 読 解 R		1		○								兼 1
		日 本 語 文 法 R		1		○								兼 1
		日 本 語 表 現 作 文 R		1		○								兼 1
		日 本 語 総 合 R		1		○								兼 1
		専 門 日 本 語 R		1		○								兼 1
		日 本 語 会 話 R		1		○								兼 1
		小 計 ( 8 科 目 )	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0
教 職 課 程 の 設 置 に よ り 開 設 す る 授 業 科 目	学 校 栄 養 指 導 論 I	3 前			2	○					1			
	学 校 栄 養 指 導 論 II	3 後			2	○					1			
	教 育 原 理	2前又は後			2	○								兼 1
	教 師 論	1 前			2	○								兼 1
	教 育 経 営 論	3前又は後			2	○								兼 1
	教 育 社 会 学	3前又は後			2	○								兼 1
	教 育 心 理 学	1前又は後			2	○								兼 1
	特 別 支 援 教 育 論	3前又は後			2	○								兼 1
	教 育 課 程 論	2前又は後			2	○								兼 1
	道 徳 教 育 論	3前又は後			2	○								兼 1
	特 別 活 動 ・ 総 合 的 な 学 習 の 時 間 の 理 論 と 指 導 法	1前又は後			2	○								兼 1
	教 育 方 法 論	2前又は後			2	○								兼 1
	生 徒 指 導 論 ( 進 路 指 導 を 含 む )	2前又は後			2	○								兼 1
	教 育 相 談 ( カ ウ ン セ リ ン グ の 基 礎 を 含 む )	3前又は後			2	○								兼 1
	栄 養 教 育 実 習 I	3 後			1	○					1			
	栄 養 教 育 実 習 II	4 通			1			○			1			※講義
	教 職 実 践 演 習 ( 栄 養 教 諭 )	4 後			2		○				1			兼 1 共同
小 計 ( 1 7 科 目 )	—	0	0	30	—			0	0	1	0	0	兼 6	
合 計 ( 1 7 2 科 目 )		—	70	177	32	—			10	4	2	2	4	兼 76
学 位 又 は 称 号		学 士 ( 農 学 )			学 位 又 は 学 科 の 分 野				農 学 関 係 家 政 関 係					

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
<p><b>【卒業要件】</b>            本大学に4年以上在学し、所定の授業科目について、必修科目70単位、選択科目54単位以上の合計124単位以上修得し、かつ入学時からの累積GPAが1.3以上であること。</p> <p><b>【履修方法】</b></p> <p>1 専門科目の履修方法            必修科目64単位、選択科目34単位以上、合計98単位以上を修得すること。            ただし、つぎの条件のすべてを満たすものとする。            (1) 専門コア群から66単位以上（必修54単位を含む）を修得。            (2) 専門総合群から12単位以上（農業生産系、応用生物系、食農ビジネス系から各4単位以上を含む）を修得。</p> <p>2 教養科目の履修方法            必修科目6単位、選択科目20単位以上、合計26単位以上を修得すること。            ただし、つぎの条件のすべてを満たすものとする。            (1) 語学系から6単位以上を修得。            (2) 人文系から2単位以上を修得。            (3) 社会系から2単位以上を修得。            (4) 自然系から4単位以上（必修2単位を含む）を修得。</p> <p>（履修科目の登録上の上限：48単位（年間））</p>	1学年の学期区分	2期
	1学期の授業期間	15週
	1時限の授業時間	90分
	専門コア群の実験・実習科目（「給食経営管理実習」以外）の1時限の授業時間	135分

## 教育課程等の概要

(農学部食農ビジネス学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当 年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
専門科目	共通群	農学概論	1前	2			○			3						兼12	オムニバス
		農学基礎演習	1通	1				○								兼6	集中・共同
		グローバル農業演習	2通		2			○				1				兼1	集中・共同
		スマート農業演習	3通		1			○								兼2	共同
		農業気象学	3前		2		○									兼1	
		森林生態学	4前		2		○									兼1	
		農業知的財産	4前		2		○									兼2	オムニバス
	小計(7科目)		-	3	9	0	-			3	0	1	0	0	兼20		
専門コア群	基礎系	食農ビジネス学概論	1前	2			○			7	4	1					オムニバス
		食と農の倫理	1前	2			○			1	1						オムニバス 共同(一部)
		基礎経済学	1前	2			○			1							
		アグロ・エコロジー論	1前	2			○			1							
		基礎統計学	1後	2			○				1						
		食と農の近現代史	1後	2			○			1							
		ミクロ経済学	1後	2			○				1						
		マクロ経済学	2前		2		○			1							
		農業簿記・会計学	2後		2		○				1						
		社会調査論	3前		2		○									兼1	
	食農ビジネス最前線	3後		2		○			1								
小計(11科目)		-	14	8	0	-			7	4	1	0	0	兼1			
農業経済・経営・政策系	農業経営学	2前	2			○			1								
	食料・農業経済学	2前		2		○			1								
	食料・農業・農村政策論	2後		2		○			1								
	農業経営管理論	2後		2		○			1								
	農村社会学	2後		2		○			1								
	6次産業経営論	2後		2		○			1								
	地域マネジメント論	3前		2		○				1							
	食農ビジネス実践論	3後		2		○			2	1						共同	
小計(8科目)		-	2	14	0	-			3	1	0	0	0	0			

科目 区分	授業科目の名称	配当 年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考				
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手					
専門科目	専門コア群 食品産業・流通系	フードシステム論	1 後	2			○			1								
		食品産業論	2 前		2			○		1								
		食料・農業市場論	2 前		2				○	1								
		農畜産物流通論	2 後		2				○			1						
		水産物流通論	2 後		2				○		1							
		農水産物マーケティング論	3 前		2				○		1							
		食品表示・認証論	3 前		2				○		1							
		女性起業論	3 後		2				○		1							
		食品産業経営戦略論	3 後		2				○		2	1	1					共同
	小計（9科目）	—	2	16	0			—	2	2	1	0	0	0				
	食農共生・循環型農業系	食農共生論	1 後	2				○		1								
		循環型農業論	2 前		2				○			1						
		食農教育論	2 前		2				○			1						
		協同組合論	2 後		2				○	1								
		都市農業論	2 後		2				○			1						
非営利協同論		3 前		2				○	1									
有機農業論		3 前		2				○			1							
農村コミュニティビジネス論		3 後		2				○	1	2							共同	
小計（8科目）	—	2	14	0			—	1	2	0	0	0	0					
国際農業系	比較農業論	2 前	2				○		1									
	国際農業論	2 後		2				○	1									
	農業開発論	3 前		2				○	1									
	現代韓国農業論	3 後		2				○	1									
	現代中国農業論	3 後		2				○			1							
小計（5科目）	—	2	8	0			—	3	0	1	0	0	0					
専門総合群	農業生産系	園芸の技術	3 前		2			○									兼1	
		植物の病気	3 前		2			○									兼1	
		植物の改良	3 前		2				○								兼1	
		昆虫とくらし	3 後		2				○								兼1	
		作物とエネルギー生産	3 後		2				○								兼1	
		生きている土壌	4 前		2				○								兼1	
	小計（6科目）	—	0	12	0			—	0	0	0	0	0	0		兼6		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	応用生物系	分子からみた植物の働き	3 前	2		○									兼1	オムニバス
		ゲノムと生命	3 前	2		○									兼1	
		生物の多様性と進化	3 前	2		○									兼4	
		動物とくらし	3 後	2		○									兼1	
		微生物とくらし	3 後	2		○									兼1	
		海洋生物とくらし	4 前	2		○									兼1	
	小計 (6 科目)	—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	兼6		
	食品栄養系	食品学入門	3 前		2		○								兼1	
		食品の安全性	3 前		2		○								兼1	
		旬の食材と薬膳	3 前		2		○								兼1	
		栄養とスポーツ	3 後		2		○								兼1	
		栄養と健康	3 後		2		○								兼1	
		病気の予防と食生活	4 前		2		○								兼1	
小計 (6 科目)	—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	兼6			
ゼミ・卒業研究	基礎ゼミナール	1 前	1				○		7	4	1					
	食農ビジネス学基礎演習Ⅰ	1 後	2				○			3	1				共同	
	食農ビジネス学基礎演習Ⅱ	2 前	2				○		4						共同	
	食農ビジネス学基礎演習Ⅲ	2 後	2				○		3	1					共同	
	食農ビジネス学研究Ⅰ	3 前	2				○		7	4	1					
	食農ビジネス学研究Ⅱ	3 後	2				○		7	4	1					
	卒業研究	4 通	6				○		7	4	1					
小計 (7 科目)	—	17	0	0	—			7	4	1	0	0	0			

科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配当 年次	単位数			授 業 形 態			専任教員等の配置					備 考			
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手				
教養科目	共通系	大学教養入門	1 前	2				○				1			兼 5	集中・共同	
		小計（1科目）	—	2	0	0	—			0	0	1	0	0	兼 5		
	語学系	日本語表現法	1 前		1		○									兼 1	
		基礎英語Ⅰ a	1 前		1		○									兼 2	
		基礎英語Ⅰ b	1 前		1		○									兼 2	
		基礎英語Ⅱ a	1 後		1		○									兼 2	
		基礎英語Ⅱ b	1 後		1		○									兼 2	
		実践英語Ⅰ	2 前		1		○									兼 2	
		実践英語Ⅱ	2 後		1		○									兼 2	
		英語基礎会話 a	3 前		1		○									兼 1	
		英語基礎会話 b	3 後		1		○									兼 1	
		中国語Ⅰ	2 前		1		○									兼 1	
		中国語Ⅱ	2 後		1		○									兼 1	
		海外語学研修	2 前		2					○						兼 1	集中
		小計（12科目）	—	0	13	0	—			0	0	0	0	0	兼 8		
	情報系	情報リテラシーⅠ	1 前	1					○							兼 1	
		情報リテラシーⅡ	1 後		1				○							兼 1	
		小計（2科目）	—	1	1	0	—			0	0	0	0	0	兼 1		
	体育系	スポーツ科学Ⅰ	1 前		1					○						兼 4	
		スポーツ科学Ⅱ	1 後		1					○						兼 4	
小計（2科目）		—	0	2	0	—			0	0	0	0	0	兼 4			
人文系	心理学	1 前		2		○									兼 1		
	倫理学	1 前		2		○									兼 1		
	哲学から学ぶ	1 前		2		○									兼 1		
	地誌学	1 後		2		○									兼 1		
	人文地理学	1 後		2		○									兼 1		
	文学から学ぶ	1 後		2		○									兼 1		
	文化人類学	2 前		2		○									兼 1		
	女性学	2 前		2		○									兼 1		
	小計（8科目）	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	兼 6			

科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配 当 年 次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
教目養科	社会系	ボランティア活動論	1 前	2		○									兼 1
		経済学入門	1 前	2		○									兼 1
		日本の政治	1 前	2		○									兼 1
		法学入門	1 後	2		○									兼 1
		経営学入門	1 後	2		○									兼 1
		観光学	1 後	2		○									兼 1
		日本国憲法	2 前	2		○									兼 1
	小計（7科目）	—	0	14	0	—			0	0	0	0	0	兼 7	
	自然系	教養数学	1 前		2		○								兼 1
		生命倫理	1 後	2			○								兼 1
		生物と環境	2 前		2		○								兼 1
		地学	3 前		2		○								兼 1
		地学実験	3 前		2				○						兼 2
	小計（5科目）	—	2	8	0	—			0	0	0	0	0	兼 6	
	キャリア系	キャリアデザインⅠ	1 前	1				○							兼 1
		キャリアデザインⅡ	2 後		1			○							兼 1
		数的能力開発	2 後		1		○								兼 1
		インターンシップ	3 通		2				○						兼 1 集中※講義
	小計（4科目）	—	1	4	0	—			0	0	0	0	0	兼 2	
	外国人留学生対象科目	日本事情 FⅠ	1・2・3・4前		2		○								兼 1
日本事情 FⅡ		1・2・3・4後		2		○								兼 1	
日本語読解 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
日本語読解 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
日本語文法 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
日本語文法 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
日本語表現作文 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
日本語表現作文 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
日本語総合 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
日本語総合 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
専門日本語 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
専門日本語 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
日本語会話 FⅠ		1・2・3・4前		1		○								兼 1	
日本語会話 FⅡ		1・2・3・4後		1		○								兼 1	
小計（14科目）	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	兼 4		

科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配当 年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
教 目 養 科  帰 国 学 生 対 象 科 目	日本事情 R I	1・2・3・4前		2		○									兼 1
	日本事情 R II	1・2・3・4後		2		○									兼 1
	日本語読解 R	1・2・3・4前		1		○									兼 1
	日本語文法 R	1・2・3・4後		1		○									兼 1
	日本語表現作文 R	1・2・3・4前		1		○									兼 1
	日本語総合 R	1・2・3・4後		1		○									兼 1
	専門日本語 R	1・2・3・4前		1		○									兼 1
	日本語会話 R	1・2・3・4後		1		○									兼 1
	小計（8科目）	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	0	兼 4
合計（136科目）		—	48	189	0	—			7	4	1	0	0	兼 66	
学位又は称号		学士（農学）			学位又は学科の分野			農学関係 経済学関係							

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
<p><b>【卒業要件】</b> 本大学に4年以上在学し、所定の授業科目について、必修科目48単位、選択科目76単位以上の合計124単位以上修得し、かつ入学時からの累積GPAが1.3以上であること。</p> <p><b>【履修方法】</b> 1 専門科目の履修方法 必修科目42単位、選択科目56単位以上、合計98単位以上を修得すること。 ただし、つぎの条件のすべてを満たすものとする。 （1）専門コア群から48単位以上（必修22単位を含む）を修得。 （2）専門コア群の「食農ビジネス実践論」「食品産業経営戦略論」「農村コミュニティビジネス論」の3科目から2単位を修得。 （3）専門コア群の「マクロ経済学」「食料・農業経済学」「食料・農業・農村政策論」「農業経営管理論」「食品産業論」「食料・農業市場論」「循環型農業論」「食農教育論」の8科目から10単位以上を修得。 （4）専門総合群から20単位以上（農業生産系、応用生物系、食品栄養系科目から各4単位以上を含む）を修得。</p> <p>2 教養科目の履修方法 必修科目6単位、選択科目20単位以上、合計26単位以上を修得すること。 ただし、つぎの条件のすべてを満たすものとする。 （1）語学系から6単位以上を修得。 （2）人文系から2単位以上を修得。 （3）社会系から2単位以上を修得。 （4）自然系から4単位以上（必修2単位を含む）を修得。</p> <p>（履修科目の登録上の上限：48単位（年間））</p>	1 学年の学期区分	2 期
	1 学期の授業期間	1 5 週
	1 時限の授業時間	9 0 分



## 授 業 科 目 の 概 要

(農学部 農業生産学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(概要)</p> <p>自然を改変しながら生物資源を活かし、人類の衣食住を支えてきた「農学」は、人間の諸活動を支える根幹的な学問である。「農学」には持続可能で豊かな人間社会と地球環境の創出を目指して、課題を見出し対応するミッションがある。「農学」は生命を支える食料の科学であり、生命科学とも位置付けられる。さらには、「農学」は生産、加工、流通の6次産業に食栄養を加えた24次産業的視点で捉えることができる。農と食をとりまく環境は大きく変化し、「農学」における食栄養科学・健康科学の重要性も認識されている。本講義はこうした問題意識からテーマを設定し、オムニバス方式の講義により、受講者が「農学」とは何かを理解するとともに、「農学」のミッションに対応する「使命感」、「農学」的視点がもたらす「俯瞰力」「実践力」に関心をもち、主体的に課題を意識することができることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(① 久保康之／1回)</p> <p>「農学を大学で学ぶとは」をテーマに講義する。「農学」は、自然を改変しながら生物資源を活かし、人間の諸活動を支える根幹的な学問である。持続可能で豊かな人間社会と地球環境の創出を目指して、私たちは何を学び、何をすべきか、「農学」の世界観を俯瞰し、学修する。</p> <p>(② 寺林敏／1回)</p> <p>「農学と社会」をテーマに講義する。「農学」は、安全な食料生産と食料の安定供給、自然環境の保全、食を取り巻く多様化・複雑化する社会への対応、新しい作物生産の場とその生産技術の開発など、社会からの求めに応え、解決する使命を担っている。「農学」が社会とのかかわりの中で、いかなる研究が社会に貢献してきたか、と同時に「農学」の発展と可能性について学修する。</p> <p>(⑤ 川崎通夫／1回)</p> <p>「農業生産技術の進歩」をテーマに講義する。農業生産技術の進歩は、人口増加、自然環境変動、および、社会変化に伴う農業生産課題を解決していく上で重要な要素である。フィールド栽培、施設園芸、植物工場、および、AI(人工知能)やIoT(モノのインターネット)を活用したスマート農業などに関する農業生産技術の進展について学修する。</p> <p>(③① 田中樹／1回)</p> <p>「国際農業と開発援助」をテーマに講義する。世界の農業の多様性を踏まえ、発展途上国における農業開発と、それに対する援助のあり方を学修する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(22 小保方潤一／1回) 「ゲノムと農学・生命科学」をテーマに講義する。生物の設計図を読みたい、というのは生物学者の長年の夢だったが、ゲノムの解読技術の飛躍的な発展によって、それは現実のものとなりつつある。ゲノム科学の急速な発展が、農学・生命科学や私たちの生活にどのような影響を与えつつあるのかを概説する。</p> <p>(3 石川幸男／1回) 「農業とケミカルエコロジー」をテーマに講義する。すべての生物は、同種または他種の他個体と相互作用を及ぼしあいながら生きており、この相互作用の仲介役として化学物質が大きな働きをしている。植物－昆虫、昆虫－昆虫間の相互作用における化学物質の働きについて、その害虫管理への応用を含めて概説する。</p> <p>(4 奥本裕／1回) 「作物改良のための情報科学」をテーマに講義する。現代の農業は近代育種が改良してきた品種を基盤に成立している。近年のゲノム解読技術と画像解析技術の急速な発展は、育種におけるDNA情報解析と高速フェノタイピングの利用を強く後押ししている。育種の現場で利用が進められているゲノム情報と圃場データ処理を利用する情報科学について概説する。</p> <p>(19 井上亮／1回) 「動物生命科学の新展開」をテーマに講義する。動物を対象とした研究は、農学においては産業動物の生産性向上のため、食品、医療においてはヒトの健康維持・増進、疾病予防・治療のために行われる。これらの動物を対象とした研究には遵守すべきルールや法令が存在する。これら動物を対象とした研究に関する現状を学修する。</p> <p>(32 豊原治彦／1回) 「地球環境と海洋科学」をテーマに講義する。水産業は一次産業の中でも特に天然依存性が高いことから、資源維持のために健全な海洋環境の保全が必須である。最新の増養殖技術の活用も含め、地球環境の保全と海洋科学の進展について学修する。</p> <p>(45 吉井英文／1回) 「食品科学と農業」をテーマに講義する。農林漁業者(1次産業)が生産する農水産物の元々持っている価値をさらに高め農林水産業を活性化させるためには、食品加工(2次産業)は必須の技術である。最新の食品加工にかかわる食品科学技術の進展について学修する。</p> <p>(47 和田大／1回) 「微生物と食品」をテーマに講義する。東洋、西洋を問わず、食品製造に微生物を利用することは長く行われてきた。農産物の2次加工としての微生物利用について概説する。</p> <p>(25 喜多大三／1回) 「食文化と多様性」をテーマに講義する。日本の食文化は大きな変革期にきており、食生活の大部分を外食産業に依存する家庭が急増している。本来、日本の伝統的食文化である「お茶」の歴史、伝統および特質について学修する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(27 黒川通典／1回) 「食栄養科学と健康」をテーマに講義する。現代の栄養事情は欠乏と過剰の二極化といわれている。社会の仕組みが複雑になっている今、社会のあらゆる側面を視野に入れながら、人間栄養学の観点から健康問題を考える。</p> <p>(21 小野雅之／1回) 「食品産業の役割とこれからの方向」をテーマに講義する。消費者への食料供給において重要な役割を担う食品産業、特に食品流通業を取り上げ、その役割とこれからの展開方向を学修する。</p> <p>(26 北川太一／1回) 「これからの食と農を考える」をテーマに講義する。今日の食と農の状況を踏まえながら、これからの食と農の共生のあり方とその方向を考える。</p>	オムニバス方式
		農学基礎演習	福井県と三重県にある農業体験施設を利用し、2日間の演習を行う。主に、我が国のイネ生産と消費の現状、水田の構造、稲作を成立させる農業技術並びに自然環境要因、水田の多面的価値、稲作文化等について学修する。演習内容として、春期の田植えと秋期の稲刈りを行う。日本の主食であるコメの栽培を学び、イネ栽培を体験することで、水田の構造、日本で水田稲作が成立する要因、稲という植物の生育特性を深く理解し、我が国における今後の稲作の在り方について学ぶことを目的とする。	集中・共同
		グローバル農業演習	私達の食生活は、我が国の食料生産だけでは決して支えられているものではなく、他国における食料生産への依存度は高まる一方である。海外に10日間滞在し、その地域や国の農業についての学修や視察により、茶などの工芸作物を含む様々な農作物、野菜や花などの種々園芸作物が他国で、どのような気象・土壌環境で、どのような栽培技術で生産され消費・利用されているかを、それら地域の歴史的、文化的背景、社会情勢の理解とともに学ぶ。	集中・共同
		スマート農業演習	日本農業における就農人口の減少、高齢化、激しい気象変動と異常気象等、農園芸作物生産を取り巻く環境は厳しさを増している。そんな中、高収量・高品質、安定生産、省力・軽作業化、省エネを実現するためのロボット技術やICTを活用した新しい農業スタイル「スマート農業」が動き始めている。本演習ではスマート農業について、その理論と実際を学び、日本農業がかかえる課題と「スマート農業」の可能性とその重要性について正しく認識させる。	共同
		農業気象学	さまざまな気象現象の基礎的な特徴と発生原理等について講義を行い、気象と動植物との関わり、農業や人間生活との関わり等について、具体的な事例を示しながら解説する。それにより、大気の組成や構造、放射過程・熱輸送過程、高・低気圧や前線とその動き、異常気象の発生原理、大気大循環、地球温暖化を含む気候変化とその影響など、さまざまな時間的・空間的スケールで起きる気象現象や気候システムについて、そのメカニズムを修得し、それらの農業への影響や対策等について現実的に考察することが可能となる学力を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	森林生態学	森林のあるところに文明が起り、森林がなくなれば文明も滅びたように、昔から人間は森林を利用して生きてきた。日本は、国土の67%を森林に覆われる世界でも有数の森林国である。森林は、近年の環境問題を解決するための、また持続可能な資源の開発を行うための、大きな鍵となる。本講義では、森林の生態についての知識を得ることを目標にする。また森林生態学を研究する方法や、環境の計測などに関する理解を深める。さらに森林と人間のかかわりや、森林が地球環境に及ぼす影響、日本の林業の問題点などについても考察を行う。	
		農業知的財産	<p>(概要)</p> <p>農林水産業は、生活の根幹を支える重要な産業でありながら、これまで十分な知的財産に関する法的支援が図られていなかった。そこで、農林水産業における知的財産の重要性を認識し、知的財産制度を有効に活用するために、農林水産業と密接に関連する知的財産の基礎的知識や各種制度の在り方、農林水産業における知的財産制度の活用方法の修得を目的とする。具体的には、農林水産分野における知的財産法制の概観、種苗法に基づく品種登録制度の概要（海外での新品種の保護制度を含む）、農林水産品の「地域ブランド」保護制度である地域団体商標制度及び地理的表示制度の内容、農林水産業における品質誤認表示規制の概要、水際措置、食品の安全性確保のための各種手法（GAP、HACCP等）の概要等について修得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(75 犬飼 一博／7回)</p> <p>農林水産業における知的財産権の重要性、知的財産法制の概観、地域団体商標制度の概要、国内及び海外における品種保護制度の概要等について学修する。</p> <p>(79 中世古 裕之／8回)</p> <p>地理的表示制度の概要、農林水産業における品質誤認表示規制の概要、水際措置、農林水産知財における今後の課題・展望等について学修する。</p>	オムニバス方式
専門コア群	基礎系	化学	化学的な知識は農学領域における基礎・専門科目を理解する上で欠かせない。本講義では、化学の基礎知識を確実なものとするとともに、大学における専門科目の理解に不可欠な化学の知識を修得することを目的とする。「化学」では、物質の成り立ちから、理論化学、無機化学、有機化学に関する基本事項を修得し、専門課程・卒業論文研究における化学的な課題に対処する能力を身につける。また、同時期開講の「化学演習」において、「化学」にて講義した基本事項について、問題演習を通じて理解する。	
		化学演習	化学的な知識は農学領域における基礎・専門科目を理解する上で欠かせない。本演習では、化学の基礎知識を確実なものとするとともに、大学における専門科目の理解に不可欠な化学の知識を修得することを目的とする。「化学演習」では、同時期開講する「化学」にて講義した基本事項について、問題演習を通じて完全に理解し、専門課程・卒業論文研究における化学的な課題に対処する能力を身につける。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	基礎系	生物学	実験科学である生物学は、多種多様な観察、実験結果によって裏付けられた知識の体系であり、分子といったマイクロなレベルから、生態環境といったマクロなレベルまで、生物が関わる極めて幅広い現象を取り扱う。農学はその知識を有機的に活用する学問であり、学ぶ上で多様な生物学の基礎知識を有することが求められる。本講義ではそれらの基礎について概説し、専門課程で必須となる生物学の基礎知識と考え方が身につけられるようにする。	
			生物学演習	「生物学」の講義では、生物学の基礎知識とその根底にある考え方を学ぶが、実学である農学ではそれら基礎知識や考え方を応用する力も重要となる。そこで本演習では、「生物学」の講義で学んだ基礎知識、概念を使い、組み合わせて解く演習問題に取り組み、応用能力、問題解決能力を養う。また同時に生物学の基礎に関する様々な問いかけに触れることで、背景となる周辺知識を学び、生物学の根幹となる考え方がどのように生まれてきたかを、追体験して、理解を深めることを目的とする。	
			物理学	物理学は自然現象、生命現象、科学技術の原理を理解する上で、重要な基礎科目であり、現代の科学技術の基礎をなしている。本講義では身近な自然現象、生命現象、科学技術の成り立ちを物理学の法則から導き出す力を身につけることを目的として、物理の法則・原理とさまざまな物理現象・科学技術との関連性について学ぶ。特に、身近に体験している現象や科学技術の成り立ちを定量的に取り扱う方法について理解する。	
			生物統計学	植物や動物に観察される多様な生物現象を理解するためには、多くの観察が必要である。観察して得られたデータは往々にして膨大な量になるが、例えば、夏季と冬季の昆虫200匹の体重測定結果を眺めていても生物現象の意味を理解するのは難しい。データを適切に整理して解析するには統計的手法の正しい活用が必要となる。生物統計学では、施肥の効果や品種の優劣などの判定に必要な基礎的なデータ整理、データに基づいた検定手法の原理を解説し、植物や動物を使った実験を実施して有用なデータを得るために最低限必要とされる基礎的知識を身につける。	
	農業植物・栽培系	植物遺伝学	生物を集団、個体、細胞レベルで理解し、活用するためには、形質を支配する遺伝子の働きを明らかにする必要がある。遺伝学は遺伝子が支配する形質の遺伝（次世代への伝承）の法則を追究する学問分野である。「植物遺伝学」では、高等植物のトピックを交えながら遺伝学について解説し、議論することで、遺伝学の基礎的知識と概念を身につける。また、遺伝子機能の解析における遺伝学の有用性について解説し、遺伝学を実践において利用する能力の修得を目指す。		
		作物機能形態学	作物における発芽、生長および環境適応などの生命現象の多くは、作物体の諸形態の係わりの中で発現する。したがって、作物に認められる諸種の生命現象の機序を理解するには、作物体の形態および生理・機能と形態との係わりに関する知識が重要となる。「作物機能形態学」では、作物を中心とした植物体の形態、形態の成り立ち、生理・機能と形態との関係および作物形態の研究手法について解説し、作物の生産特性、収量・品質の成立および環境適応に関する仕組みの理解を深める上で必要な形態学的知識を身につける。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	農業植物・栽培系	植物生理学	農業・園芸作物生産において主に扱う植物について、その発生および生長の制御メカニズムを理解することは極めて重要である。「植物生理学」では植物の形態、代謝、生殖といった一般的な知見を中心として、それらに基づいた植物の発生および生長を制御している遺伝・環境要因についても網羅的に解説する。また、本学問は近年新しい知見が次々と得られている分野であり、基礎的な研究の最前線と農業生産で用いられている技術との結びつきについても議論を深める。	
			植物育種学	育種（品種改良）は農耕の起源に深く関わる人類の営みである。動植物は人の働きかけ（人為選抜）に応じて性質や形を変化させる能力を有している。農耕は、人の働きかけに応えた野生植物が栽培植物に姿を変えたことで可能になった。この生物がもつ能力は自然選抜によって多様な生命が地球上に誕生してきた進化の過程を振り返ることによって理解できる。講義では作物栽培における育種の役割、ならびに作物改良の原動力となる生物の進化の仕組みを解説する。また、近代植物育種が誕生した背景にあるメンデル遺伝学と育種との関連、および遺伝学の発展に伴って新たに考案されてきた育種の方法を修得して新しい品種を創り出すために必要な基礎的知識を身につける。	
			作物学	人類の生存には、変動する環境の中で、農作物の生産技術を弛まなく進展させることが食料の安定供給に必要不可欠である。そのためには、作物の遺伝的特性を理解し、多様に変動する圃場環境への各作物の応答反応を明らかにすることが重要である。「作物学」では、我々人類と主要作物（イネ、ムギ類、マメ類、イモ類など）とのかかわり、主要作物の起源・伝播、生産状況、形態、生理、生態、環境、品種、栽培、品質、利用などを学ぶ。	
			野菜花卉園芸学	我が国の野菜園芸と花卉園芸の特徴について概説する。野菜に関しては、特に重要な作型の概念を理解させるため、対象作物の生理生態的特性、栽培管理に必要とされる技術を具体的に解説する。また、種々の作型で問題となる課題やその対策についても解説する。花卉に関しては、花卉品質の重要要素である花色、鮮度、草姿に関する生理機構・制御機構について解説する。また、日本の国花である菊の分類と周年栽培技術についても解説する。	
			植物育種方法論	動植物は人の働きかけ（人為選抜）に応じて性質や形を変化させる能力を有している。この能力を利用して育種は品種開発を進めてきた。そして、自然選抜による地球上の多様な生命の誕生させた「進化」を可能にした能力でもある。生命の進化が成し遂げた結果を眺めれば育種がもつ潜在能力の高さが容易に想像できる。近年のゲノムサイエンスに基づく生命科学の成果は、生物が進化する能力の実態を次第に明らかにしてきている。これらの生命科学の研究成果を理解するために必要な分子遺伝学の基礎を修得し、複雑な形質の効率的な選抜に必要となる量的形質における遺伝効果と環境効果とを分割する統計遺伝学的手法ならびにゲノム情報と統計遺伝学的手法を組み合わせた育種方法について原理を正しく理解する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	農業植物・栽培系	資源作物学	主食や料理食材として調理される作物の他に、加工・製造工程を経て様々な用途に使われている作物も人類の営みにおいて重要な資源である。「資源作物学」では、人類へ様々な資源を供給する工芸作物(油料作物、糖料作物、デンプン料作物、嗜好料作物、繊維作物、紙料作物、香辛料作物、芳香油料作物、染料作物、薬用作物、樹脂料作物およびゴム料作物)について概説し、各作物における植物学的形質、生産、加工・製造および利用について理解を深め、更に作物の多様性や重要性を広く知る上で必要な基礎知識を身につける。	
			果樹園芸学	果樹生産は我々の多様な食生活を支える重要な産業であるが、近年の気候変動や人々の嗜好の変化などにより、そのあり方が大きく問われている。園芸作物の中でも特に果樹は、永年性の樹木という点で独特の生理生態的特徴を有する。「果樹園芸学」では、果樹の栽培に関係する開花や結実などの生理学的な特徴を概説する。また、近年のゲノム解析技術を用いた果樹育種に関する最新の知見について解説するとともに、果実と人々の生活とのかかわり方についても実例を交えて論じる。	
			耕地生態学	作物を耕地で生産することで食糧を確保し、同時に環境を浄化し、生物資源を蓄積することが農業の持つ本来の姿である。安定的に食糧を生産・供給・備蓄できる農業技術の開発が急務であるが、将来に向けて耕地の生態系と調和し、地球環境に負荷のかからない持続的農業技術を確立することも必要である。「耕地生態学」では、以上の視点から生態系と調和した持続的農業を確立するために必要となる知見や技術を、幅広い事例紹介を通じて理解することを目的とする。	
			施設園芸学	我が国の園芸生産における施設栽培の実状、ガラスハウスなどの施設の種類とその構造、施設及び施設内設備の機能、施設栽培される作物の生産性、品質について解説する。施設下で、ある程度の制御が可能な、光強度、気温、湿度さらにCO <sub>2</sub> 濃度制御の効果について実例を挙げて説明する。さらに、近年、注目を浴びている植物工場について取り上げ、植物工場における作物栽培法である養液栽培の理論と実際、植物工場の基本技術、特徴、可能性について解説する。	
	農業生物・環境系	植物病理学	植物の病気による損害は年間8億人の人々の食料に相当する。植物を病気から守ることは食料生産の観点から重要な課題である。では、植物はどのようにして病気にかかるのか？植物の病気の原因を探り、感染・伝染のしくみを調べ、植物の病気を防ぐ基礎的・応用的研究をする学問分野が植物病理学である。本講義ではテキストに基づき植物病理学の基礎について概説し、受講者が植物が病気になる仕組みを理解するとともに、植物を病害から保護するための基礎的な技術と知識を修得することを達成目標とする。		
		応用昆虫学	一部の昆虫は、いわゆる“害虫”として我々の農業生産の大きな阻害要因となっている。応用昆虫学は、害虫の適切な管理方法に関する知見を提供することで農業生産の向上に大きく貢献してきた。しかし、応用昆虫学の対象には農業害虫ばかりではなく、ミツバチやカイコなどの有用昆虫、ショウジョウバエやカイコなどの分子生物学的研究のモデル昆虫、カヤハエなどの衛生昆虫、ヒアリやクビアカツヤカミキリなどの外来昆虫も含まれている。本講義では、まず昆虫の分類と体のつくりについて詳しく解説し、つづいて、昆虫をモデル昆虫、有用昆虫、社会性昆虫、衛生昆虫、農業害虫などに分け、それぞれについて詳しく解説することで、受講者が応用昆虫学全般の基礎知識を得ることを目的とする。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	農業生物・環境系	土壌学	地殻の最表層部は土壌で覆われている。土壌は地球表層環境における岩石の物理的、化学的、生物の変質や、変質物の移動・堆積によって生成した物質の層である。この層、土壌はほとんどすべての陸上植物の培地、莫大な数の微生物のすみかであり、地球表層における物質循環の要である。土壌は大気組成にすら大きな影響を与え、地球環境問題や、土壌・地下水の汚染などの環境問題の理解には土壌の理解が不可欠である。最近、このことが強く認識されるようになってきている。本講義では土の保全や修復を強く意識しながら、i) 土壌は何からできているか、ii) 土壌はどのようにしてできたか、iii) 土壌はどのような機能をもっているか、等の基礎的な事項について系統的に解説する。	
			植物感染機構学	植物の病気は病原微生物と宿主植物の相互作用の結果として現れる。病原体は植物に感染行動を起こし、植物の防御応答を回避あるいは抑制しながら感染をする。どのような仕組みで宿主を認識し、防御応答を回避しているのだろうか。一方、植物は病原体が感染すると感染を阻害する防御応答を行う。どのような仕組みで病原体を認識し、感染阻害を起こしているのだろうか。本講義では植物病原菌の感染機構について相互作用の観点から概説し、植物病害保護技術の基盤となる生命現象理解を進めることを目的とする。	
			昆虫生理生態学	昆虫は、種数においてもバイオマスにおいても地球上でもっとも繁栄している動物である。昆虫は、ヒトとは全く異なる進化の過程をたどりその頂点に立った生物のグループであり、その体のつくりだけでなく、生理・生態もヒトとは大きく異なる。昆虫の対極に立つ我々としては、昆虫の成功に学ぶべき点は数多い。また、昆虫の生理・生態についてよく知ることは、その弱点を知ることにつながり、害虫の新規管理手法のヒントが得られる可能性がある。本講義では、昆虫を生理・生態の両側面、かつ、様々な観点から解析し、詳細に解説することで、昆虫の生理・生態に関する広範な知識を身につけることを目的とする。	
			植物無機栄養学	植物の生育には、種々の環境因子（光、温度、水、大気、土壌など）が影響している。また、植物はこれらの環境因子を巧みに利用して生きている。環境因子に対する植物の生育応答について講義する。植物の無機栄養成分が光合成をはじめとする各代謝にどのようにかかわっているか、またこれらの過不足により、どのような症状を呈するかも講義する。植物が光合成を中心として、無機栄養をいかに上手に利用しているかを理解する。	
			多様性生物学	我々が暮らす現在の環境は、地球が創成してから46億年、原始生命が発生してから40億年経過したと言われている。これまでに、生命が減じる危機が5回あったが、今、この地球上で生存している生物種（現存種）は、それぞれが何かしらの術で一度も途絶えることなく現代まで命をつないできた。この一因として、現存種が遺伝という生命現象により親から子への情報伝達に成功し、外部環境変化に適応できたことが挙げられる。本講義では、まず地球の創成から現在までに起こったと考えられる環境の変化について学ぶ。ついで、生物が採用している情報伝達因子（遺伝子）と遺伝の仕組みを理解し、その遺伝子の揺らぎが現存する様々な生物種を産みだす一因となったことを理解する。また、ヒトが作出したと言われる遺伝子組み換え動物についてもスポットを当てる。	



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	農業生物・環境系	土壌微生物学	地球は化学物質に関してほぼ閉じた系であり擬化学平衡が生物により維持されているが、その物質循環の主役は微生物である。特に作物生産の場として重要な土壌中では動植物や環境との相互作用のなかで、元素と物質の変換が多様な微生物により行われている。ほとんどの微生物は従来の分離培養を伴う分析法では、培養が困難なため属名や種名を同定するに至っていない。本講義では土壌微生物学の重要事項に焦点を当てて学んだ後、環境保全、土壌微生物の有効利用のために、土壌微生物学の展開について考察する。	
			植物病害管理学	糸状菌・細菌・ウイルスなどの病原菌による被害によって、毎年約 8 億人分の食料が失われている。ほとんどの場合、植物病害を治療することは困難であるため、病原菌の生活環や防除技術の特性を正しく理解し、病原の感染や栽培環境への侵入を予防する必要がある。また防除法の理解だけでなく、国内の病害の流行を予測する技術開発や、海外からの病害虫の侵入リスクなど幅広い視点での知識も必要とされている。本講義では「植物病理学」などの関連科目で学んだ基礎知識を基に、植物病害の管理について修得する。	
			害虫防除論	地球の人口は現在 70 億人を超え、今後も増加の一途をたどると考えられている。このため、食料の生産量確保は人類の課題である。これまでに人類は、害虫被害による農作物の損失回避のために殺虫剤を開発し頻用してきたが、同時に他生物種の生態系を著しく破壊する結果となった。「害虫防除論」では、まず、害虫とはヒトの都合でつけられた命名であることを理解し、害虫の多様性を学修する。さらにヒトが昆虫から農作物を守るために行ってきた環境負荷を低減する工夫について農業を中心に紹介する。最終回では、これまで得た知識を用いて今後ヒトが暮らしていく環境に必要な害虫の管理法を検討する。	
			雑草管理学	適切な雑草の防除は、作物生産の維持のために不可欠である。この講義では、効果的かつ効率的な雑草管理のために必要な基礎的な知識を修得することを目的とする。前半では雑草の分類、生態、群落形成、外来雑草問題などの雑草の生物的特性について、後半では様々な防除手段、除草剤、除草剤抵抗性雑草など雑草管理技術について扱うほか、最新の雑草問題や現場での総合的雑草防除の実践例なども紹介しつつ講義する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	実験・実習系	化学実験	<p>(概要)  農学・生命科学分野の「実験」を正しく安全に行うためには、化学の基礎的な知識や技術が必須である。「化学実験」では、農学・生命科学の基礎となっている化学の基本的な事項について、実験を通じて理解を深め、その技術や考え方を身をもって体得することを目的とする。農学・生命科学分野で必要とされることが多い、分析化学から、滴定、比色、クロマトグラフィーなどを取り上げ、身近な素材を使って実験を行う。また、実験で得られたデータのまとめ方や視覚化、考察の仕方なども併せて学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(① 久保康之・9 飯田祐一郎・4 奥本裕・10 牛島智一・3 石川幸男・14 小玉紗代・15 高木大輔・13 工藤愛弓／1回) (共同)  基礎化学の導入として安全講習を行い、実験室・器具の使い方、実験ノートの書き方を学ぶ。</p> <p>(① 久保康之・9 飯田祐一郎・14 小玉紗代・15 高木大輔／3回) (共同)  基礎化学として便量の仕方、ピペットマンの使い方、濃度計算、データ整理を学ぶ。分析化学としてpHについて(原理と測定：pH試験紙とpHメーター)及びバッファの作製方法を学び、酸塩基滴定により食酢中の酢酸量を測定する。</p> <p>(4 奥本裕・10 牛島智一・14 小玉紗代・15 高木大輔／3回) (共同)  分析化学として比色の原理、吸光度の測定の基礎を学び、清涼飲料水中のグルコース濃度や緑茶タンニン量を、比色法により測定する。クロマトグラフィーの原理を学ぶ。</p> <p>(3 石川幸男・13 工藤愛弓・14 小玉紗代・15 高木大輔／3回) (共同)  分析化学としてペーパークロマトグラフィーで色素を分離し、視覚的にクロマトグラフィーを理解する。有機化学として卵を使い、タンパク質の変性、酸・アルカリ分解や、硫黄を含むアミノ酸の存在を確かめる。最後に、これまでに得たデータを使い、Excelを使った統計比較や、データをグラフ化し視覚的に表現することを学ぶ。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	実験・実習系	生物学実験	<p>(概要)</p> <p>生物科学を学ぶ上で基礎となる現象や実験手法を、実際に体験して学ぶ。分子レベルでの実験としては、核酸の抽出と性質の検討、酵素反応や光合成反応の測定と解析などを行う。また、光学顕微鏡を用いて、染色体、各種の細胞、微生物、等の形態と多様性を観察するほか、肉眼による観察実験としては、ラットと魚類の解剖、動物の消化組織の比較観察などを行う。これらの実験を通じて、実験計画の立て方や、実験機器の安全取り扱い、スケッチなどを含む生物観察の技法、実験データの定量的扱い、無菌操作や微生物の培養方法と成育特性、レポートの作成の仕方、などを総合的に学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(2 寺林敏・11 北村祐人・5 川崎通夫・7 山川武夫・8 佐野修司・14 小玉紗代・15 高木大輔・13 工藤愛弓／1回) (共同)</p> <p>安全講習を行い、実験室・器具の取り扱い方、実験レポートの書き方、顕微鏡の取り扱い方、スケッチの仕方、微生物・細胞・組織の観察方法を学ぶ。</p> <p>(5 川崎通夫・15 高木大輔・14 小玉紗代・13 工藤愛弓／3回) (共同)</p> <p>藻類と高等植物から有機溶媒によって光合成色素を抽出し、薄層クロマトグラフィーによって分離し、比較分析する。滅菌操作、無菌操作、液体培地と寒天培地の調製、細菌の培養、動物の消化管組織の比較・観察について学ぶ。</p> <p>(2 寺林敏・11 北村祐人・14 小玉紗代・15 高木大輔・13 工藤愛弓／3回) (共同)</p> <p>タマネギの根端分裂組織からプレパラートを作成し、染色体を観察する。ショウジョウバエの多糸染色体を観察する。オオカナダモの光合成速度を測定し、光合成に対する光や温度の影響を調べる。ラットと魚類の解剖を行い、動物の体のつくりを学ぶ。</p> <p>(7 山川武夫・8 佐野修司・14 小玉紗代・15 高木大輔・13 工藤愛弓／3回) (共同)</p> <p>ブロッコリーから核酸を抽出し、その基本的な性質を学ぶ。分光光度計の使い方を学ぶ。アミラーゼによるデンプン分解反応を、分光光度計を使って測定する。酵素の基本的な性質を学ぶ。コロニーの計数や液体培養での濁度測定を行い、微生物の増殖を学ぶ。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
			物理学実験	<p>物理学は自然科学の基礎となる学問であり、自然現象のみならず、電子・通信・コンピュータ技術、さらに生命・医療の分野にも応用され、現代の社会を支えている。本実験では、自然や身の周りの現象の観察・測定などの物理学に関する基礎的な実験を実施し、実験機器の使用手法、コンピュータを活用したデータの取得と解析方法、得られた結果の表現・評価方法、さらに実験報告書の書き方等の総合的な問題解決能力を養う。自然科学における定数や法則の意味についても実験を通して身につける。</p>	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	実験・実習系	農場実習	夏期休暇期間に、連続 3 日間で実施する。夏期に行われる農園芸作業のうち、花卉類の播種、採花・調整、根菜類の播種、秋冬野菜苗の定植、サツマイモの収穫、ブドウの収穫・調整等を行う。収穫は、「農業生産学実習 I」で自分たちが播種あるいは定植を行った作物であり、収穫物の収量性、品質の良否を見ながら、播種、定植そして管理との関係について評価する。「農業生産学実習 I」と同様、農業の基本作業を体験し、農業生産技術の理解と基礎的な農業技術の修得を目的とする。	集中・共同
			農業生産学基礎実験 I	<p>(概要)</p> <p>農作物を環境負荷を少なく、効率的、合理的に生産するためには植物の形態・生理的特徴、遺伝様式の理解、環境要因の影響、病害や虫害の原因となる病原菌や昆虫について理解を深めることが重要である。本実験では植物、病原菌、昆虫を対象として、形態観察、組織・細胞観察、遺伝的解析、植物糸状菌病害の診断と病原菌の扱いについて、基礎的な技術を教授する。さらに、実験データの記載方法やまとめ方、考察の仕方などについて教授し、理解の深化をはかる。</p> <p>(オムニバス方式／全 10 回)</p> <p>(4 奥本裕・10 牛島智一・14 小玉紗代・13 工藤愛弓／4 回) (共同)</p> <p>イネ植物体を液体窒素で凍結後に粉砕し CTAB 法で DNA 抽出操作と簡易 DNA 抽出操作を行い、高分子 DNA の状態をアガロースゲル電気泳動で確認する。イネのたれ葉変異系統と原品種との交雑 F2 集団を使い、表現型の分離を調査する。メンデル比の期待分離比との適合度を検定する。モチと巨大胚の F2 集団を使った 2 つの表現型の独立遺伝検証や、コムギ品種を用い根端分裂細胞の染色体数を観察する。これらの一連の作業を通して、農業生産における実験の基礎的手法を学ぶ。</p> <p>(① 久保康之・9 飯田祐一郎・14 小玉紗代・13 工藤愛弓／3 回) (共同)</p> <p>培地の作製、モル濃度の計算、滅菌機器の操作方法、図表の表記方法、レポートの作成方法など実験に必須な基礎知識を修得し、罹病植物から培地上への分離・培養を通じて、糸状菌病の診断技術を修得する。罹病植物における病態を顕微鏡観察し、糸状菌病の基礎的な診断技術を修得のうえ、準備した罹病植物またはキャンパス内の罹病植物片を採集して観察する。病原糸状菌の孢子発芽、付着器形成、侵入菌糸形成過程を顕微鏡観察し、感染器官の機能阻害をもたらすメラニン合成阻害剤の効果検定を行う。これらの一連の作業を通して、農業生産における実験の基礎的手法を学ぶ。</p> <p>(3 石川幸男・12 藤井毅・14 小玉紗代・13 工藤愛弓／3 回) (共同)</p> <p>カイコガ成虫の全体像を実体顕微鏡下で観察する。触角、口器、脚を体から取り外し、その構造を細かく観察してスケッチする。実体顕微鏡下でカイコガ幼虫を解剖し、気管・消化管・生殖器官・絹糸腺の内部器官をスケッチする。カイコの幼虫から血液を採取し、その色を観察する。これらの一連の作業を通して、農業生産における実験の基礎的手法を学ぶ。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	実験・実習系	農業生産学基礎実験Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>農作物を環境負荷を少なく、効率的、合理的に生産するためには植物の形態・生理的特徴、遺伝様式の理解、環境要因の影響、病害や虫害の原因となる病原菌や昆虫について理解を深めることが重要である。本実験では植物の遺伝的解析、植物細菌およびウイルス病害の診断と病虫害防除について、基礎的な技術を教授する。さらに、実験データの記載方法やまとめ方、考察の仕方などについて教授し、理解の深化をはかる。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(① 久保康之・9 飯田祐一郎・14 小玉紗代・13 工藤愛弓／4回) (共同)</p> <p>抵抗性・感受性品種への病原菌の接種と病徴観察、植物の防御応答の細胞観察を通じて、品種特異的抵抗性(レース)を理解する。罹病植物における病態を観察し、細菌病の基礎的な診断技術や、免疫学的手法(ELISA)によるウイルス病の基礎的な診断技術を修得する。殺菌剤を含んだ培地上で分離菌株を培養することで、耐性菌の検定法の修得と化学的防除法について理解する。</p> <p>(4 奥本裕・10 牛島智一・14 小玉紗代・13 工藤愛弓／3回) (共同)</p> <p>イネの3つのグループ、温帯ジャポニカ、インディカ、熱帯ジャポニカは籾幅、籾長、ならびにアミロース含量における多様性を確認する。イネ玄米から抽出したWXタンパク質の定量とアミロース含量の定量を行い、Wx座の遺伝子型とタンパク質含量ならびにアミロース含量との関係を確認する。イネの胚乳からDNAを抽出し、分子マーカーと巨大胚との連鎖価を算出して簡単な連鎖地図を作製する。</p> <p>(3 石川幸男・12 藤井毅・14 小玉紗代・13 工藤愛弓／3回) (共同)</p> <p>殺虫剤(ダイアジノン)のкокヌストモドキ成虫に対する効果検定を残渣接触法により実施する。カイコガの性フェロモンに対する典型的な行動反応の観察や、フェロモンの量と反応率の関係性を定量的に解析する。酵素活性の測定として、昆虫の糖代謝酵素トレハラーゼの活性測定法を学ぶ。</p>	オムニバス方式・共同(一部)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	実験・実習系	<p>農業生産学専門実験</p> <p>(概要) 農作物を環境負荷を少なく、効率的、合理的に生産するためには植物の形態・生理的特徴、遺伝様式を理解、環境要因の影響、病害や虫害の原因となる病原菌や昆虫について理解を深めることが重要である。本実験では植物、病原菌、昆虫を対象として、分子遺伝学的、生化学的、細胞・組織学的分析に関する基礎的な技術を教授する。さらに、実験データの記載方法やまとめ方、考察の仕方などについて教授し、理解の深化をはかる。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(4 奥本裕・10 牛島智一・14 小玉紗代・13 工藤愛弓／3回) (共同) イネの出穂期遺伝子 Ehd1 に関して、PCR 産物を制限酵素で切断することにより遺伝子型を特定する。イネ・コアコレクションと台湾で栽培されている品種について調査し、遺伝子型の分布を明らかにする。矮性遺伝子と連鎖する mPing 挿入を利用して連鎖分析を行い、座乗位置を決定する。イネの品種を栽培して各系統の1穂当たり粒数を測定し、系統平均値間の差異の検定について学ぶ。</p> <p>(① 久保康之・9 飯田祐一郎・14 小玉紗代・13 工藤愛弓／3回) (共同) 土壌から微生物を分離し、植物病原菌に対する拮抗性について培地上での検定を通じて、生物防除法を理解する。植物病原糸状菌からの DNA の抽出と ITS 領域の PCR 増幅を行い、糸状菌病の分子診断技術を修得する。植物病原糸状菌の形質転換技術と病原性変異株の選抜法を修得する。</p> <p>(3 石川幸男・12 藤井毅・14 小玉紗代・13 工藤愛弓／4回) (共同) カイコの性フェロモン腺からフェロモンを抽出し、TLC で分析する。カイコのフェロモン成分の化学的性質を推定する。カイコの血液採取法と、その血液中に存在するタンパク質をポリアクリルアミド電気泳動法 (SDS-PAGE) により分析し、タンパク質の分離法と分子量推定法を学ぶ。カイコの卵中で起こる胚子発育の様子を、時間をおって観察する。胸部で結紮したカイコ終齢幼虫の腹部に昆虫ホルモンであるエクジソンを注射し、その作用を観察する。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
			<p>農業生産学実習 I</p> <p>畑、果樹園、水田および施設 (ガラスハウスおよびビニールパイプハウス) における農作物の栽培管理に関する基礎的な知識と技術の修得を目的とし、播種から、育苗、耕耘、施肥、定植、灌水、生育期間中の種々管理 (除草、防除、摘心、誘引、ホルモン処理等)、収穫、調整までの作業を行う。また、土壌を用いない水耕栽培についても理論的理解と培養液管理について学ぶ。一部の収穫物については食味試験、糖度・酸度などの簡易な品質評価を行う。作物は春から夏にかけて栽培管理されるものを対象とする。</p>	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	実験・実習系	農業生産学実習Ⅱ	畑、果樹園、水田および施設（ガラスハウスおよびビニールパイプハウス）における農作物の栽培管理に関する基礎的な知識と技術の修得を目的とし、播種から、育苗、耕耘、施肥、定植、灌水、生育期間中の種々管理（除草、防除、摘心、誘引、ホルモン処理、剪定等）、収穫、調整までの作業を行う。また、水耕栽培については、「農業生産学実習Ⅰ」に引き続き、地上部栽培管理と培養液管理について学ぶ。一部の収穫物については食味試験、糖度・酸度などの簡易な品質評価を行う。作物は初秋から冬にかけて栽培管理されるものを対象とする。	共同
	専門総合群	応用生物系	分子からみた植物の働き	人類は、野生植物の役立つ性質を伸ばし、不要な性質を失わせたり変化させることで、野菜や作物を作り出してきた。これを野生植物の栽培化とよぶ。古代の人類はこれを経験的に行ったが、植物分子の知識が蓄積した現代は、望みの性質をもつ植物をデザインすることも可能になりつつある。本講義では、食糧生産の基盤となる植物の働きに関して分子レベルの知識を得ることを目標として、植物の様々な形質や機能に関する分子を紹介し、その働きを解説する。また、植物の最も基本的な機能「光合成」の分子基盤も説明する。	
			ゲノムと生命	ゲノムとは何か？この問いに対する答えは一つではない。ゲノムの定義は時代とともに何度も変わってきた。一口にゲノムと言っても、生物種、調べる現象、解析の技術や手法などによって、ゲノムのもつ様々な側面や性質が見えてくる。本講義では、ゲノムの一般的な性質や機能と、生命を操作する「ゲノム科学」の先端技術などを紹介するだけでなく、ゲノムの科学史、風変わりなゲノムを持つ生物、ゲノムに関わるユニークな現象などを紹介しながら、ゲノムとは何かを考え、ゲノム研究がこれからの人々や社会にどのような影響を与えていくのかを、自然観や生命観に対する影響も含めて、考察する。	
		生物の多様性と進化	<p>（概要）</p> <p>約 40 億年前に地球上に生命が誕生し、その後、地球環境の変化に伴い生命は進化して、現在、地球上にみられる多様な生物が生まれた。この間に多くの生物が絶滅していったことが化石研究から知られており、現存する生物は、私たちが含めて過酷な自然淘汰を生き残った一部の生物群である。また、人類は植物や動物を食糧として利用するために育種交配、また最近では遺伝子組換え技術を利用して人為淘汰し、生物の形質を変換させてきた。「生物多様性と進化」においては、植物、動物、微生物、海洋生物、及び昆虫について、これらの生物の多様性と進化について、自然淘汰と人為淘汰の観点から解説する。</p> <p>（オムニバス方式／全 15 回）</p> <p>（22 小保方潤一／4 回） 植物に関して、地球の歴史と生命の誕生、藻類の多様性、陸上植物の進化、進化のメカニズムについて学修する。</p> <p>（47 和田大／3 回） 微生物に関して、微生物の多様性「古細菌、原核微生物、真核微生物」、原核微生物、真核微生物の多様性とその利用、産業微生物とその品種改良について学修する。</p> <p>（19 井上亮／4 回） 動物に関して、脊椎動物の起源、脊椎動物の進化、動物の多様性、産業動物の品種改良について学修する。</p>	オムニバス方式	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門総合群	応用生物系	生物の多様性と進化	(32 豊原治彦 / 4回) 海洋生物に関して、海洋環境の多様性、海洋無脊椎動物の進化と多様性、魚類の進化と多様性、海洋生物の品種改良について学修する。	オムニバス方式
			動物とくらし	我々のくらしは様々な動物と関係して成り立っている。例えば、日々の食事は家畜や家禽などの産業動物によって支えられており、犬や猫などのペット（コンパニオン・アニマル）は日々の安寧な暮らしの重要なサポート役となっている。「動物とくらし」では、我々のくらしに、産業動物やコンパニオン・アニマルがどのように関わっているのかを学ぶとともに、それぞれの動物の生態や生理について説明し、くらしで関わる動物に関する基本的な知識を身につける。	
			微生物とくらし	有用微生物およびその利用に関して講義を行う。微生物には「バイ菌」という言葉に代表されるように、ネガティブなイメージがあるが、本講義では人類に役立つ微生物バイオテクノロジーについて広く述べる。具体的には、1) 各種発酵食品製造における微生物の役割、2) 有用物質生産の実例として微生物を用いたアミノ酸、核酸等の発酵生産および、抗生物質の発酵生産について、3) ニューバイオテクノロジーによる微生物機能の有効利用の事例として、遺伝子工学の利用によるタンパク質の生産、代謝工学等について、4) 環境修復のためのバイオテクノロジーについて、などである。また、それらを自らが展開していくために必要な考え方、今後の発展の方向などについて講義する。	
			海洋生物とくらし	海洋は地球の表面積の約7割を占め、更に深海など人類にとって未踏の領域も含むフロンティアである。このように広大かつ深遠な領域に住む海洋生物は独自の世界を形成し、直接的或いは間接的に我々の暮らしと関わっている。「海洋生物とくらし」では、水圏の成り立ちから海洋生物の分類、生理、生態について概説し、特に我々の暮らしとの関わりが深い「魚介類」に対する理解を深めることを目的とする。我々にとって身近な魚介類について、その旬、味、などの背景について、化学的な視点から考察する。	
	食品栄養系	食品学入門	食品学入門は、食品の一般的特質、その食品の栄養的価値並びに保存性を高めるためにどのような加工がなされているか、食品の栄養成分の構造、性質を学ぶものである。本講義では、食品の1次機能(食品成分の化学)、2次機能(嗜好成分の化学)、および3次機能(食品の生理機能性)について学ぶとともに、食品の加工法、貯蔵法を学修する。本講義と一般的な化学や生化学を並行して学ぶことにより、食品加工手法と食品の一般的知識を身につけることを目的とする。		
		食品の安全性	食品は、貴重な栄養源であり生きていく上で欠かせないものである。この食品の安全性を守ることは健康を維持する上で重要である。本講義では、リスク分析の考えに基づき、食品の安全性がどのような制度、規制によって守られているのかについて学修するとともに、食品の安全性を脅かす有害要因およびそのリスクの評価方法について学ぶ。また、輸入食品の安全管理体制や食品の製造から食卓に至る各過程における安全管理体制について学び、リスク管理の理解を深める。さらに、食品の安全から安心を得るために大切なリスクコミュニケーションを模擬体験し、リスクバランスについて考える。近年、海外からインターネット販売による輸入が増加している健康食品の安全性についても学ぶ。		



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門総合群	食品栄養系	旬の食材と薬膳	近年、少子高齢化や医療の高度化による医療費の増加は、国民健康保険制度などの医療保険体制の見直しや、国民一人ひとりが健康増進を図り、国民保健の向上すること目的とした健康増進法の施行にまで至っている。近年、薬膳や漢方などの基礎にある中医学的捉え方について、ヒトの体質、季節などに対応した健康を維持する食生活として注目されている。本講義では、身近な薬草および食薬の種類、効果、効能について中医学的捉え方を学修したうえで、薬膳や漢方方剤の知識を学修する。	
		栄養とスポーツ	専門分野で学修した知識・技能を、人々の生活の質向上や健康社会の実現へと展開するために、栄養・スポーツ分野におけるエビデンスに基づいた情報を理解する、具体的には、健康の維持・増進のための栄養・スポーツの基礎知識、運動不足や栄養の過剰・不足がもたらす身体への影響、栄養摂取や運動トレーニングによる生体の適応およびそのメカニズムを理解する。さらに身体のみならずこころの健康のために望ましい運動や栄養、運動トレーニング法について理解し、さまざまなライフステージにおける心身の健康を維持・増進するための総合的学修を行う。		
		栄養と健康	巷には食と健康に関する情報があふれているが、その情報が正しいかどうかを判断する事は難しい。栄養とは何か、カロリーとは何かに始まり、食生活に影響する諸因子、食生活と病気との関係、各栄養素の特徴と過不足の害、各食品群の栄養、食物アレルギーへと講義を展開して行く。後半は健康になるためには栄養と運動と休養（ストレス発散）が三本柱であることを学ぶとともに、栄養と健康に関する質問に答える。		
		病気の予防と食生活	日本人の死亡原因は、脳卒中や虚血性心疾患（心筋梗塞など）の循環器病とがんの割合が多くなっている。それらの多くの病気に関わっているのが生活習慣病である。生活習慣病とは、食事や運動、ストレス、喫煙、飲酒などの生活習慣がその発症・進行に深く関与する病気の総称をいう。その病因として、日々の食事や運動の生活習慣の乱れなどが考えられている。本講義では病気の予防と食生活、特に生活習慣病について学修する。		
	食農ビジネス系	食と農の倫理を学ぶ	<p>(概要)</p> <p>食と農をめぐる様々な問題が存在するが、そのなかには解決・緩和に向けて倫理的な考え方や行動規範が有効なものがある。本講義では、食と農をめぐる倫理的な考え方や行動規範を「食と農の倫理」と捉え、食と農をめぐる諸問題の所在を理解したうえで、食と農の倫理の思想と理念への認識を深めるとともに、その視点から課題の解決・緩和のための具体的行動や制度を知ることが目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(21 小野雅之・57 谷口葉子／1回) (共同)</p> <p>食と農の倫理について、それぞれの領域において分担して概説する。</p> <p>(21 小野雅之／7回)</p> <p>食への権利と倫理的消費、食料安全保障と食分配の不均衡、食品ロス、食料アクセス問題、企業の倫理とコンプライアンス、ソーシャルビジネスとCSV、農福連携と社会的包摂をテーマに学修する。</p> <p>(57 谷口葉子／7回)</p> <p>寄付文化と応援消費、食のオルタナティブ運動、環境保全型農業、公正と社会正義、アニマルウェルフェア、海と森林の保全、スローフードをテーマに学修する。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	食と農の経済を学ぶ	食料は人間が生きていく上で必要不可欠であるが、個人の消費能力には限界がある。このような食料の必需性と飽和性、さらには自然条件に左右される農業生産の不安定性や乏しい貯蔵性等から、農業や食料関連産業は、一般の商工業とは異なる特徴を有している。本講義では、このような食料・農業の特殊性を踏まえながら、食料消費の動向、農業及び食料関連産業の現状と問題点・課題等について、経済学的な考え方にに基づき、理解し考察する。	
	食と農の共生を考える	近年、さまざまな側面から「食と農の距離の拡大」（食と農の乖離）の問題が指摘されている。私たちが真に豊かな食を実現し、日本の農業を守り発展させていくためには、食と農の距離を少しでも短くすること、すなわち食と農を結び両者が「共生」していく道筋を考えていかなければならない。本講義は、さまざまな分野で農学を学ぶ立場から「食と農の距離」の問題を考え、生産者と消費者、農村（むら）と都市（まち）、産地と食卓を結び食農共生の課題や方向性について理解し、考えていく。	
	フードシステムを学ぶ	現在、我が国のフードシステムはスーパーチェーン主導といわれている。本講義ではフードシステムの仕組みを概観したうえで、とくにスーパーチェーンの誕生、成長、成熟過程を取り上げる。具体的には、スーパーチェーンが我が国に誕生した高度経済成長期以降のフードシステムの変遷とその背景、さらにスーパーチェーン主導が確立した1990年代以降、フードシステムにどのような問題が生じているか、その中でも価格形成メカニズムに着目し、そのしわ寄せが生産者に及んでいることを学ぶ。また、「買い物難民」などフードシステムの新たな問題も取り上げ、スーパーチェーンの評価(功罪)について複眼的思考を学ぶ。さらに、「地域ブランド化」や「六次産業化」の取り組みなど地域問題についても理解を深める。	
	農業の多様性を学ぶ	さまざまな気候、生態環境、歴史、文化、社会・経済状況などを反映し、世界各地や日本で多様な農業（農耕、牧畜、狩猟採集、林業、漁労などを幅広く含む生業）が営まれている。本講義では、多様性をキーワードに、これらの農業の成り立ちや特徴を理解し、私たちが直面している地域・地球環境問題（例えば、貧困問題、環境荒廃、過疎化など）の解決に向けたアイデアや取り組みについて考える。	
	食と農の歴史を学ぶ	今日のわが国の農業・農村社会や食生活・食料消費の現状と特徴、課題を知るためには、歴史的な視点を持つことが必要である。本講義では、近代（明治）以降のわが国の農業・農村社会と食生活・食料消費の歴史を、いくつかの段階に区分し、それぞれの段階における経済・社会の状況、農業と食生活の状況と特徴、課題について、特に現代（第2次世界大戦後）を中心に講述する。そのことにより、わが国の食料・農業の歴史的な変遷に関する理解を深めることを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	ゼミ・卒業研究	基礎ゼミナール	本ゼミナールは、新入生が学部・学科での学修を不安なくスタートし、目標を持って大学での勉学に励むために必要な基礎的知識・技能・態度を修得する教育プログラムである。すなわち、学生が大学での学修に必要な基本的知識や主体的で深い学びの方法を修得し、自ら大学での学びをデザインするとともに、将来の目標について考えることを目的とする。各専任教員による少人数ゼミナールを基本とし、教員と学生が密接にかつ自由に、相談・議論しながら進める。教材として全学共通教材である「First Year Study Guide」を活用し、大学として共通する項目を学修するとともに、教員独自の教材を用いて学修を深める。	
		農業生産学研究	本科目は、卒業研究に先立って各研究室での基礎的な研究活動を通して、自らが主体的に能力、適性、志望に応じた進路を選択できるようになることを目的とする。「農業生産学研究」は、大学4年間の学修の集大成としての卒業研究を円滑に行うため、これまでに学修した専門的知識・技能および汎用的能力を基本に、各分野の研究の遂行に必要な情報の収集方法を修得するとともに、問題発見力および解決力を身につける。	
		卒業研究	これまでに学修した専門的知識・技能および汎用的能力をさらに深めて大学4年間の学修の集大成としての卒業研究を行う。卒業研究では、学生が研究テーマの設定、研究方法の策定、研究調査の実施、研究成果の解析・まとめを行い、卒業論文を作成するとともに、発表会において発表・ディスカッションを行う。これらを通して、学術研究における倫理的規範、課題の発見（研究テーマの設定）と解決（研究の進め方）、思考力・判断力（研究結果のまとめ）、表現力（論文作成およびプレゼンテーション）を身につける。さらに、教員とのディスカッションや共同研究などを通して多様な人々と協働する力を養う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	共通系	大学教養入門	本科目の内容は、大学生としての教養を身につけるスタートラインに立つことにあり、自らが主体的に知識を獲得し、対話を通して理解を深め、表現するための技術等を修得することである。本講義では教養入門書を用いて ABD（アクティブ・ブック・ダイアログ）読書法や協働学習の習慣を身につけるとともに、チームワーク能力、コミュニケーション能力を身につけることを目標とする。	集中・共同
	語学系	日本語表現法	我々は日本語を用いて、何をどのように表現しているのだろうか、そして表現できるのだろうか。本科目では、日本人が日本語を用いて、どのように表現してきたのか、そしてどのような表現が可能なのかを、様々な事例を通して考える。それによって、言語に対する感覚を研ぎ澄まし、言葉にこだわる人間になることを目指す。日本語表現の特徴について、具体的に説明できること、日本語表現を客観的にとらえ、他の言語とも比較しつつ、多様な視点から考えることができるようになることを目標とする。	
		基礎英語 I a	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題についての平易なパッセージを読んで理解できるようになる。また、ゆっくり、はっきりと発声（再生）されれば音声だけでも理解できるようになる。読む・聞くことについては、CEFR-J[A2-1]を目標とする。	
		基礎英語 I b	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題についての平易なパッセージを読んで理解できるようになる。また、ゆっくり、はっきりと発声（再生）されれば音声だけでも理解できるようになる。読む・聞くことについては、CEFR-J[A2-2]を目標とする。	
		基礎英語 II a	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題について、基本的な語彙や表現を用いた英文を書けるようになる。また、前もって用意すれば同じ内容を口頭で発話できるようになる。書く・話すことについては、CEFR-J[A1.1-A1.2]を目標とする。	
		基礎英語 II b	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題について、基本的な語彙や表現を用いた英文を書けるようになる。また、前もって用意すれば同じ内容を口頭で発話できるようになる。書く・話すことについては、CEFR-J[A1.3]を目標とする。	
		実践英語 I	これまでに学修した英語のスタディスキルをさらに向上させる。ICT 等を用いて、より高度な 4 技能統合型の演習を行う。インプット活動のみならず、アウトプット活動を取り入れ、各技能の基礎力および応用力を養う。読む・聞くことについては、CEFR-J[B1.1]を目標とし、自分に関連する内容（日常生活、学校生活など）の英文に関する基本的な情報を理解できるようになる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	実践英語Ⅱ	これまでに学修した英語のスタディスキルをさらに向上させる。ICT等を用いて、より高度な4技能統合型の演習を行う。インプット活動のみならず、アウトプット活動を取り入れ、各技能の基礎力および応用力を養う。書く・話すことについては、CEFR-J[A2.1]を目標とし、海外研修、留学、ホームステイ、観光、あるいは海外からの訪問客への対応など、日本の大学生が英語を使用する現実的かつ具体的な場面と相手を想定しながら、複数の英文を連続して発話できるスピーキング力、複数の英文を組み合わせてパラグラフを構成できるライティング力を身につけるためのトレーニングを行う。	
	英語基礎会話 a	本科目では、基本的な英会話力の向上を目指す。日常における様々なシーンを想定し、会話がスムーズにできるように練習する。ペアワークやグループワークなどを通じて、自分のことを一方的に話すだけでなく、相手の話を聞いてそれに受け答えできるように訓練をする。また様々な英語表現に触れ、会話の幅を広げることも目的の一つとしている。	
	英語基礎会話 b	本科目では、英語基礎会話 a に引き続き、基本的な英会話力の向上を目指す。様々なシチュエーションを想定し、より深い内容の会話ができるように練習をする。ペアワークやグループワークなどを通じて、会話のキャッチボールがスムーズにできるように訓練を行う。文法の再確認も目的の一つとしている。	
	中国語Ⅰ	中国語を初めて学ぶ者にとって、中国語の基本的な発音や文法を理解し、一定の語彙数を早期に修得することが重要である。本科目では、中国語の発音や文法について学習するとともに、日常における中国語の表現方法の学習を通して、読む・書く・聴く・話すための基礎的な能力を修得する。	
	中国語Ⅱ	正確な発音と中国語文法の基礎を学習し、読む・聴く・話す・書くの四つの力を総合的にバランスよく修得する。1年間の学習を通じて初級中国語がマスターできる。単語を覚え、基礎文法を学び、簡単な文型を運用して、会話や作文ができるなど、基礎的な中国語能力の修得を目指す。	
	海外語学研修	本研修は、語学力（英語力）の向上と研修地の歴史・文化およびそこで生活する人々に触れ、国際的な知識と理解を深め、広範囲な国の人々と協力し合える国際感覚を身につけることを目的とする。事前に研修先の歴史や文化を調査することで、現地での研修を深められるようにする。研修先では、月曜日から金曜日に講義・演習を実施し、語学力別に分けたクラスで行う。研修に参加する学生同士で協力し合い、研修の目標達成を目指す。	集中
情報系	情報リテラシーⅠ	近年、高等教育機関での勉学や社会人としての仕事において、パソコンを使えるスキルは必要不可欠である。本科目では、パソコン初心者进行を想定し、パソコンでの文書作成ソフトや表計算ソフトの基本的な使い方、また発表の場で広く使用されるようになったプレゼンテーション資料作成ソフトの使い方を中心に学ぶ。実践力をつけるため課題を中心に演習を進め、レポートや発表資料の作成が適切に行えるようにする。さらに情報セキュリティやモラルについても事例を通して学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
教養科目	情報系	情報リテラシーⅡ	卒業研究で数値データを扱う場合、その統計処理に関する知識は必要不可欠である。情報技術の有効利用の中でも、科学技術分野においてとりわけ重要であるデータの処理と分析のための種々の数学的処理技法を理解する。本科目では、情報リテラシーⅠで用いた代表的かつ標準的な表計算ソフトを用い、基本的な統計処理の方法を学ぶとともに、統計の基本を理解し、正しい統計処理方法の選択や結果の解釈を行うための基礎力を身につける。	
	体育系	スポーツ科学Ⅰ	生涯を通じて明るく活気のある生活を営むために、スポーツ・身体運動は極めて重要な役割を果たす。運動技術の修得およびスポーツの楽しさを理解するとともに、自らの生活行動の中にスポーツ・身体運動を実践する能力を育成することを目的とする。本科目では、スポーツ・身体運動を通して①健康の維持・増進をはかる②運動技能を向上させることができる③マナーやルールを理解することができる④コミュニケーション能力やリーダーシップを培うことを目指す。	
		スポーツ科学Ⅱ	「スポーツ科学Ⅰ」で培った学修内容を応用し、心技体のさらなる向上を目標とする。①<心>スポーツ活動を通じた成功体験や規範遵守、主体性、自己統制、表現力、協調性、他者受容意識の向上など人間力の醸成を目指す。②<技>スポーツ科学Ⅰよりも高度なスポーツ技術の獲得を目指す。③<体>運動やスポーツが身体へ及ぼす影響やそのメカニズムについて理解し、自らの生活行動の中にスポーツを実践できる能力の育成を目指す。	
	人文系	心理学	心理学はその行動法則を明らかにする行動の科学として、広い領域に関係している。実際に見ることができ、観察可能な行動から、人間の“こころ”の動きを検討したり、目で見て確認できないものについても、観察・実験・調査といった様々な方法を用いて客観的なデータを集め、心の働きを研究している。本講義では、これまでに行われてきた多くの実証研究を学修することによって、心理学の基礎知識を身につけることを目的とする。	
		倫理学	現代の社会システムに関する理解を通じて、倫理的規範/価値観の変容について学修する。日本の高度成長期には「消費は美德」という言葉が流行し「大量生産/大量消費社会」を賛美したものであった。一方で、現代社会で時代をリードしているのは「Mottainai (もったいない)」というエコロジーを主軸としたものであるが、本当にこのような価値観の転換に成功しているだろうか。本講義では、20世紀の半ば以降、今日に至るまで社会を動かしている経済のシステムを理解した上で、それを変革するための道を探る。	
		哲学から学ぶ	哲学的な知の営みは、他の学問と比較してどのような独自性、特徴を持つであろうか。本講義では哲学的に問うことの本質を明らかにしながら、いくつかの哲学的・倫理学的問題を取り上げ、共に考えていく。「人間の心と動物の心」「悪」「人生と時間」といったテーマを中心に論じる。哲学的に考えるとはどういうことであるかを理解し、講義で取り上げる個々の哲学・倫理学のテーマに関して、自分なりによく考え、それを論理的に文章にまとめる力を身につける。	
		地誌学	本講義の目的は、地誌学の学修を通して、地理学的(空間的)な視点を用いて、世界各地の諸問題や地理的現象を把握する能力を身につけ、地域的な特徴や地域が抱える問題点を的確に理解することである。本講義では、世界各地の地誌について学修しながら、上記の能力の修得を目指していく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	人文地理学	窓の外にひろがる風景、大学が立地する町並み、人びとが抱くイメージなど。これらをどのように捉えることができるのか、また、どのように捉えてきたのか。それが本講義のテーマである。言い換えると、本講義は地理学史の流れに沿いながら、＜地理学的なもの見方・考え方＞について幅広く解説するものである。この見方・考え方は、意識されていない場合も多いが、実はわたしたちの生活のさまざまなところに活用されている。本講義を通して、身近な問題を新たな視点から捉え直すきっかけを提供していく。	
	文学から学ぶ	日本の近代文学の短編を読む。なお、明治から敗戦までの作品を近代文学と位置づける。文学作品を読むことは、それだけで我々の心を豊かにしてくれる。作品を読むことで、近代の日本人が何を考え、発見し、何に悩んでいたのか、共に考えていく。文学作品への抵抗をなくし、作品を読んで考える習慣を身につけることを目的とする。毎回、1編の短編作品を取り上げて講義し、作品を鑑賞する中で、その文学的特徴を説明できるようになることを目指す。	
	文化人類学	人類学はこれまで、世界中のさまざまな人々の多様な生の理解を通して、私たち人類が地球上に生き、存在するということがどのような事態なのかを探求してきた。本講義では、人類学の基礎的な概念や方法を概説し、人類学がどのような学問なのかを示した上で、そのような人類学的な見方の成立と歴史的展開をあとづける。そのうえで、人類学的思考がどのようなものであるか、人類学誕生以来の学説史的な展開、流れについて理解することを目指す。	
	女性学	女性学とは、男女ともが、社会のしくみについて考える場である。社会の「主人公」が男性であることが自明であった時代、「見えない存在」とされていた女性のあり方に目を向けることが女性学のきっかけとなった。しかし、それは、性別によって個人が生き方を決められてしまう社会のしくみそのものを問う学問および活動を意味する。現在では、性をめぐる社会のしくみは、男女それぞれの個人としての「生きにくさ」と何かしら関係があるのかもしれないと捉えられる一方、「もはや性別による不都合など存在しない」という意見も多く見られる。本講義では、1970年代以降、今日に至るまで、女性学において語られてきた様々なトピックをヒントに、性をめぐっての、今日的な社会のしくみについて、家族、恋愛、仕事、セクシュアリティなど様々な角度から理解を深める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	社会系	ボランティア活動論	本講義は、「ボランティアとは何か」をさまざまな角度から考察することを通じて、自己と社会の関係の理解を深めることを目指す。とりわけ、ボランティア活動の意義に関する複数の理解の各々を批判的に考察しながら、根本的な意味で〈互いに支え合う存在〉であるところの人間存在のあり方をつかむことを目標とする。本講義を通じて、現在行なわれているさまざまなボランティア活動の具体的な内容を知るだけでなく、ボランティアの意義の理解を深めることによって人間理解（すなわち私たちの自己理解）も深めることができる。	
		経済学入門	経済現象を理解するために必要な基本的知識や経済学的な考え方、現実の経済現象を事例として参照しながら、解説することを目的とする。戦後日本経済の歴史の大まかな流れや、雇用、企業組織、財政、社会保障といった日本経済の動きに関わる基本的な事項について説明でき、日々の経済ニュースを理解できるようになることを目指す。そのうえで、日本経済が抱える諸問題について、その重要性を理解し、異なる立場の議論を比較することができる力を身につける。	
		日本の政治	人間が集団で生活している限り、法や条例、公共事業の影響を避けて生きることはできない。それらを決定するのが政治であり、皆政治に参加することによって自分自身の生活をより善いものに作りかえることができる。しかし逆に、政治に参加しないことによってより悪いものになってしまう可能性も否定できない。本講義では、有権者である学生に日本の政治についての基本的な知識を与えることを目的とする。政治学の区分で言うところの政治体制論、政治過程論、日本政治史、国際政治、地方自治の内容について、日本の政治を概観していく。また、最近のニュースが理解できるように、政治的な時事問題についても紹介し、解説する。	
		法学入門	法は私たちの日常生活と密接な関係にあり、私たちが普段あまり意識しないで行動をしても、その行為の裏には法律関係若しくは法律問題のあるものが沢山ある。法を学ぶことは世の中を知ることもつながる。本講義では、法学の基礎から始め、身近な具体的事例をとりあげ、民法、商法、刑事法、民事訴訟法などの基礎を解説する。日常生活において必要、有益な法律の知識を得て、身近な法律問題を法的な立場から考えるようになることを目指す。	
		経営学入門	基本的な企業経営の仕組みについて講義する。資本主義社会における企業の役割を踏まえて、現代企業の経営活動を理解することを目標とする。本講義では、組織論・管理論・戦略論の基本的な用語と概念を学び、それらを用いて具体的な経営現象を説明していく。経営学の基本的な理論と概念を理解することで、国家公務員一般職試験および地方上級職試験における専門試験で出題される「経営学」を理解できる程度の知識を修得することを目指す。	
		観光学	近年、日本への外国人観光客が急速に増加しているが、これは日本だけの現象ではなく、世界的に国際観光が盛んになっている。少子高齢化の時代を迎え、交流人口の増加を期待される観光は日本の重要政策に位置づけられ、今後ますますその必要性が高まってくると考えられる。本講義では、観光経済を学ぶうえでの観光の基礎知識を修得することを目的とする。観光振興の意義を理解し、観光現象について書かれた記事や文献を理解できるようになることを目標とする。	



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目		日本国憲法	本講義では、日本国憲法の意義、および基礎的知識を修得することを目的とし、講義テーマに関連する憲法上の問題をとりあげ、これと関わりのある基本事項、判例、学説を解説・検討する。さらにその知識を活用して、社会における多様な問題について、憲法の視点を踏まえて自分の言葉で発言できるようになることを目標とする。できるだけ身近な素材を利用し講義を進めることで、「憲法」と日常生活との関わりについて考えてもらえる機会とする。また、憲法をめぐるさまざまな考え方にふれ、物事を多角的にみる能力を養う。	
	自然系	教養数学	本講義では、農学部専門的知識を学ぶ上で必要となる、統計学などの応用数学と言われる知識を修得するための基礎的・基本的な数学の知識や考え方を扱う。それらを学び、理解することを通じて、論理的思考能力・判断力・表現力といった素養を身につける。さらにそのような数学的素養を活かし、農学領域やそれを取り巻く様々な分野に対しても応用できるような基本的技能を習得することを本講義の目標とする。	
		生命倫理	農学の学びにおいて「総合科学」の基礎となる幅広い知識の修得に加え、倫理観をもった豊かな人間性を涵養する教育が必要であり、農学分野における生命科学の倫理的配慮が社会的、科学的、技術的側面などから求められている。なかでも、農学分野において、ゲノム解析、各種細胞の研究利用、遺伝子組み換えによる品種改良など生命に係る技術利用が行われ、人類に有益な結果をもたらす一方で、予期せぬ有害な影響なども予測される。本授業では、生命科学分野で配慮されるべき生命倫理観及びその行動を学ぶ。「ヒトの生死や生命とは何か」、「人間とは何か」など根源的な問いに向き合いながら、農学における生命科学の最新技術をヒトや地球環境に及ぼす影響を考察しながら、倫理的行動について学修することを目的としている。	
		生物と環境	環境をめぐる諸問題は、ニュースでみない日はないほど私達にとって身近な話題となっている。環境を理解するためには、さまざまな知識や考え方が必要である。本講義では、生物（ヒトも含む）と環境の関わりを学ぶことを通して、私達の身の回りにある環境・環境問題を正しく理解できるようになることを目指す。そして、これからの時代を生きる人類にとって避けて通れない環境問題の解決を模索していく上で必要になる考え方を身につけ、自身で情報を見わけることができるようになることを目標とする。	
		地学	地学の大きな柱である固体地球、岩石鉱物、地質・地史、大気・海洋、天文の諸分野に関して、実際のデータや写真など、具体的な資料を用いて、我々の住む地球や我々を取り巻く宇宙に関する知見を深め、我々が経験する自然現象がいろいろな法則や原理によって説明できることを学ぶ。扱う範囲は広いが、単に広く浅い知識を修得するのではなく、自らの手で資料を検討することによって少し深い知見も得られるよう進める、また今まに行われている研究についても紹介する。	
		地学実験	地学実験では、地球物理学・天文学・地質鉱物学における基本的事項について修得する。天文学分野では、天文に関する知識を実地の観測結果と結びつけて考察できるようにし、観測者である自分の空間位置を太陽系と恒星の世界の中で把握できるようにすることを目的とする。また地質鉱物学分野では、直接生の岩石や堆積物、化石などに触れることによって地球の歴史や各自の生活の基盤になっている大地の生い立ちを考察できるようになることを目的とする。	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	キャリア系	キャリアデザインⅠ	就職や人生設計の前提として、「大学生」として大学生活をプランニングする。「基礎ゼミナール」と連携しつつ、「摂南大学」の学生として必要な知識や技能を修得する。専門の学びとの接続となるよう基本的なスタディスキルを修得する。講義と並行して、グループワークを実施し、課題やメンバー構成などの所与の条件に対してグループとして処していく力を養成する。社会の変化を知り、調べ、考え、発表するための技能についての理解を深めることを講義目標とする。	
		キャリアデザインⅡ	現代社会で生じているさまざまな事象を、氾濫する情報からの確にとらえ、それらを起点に思考し、自らの活かし方、伸ばすべきポイントについて考える。将来、就きたい職業を模索し、そのために今何を行うべきかを自ら考え、宣言できるようになることを目指す。講義だけでなく、グループワークや個人で考えるワークを織り交ぜて行い、来るべき就職活動に向けて、自分に必要な能力を自覚し学び、計画を実行に移せるようにする。	
		数的能力開発	社会に出るにあたり必要とされる数的能力を学修する。社会人として数的能力が必要となる場面は多く、就職活動でも筆記試験で算数・数学はよく使われる。本講義では、将来のキャリア形成に活かせるよう、社会人として必要となる数的能力を高めることを目的とする。自力で解く、講師による解説、類題を解くという流れで、段階的に実践問題に取り組む。さまざまな問題を確実に理解し、解ける力を身につけていく。	
		インターンシップ	インターンシップの目的は、実際の仕事現場の一員として業務を担当することで、そこで働く人々がどのような考え方で働いているのか、特に「1)仕事の社会における役割」「2)仕事の成果とは」「3)仕事の責任と充実感」を直接肌で感じることである。事前学習として、ビジネス組織のあり方、マナーや常識を修得する。インターンシップ先での実習参加の機会を最大限に活用し、自分や社会をより理解し、将来の選択肢や可能性を広げること、職業観の涵養に努めることを目標とする。事後学習も行う。	集中※講義
外国人留学生対象科目	日本事情FⅠ	年中行事やしきたりなど日常生活に見られる日本の伝統文化から、日本人の価値観や考え方について、体験もまじえながら考察する。日本の年中行事やしきたりについて理解を深め、考察したことや体験を通して学んだことを日本語で表現する力を身につける。日本文化・社会と自国の文化・社会及び他国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できるようになることを目標とする。		
	日本事情FⅡ	日本文化・社会について、日本映画を視聴して観察したり考察したりする。また、映画の台詞や使われている場面から日本語の文法や表現についても学ぶ。日本文化・社会について観察し、自国の文化・社会及び他の受講生の国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できることを目標とする。映画についての情報・その他背景知識についてまず説明し、映画の場面をいくつか視聴する中で内容理解・練習問題・その他の各種タスク問題を出し、テーマについてディスカッションをした後、「書く」練習を行う。		
	日本語読解FⅠ	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。読んだ内容を要約したり、口頭で説明する練習を行うことで、語彙力を向上させる。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目 外国人留学生対象科目	日本語読解F II	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。読んだ内容を要約し、口頭で説明する練習を行う。語彙力を向上させ、専門分野の文章を読むための読解力の基礎を身につける。	
	日本語文法F I	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回、講義テーマを決め、教員による解説と練習を繰り返しながら進め、中上級～上級の文法項目が運用できるようになることを目標とする。	
	日本語文法F II	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回、講義テーマを決め、教員による解説と練習を繰り返しながら進め、高度な日本語運用能力を身につけることを目標とする。	
	日本語表現作文F I	本講義ではレポートや論文の基礎を学び、レポート・論文の文体と書き方を身につけることを目指す。レポートや論文の書き方について解説し、書く練習を行う。「①レポート・論文の文体で書ける」「②読んだ内容を要約できる」「③段落分けして書ける」「④経過説明、分類、定義など、書きたい内容に合う表現を使って書ける」「⑤信頼性の高い資料を集め、ルールを守って引用できるようになる」ことを目標とする。	
	日本語表現作文F II	本講義では、実際にレポートを作成することを通して、レポート・論文の書き方を守ってレポートが作成できるようになることを目指す。テーマを決め、実際にレポートを作成していく。「①レポート・論文の文体で書ける」「②レポート・論文の書き方を守って書ける」「③アウトラインに沿って書ける」「④信頼性の高い資料を集められる」ことを目標とする。	
	日本語総合F I	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。JLPTのN1に合格していない場合には、その対策も行なう。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。	
	日本語総合F II	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。JLPTのN1に合格していない場合には、その対策も行なう。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。実際に日本社会で使用されている生教材を使って速読を行ない、できるだけ速く、自分に必要な情報を読み取る練習をする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目 外国人留学生対象科目	専門日本語 F I	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。本科目では、Eメールの書き方、自己PRの書き方、話の展開のさせ方を扱い、解説と練習を中心に進める。相手との関係、伝達内容、使用媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目標とする。	
	専門日本語 F II	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。ビジネス場面で使用する日本語表現、異文化ビジネスコミュニケーションについて学ぶ。用意した資料及びタスクシートをもとに講義、ディスカッション等を行う。ビジネス日本語・ビジネスマナー・日本の会社についての知識を得ることによって、日本での就職活動及び就職に必要な知識やスキルを身につけることを目標とする。	
	日本語会話 F I	講義を理解する際に役立つメモの取り方を学ぶと同時に、アカデミック場面における口頭発表のスキルを養う。さまざまなテーマに関する話を聞き、聞きとった内容をメモした後、その内容について発表する。「①まとまりのある話を聞いて、適切にメモを取ることができる」「②適切な表現を用いて、論理的かつわかりやすい発表ができる」ようになることを目指す。	
	日本語会話 F II	日本・国際社会におけるさまざまな問題や話題について日本語で議論する能力を伸ばす。さまざまな問題・話題に関するニュース等を見て、話し合う方法を進める。また、コースの後半は学生各自が興味のある話題を持ち寄って、話し合う方法をとる。社会的な話題について、日本語で論理的に意見を述べるができるようになることを目指す。	
帰国学生対象科目	日本事情 R I	年中行事やしきたりなど日常生活に見られる日本の伝統文化から、日本人の価値観や考え方について、体験もまじえながら考察する。用意したスライドやプリントに沿って、テーマについて学び、講義後に理解度の確認小テストを行う。その後、クラス全体でフィードバックを実施する。体験で学んだことはレポートを作成し、学生同士で意見交換を行う。異文化理解を深め、異文化に対する柔軟な見方、態度を養い、日本語の表現能力（技術）を高めることを目指す。	
	日本事情 R II	日本文化・社会について、日本映画を視聴して観察したり考察したりする。また、映画の台詞や使われている場面から日本語の文法や表現についても学ぶ。各映画について、まず映画についての情報・その他背景知識について説明し、映画の場面をいくつか視聴する。その後、内容理解・練習問題・その他の各種タスク問題を行い、テーマについてディスカッションした後、「書く」練習をする。日本文化・社会について観察し、自国の文化・社会及び他の受講生の国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できることを目標とする。	
	日本語読解 R	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。また、読んだ内容を要約したり、口頭で説明する練習を行う。専門分野の文章を読むための読解力の基礎を身につけることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本語文法R	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回テーマを設け、解説と練習を繰り返しながら進める。中上級～上級の文法項目が運用でき、高度な日本語運用能力を身につけることを目標とする。	
	日本語表現作文R	本講義ではレポートや論文の基礎を学び、レポート・論文の文体と書き方を身につけることを目指す。レポートや論文の書き方について解説し、書く練習を行う。「①レポート・論文の文体で書ける」「②読んだ内容を要約できる」「③段落分けして書ける」「④経過説明、分類、定義など、書きたい内容に合う表現を使って書ける」「⑤信頼性の高い資料を集め、ルールを守って引用できる」ようになることを目標とする。	
	日本語総合R	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。実際に日本社会で使用されている生教材を使って、速読を行ない、できるだけ速く、自分に必要な情報を読み取るための練習をする。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。	
	専門日本語R	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。Eメールの書き方、自己PRの書き方、話の展開のさせ方を扱い、解説と練習を中心に進める。相手との関係、伝達内容、使用媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目標とする。	
	日本語会話R	日本・国際社会におけるさまざまな問題や話題について日本語で議論する能力を伸ばす。さまざまな問題・話題に関するニュース等を見て、話し合う方法で進める。また、後半は学生各自が興味のある話題を持ち寄って、話し合う方法をとる。社会的な話題について、日本語で論理的に意見を述べるができるようになることを目指す。	
教職課程の設置により開設する授業科目	職業指導Ⅰ	職業教育や進路指導においては、職業構造や職種・業種内容について学んだり資格取得や技能訓練などを促進したりするばかりでなく、社会や産業構造の変化の中で自分はいかに生きていくかという「生き方の設計」について学ぶことが重要である。本科目を通して学生は、キャリア教育の理論と実践について理解を深めるとともに、経済社会・産業界の変化と職業指導に与える影響などについて知見を広め、「生き方の設計」の指導者としての資質能力の基礎を身につける。	
	職業指導Ⅱ	職業教育や進路指導においては、職業構造や職種・業種内容について学んだり資格取得や技能訓練などを促進したりするばかりでなく、社会や産業構造の変化の中で自分はいかに生きていくかという「生き方の設計」について学ぶことが重要である。本科目を通して学生は、キャリア教育の理論と実践について理解を深めるとともに、経済社会・産業界の変化とそれが職業指導に与える影響などについて知見を広め、「生き方の設計」の指導者としての資質能力の基礎を身につける。職業教育の理論、面談する際の技法への理解を深めることを講義の目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	理科教育法Ⅰ	理科教育法は中等教育において理科教育を如何に行うかを考え、教育現場で如何に実践していくかを身につける科目である。理科教育法Ⅰでは、高等学校を中心に戦後からの理科教育の流れをみつめ、現代の理科教育のあり方を考えていく。中学校・高等学校学習指導要領に則った教育課程の編成や目標、内容、方法等の基本的必須事項を理解して教授法を身につけ、授業計画や授業設計ができるようになる。高等学校の授業を生徒の立場から体験してもらう目的で、授業担当者が授業展開の実際を示すサンプル授業を実施するので、自身が授業を行うときの参考にしてもらいたい。教育実習等で不可欠な学習指導案の内容、作成の方法などにも触れる。	
	理科教育法Ⅱ	日本の教育問題の1つに理科離れがある。理科の面白さを引き出すためには理科の実験・観察の果たす役割は大きく、実験・手作業を通して身につく“見えない学力”は将来、技術者や研究者についたときの基礎力になる。理科教育法Ⅱは授業で実験・観察を行う意義をとらえ、理科の教科指導と授業力に関する資質と能力の育成をはかり、実験を取り入れた授業を組み立てることを前提に、授業計画や実験の方法について、具体例や実践例を挙げながら授業をすすめる。さらに理科教育法Ⅰと関連付けて指導計画、指導法などを実践の場で具体的に役立つ方法として身につけるために、各自に50分間の学校の模擬授業を実施してもらう。	
	理科教育法Ⅲ	高等学校の理科は選択制が導入されており、中学校理科の果たすべき役割は大きい。そのため、第1分野、第2分野の内容の特徴と小学校、高等学校の接続や内容との関連性について学び、物理、化学、生物、地学の各分野の特徴についての知識も必要となる。理科教育法Ⅲでは中学校の理科教師を目指す学生に、理科教育の内容、指導法に関する基本事項を再確認し、中学校で授業を行うために必要な授業作りの方法を身につける。また、楽しく、わかりやすい授業を行うための知識や技術を習得するとともに、簡単な実験・観察やグループワークなどのアクティブラーニングを積極的に取り入れ、学習者主体の活動的な授業が行えるようにする。また、聞き手である生徒が授業をよりわかりやすく受けることができるための方法や工夫を研究する。	
	理科教育法Ⅳ	本授業では、中学校や高等学校の授業を想定したうえで決められた時間の模擬授業を実際に行えるような授業実践力を培うことを目標とする。指定された単元の模擬授業を実際に行うことで、授業の難しさ、教材研究の重要性を知る。さらには模擬授業に対する研究協議によって、授業計画や指導法の改善を行う。総括して、教育実習時に十分通用するような授業実践力を培うことを第一目標とする。余裕があれば教授フローチャートを用いた授業計画も体験するものとする。	
	農業科教育法Ⅰ	農業教育を広い視野から眺めるためにまず、農の教育の本質・教育理念について知り、次いで文部科学省学習指導要領に基づく幼稚園～中学校の教育現場における普通教育としての栽培・飼育教育や高等学校における専門教育としての農業科教育と、それに関わる社会教育的実践の実態を理解する。さらに学習指導に関する一般的な手法や諸課題について理解するとともに、学校現場の農業教育実践の見学などを通じて、農業科の教育法の実践法を習得する。基本的に講義形式であるが、演習形式を採り入れることもある。教員採用試験の小模擬試験を適宜実施し、模範的授業の様子も適宜、鑑賞する。また、農業高校の授業見学や農業科教員との質疑応答の機会を設け、教育現場の実際の状況を理解する場を設ける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	農業科教育法Ⅱ	<p>講義（座学）や実習の授業において高校農業科の生徒を上手く指導するために必要な理論と技能を知識として理解するとともに、模擬授業の実践などを通じて体得する。</p> <p>専門高校の熟練教員の模範的授業の観賞や農業高校の教員との交流、学校の現場見学などから、さらなる授業実践力の向上を図る。</p> <p>演習形式的な授業で、教員と学生との間の質疑応答をできるだけ取り入れる。授業の後半には高校教科農業の教科書を使った学習指導案の作成、模擬授業を実践し、授業実践力を培う。授業の中で高校農業科の教員採用試験の過去問を活用した模擬試験を適宜実施する。</p>	
	教育原理	<p>「教育」という事象を成り立たせている諸理念・諸概念にはどのようなものがあり、また、それらの諸理念・諸概念が「教育」の思想や歴史のなかでどのように現れ、変遷してきたのかについての基礎的な知識を獲得することを目指す。さらには、その基礎的な知識を踏まえたうえで、現代の「教育」のあるべき姿について、受講者それぞれが自分なりに考えを深め、自分なりの理想の「教育」を構想することができるように、思考力や感性を磨いていく。</p>	
	教師論	<p>教職に関する理解を深め、自己の適性を見つめ直し、最終的に教職をめざすことについて主体的な進路選択を行うための判断材料を提供する。具体的には、「教職の意義とは何か」「教師の役割や求められる資質能力とは何か」「教職の専門性は何によって担保されるのか」「教師の職務とは何か」「教師の身分や身分保障はどのようなになっているのか」などについて基礎的な知識を講義し、これに基づき、関連するテーマについてディスカッションを通して理解を深める。</p>	
	教育経営論	<p>本講義では教育課程(カリキュラム)とは何かについて考える。まず教育課程はどのような目的から、どのような内容で編成されているのかについての歴史的経緯を考察する。同時に学校教育システムとの関わりから、その意義や役割を理解する。そして、わが国における学習指導要領の変遷や戦前・戦中・戦後のカリキュラムの実践的開発を知ると共に、これからのカリキュラム開発の課題について考える。特に、これからのカリキュラム開発では新学習指導要領で言われている「社会に開かれた教育課程」、「アクティブラーニング（能動的学修・学習）」そして「カリキュラムマネジメント」に注目し、その意義等について理解する。</p>	
	教育社会学	<p>近年、学校教育現場では様々な問題を抱えるようになってきました。一般的に私たちはそうした問題に対し、学校教育内部でのみ対処し解決しようとする傾向がある。しかしながら、そうした問題の多くは、時に関係のないような社会的、経済的、政治的、そして文化的なシステムと密接な関係性をもっていることが多々ある。そこで本講義では、教育現場で生じている諸問題を、特に社会学的観点からとらえ、検討していくことを目標とする。特に、最近社会問題化している子どもの貧困や教育格差問題等を扱いながら、体系的に現代社会と教育の関係性について学び、教育社会学の理論や概念を学んでいく。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	教育心理学	学校での教育活動において教師の果たす役割は大きい。学習の質を高めるために、教師が学習者を理解し、さまざまな形で援助していくためにはどうすればよいのか。それを考えていくにあたって必要な基礎的な知識を身につける。具体的には、幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程や意欲、学校における人間関係、個に応じた教育について学ぶ。また、学習活動と関係の深い人間の認知活動についても理解する。その上で、各発達段階における心理的特性を踏まえた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解する。さらに、日常生活の中で行われている学習活動や学校等における問題について、心理学的に説明し、考えることができるようになることを目標とする。	
	特別支援教育論	教職課程「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」に対応する科目である。 「障害」という概念を再構成するとともに、特別支援教育の理念・制度・方法についての歴史的変遷から最新の動向について整理し、現状と課題について考察する。貧困、被虐待、渡日等の特別な教育ニーズのある子どもに対する指導・支援のあり方についても取り扱う。通常学級で多様な教育的ニーズのある子どもがともに学びともに育つ教育を展望したい。	
	教育課程論	本講義では教育課程(カリキュラム)とは何かについて考える。まず教育課程はどのような目的から、どのような内容で編成されているのかについての歴史的経緯を考察する。同時に学校教育システムとの関わりから、その意義や役割を理解する。そして、わが国における学習指導要領の変遷や戦前・戦中・戦後のカリキュラムの実践的開発を知ると共に、これからのカリキュラム開発の課題について考える。特に、これからのカリキュラム開発では新学習指導要領で言われている「社会に開かれた教育課程」、「アクティブラーニング(能動的学修・学習)」そして「カリキュラムマネジメント」に注目し、その意義等について理解する。	
	道徳教育論	日本や世界の「道徳教育」が歴史的にどのように成立し変遷してきたのか、また、そもそも「道徳教育」を「道徳教育」とらしている一般的な原理とはいったい何なのか。「道徳教育」の歴史や原理に関するこうした基礎的な知識を身に付けることを目指す。また、この基礎的な知識を踏まえたうえで、さらにはより具体的かつ実践的に、現代の日本の学校における「道徳教育」の目標や内容について理解し、現代の日本の学校において行われる様々な「道徳教育」の指導方法を身に付けていく。	
	特別活動・総合的な学習の時間の理論と指導法	特別活動の歴史と意義、方法論について学ぶ。また、実践上の課題をとらえ、学級活動の指導計画の作成や問題解決に至るかわりについて理解を深める。総合的な学習(探究)の時間の中心である探究的な学習の過程について学ぶ。また、学校が定める目標や内容のもとで総合的な学習(探究)の時間の指導計画の作成や評価について理解を深める。 事例をもとに、グループ討議やグループでの即興劇を行い、気付きや変化について意見交換を行う。	
	教育方法論	教職課程「教育の方法及び技術」に対応する科目である。授業は、①教育方法・教育思想の歴史の概観、教育目標、教育内容、学習、発達、学力、教材論、計画、評価等に関する基礎的な理論、②授業の設計から評価に至る授業構成の理解、③学習指導を組織化するための基礎的な授業技術と方略の習得、に関する講義と、④授業実践に関するミニ講座によるワーク、⑤グループでの共同作業による教材開発とマイクロ・ティーチングの実施体験により構成する。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	生徒指導論(進路指導を含む)	生徒指導、進路指導は、学校教育をすすめるうえで重要な役割を占めている。いじめ、不登校、学級崩壊、暴力行為や非行、受験競争、進路のミスマッチなど、生徒指導・進路指導上の諸問題については、その解決の重要性が認識されている。本科目では、生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義について理解を深め、実践を進める方法原理について基礎的な知識を獲得し、学校組織を構成する教職員、学校外部の専門機関や関係諸団体と協力して解決・改善を目指そうとする素養を養う。	共同※講義
	教育相談(カウンセリングの基礎を含む)	教育相談は、幼児児童生徒が自己理解を深めたり好ましい人間関係を築いたりしながら、集団の中で適応的に生活する力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。幼児児童生徒の発達の状況に即しつつ、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援するために必要な基礎的知識(カウンセリングの意義、理論や技法に関する基礎的知識を含む)を身に付ける。特に学校における教育相談に焦点を当て、教師が行う教育相談活動の基本的な考え方や教育相談に必要なスキルを身につける。そのために、教育相談のもつ今日的意義を解説し、カウンセリングの基礎知識及びその実践的な手法を紹介する。併せて生徒理解と“問題”への対応について、実践的な取り組み方を考える。	共同※講義
	教育実習Ⅰ	(1) 教育実習の実際についての情報を提供する。それらに基づいて、受講者は、演習や実習を行う。(2) 教育実習校における実習に必要な教育実践の基本を理解して、教科指導、学級・ホームルーム経営、生徒理解・生徒指導等の実際について有効な指導計画を立案し、効果的な指導をできるようにする。(3) 教育実習の現状と課題についての認識を深めるとともに、教育実習生としての基本的心がまえについて理解を深め、実践できる素養を養う。	共同※講義
	教育実習Ⅱ	「教育実習Ⅱ」では、教育実習校において10日間以上の実習を行う。(1) 教育実習校において、教科指導、特別活動の指導、生徒理解・生徒指導などの実習を行う。また、大学において事前及び事後の指導を受ける。(2) 事前指導では、教育実習講義と個別指導を行う。(3) 教育実習は所定期間内に実習校の指導教員の指導の下で行う。(4) 事後指導では、教育実習体験報告及び反省を行い、教育実習のまとめとして、総括を行う。	共同
	教育実習Ⅲ	「教育実習Ⅲ」では、教育実習校において15日間以上の実習を行う。(1) 教育実習校において、教科指導、特別活動の指導、生徒理解・生徒指導などの実習を行う。また、大学において事前及び事後の指導を受ける。(2) 事前指導では、教育実習講義と個別指導を行う。(3) 教育実習は所定期間内に実習校の指導教員の指導の下で行う。(4) 事後指導では、教育実習体験報告及び反省を行い、教育実習のまとめとして、総括を行う。	共同※講義

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	教職実践演習(中・高)	さまざまな学習を通して自身の課題を見つめ直し、教員としての適性や力量について確認する。具体的には、①ガイダンス、②教科における実践上の課題、③教科指導・生徒指導・進路指導の実際、④今日的な教育問題に関する学習からなる。①では、科目の目的等と各自の課題について確認する。②では、教科の専門分野に関する個々の課題についてその分野を専門とする教員の指導、実践上の課題について教科教育法担当教員の指導を受ける。③では、市教育委員会と連携し中学校を2回訪れ、授業見学後、中学校教員の指導を受ける。④では、教職課程教員がそれぞれの専門を活かし、「いじめの現状」「いじめ問題への取り組み」「ジェンダーと教育」「学校の中のマイノリティー」「『甘え』について考える」「『自律』について考える」「体罰について」「授業料無償化と奨学金について」「カウンセリングマインドと生徒対応」「『自分』を知る」をテーマに考察する。	共同※講義
	地域連携教育活動Ⅰ	大学近隣の小学校あるいは中学校で、年間を通じて授業補助、学習支援、学校行事、課外活動等幅広く体験し、自己の適性を把握する機会をもち、人間的成長や社会意識の向上、教員としての愛情と使命感を深めることを目指す。具体的には、実際の教育現場を知ること、自身の能力や適性を考え課題を自覚すること、社会的倫理観を確立すること、多様な相手に合わせたコミュニケーションがとれることを目標とする。また、こどもの実態を知り、教科指導や生徒指導等を観察、可能であれば参加することで、実践的な指導の基礎固めを行う。	
	地域連携教育活動Ⅱ	「地域連携教育活動Ⅰ」を受け、その体験をもとにさらに学びを深める。「地域連携教育活動Ⅰ」と異なる、あるいは同じ大学近隣の小学校あるいは中学校で、年間を通じて授業補助、学習支援、学校行事、課外活動等幅広く体験し、自己の適性を把握する機会をもち、人間的成長や社会意識の向上、教員としての愛情と使命感を深めることを目指す。具体的には、実際の教育現場を知ること、自身の能力や適性を考え課題を自覚すること、社会的倫理観を確立すること、多様な相手に合わせたコミュニケーションがとれることを目標とする。また、こどもの実態を知り、教科指導や生徒指導等を観察、可能であれば参加することで、実践的な指導の基礎固めを行う。	

## 授 業 科 目 の 概 要

（農学部 応用生物科学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>（概要）</p> <p>自然を改変しながら生物資源を活かし、人類の衣食住を支えてきた「農学」は、人間の諸活動を支える根幹的な学問である。「農学」には持続可能で豊かな人間社会と地球環境の創出を目指して、課題を見出し対応するミッションがある。「農学」は生命を支える食料の科学であり、生命科学とも位置付けられる。さらには、「農学」は生産、加工、流通の6次産業に食栄養を加えた24次産業的視点で捉えることができる。農と食をとりまく環境は大きく変化し、「農学」における食栄養科学・健康科学の重要性も認識されている。本講義はこうした問題意識からテーマを設定し、オムニバス方式の講義により、受講者が「農学」とは何かを理解するとともに、「農学」のミッションに対応する「使命感」、「農学」的視点がもたらす「俯瞰力」「実践力」に関心を持ち、主体的に課題を意識することができることを目的とする。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（27 久保康之／1回）</p> <p>「農学を大学で学ぶとは」をテーマに講義する。「農学」は、自然を改変しながら生物資源を活かし、人間の諸活動を支える根幹的な学問である。持続可能で豊かな人間社会と地球環境の創出を目指して、私たちは何を学び、何をすべきか、「農学」の世界観を俯瞰し、学修する。</p> <p>（31 寺林敏／1回）</p> <p>「農学と社会」をテーマに講義する。「農学」は、安全な食料生産と食料の安定供給、自然環境の保全、食を取り巻く多様化・複雑化する社会への対応、新しい作物生産の場とその生産技術の開発など、社会からの求めに応え、解決する使命を担っている。「農学」が社会とのかかわりの中で、いかなる研究が社会に貢献してきたか、と同時に「農学」の発展と可能性について学修する。</p> <p>（23 川崎通夫／1回）</p> <p>「農業生産技術の進歩」をテーマに講義する。農業生産技術の進歩は、人口増加、自然環境変動、および、社会変化に伴う農業生産課題を解決していく上で重要な要素である。フィールド栽培、施設園芸、植物工場、および、AI(人工知能)やIoT(モノのインターネット)を活用したスマート農業などに関する農業生産技術の進展について学修する。</p> <p>（30 田中樹／1回）</p> <p>「国際農業と開発援助」をテーマに講義する。世界の農業の多様性を踏まえ、発展途上国における農業開発と、それに対する援助のあり方を学修する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(1 小保方潤一／1回) 「ゲノムと農学・生命科学」をテーマに講義する。生物の設計図を読みたい、というのは生物学者の長年の夢だったが、ゲノムの解読技術の飛躍的な発展によって、それは現実のものとなりつつある。ゲノム科学の急速な発展が、農学・生命科学や私たちの生活にどのような影響を与えつつあるのかを概説する。</p> <p>(18 石川幸男／1回) 「農業とケミカルエコロジー」をテーマに講義する。すべての生物は、同種または他種の他個体と相互作用を及ぼしあいながら生きており、この相互作用の仲介役として化学物質が大きな働きをしている。植物－昆虫、昆虫－昆虫間の相互作用における化学物質の働きについて、その害虫管理への応用を含めて概説する。</p> <p>(20 奥本裕／1回) 「作物改良のための情報科学」をテーマに講義する。現代の農業は近代育種が改良してきた品種を基盤に成立している。近年のゲノム解読技術と画像解析技術の急速な発展は、育種におけるDNA情報解析と高速フェノタイピングの利用を強く後押ししている。育種の現場で利用が進められているゲノム情報と圃場データ処理を利用する情報科学について概説する。</p> <p>(2 井上亮／1回) 「動物生命科学の新展開」をテーマに講義する。動物を対象とした研究は、農学においては産業動物の生産性向上のため、食品、医療においてはヒトの健康維持・増進、疾病予防・治療のために行われる。これらの動物を対象とした研究には遵守すべきルールや法令が存在する。これら動物を対象とした研究に関する現状を学修する。</p> <p>(4 豊原治彦／1回) 「地球環境と海洋科学」をテーマに講義する。水産業は一次産業の中でも特に天然依存性が高いことから、資源維持のために健全な海洋環境の保全が必須である。最新の増養殖技術の活用も含め、地球環境の保全と海洋科学の進展について学修する。</p> <p>(45 吉井英文／1回) 「食品科学と農業」をテーマに講義する。農林漁業者(1次産業)が生産する農水産物の元々持っている価値をさらに高め農林水産業を活性化させるためには、食品加工(2次産業)は必須の技術である。最新の食品加工にかかわる食品科学技術の進展について学修する。</p> <p>(5 和田大／1回) 「微生物と食品」をテーマに講義する。東洋、西洋を問わず、食品製造に微生物を利用することは長く行われてきた。農産物の2次加工としての微生物利用について概説する。</p> <p>(25 喜多大三／1回) 「食文化と多様性」をテーマに講義する。日本の食文化は大きな変革期にきており、食生活の大部分を外食産業に依存する家庭が増えている。本来、日本の伝統的食文化である「お茶」の歴史、伝統および特質について学修する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(28 黒川通典／1回) 「食栄養科学と健康」をテーマに講義する。現代の栄養事情は欠乏と過剰の二極化といわれている。社会の仕組みが複雑になっている今、社会のあらゆる側面を視野に入れながら、人間栄養学の観点から健康問題を考える。</p> <p>(21 小野雅之／1回) 「食品産業の役割とこれからの方向」をテーマに講義する。消費者への食料供給において重要な役割を担う食品産業、特に食品流通業を取り上げ、その役割とこれからの展開方向を学修する。</p> <p>(26 北川太一／1回) 「これからの食と農を考える」をテーマに講義する。今日の食と農の状況を踏まえながら、これからの食と農の共生のあり方とその方向を考える。</p>	オムニバス方式
		農学基礎演習	福井県と三重県にある農業体験施設を利用し、2日間の演習を行う。主に、我が国のイネ生産と消費の現状、水田の構造、稲作を成立させる農業技術並びに自然環境要因、水田の多面的価値、稲作文化等について学修する。演習内容として、春期の田植えと秋期の稲刈りを行う。日本の主食であるコメの栽培を学び、イネ栽培を体験することで、水田の構造、日本で水田稲作が成立する要因、稲という植物の生育特性を深く理解し、我が国における今後の稲作の在り方について学ぶことを目的とする。	集中・共同
		グローバル農業演習	私達の食生活は、我が国の食料生産だけでは決して支えられているものではなく、他国における食料生産への依存度は高まる一方である。海外に10日間滞在し、その地域や国の農業についての学修や視察により、茶などの工芸作物を含む様々な農作物、野菜や花などの種々園芸作物が他国で、どのような気象・土壌環境で、どのような栽培技術で生産され消費・利用されているかを、それら地域の歴史的、文化的背景、社会情勢の理解とともに学ぶ。	集中・共同
		スマート農業演習	日本農業における就農人口の減少、高齢化、激しい気象変動と異常気象等、農園芸作物生産を取り巻く環境は厳しさを増している。そんな中、高収量・高品質、安定生産、省力・軽作業化、省エネを実現するためのロボット技術やICTを活用した新しい農業スタイル「スマート農業」が動き始めている。本演習ではスマート農業について、その理論と実際を学び、日本農業がかかえる課題と「スマート農業」の可能性とその重要性について正しく認識させる。	共同
		農業気象学	さまざまな気象現象の基礎的な特徴と発生原理等について講義を行い、気象と動植物との関わり、農業や人間生活との関わり等について、具体的な事例を示しながら解説する。それにより、大気の組成や構造、放射過程・熱輸送過程、高・低気圧や前線とその動き、異常気象の発生原理、大気大循環、地球温暖化を含む気候変化とその影響など、さまざまな時間的・空間的スケールで起きる気象現象や気候システムについて、そのメカニズムを修得し、それらの農業への影響や対策等について現実的に考察することが可能となる学力を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	森林生態学	森林のあるところに文明が起り、森林がなくなれば文明も滅びたように、昔から人間は森林を利用して生きてきた。日本は、国土の67%を森林に覆われる世界でも有数の森林国である。森林は、近年の環境問題を解決するための、また持続可能な資源の開発を行うための、大きな鍵となる。本講義では、森林の生態についての知識を得ることを目標にする。また森林生態学を研究する方法や、環境の計測などに関する理解を深める。さらに森林と人間のかかわりや、森林が地球環境に及ぼす影響、日本の林業の問題点などについても考察を行う。	
		農業知的財産	<p>(概要)</p> <p>農林水産業は、生活の根幹を支える重要な産業でありながら、これまで十分な知的財産に関する法的支援が図られていなかった。そこで、農林水産業における知的財産の重要性を認識し、知的財産制度を有効に活用するために、農林水産業と密接に関連する知的財産の基礎的知識や各種制度の在り方、農林水産業における知的財産制度の活用方法の修得を目的とする。具体的には、農林水産分野における知的財産法制の概観、種苗法に基づく品種登録制度の概要（海外での新品種の保護制度を含む）、農林水産品の「地域ブランド」保護制度である地域団体商標制度及び地理的表示制度の内容、農林水産業における品質誤認表示規制の概要、水際措置、食品の安全性確保のための各種手法（GAP、HACCP等）の概要等について修得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(75 犬飼 一博／7回)</p> <p>農林水産業における知的財産権の重要性、知的財産法制の概観、地域団体商標制度の概要、国内及び海外における品種保護制度の概要等について学修する。</p> <p>(79 中世古 裕之／8回)</p> <p>地理的表示制度の概要、農林水産業における品質誤認表示規制の概要、水際措置、農林水産知財における今後の課題・展望等について学修する。</p>	オムニバス方式
専門コア群	基礎系	化学	化学的な知識は農学領域における基礎・専門科目を理解する上で欠かせない。本講義では、化学の基礎知識を確実なものとするとともに、大学における専門科目の理解に不可欠な化学の知識を修得することを目的とする。「化学」では、物質の成り立ちから、理論化学、無機化学、有機化学に関する基本事項を修得し、専門課程・卒業論文研究における化学的な課題に対処する能力を身につける。また、同時期開講の「化学演習」において、「化学」にて講義した基本事項について、問題演習を通じて理解する。	
		化学演習	化学的な知識は農学領域における基礎・専門科目を理解する上で欠かせない。本演習では、化学の基礎知識を確実なものとするとともに、大学における専門科目の理解に不可欠な化学の知識を修得することを目的とする。「化学演習」では、同時期開講する「化学」にて講義した基本事項について、問題演習を通じて完全に理解し、専門課程・卒業論文研究における化学的な課題に対処する能力を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	基礎系	生物学	実験科学である生物学は、多種多様な観察、実験結果によって裏付けられた知識の体系であり、分子といったミクロなレベルから、生態環境といったマクロなレベルまで、生物が関わる極めて幅広い現象を取り扱う。農学はその知識を有機的に活用する学問であり、学ぶ上で多様な生物学の基礎知識を有することが求められる。本講義ではそれらの基礎について概説し、専門課程で必須となる生物学の基礎知識と考え方が身につけられるようにする。	
		生物学演習	「生物学」の講義では、生物学の基礎知識とその根底にある考え方を学ぶが、実学である農学ではそれら基礎知識や考え方を応用する力も重要となる。そこで本演習では、「生物学」の講義で学んだ基礎知識、概念を使い、組み合わせて解く演習問題に取り組み、応用能力、問題解決能力を養う。また同時に生物学の基礎に関する様々な問いかけに触れることで、背景となる周辺知識を学び、生物学の根幹となる考え方がどのように生まれてきたかを、追体験して、理解を深めることを目的とする。		
		物理学	物理学は自然現象、生命現象、科学技術の原理を理解する上で、重要な基礎科目であり、現代の科学技術の基礎をなしている。本講義では身近な自然現象、生命現象、科学技術の成り立ちを物理学の法則から導き出す力を身につけることを目的として、物理の法則・原理とさまざまな物理現象・科学技術との関連性について学ぶ。特に、身近に体験している現象や科学技術の成り立ちを定量的に取り扱う方法について理解する。		
		生物統計学	植物や動物に観察される多様な生物現象を理解するためには、多くの観察が必要である。観察して得られたデータは往々にして膨大な量になるが、例えば、夏季と冬季の昆虫200匹の体重測定結果を眺めていても生物現象の意味を理解するのは難しい。データを適切に整理して解析するには統計的手法の正しい活用が必要となる。「生物統計学」では、施肥の効果や品種の優劣などの判定に必要な基礎的なデータ整理、データに基づいた検定手法の原理を解説し、植物や動物を使った実験を実施して有用なデータを得るために最低限必要とされる基礎的知識を身につける。		
	植物系	バイオテクノロジー	現在、世界中の農地の1割以上で遺伝子組換え作物が栽培されている。遺伝子組換え技術は、現代農業における生産性拡大に寄与するとともに、農薬使用量の削減など環境保全にも非常に大きな貢献をしている。植物バイオテクノロジーを中心に、バイオテクノロジーの素晴らしい成果と課題を、様々な具体的事例に基づいて紹介する。ゲノム編集技術など、現在のバイオテクノロジーの最先端の話題にも触れる。また、動物や微生物を対象としたバイオテクノロジーの紹介も行う。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	植物系	<p>生物系統学</p> <p>(概要) 地球が誕生したのは今から 46 億年前だが、40 億年前の地層からは早くも生命の痕跡が検出されている。その頃の単純な生命体はやがて原核細胞や真核細胞に進化し、さらに進化や分岐を繰り返して地球上の様々な環境に進出し、多様な体制や増殖の仕組みをもつ様々な生物群が出現した。本講義では、生物の系統進化や分類群を縦糸に、それらの生物群が示す体制や生活史等を横糸にして、地球上に棲息する生物たちの多様な世界を具体的に学ぶ。これらの生物の多様性は、産業、文化、農学、応用生命科学、などの基礎ともなっており、それらの関係についても学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(1 小保方潤一／4回) 地球の歴史と生命の誕生、藻類が生み出した多様な世界、陸に上がった植物とその繁栄、進化と多様性について講義する。</p> <p>(5 和田大／3回) 原核微生物、真核微生物、菌類と産業との関わりについて講義する。</p> <p>(2 井上亮／4回) 動物に関して、特に陸上動物の多様性および脊椎動物の進化について、産業動物のうち、ウシ・ブタ・ニワトリの系統について講義する。</p> <p>(4 豊原治彦／4回) 水産生物の世界に関して、海綿と刺胞動物、冠輪動物、脱皮動物と新口動物、魚類、両生類、爬虫類、哺乳類について講義する。</p>	オムニバス方式	
			ゲノム分子生物学	<p>ゲノムは、DNA 分子とそこに作用する多様な蛋白質や RNA 分子から構築された、巨大な機能複合体である。本講義では、ゲノムの様々な性質を生み出している分子の働きを、複製、転写、翻訳、などの点から順に講じる。ゲノムや分子生物学は、一見、抽象的な知識の羅列という印象を持たれがちだが、個々の現象の背後にある「分子の動き」やその「生物学的意味」を丁寧に追いかけていくと、色々な現象がつながって理解できるようになる。重要なトピックについては、科学史の流れを織り交ぜながら、どのような作業仮説や実験から、どのような知見が明らかになり、その結果、どのような説明や概念が生み出されてきたのかを解説する。</p>	
			植物遺伝子工学	<p>作物の野菜の生産性は、環境ストレスや病害・食害によって低下する。逆に言えば、植物のストレス抵抗性を高めることで、農薬や肥料の使用を控えながら食料生産性を高めることができる。本講義では、植物遺伝子組換え技術の分子基盤と、その実用技術を学ぶ。さらに、最新の植物分子生理学研究から明らかになったストレス・病害抵抗性遺伝子の働きと役割りを紹介し、それらを用いたストレス抵抗性植物の設計についても論じる。</p>	



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	植物系	ゲノム機能学	多種多様な生物のゲノムが解析されるようになり、ゲノム情報から有用な情報を抽出して活用することが、現代農学の重要な課題となっている。そのゲノム情報を解析する上で鍵となるのは、進化の考え方であり、ゲノムの特性に関する様々な知識と共に応用利用される。「ゲノム機能学」においては、種々のゲノムの特性を生み出す分子メカニズムと進化の関係について解説し、そしてそれらと密接な関わりがあるゲノム改変技術について説明する。また現代生物学において基盤解析技術になりつつある大規模遺伝子配列解析についても触れ、その原理と応用例について説明する。	
		植物分子生理学	植物はどのように生きているのか？移動することが出来ない植物は芽生えた場所で外環境の変化に対応しながら生長していく。生育における多様な生理現象は、個々の生化学的現象により構築され、近年の分子レベルの解析はそれら仕組みを明らかにしている。「植物分子生理学」では、地球上の生命を支える植物の生命戦略とその機構を分子レベルで理解することを目的とする。本講義では、「植物の構造・成長・分化」「植物の栄養吸収・輸送」「光合成」について概説し、植物の生育に必須な機構について理解する。		
		細胞生物学	組織・器官の分化や形態形成など、生物が示す様々な機能を理解するためには、細胞の構造と機能に関する基礎的な知識が必要である。本講義では、真核細胞を理解するポイントとして、細胞膜、膜輸送、細胞小器官、エネルギー代謝、細胞骨格と細胞運動、細胞内輸送系、シグナル伝達系、細胞分裂と細胞周期、細胞接着と組織形成、などの諸点を概説する。また、これらの知見を生み出した細胞の研究手法と、今後の発展についても言及する。		
	微生物系	生化学	生化学は、生命現象を化学的に解明しようとする学問である。すなわち、生命現象を分子レベルでの量的質的变化として理解しようとする学問である。農学分野に限らず、広く生命現象の理解に不可欠であり、また、生物機能の利用と応用の観点からも絶対に必要な科目である。本講義では生物の構成と維持に関与する基本的化合物である糖質、タンパク質、脂質などの構造・種類・機能について学修する。これら化合物は、各種生命現象の発現に関わる重要な生化学的化合物であるため、化学構造式に慣れて、十分習熟することを目的とする。		
		応用微生物学	有用微生物とその利用に関して講義を行う。本講義では人類に役立つ細菌類及び真菌類に関する微生物バイオテクノロジーについて広く述べる。具体的には 1) 各種発酵食品製造における微生物の役割、我々が微生物をどのように生活の中で利用してきたのか、2) 有用物質生産の実例として、代謝制御発酵によるアミノ酸、核酸等の発酵生産に関する遺伝生化学的理論と工業化の実際、抗生物質の発酵生産について、3) ニューバイオテクノロジーによる微生物機能の有効利用の事例として、遺伝子工学の利用による異種タンパク質の生産、代謝工学等について、4) 地球環境問題への微生物の利用として、環境修復のためのバイオテクノロジーについて、などを学修する。また、それらを自らが展開していくために必要な考え方、今後の発展の方向などについて講義する。		
		生態学	地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、森林破壊、砂漠化の進行等々の環境問題の解決は21世紀の人類にとって喫緊の課題であり、環境と生物との関係性の科学である「生態学」の重要性はいよいよ高くなりつつある。「生態学」では私たちヒトを含む全ての生物種、または個体群が環境から受ける様々な恩恵と制約について、また逆に生物が環境を改変するメカニズムについて解説し、生態系の保全のために必要な方法について考える。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	微生物系	微生物工学	微生物は、我々人類の健康を脅かし、家畜や農作物に多大な被害をもたらすと一方で、発酵食品や医薬品など多くの恩恵も与えてきた。近年のバイオテクノロジーの発展により、食品や医薬品だけでなく、環境やエネルギーなどの幅広い分野での微生物利用が期待されている。「応用微生物学」では、多様な微生物について、我々との関わりを中心に広範な内容を学修した。「微生物工学」では、その中から、微生物による物質生産に焦点を絞り、微生物機能とその活用方法についての理解を深めることを目的とする。また、微生物の遺伝子組換え技術など、卒業研究で行う実験内容とも関連のある手法とその原理についても学修する。	
		共生ウイルス学	生物はそれ単独ではなく、他種との関係の中で生存する。共生とは異なる生物種が同じ時空間にあって互いに様々なシグナルのやり取りを通じて生存する状態であり、双方が利益を享受する「相利共生」から片方が他方を一方的に収奪する「寄生」まで様々な関係性を含む。「共生ウイルス学」では、このような関係性の基礎について概説し、続いて植物ウイルスの増殖メカニズムおよび植物ウイルスの病原性と宿主植物の抵抗性反応について詳説し、植物ウイルスと宿主植物との寄生および共生関係について論考する。		
		植物共生微生物学	植物や動物は常に微生物と共存しており、自然界にはこれら生物との間において密接な相互作用関係を成立させている微生物が数多く存在する。「植物共生微生物学」では主に、植物に共生・寄生関係を成立する真菌や細菌といった微生物に焦点を当てる。まず、講義の前半では具体例と共に農学における共生微生物の重要性について解説する。さらに、講義の後半では、植物と各微生物間における分子レベルでの相互作用メカニズムについて最新の研究報告例と共に紹介し、植物を取り巻く微生物の役割についての理解を目指す。		
	動物・海洋生物系	産業動物学	産業動物とは、その飼育が経済行為として行われる動物の総称であり、家畜、家禽を主として、養蜂に使われるミツバチなども産業動物に分類される。いずれの産業動物も、我々ヒトの日々の食事を支える重要な動物である。「産業動物学」では、主要な産業動物である家畜、家禽、すなわちウシ、ブタ、ニワトリに焦点を絞り、その生態や生理について説明し、それぞれの違いを学ぶとともに、我が国における家畜、家禽についての基本的な知識を身につける。		
		動物機能科学	動物の生命活動は、様々な臓器が正しく協調して活動することで実現する。例えば、消化器が栄養を分解吸収しなければ食べ物を食べても体を維持することができないし、腎臓が機能しなければ体から老廃物を排出することができない。「動物機能科学」では、特に哺乳類の体の構造や、各種臓器の機能、及び各種臓器が関係する疾病について説明する。ヒトを含む動物に関わる最低限必要な知識に加えて、日常生活で耳にすることが多い病気や健康に関わる言葉を理解できる知識を身につける。		
		生体防御学	動物には病気から体を守る（生体防御）のために免疫系が備わっている。ひとことで病気といっても、外来の病原体によって引き起こされる感染、自身の免疫系の異常（暴走）によって起こる自己免疫疾患やアレルギーなど様々な病気があり、そのほぼ全てに免疫系が関わっている。「生体防御学」では、動物の免疫について詳細に説明し、日々病原体などの抗原に曝されている我々動物が如何にして自身の体を守っているかを学ぶ。また、免疫系の調節不備によって起こるアレルギーや自己免疫疾患についての知識も身につける。		

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	動物・海洋生物系	生物情報学	生命科学の分野でも、農学の分野でも、生物から得られた情報、特に膨大な情報を効率的に解析し、活用する場が急激に増えている。膨大なデータの解析にはAIも活用され始めているが、農学の領域ではまだヒトの判断が必要である。情報を活用するには、それがどのように得られており、どのように処理される必要があるかを学ぶことが重要である。「生物情報学」では、生命科学や農学において、膨大な情報がどのように処理され、活用されているのかを学ぶ。	
			バイオインフォマティクス演習	高速シーケンサーは、遺伝子の解読・発現パターンの解析や環境サンプル中のゲノム DNA の解析など、生命科学の研究において非常に役立つツールである。シーケンサーは膨大なデータを出力するため、一次データから直接情報を読み解くことは困難であり、バイオインフォマティクスと呼ばれるコンピュータを用いた解析によってはじめて全体像を掴むことができる。本演習では、DNA シーケンサーから出力される膨大なデータを可視化する方法を学び、高齢化・環境・食料といった社会問題に高速シーケンサーとバイオインフォマティクスが重要なツールとなっていることを学ぶ。	共同
			海洋動物学	生命は海洋で生まれ、今なお陸上には見られない多様な動物が海洋には生息している。これらの海洋動物はそれぞれの特徴に基づき、門と呼ばれる最も基本的な分類群に分けられている。「海洋動物学」では海洋の主要な生態系について説明し、これらの動物門のうち重要なものについて特徴を概説する。また、それぞれの門に属する代表的な海洋動物について、系統分類にしたがい概説するとともに、これらの動物の食糧としての有用性や水産業との関連性についても解説する。	
			海洋生物機能学	生命は海洋で誕生し、今なお多くの動物が海洋に生息している。海洋環境は、地球の誕生以来、大きな変動を遂げており、海洋に生息する生物もその変化に合わせて進化してきた。海洋環境を決定づける大きな要因としては、浸透圧、温度、及び水圧があげられる。「海洋生物機能学」においては、このような海洋を含めた地球上の水圏環境の多様な生態系、及びその多様な生態系に適応して生息する生物、それらの生物の生理機能、生化学機能、環境適応機能、及び遺伝子機能について概説するとともに、貝殻などの硬組織形成機能（バイオミネラリゼーション）を例として取り上げ、このような生物機能を人間の暮らしに生かすための生物模倣の考え方を学ぶ。	
			海洋生物化学	水圏には陸上に見られない多様な生物が生息し、それらの海洋生物は更に数え切れない数の化学物質からなっている。このおびただしい数の化学物質の中には海洋生物にのみ見られる特徴的な代謝系から生成されるものも少なくない。我が国は四方を海に囲まれ、我々は古くから経験的にこのような有用な物質を利用してきた。「海洋生物化学」では、海洋生物によって作られる諸物質の代謝・生合成過程から利用に至る全過程について化学の視点から理解する。	
			水圏生物利用学	水圏には陸上には見られない多様な生物が生息し、これまで人類はこれらの生物をおもに食糧として利用してきた。特に我が国は四方を海に囲まれ、多様な水産資源に恵まれている。水圏生物は、優れたタンパク質の供給源であるばかりでなく、多くの機能性成分を含むことが、近年、明らかとなってきた。また、うまみ成分も多く含み、日本人の食生活を豊かにしてきた。「水圏生物利用学」では、水圏生物のおもに食糧資源としての特性を概説し、水産物利用のための基礎知識を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	動物・海洋生物系	応用藻類学 「藻類」は海洋および陸水における一次生産を担い、極めて多様な種を含む一群の生物である。食用種以外は普段目にする事が少なく、意識されることも稀であるが、藻類は地球全体における生態系と環境に大きな影響を持ち、その礎を築いているとさえ考えられる。「応用藻類学」では、まず「藻類」について、その誕生と進化、形態、さらに分類学的、生態学的な地位、生活環について概説する。また、その成分に関する食品学的、工学的な価値と利用などの応用的側面についても紹介する。	
		実験・実習系	化学実験 (概要) 農学・生命科学分野の「実験」を正しく安全に行うためには、化学の基礎的な知識や技術が必須である。「化学実験」では、農学・生命科学の基礎となっている化学の基本的な事項について、実験を通じて理解を深め、その技術や考え方を身をもって体得することを目的とする。農学・生命科学分野で必要とされることが多い、分析化学から、滴定、比色、クロマトグラフィーなどを取り上げ、身近な素材を使って実験を行う。また、実験で得られたデータのまとめ方や視覚化、考察の仕方なども併せて学ぶ。  (オムニバス方式／全10回)  (3 椎名隆・9 加藤裕介・5 和田大・7 加藤直樹・4 豊原治彦・8 増田太郎・14 沼本穂・13 池田裕美／1回) (共同) 基礎化学の導入として安全講習を行い、実験室・器具の使い方、実験ノートの書き方を学ぶ。  (5 和田大・7 加藤直樹・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) 基礎化学として便量の仕方、ピペットマンの使い方、濃度計算、データ整理を学ぶ。分析化学としてpHについて(原理と測定:pH試験紙とpHメーター)及びバッファの作製方法を学び、酸塩基滴定により食酢中の酢酸量を測定する。  (3 椎名隆・9 加藤裕介・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) 分析化学として比色の原理、吸光度の測定の基礎を学び、清涼飲料水中のグルコース濃度や緑茶タンニン量を、比色法により測定する。クロマトグラフィーの原理を学ぶ。  (4 豊原治彦・8 増田太郎・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) 分析化学としてペーパークロマトグラフィーで色素を分離し、視覚的にクロマトグラフィーを理解する。有機化学として卵を使い、タンパク質の変性、酸・アルカリ分解や、硫黄を含むアミノ酸の存在を確かめる。最後に、これまでに得たデータを使い、Excelを使った統計比較や、データをグラフ化し視覚的に表現することを学ぶ。	オムニバス方式・共同(一部)

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	実験・実習系	生物学実験	<p>(概要)</p> <p>生物学を学ぶ上で基礎となる現象や実験手法を、実際に体験して学ぶ。分子レベルでの実験としては、核酸の抽出と性質の検討、酵素反応や光合成反応の測定と解析などを行う。また、光学顕微鏡を用いて、染色体、各種の細胞、微生物、等の形態と多様性を観察するほか、肉眼による観察実験としては、ラットと魚類の解剖、動物の消化組織の比較観察などを行う。また、これらの実験授業を通じて、実験計画の立て方や、実験機器の安全取り扱い、スケッチなどを含む生物観察の技法、実験データの定量的扱い、無菌操作や微生物の培養方法と育成特性、レポートの作成の仕方、などを総合的に学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(1 小保方潤一・11 松尾充啓・2 井上亮・12 芳本玲・6 海道真典・10 田中茂幸・14 沼本穂・13 池田裕美／1回) (共同) 安全講習を行い、実験室・器具の取り扱い方、実験レポートの書き方、顕微鏡の取り扱い方、スケッチの仕方、微生物・細胞・組織の観察方法を学ぶ。</p> <p>(1 小保方潤一・11 松尾充啓・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) 藻類と高等植物から有機溶媒によって光合成色素を抽出し、薄層クロマトグラフィーによって分離し、比較分析する。ブロッコリーから核酸を抽出し、その基本的な性質を学ぶ。分光光度計の使い方を学ぶ。オオカナダモの光合成速度を測定し、光合成に対する光や温度の影響を調べる。</p> <p>(6 海道真典・10 田中茂幸・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) タマネギの根端分裂組織からプレパラートを作成し、染色体を観察する。ショウジョウバエの多糸染色体を観察する。滅菌操作、無菌操作、液体培地と寒天培地の調製、細菌の培養を行う。コロニーの計数や液体培養での濁度測定を行い、微生物の増殖を学ぶ。</p> <p>(2 井上亮・12 芳本玲・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) アミラーゼによるデンプン分解反応を、分光光度計を使って測定する。酵素の基本的な性質を学ぶ。ラットと魚類の解剖を行い、動物の体のつくりを学ぶ。動物の消化管組織を比較・観察する。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
			物理学実験	<p>物理学は自然科学の基礎となる学問であり、自然現象のみならず、電子・通信・コンピュータ技術、さらに生命・医療の分野にも応用され、現代の社会を支えている。本実験では、自然や身の周りの現象の観察・測定などの物理学に関する基礎的な実験を実施し、実験機器の使用方法、コンピュータを活用したデータの取得と解析方法、得られた結果の表現・評価方法、さらに実験報告書の書き方等の総合的な問題解決能力を養う。さらに、自然科学における定数や法則の意味についても実験を通して身につける。</p>	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	実験・実習系	<p>応用生物科学基礎実験Ⅰ</p> <p>(概要) 「化学実験」、「生物学実験」を通じて、教科書に記載されているような化学や生物の諸現象に触れ、実験を体験することで、実験を行うために最低限必要な基礎知識を修得するが、研究の世界における実験とは原則として未知のことを解き明かすために行われる。「応用生物科学基礎実験Ⅰ」では、農学、生命科学分野において頻用される実験技術を使い、受講生が持参する発酵食品を試料にどのような微生物が含まれているかという疑問の解決を試みる。これにより、生命科学分野における実験の基礎技術を学ぶとともに、実験の進め方、注意点を理解する。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(2 井上亮・5 和田大・14 沼本穂・13 池田裕美／2回) (共同) 安全講習を行い、実験全体の概要説明をする。発酵食品に含まれる細菌を無菌培養する。</p> <p>(2 井上亮・12 芳本玲・14 沼本穂・13 池田裕美／2回) (共同) 無菌培養した発酵食品中の細菌数を測定し、形態を観察する。外来遺伝子を取り込む能力を持つ大腸菌を作製する。</p> <p>(5 和田大・12 芳本玲・14 沼本穂・13 池田裕美／2回) (共同) 発酵食品に含まれる細菌から核酸を抽出し、16S rRNA 遺伝子を対象としたPCRを行う。PCR産物をプラスミドDNAに組み込み、大腸菌に形質転換する。</p> <p>(6 海道真典・10 田中茂幸・14 沼本穂・13 池田裕美／4回) (共同) 大腸菌の形質転換体からプラスミドDNAを抽出し、電気泳動で確認する。さらに、シーケンス結果を元にデータベース検索を行い、発酵食品に含まれる細菌を同定する。培養した発酵食品に含まれる細菌のタンパク質を抽出し、電気泳動(SDS-PAGE)する。これまでに得られた結果を取りまとめ、発表する。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
			<p>応用生物科学基礎実験Ⅱ</p> <p>(概要) 「応用生物科学基礎実験Ⅱ」では、植物を実験対象にして、農学・生命科学分野で一般的に使われる実験技術や考え方、また植物に特有な現象やその解析手法、などを学ぶ。具体的には、植物の組織培養、ゲノム塩基配列を用いた植物の系統解析、植物の環境応答と遺伝子発現、遺伝子組換え植物を用いたタンパク質の分析、の4つのテーマで実験解析を行う。植物の性質上、組織培養実験については、初回に準備を始め、「応用生命科学基礎実験Ⅱ」の全期間に渡って観察を行う。最終回は、各自の実験成果・研究成果を発表する。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(3 椎名隆・9 加藤裕介・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) 安全講習を行い、実験全体の概要説明をする。植物のカルス誘導培地とシュート誘導培地を作成する。ニンジンなど数種の野菜の組織培養を行い、その経過を本実験の全期間(5週間)にわたって観察する。各種の野菜からDNAを抽出し、その中の葉緑体DNA成分をPCRによって増幅する。DNAの電気泳動や目的画分の精製、シーケンス反応を行う。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	実験・実習系	<p>応用生物科学基礎実験Ⅱ</p> <p>(1 小保方潤一・11 松尾充啓・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) タバコの葉に、高熱、低温、強光、塩、傷害などのストレスを与え、RNA を抽出する。RT-PCR 法と電気泳動により、ストレス処理によってタバコの遺伝子発現がどのように変化したかの概況を観察する。qRT-PCR 法を用いて、タバコの遺伝子発現の変動を定量的に解析する。</p> <p>(4 豊原治彦・8 増田太郎・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) 葉緑体ゲノムに外来遺伝子を導入した形質転換タバコからタンパク質を抽出・定量し、電気泳動 (SDS-PAGE) によって分析する。組織培養を観察し、野菜の葉緑体 DNA のシーケンス結果をコンピュータとデータベースを使用して解析し、各種の野菜の系統関係を考察する。</p> <p>(3 椎名隆・9 加藤裕介・1 小保方潤一・11 松尾充啓・4 豊原治彦・8 増田太郎・14 沼本穂・13 池田裕美／1回) (共同) これまでの実験で得られた結果をまとめ、発表する。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
			<p>応用生物科学専門実験Ⅰ</p> <p>(概要) 応用生物科学専門実験を通して、基礎実験などで修得した知識や技術を駆使して、学科の各研究室の研究内容に関連したより専門性の高い実験を行う。「応用生物科学専門実験Ⅰ」では、植物分子生理学、植物ゲノム科学、応用微生物学の3研究室が担当し、それぞれ、変異体植物を用いた生理的形質の解析、分子生物学や生化学の手法を用いたゲノム機能の解析、モデル微生物 (酵母) を用いた一次代謝、土壌微生物 (放線菌・カビ) を用いた二次代謝の解析、などのテーマに取り組む。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(3 椎名隆・9 加藤裕介・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) 培地や試薬の調製、生理形質に変異を持った植物系統の無菌播種、植物体からの DNA 抽出を行う。無菌播種した変異体植物の解析として、ジェノタイプングや生理形質の評価 (葉の表現型、葉緑体の状態、重力屈性、光形態形成、光合成活性) を行う。</p> <p>(1 小保方潤一・11 松尾充啓・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) 野性型と変異体植物から、DNA と RNA を抽出し、スペクトルをとり定量する。さらに様々な酵素処理と組み合わせ、RNA 編集反応の性質を比較分析するためのサンプルを複数調製する。サンプル群に制限酵素処理を行い、得られた切断パターンの比較分析から、葉緑体 RNA 編集反応の仕組みや性質などを考察する。</p> <p>(5 和田大・7 加藤直樹・14 沼本穂・13 池田裕美／3回) (共同) 培地や試薬の調製、抗菌試験用微生物の培養、アミノ酸要求性を示す一倍体酵母の交雑実験や相補性試験、ペーパーディスクや寒天片を用いた抗菌試験を行う。放線菌やカビの培養プレートから抗菌物質の抽出・分析を行う。抗菌試験結果を観察する。酵母のアミノ酸要求性における相補性試験結果の解析をする。</p> <p>(3 椎名隆・9 加藤裕介・1 小保方潤一・11 松尾充啓・5 和田大・7 加藤直樹・14 沼本穂・13 池田裕美／1回) (共同) これまでの実験で得られた結果をまとめ、発表する。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	実験・実習系	<p>応用生物科学専門実験Ⅱ</p> <p>(概要) 「応用生命科学専門実験Ⅱ」では、植物環境微生物学、海洋生物学、動物機能科学の3研究室が担当する。これまでの基礎・専門実験で修得した実験技術を駆使して、それぞれの研究室の研究内容と関連する実験を行う。植物環境微生物学では、植物ウイルス、細菌に関する実験を、海洋生物学では、海洋生物中の酵素の抽出とこの活性に関する実験を、動物機能科学では、環境微生物叢に関する実験を行う。これにより、これまでに修得した実験技術のアプリケーションの幅を学ぶとともに、各研究室の特徴を知る。また、環境微生物叢の実験では、「バイオインフォマティクス演習」と連携し、生命科学分野におけるデータ解析(バイオインフォマティクス)を体験する。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(2 井上亮・12 芳本玲・6 海道真典・10 田中茂幸・4 豊原治彦・8 増田太郎・14 沼本穂・13 池田裕美/1回) (共同)安全講習を行い、実験全体の概要説明をする。</p> <p>(6 海道真典・10 田中茂幸・14 沼本穂・13 池田裕美/3回) (共同) 植物のプロトプラストにウイルスを接種して培養し、ELISA法によってウイルス増殖量を検定する。糸状菌を集菌・洗浄し、植物体に接種する。糸状菌によって誘導される病徴を肉眼と顕微鏡を用いて観察する。</p> <p>(4 豊原治彦・8 増田太郎・14 沼本穂・13 池田裕美/3回) (共同) クルマエビ体液からフェノールオキシダーゼを抽出し、イオン交換クロマトグラフィーで精製したうえで活性を測定し、酵素反応速度解析を行う。</p> <p>(2 井上亮・12 芳本玲・14 沼本穂・13 池田裕美/3回) (共同) 環境試料を選択・非選択培地に塗布し、培養のうえ環境試料中微生物の菌数測定と形態観察をする。さらに環境試料から核酸を抽出し、PCRなどを行うことで次世代シーケンサー用ライブラリーを調製する。</p>	オムニバス方式・共同(一部)
	専門総合群	農業生産系	<p>園芸の技術</p> <p>我が国の果樹、野菜、花卉などの園芸作物生産は、限られた土地を有効活用し、なおかつ消費者のニーズに合った高品質な商品を生産するため、種々の特殊な技術を用いて行われている。「園芸の技術」では、実際の園芸作物における生産流通現場で応用されている興味深い「技」に焦点を当てて紹介する。植物生理学的な背景に基づく各技術の概要と、それらの技術を用いることで得られる生産性の向上や市場における付加価値および経済効果について論じる。</p>	
		植物の病気	<p>ヒトや動物と同様に植物も病原菌に感染し、病気にかかる。しかしながら、病原菌だけが原因ではなく、植物の健康状態や品種の違い、周辺の環境などの要因によって発病するかどうかが決まる。本講義では実例を紹介しながら、なぜ植物は病気になるのか、どのようにして植物を病気から守るのか、などの植物病理学の基本事項を修得する。また植物病に関わる微生物、植物、環境等に関する基礎知識の修得を通じて、農作物の持続的・安定的な供給、食品の安全・安心、国際的な食料の流通や消費など学科で学修した諸問題について幅広い視点で議論する。</p>	



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門総合群	農業生産系	植物の改良	人は植物を食料として利用するだけでなく、家畜の飼料や観賞用、工業用原料、医薬品用原料などさまざまに利用している。そして、人は品種を作るという概念を持つ前から収穫量が多いものや病気に強いものなど、自然に存在する有用な形質を示す植物を選んできた。しかし、メンデルが遺伝の法則を発見したことにより、体系的に植物を改良することが可能となった。本講義では、改良の対象となる植物の形質について概説するとともに、従来おこなわれている植物改良の手法から、今日、注目を集めている遺伝子工学の技術を利用したゲノム編集までを解説し、植物の改良に必要な基礎的な知識を身につける。	
		昆虫とくらし	昆虫の祖先は約4億年前に地球上に現れ、今や地球上の全生物種の70%を超える種数を占めると言われている。この繁栄に成功した理由として、脊椎動物にはないムシが持つ昆虫独特の環境への適応能力が指摘されており、我々ヒトは、ある時はムシと作物を争い、ある時はムシの特性を学び応用することで生活をより豊かなものへと変えていくことに成功した。「昆虫とくらし」では、害虫と益虫というヒトの視点を通じたムシの二面性について紹介し、ムシを通じて生態を中立的に見る目を身につける。		
		作物とエネルギー生産	作物は、人類が利用するエネルギーの重要な供給源の一つとなっている。「作物とエネルギー生産」では、(1)バイオマスエネルギーにおける生産と利用の現状および課題、(2)エネルギー作物における種類、生態・形態・生理的形質、栽培および利用、(3)バイオ燃料の種類、製造法および利用などについて概説する。作物とエネルギー生産との係わり合いやエネルギー作物に関する現状、重要性と課題を理解し、それらを説明する上で必要な基礎知識を身につける。		
		生きている土壌	作物の生産基盤として、土壌の役割は重要である。土壌中には微生物を含めて多くの生物が生息しており、物質循環をはじめとした機能面で役割を担っているほか、土壌自身も外部からの影響により変化しており、まさに土壌は生きているといえる。また、作物などの植物生育と関連していることから、他の生物の生命活動にも影響をおよぼしているほか、周辺環境のかかわりも深い。本講義では、上記の観点から、土壌自身の生物性、特性の変化、作物生育や周辺環境とのかかわりなど、幅広い観点から土壌の役割について講義する。		
	食品栄養系	食品学入門	食品学入門は、食品の一般的特質、その食品の栄養的価値並びに保存性を高めるためにどのような加工がなされているか、食品の栄養成分の構造、性質を学ぶものである。本講義では、食品の1次機能(食品成分の化学)、2次機能(嗜好成分の化学)、および3次機能(食品の生理機能性)について学ぶとともに、食品の加工法、貯蔵法を学修する。本講義と一般的な化学や生化学を並行して学ぶことにより、食品加工手法と食品の一般的知識を身につけることを目的とする。		
		食品の安全性	食品は、貴重な栄養源であり生きていく上で欠かせないものである。この食品の安全性を守ることは健康を維持する上で重要である。本講義では、リスク分析の考えに基づき、食品の安全性がどのような制度、規制によって守られているのかについて学修するとともに、食品の安全性を脅かす有害要因およびそのリスクの評価方法について学ぶ。また、輸入食品の安全管理体制や食品の製造から食卓に至る各過程における安全管理体制について学び、リスク管理の理解を深める。さらに、食品の安全から安心を得るために大切なリスクコミュニケーションを模擬体験し、リスクバランスについて考える。近年、海外からインターネット販売による輸入が増加している健康食品の安全性についても学ぶ。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門総合群	食品栄養系	旬の食材と薬膳	近年、少子高齢化や医療の高度化による医療費の増加は、国民健康保険制度などの医療保険体制の見直しや、国民一人ひとりが健康増進を図り、国民保健の向上すること目的とした健康増進法の施行にまで至っている。近年、薬膳や漢方などの基礎にある中医学的捉え方について、ヒトの体質、季節などに対応した健康を維持する食生活として注目されている。本講義では、身近な薬草および食薬の種類、効果、効能について中医学的捉え方を学修したうえで、薬膳や漢方方剤の知識を学修する。	
		栄養とスポーツ	専門分野で学修した知識・技能を、人々の生活の質向上や健康社会の実現へと展開するために、栄養・スポーツ分野におけるエビデンスに基づいた情報を理解する、具体的には、健康の維持・増進のための栄養・スポーツの基礎知識、運動不足や栄養の過多・不足がもたらす身体への影響、栄養摂取や運動トレーニングによる生体の適応およびそのメカニズムを理解する。さらに身体のみならずこころの健康のために望ましい運動や栄養、運動トレーニング法について理解し、さまざまなライフステージにおける心身の健康を維持・増進するための総合的学修を行う。		
		栄養と健康	巷には食と健康に関する情報があふれているが、その情報が正しかどうかを判断する事は難しい。栄養とは何か、カロリーとは何かに始まり、食生活に影響する諸因子、食生活と病気との関係、各栄養素の特徴と過不足の害、各食品群の栄養、食物アレルギーへと講義を展開して行く。後半は健康になるためには栄養と運動と休養（ストレス発散）が三本柱であることを学ぶとともに、栄養と健康に関する質問に答える。		
		病気の予防と食生活	日本人の死亡原因は、脳卒中や虚血性心疾患（心筋梗塞など）の循環器病とがんの割合が多くなっている。それらの多くの病気に関わっているのが生活習慣病である。生活習慣病とは、食事や運動、ストレス、喫煙、飲酒などの生活習慣がその発症・進行に深く関与する病気の総称をいう。その病因として、日々の食事や運動の生活習慣の乱れなどが考えられている。本講義では病気の予防と食生活、特に生活習慣病について学修する。		
	食農ビジネス系	食と農の倫理を学ぶ	<p>(概要)</p> <p>食と農をめぐる様々な問題が存在するが、そのなかには解決・緩和に向けて倫理的な考え方や行動規範が有効なものがある。本講義では、食と農をめぐる倫理的な考え方や行動規範を「食と農の倫理」と捉え、食と農をめぐる諸問題の所在を理解したうえで、食と農の倫理の思想と理念への認識を深めるとともに、その視点から課題の解決・緩和のための具体的行動や制度を知ることが目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(21 小野雅之・55 谷口葉子／1回) (共同)</p> <p>食と農の倫理について、それぞれの領域において分担して概説する。</p> <p>(21 小野雅之／7回)</p> <p>食への権利と倫理的消費、食料安全保障と食分配の不均衡、食品ロス、食料アクセス問題、企業の倫理とコンプライアンス、ソーシャルビジネスとCSV、農福連携と社会的包摂をテーマに学修する。</p> <p>(55 谷口葉子／7回)</p> <p>寄付文化と応援消費、食のオルタナティブ運動、環境保全型農業、公正と社会正義、アニマルウェルフェア、海と森林の保全、スローフードをテーマに学修する。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門総合群	食農ビジネス系	食と農の経済を学ぶ	食料は人間が生きていく上で必要不可欠であるが、個人の消費能力には限界がある。このような食料の必需性と飽和性、さらには自然条件に左右される農業生産の不安定性や乏しい貯蔵性等から、農業や食料関連産業は、一般の商工業とは異なる特徴を有している。本講義では、このような食料・農業の特殊性を踏まえながら、食料消費の動向、農業及び食料関連産業の現状と問題点・課題等について、経済学的な考え方にに基づき、理解し考察する。	
		食と農の共生を考える	近年、さまざまな側面から「食と農の距離の拡大」（食と農の乖離）の問題が指摘されている。私たちが真に豊かな食を実現し、日本の農業を守り発展させていくためには、食と農の距離を少しでも短くすること、すなわち食と農を結び両者が「共生」していく道筋を考えていかなければならない。本講義は、さまざまな分野で農学を学ぶ立場から「食と農の距離」の問題を考え、生産者と消費者、農村（むら）と都市（まち）、産地と食卓を結ぶ食農共生の課題や方向性について理解し、考えていく。		
		フードシステムを学ぶ	現在、我が国のフードシステムはスーパーチェーン主導といわれている。本講義ではフードシステムの仕組みを概観したうえで、とくにスーパーチェーンの誕生、成長、成熟過程を取り上げる。具体的には、スーパーチェーンが我が国に誕生した高度経済成長期以降のフードシステムの変遷とその背景、さらにスーパーチェーン主導が確立した1990年代以降、フードシステムにどのような問題が生じているか、その中でも価格形成メカニズムに着目し、そのしわ寄せが生産者に及んでいることを学ぶ。また、「買い物難民」などフードシステムの新たな問題も取り上げ、スーパーチェーンの評価（功罪）について複眼的思考を学ぶ。さらに、「地域ブランド化」や「六次産業化」の取り組みなど地域問題についても理解を深める。		
		農業の多様性を学ぶ	さまざまな気候、生態環境、歴史、文化、社会・経済状況などを反映し、世界各地や日本で多様な農業（農耕、牧畜、狩猟採集、林業、漁労などを幅広く含む生業）が営まれている。本講義では、多様性をキーワードに、これらの農業の成り立ちや特徴を理解し、私たちが直面している地域・地球環境問題（例えば、貧困問題、環境荒廃、過疎化など）の解決に向けたアイデアや取り組みについて考える。		
		食と農の歴史を学ぶ	今日のわが国の農業・農村社会や食生活・食料消費の現状と特徴、課題を知るためには、歴史的な視点を持つことが必要である。本講義では、近代（明治）以降のわが国の農業・農村社会と食生活・食料消費の歴史を、いくつかの段階に区分し、それぞれの段階における経済・社会の状況、農業と食生活の状況と特徴、課題について、特に現代（第2次世界大戦後）を中心に講述する。そのことにより、わが国の食料・農業の歴史的な変遷に関する理解を深めることを目的とする。		
	ゼミ・卒業研究	基礎ゼミナール	本ゼミナールは、新生者が学部・学科での学修を不安なくスタートし、目標を持って大学での勉学に励むために必要な基礎的知識・技能・態度を修得する教育プログラムである。すなわち、学生が大学での学修に必要な基本的知識や主体的で深い学びの方法を修得し、自ら大学での学びをデザインするとともに、将来の目標について考えることを目的とする。各専任教員による少人数ゼミナールを基本とし、教員と学生が密接にかつ自由に、相談・議論しながら進める。教材として全学共通教材である「First Year Study Guide」を活用し、大学として共通する項目を学修するとともに、教員独自の教材を用いて学修を深める。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	ゼミ・卒業研究	応用生物科学研究	本科目は、卒業研究に先立って各研究室での基礎的な研究活動を通して、自らが主体的に能力、適性、志望に応じた進路を選択できるようになることを目的とする。「応用生物科学研究」は、大学4年間の学修の集大成としての卒業研究を円滑に行うため、これまでに学修した専門的知識・技能および汎用的能力を基本に、各分野の研究の遂行に必要な情報の収集方法を修得するとともに、問題発見力および解決力を身につける。	
		卒業研究	これまでに学修した専門的知識・技能および汎用的能力をさらに深めて大学4年間の学修の集大成としての卒業研究を行う。卒業研究では、学生が研究テーマの設定、研究方法の策定、研究調査の実施、研究成果の解析・まとめを行い、卒業論文を作成するとともに、発表会において発表・ディスカッションを行う。これらを通して、学術研究における倫理的規範、課題の発見（研究テーマの設定）と解決（研究の進め方）、思考力・判断力（研究結果のまとめ）、表現力（論文作成およびプレゼンテーション）を身につける。さらに、教員とのディスカッションや共同研究などを通して多様な人々の協働する力を養う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	共通系	大学教養入門	本科目の内容は、大学生としての教養を身につけるスタートラインに立つことにあり、自らが主体的に知識を獲得し、対話を通して理解を深め、表現するための技術等を修得することである。本講義では教養入門書を用いて ABD（アクティブ・ブック・ダイアログ）読書法や協働学習の習慣を身につけるとともに、チームワーク能力、コミュニケーション能力を身につけることを目標とする。	集中・共同
	語学系	日本語表現法	我々は日本語を用いて、何をどのように表現しているのだろうか、そして表現できるのだろうか。本科目では、日本人が日本語を用いて、どのように表現してきたのか、そしてどのような表現が可能なのかを、様々な事例を通して考える。それによって、言語に対する感覚を研ぎ澄まし、言葉にこだわる人間になることを目指す。日本語表現の特徴について、具体的に説明できること、日本語表現を客観的にとらえ、他の言語とも比較しつつ、多様な視点から考えることができるようになることを目標とする。	
		基礎英語 I a	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題についての平易なパッセージを読んで理解できるようになる。また、ゆっくり、はっきりと発声（再生）できれば音声だけでも理解できるようになる。読む・聞くことについては、CEFR-J[A2-1]を目標とする。	
		基礎英語 I b	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題についての平易なパッセージを読んで理解できるようになる。また、ゆっくり、はっきりと発声（再生）できれば音声だけでも理解できるようになる。読む・聞くことについては、CEFR-J[A2-2]を目標とする。	
		基礎英語 II a	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題について、基本的な語彙や表現を用いた英文を書けるようになる。また、前もって用意すれば同じ内容を口頭で発話できるようになる。書く・話すことについては、CEFR-J[A1.1-A1.2]を目標とする。	
		基礎英語 II b	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題について、基本的な語彙や表現を用いた英文を書けるようになる。また、前もって用意すれば同じ内容を口頭で発話できるようになる。書く・話すことについては、CEFR-J[A1.3]を目標とする。	
		実践英語 I	これまでに学修した英語のスタディスキルをさらに向上させる。ICT 等を用いて、より高度な 4 技能統合型の演習を行う。インプット活動のみならず、アウトプット活動を取り入れ、各技能の基礎力および応用力を養う。読む・聞くことについては、CEFR-J[B1.1]を目標とし、自分に関連する内容（日常生活、学校生活など）の英文に関する基本的な情報を理解できるようになる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
教養科目	語学系	実践英語Ⅱ	これまでに学修した英語のスタディスキルをさらに向上させる。ICT等を用いて、より高度な4技能統合型の演習を行う。インプット活動のみならず、アウトプット活動を取り入れ、各技能の基礎力および応用力を養う。書く・話すことについては、CEFR-J[A2.1]を目標とし、海外研修、留学、ホームステイ、観光、あるいは海外からの訪問客への対応など、日本の大学生が英語を使用する現実的かつ具体的な場面と相手を想定しながら、複数の英文を連続して発話できるスピーキング力、複数の英文を組み合わせてパラグラフを構成できるライティング力を身につけるためのトレーニングを行う。	
		英語基礎会話 a	本科目では、基本的な英会話力の向上を目指す。日常における様々なシーンを想定し、会話がスムーズにできるように練習する。ペアワークやグループワークなどを通じて、自分のことを一方的に話すだけでなく、相手の話を聞いてそれに受け答えできるように訓練をする。また様々な英語表現に触れ、会話の幅を広げることも目的の一つとしている。	
		英語基礎会話 b	本科目では、英語基礎会話 a に引き続き、基本的な英会話力の向上を目指す。様々なシチュエーションを想定し、より深い内容の会話ができるように練習をする。ペアワークやグループワークなどを通じて、会話のキャッチボールがスムーズにできるように訓練を行う。文法の再確認も目的の一つとしている。	
		中国語Ⅰ	中国語を初めて学ぶ者にとって、中国語の基本的な発音や文法を理解し、一定の語彙数を早期に修得することが重要である。本科目では、中国語の発音や文法について学習するとともに、日常における中国語の表現方法の学習を通して、読む・書く・聴く・話すための基礎的な能力を修得する。	
		中国語Ⅱ	正確な発音と中国語文法の基礎を学習し、読む・聴く・話す・書くの四つの力を総合的にバランスよく修得する。1年間の学習を通じて初級中国語がマスターできる。単語を覚え、基礎文法を学び、簡単な文型を運用して、会話や作文ができるなど、基礎的な中国語能力の修得を目指す。	
		海外語学研修	本研修は、語学力（英語力）の向上と研修地の歴史・文化およびそこで生活する人々に触れ、国際的な知識と理解を深め、広範囲な国の人々と協力し合える国際感覚を身につけることを目的とする。事前に研修先の歴史や文化を調査することで、現地での研修を深められるようにする。研修先では、月曜日から金曜日に講義・演習を実施し、語学力別に分けたクラスで行う。研修に参加する学生同士で協力し合い、研修の目標達成を目指す。	集中
情報系	情報リテラシーⅠ	近年、高等教育機関での勉学や社会人としての仕事において、パソコンを使えるスキルは必要不可欠である。本科目では、パソコン初心者者を想定し、パソコンでの文書作成ソフトや表計算ソフトの基本的な使い方、また発表の場で広く使用されるようになったプレゼンテーション資料作成ソフトの使い方を中心に学ぶ。実践力をつけるため課題を中心に演習を進め、レポートや発表資料の作成が適切に行えるようにする。さらに情報セキュリティやモラルについても事例を通して学ぶ。		
	情報リテラシーⅡ	卒業研究で数値データを扱う場合、その統計処理に関する知識は必要不可欠である。情報技術の有効利用の中でも、科学技術分野においてとりわけ重要であるデータの処理と分析のための種々の数学的処理技法を理解する。本科目では、情報リテラシーⅠで用いた代表的かつ標準的な表計算ソフトを用い、基本的な統計処理の方法を学ぶとともに、統計の基本を理解し、正しい統計処理方法の選択や結果の解釈を行うための基礎力を身につける。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	体育系	スポーツ科学Ⅰ	生涯を通じて明るく活気のある生活を営むために、スポーツ・身体運動は極めて重要な役割を果たす。運動技術の修得およびスポーツの楽しさを理解するとともに、自らの生活行動の中にスポーツ・身体運動を実践する能力を育成することを目的とする。本科目では、スポーツ・身体運動を通して①健康の維持・増進をはかる②運動技能を向上させることができる③マナーやルールを理解することができる④コミュニケーション能力やリーダーシップを培うことを目指す。	
		スポーツ科学Ⅱ	「スポーツ科学Ⅰ」で培った学修内容を応用し、心技体のさらなる向上を目標とする。①<心>スポーツ活動を通じた成功体験や規範遵守、主体性、自己統制、表現力、協調性、他者受容意識の向上など人間力の醸成を目指す。②<技>スポーツ科学Ⅰよりも高度なスポーツ技術の獲得を目指す。③<体>運動やスポーツが身体へ及ぼす影響やそのメカニズムについて理解し、自らの生活行動の中にスポーツを実践できる能力の育成を目指す。	
	人文系	心理学	心理学はその行動法則を明らかにする行動の科学として、広い領域に関係している。実際に見ることができる、観察可能な行動から、人間の“こころ”の動きを検討したり、目で見て確認できないものについても、観察・実験・調査といった様々な方法を用いて客観的なデータを集め、心の働きを研究している。本講義では、これまでに行われてきた多くの実証研究を学修することによって、心理学の基礎知識を身につけることを目的とする。	
		倫理学	現代の社会システムに関する理解を通じて、倫理的規範/価値観の変容について学修する。日本の高度成長期には「消費は美德」という言葉が流行し「大量生産/大量消費社会」を賛美したものであった。一方で、現代社会で時代をリードしているのは「Mottainai (もったいない)」というエコロジーを主軸においたものであるが、本当にこのような価値観の転換に成功しているだろうか。本講義では、20世紀の半ば以降、今日に至るまで社会を動かしている経済のシステムを理解した上で、それを変革するための道を探る。	
		哲学から学ぶ	哲学的な知の営みは、他の学問と比較してどのような独自性、特徴を持つであろうか。本講義では哲学的に問うことの本質を明らかにしながら、いくつかの哲学的・倫理学的問題を取り上げ、共に考えていく。「人間の心と動物の心」「悪」「人生と時間」といったテーマを中心に論じる。哲学的に考えるとはどういうことであるかを理解し、講義で取り上げる個々の哲学・倫理学のテーマに関して、自分なりによく考え、それを論理的に文章にまとめる力を身につける。	
		地誌学	本講義の目的は、地誌学の学修を通して、地理学的(空間的)な視点を用いて、世界各地の諸問題や地理的現象を把握する能力を身につけ、地域的な特徴や地域が抱える問題点を的確に理解することである。本講義では、世界各地の地誌について学修しながら、上記の能力の修得を目指していく。	
人文地理学	窓の外にひろがる風景、大学が立地する町並み、人びとが抱くイメージなど。これらをどのように捉えることができるのか、また、どのように捉えてきたのか。それが本講義のテーマである。言い換えると、本講義は地理学史の流れに沿いながら、<地理学的なものの方・考え方>について幅広く解説するものである。この見方・考え方は、意識されていない場合も多いが、実はわたしたちの生活のさまざまなところに活用されている。本講義を通して、身近な問題を新たな視点から捉え直すきっかけを提供していく。			

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	人文系	文学から学ぶ	日本の近代文学の短編を読む。なお、明治から敗戦までの作品を近代文学と位置づける。文学作品を読むことは、それだけで我々の心を豊かにしてくれる。作品を読むことで、近代の日本人が何を考え、発見し、何に悩んでいたのか、共に考えていく。文学作品への抵抗をなくし、作品を読んで考える習慣を身につけることを目的とする。毎回、1編の短編作品を取り上げて講義し、作品を鑑賞する中で、その文学的特徴を説明できるようになることを目指す。	
		文化人類学	人類学はこれまで、世界中のさまざまな人々の多様な生の理解を通して、私たち人類が地球上に生き、存在するということがどのような事態なのかを探求してきた。本講義では、人類学の基礎的な概念や方法を概説し、人類学がどのような学問なのかを示した上で、そのような人類学的な見方の成立と歴史的展開をあとづける。そのうえで、人類学的思考がどのようなものであるか、人類学誕生以来の学説史的な展開、流れについて理解することを目指す。	
		女性学	女性学とは、男女ともが、社会のしくみについて考える場である。社会の「主人公」が男性であることが自明であった時代、「見えない存在」とされていた女性のあり方に目を向けることが女性学のきっかけとなった。しかし、それは、性別によって個人が生き方を決められてしまう社会のしくみそのものを問う学問および活動を意味する。現在では、性をめぐる社会のしくみは、男女それぞれの個人としての「生きにくさ」と何かしら関係があるのかもしれないと捉えられる一方、「もはや性別による不都合など存在しない」という意見も多く見られる。本講義では、1970年代以降、今日に至るまで、女性学において語られてきた様々なトピックをヒントに、性をめぐっての、今日的な社会のしくみについて、家族、恋愛、仕事、セクシュアリティなど様々な角度から理解を深める。	
社会系	ボランティア活動論	本講義は、「ボランティアとは何か」をさまざまな角度から考察することを通じて、自己と社会の関係の理解を深めることを目指す。とりわけ、ボランティア活動の意義に関する複数の理解の各々を批判的に考察しながら、根本的な意味で〈互いに支え合う存在〉であるところの人間存在のあり方をつかむことを目標とする。本講義を通じて、現在行なわれているさまざまなボランティア活動の具体的な内容を知るだけでなく、ボランティアの意義の理解を深めることによって人間理解（すなわち私たちの自己理解）も深めることができる。		
	経済学入門	経済現象を理解するために必要な基本的知識や経済学的な考え方、現実の経済現象を事例として参照しながら、解説することを目的とする。戦後日本経済の歴史の大まかな流れや、雇用、企業組織、財政、社会保障といった日本経済の動きに関わる基本的な事項について説明でき、日々の経済ニュースを理解できるようになることを目指す。そのうえで、日本経済が抱える諸問題について、その重要性を理解し、異なる立場の議論を比較することができる力を身につける。		



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	社会系	日本の政治	人間が集団で生活している限り、法や条例、公共事業の影響を避けて生きることはできない。それらを決定するのが政治であり、皆政治に参加することによって自分自身の生活をより善いものに作りかえることができる。しかし逆に、政治に参加しないことによってより悪いものになってしまう可能性も否定できない。本講義では、有権者である学生に日本の政治についての基本的な知識を与えることを目的とする。政治学の区分で言うところの政治体制論、政治過程論、日本政治史、国際政治、地方自治の内容について、日本の政治を概観していく。また、最近のニュースが理解できるように、政治的な時事問題についても紹介し、解説する。	
		法学入門	法は私たちの日常生活と密接な関係にあり、私たちが普段あまり意識しないで行動をしていても、その行為の裏には法律関係若しくは法律問題のあるものが沢山ある。法を学ぶことは世の中を知ることもつながる。本講義では、法学の基礎から始め、身近な具体的事例をとりあげ、民法、商法、刑事法、民事訴訟法などの基礎を解説する。日常生活において必要、有益な法律の知識を得て、身近な法律問題を法的な立場から考えるようになることを目指す。	
		経営学入門	基本的な企業経営の仕組みについて講義する。資本主義社会における企業の役割を踏まえて、現代企業の経営活動を理解することを目標とする。本講義では、組織論・管理論・戦略論の基本的な用語と概念を学び、それらを用いて具体的な経営現象を説明していく。経営学の基本的な理論と概念を理解することで、国家公務員一般職試験および地方上級職試験における専門試験で出題される「経営学」を理解できる程度の知識を修得することを目指す。	
		観光学	近年、日本への外国人観光客が急速に増加しているが、これは日本だけの現象ではなく、世界的に国際観光が盛んになっている。少子高齢化の時代を迎え、交流人口の増加を期待される観光は日本の重要政策に位置づけられ、今後ますますその必要性が高まってくると考えられる。本講義では、観光経済を学ぶうえでの観光の基礎知識を修得することを目的とする。観光振興の意義を理解し、観光現象について書かれた記事や文献を理解できるようになることを目標とする。	
	日本国憲法	本講義では、日本国憲法の意義、および基礎的知識を修得することを目的とし、講義テーマに関連する憲法上の問題を取りあげ、これと関わりのある基本事項、判例、学説を解説・検討する。さらにその知識を活用して、社会における多様な問題について、憲法の視点を踏まえて自分の言葉で発言できるようになることを目標とする。できるだけ身近な素材を利用し講義を進めることで、「憲法」と日常生活との関わりについて考えてもらえる機会とする。また、憲法をめぐるさまざまな考え方にふれ、物事を多角的にみる能力を養う。		
自然系	教養数学	本講義では、農学部専門的知識を学ぶ上で必要となる、統計学などの応用数学と言われる知識を修得するための基礎的・基本的な数学の知識や考え方を扱う。それらを学び、理解することを通じて、論理的思考能力・判断力・表現力といった素養を身につける。さらにそのような数学的素養を活かし、農学領域やそれを取り巻く様々な分野に対しても応用できるような基本的技能を習得することを本講義の目標とする。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	自然系	生命倫理	農学の学びにおいて「総合科学」の基礎となる幅広い知識の修得に加え、倫理観をもった豊かな人間性を涵養する教育が必要であり、農学分野における生命科学の倫理的配慮が社会的、科学的、技術的側面などから求められている。なかでも、農学分野において、ゲノム解析、各種細胞の研究利用、遺伝子組み換えによる品種改良など生命に係る技術利用が行われ、人類に有益な結果をもたらす一方で、予期せぬ有害な影響なども予測される。本授業では、生命科学分野で配慮されるべき生命倫理観及びその行動を学ぶ。「ヒトの生死や生命とは何か」、「人間とは何か」など根源的な問いに向き合いながら、農学における生命科学の最新技術をヒトや地球環境に及ぼす影響を考察しながら、倫理的行動について学修することを目的としている。	
		生物と環境	環境をめぐる諸問題は、ニュースでみない日はないほど私達にとって身近な話題となっている。環境を理解するためには、さまざまな知識や考え方が必要である。本講義では、生物（ヒトも含む）と環境の関わりを学ぶことを通して、私達の身の回りにある環境・環境問題を正しく理解できるようになることを目指す。そして、これからの時代を生きる人類にとって避けて通れない環境問題の解決を模索していく上で必要になる考え方を身につけ、自身で情報を見わけることができるようになることを目標とする。	
		地学	地学の大きな柱である固体地球、岩石鉱物、地質・地史、大気・海洋、天文の諸分野に関して、実際のデータや写真など、具体的な資料を用いて、我々の住む地球や我々を取り巻く宇宙に関する知見を深め、我々が経験する自然現象がいろいろな法則や原理によって説明できることを学ぶ。扱う範囲は広いが、単に広く浅い知識を修得するのではなく、自らの手で資料を検討することによって少し深い知見も得られるよう進める、また今まきに行われている研究についても紹介する。	
		地学実験	地学実験では、地球物理学・天文学・地質鉱物学における基本的事項について修得する。天文学分野では、天文に関する知識を実地の観測結果と結びつけて考察できるようにし、観測者である自分の空間位置を太陽系と恒星の世界の中で把握できるようにすることを目的とする。また地質鉱物学分野では、直接生の岩石や堆積物、化石などに触れることによって地球の歴史や各自の生活の基盤になっている大地の生い立ちを考察できるようになることを目的とする。	共同
キャリア系	キャリアデザインⅠ	就職や人生設計の前提として、「大学生」として大学生活をプランニングする。「基礎ゼミナール」と連携しつつ、「摂南大学」の学生として必要な知識や技能を修得する。専門の学びとの接続となるよう基本的なスタディスキルを修得する。講義と並行して、グループワークを実施し、課題やメンバー構成などの所与の条件に対してグループとして処していく力を養成する。社会の変化を知り、調べ、考え、発表するための技能についての理解を深めることを講義目標とする。		
	キャリアデザインⅡ	現代社会で生じているさまざまな事象を、氾濫する情報からの確にとらえ、それらを起点に思考し、自らの活かし方、伸ばすべきポイントについて考える。将来、就きたい職業を模索し、そのために今何を行うべきかを自ら考え、宣言できるようになることを目指す。講義だけでなく、グループワークや個人で考えるワークを織り交ぜて行い、来るべき就職活動に向けて、自分に必要な能力を自覚し学び、計画を実行に移せるようにする。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	キャリア系	数的能力開発	社会に出るにあたり必要とされる数的能力を学修する。社会人として数的能力が必要となる場面は多く、就職活動でも筆記試験で算数・数学はよく使われる。本講義では、将来のキャリア形成に活かせるよう、社会人として必要となる数的能力を高めることを目的とする。自力で解く、講師による解説、類題を解くという流れで、段階的に実践問題に取り組む。さまざまな問題を確実に理解し、解ける力を身につけていく。	
		インターンシップ	インターンシップの目的は、実際の仕事現場の一員として業務を担当することで、そこで働く人々がどのような考え方で働いているのか、特に「1）仕事の社会における役割」「2）仕事の成果とは」「3）仕事の責任と充実感」を直接肌で感じることである。事前学習として、ビジネス組織のあり方、マナーや常識を修得する。インターンシップ先での実習参加の機会を最大限に活用し、自分や社会をより理解し、将来の選択肢や可能性を広げること、職業観の涵養に努めることを目標とする。事後学習も行う。	集中※講義
外国人留学生対象科目		日本事情 F I	年中行事やしきたりなど日常生活に見られる日本の伝統文化から、日本人の価値観や考え方について、体験もまじえながら考察する。日本の年中行事やしきたりについて理解を深め、考察したことや体験を通して学んだことを日本語で表現する力を身につける。日本文化・社会と自国の文化・社会及び他国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できるようになることを目標とする。	
		日本事情 F II	日本文化・社会について、日本映画を視聴して観察したり考察したりする。また、映画の台詞や使われている場面から日本語の文法や表現についても学ぶ。日本文化・社会について観察し、自国の文化・社会及び他の受講生の国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できることを目標とする。映画についての情報・その他背景知識についてまず説明し、映画の場面をいくつか視聴する中で内容理解・練習問題・その他の各種タスク問題を出し、テーマについてディスカッションをした後、「書く」練習を行う。	
		日本語読解 F I	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。読んだ内容を要約したり、口頭で説明する練習を行うことで、語彙力を向上させる。	
		日本語読解 F II	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。読んだ内容を要約し、口頭で説明する練習を行う。語彙力を向上させ、専門分野の文章を読むための読解力の基礎を身につける。	
		日本語文法 F I	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回、講義テーマを決め、教員による解説と練習を繰り返しながら進め、中上級～上級の文法項目が運用できるようになることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目 外国人留学生対象科目	日本語文法 F II	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回、講義テーマを決め、教員による解説と練習を繰り返しながら進め、高度な日本語運用能力を身につけることを目標とする。	
	日本語表現作文 F I	本講義ではレポートや論文の基礎を学び、レポート・論文の文体と書き方を身につけることを目指す。レポートや論文の書き方について解説し、書く練習を行う。「①レポート・論文の文体で書ける」「②読んだ内容を要約できる」「③段落分けして書ける」「④経過説明、分類、定義など、書きたい内容に合う表現を使って書ける」「⑤信頼性の高い資料を集め、ルールを守って引用できるようになる」ことを目標とする。	
	日本語表現作文 F II	本講義では、実際にレポートを作成することを通し、レポート・論文の書き方を守ってレポートが作成できるようになることを目指す。テーマを決め、実際にレポートを作成していく。「①レポート・論文の文体で書ける」「②レポート・論文の書き方を守って書ける」「③アウトラインに沿って書ける」「④信頼性の高い資料を集められる」ことを目標とする。	
	日本語総合 F I	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。JLPTのN1に合格していない場合には、その対策も行なう。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。	
	日本語総合 F II	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。JLPTのN1に合格していない場合には、その対策も行なう。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。実際に日本社会で使用されている生教材を使って速読を行ない、できるだけ速く、自分に必要な情報を読み取る練習をする。	
	専門日本語 F I	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。本科目では、Eメールの書き方、自己PRの書き方、話の展開のさせ方を扱い、解説と練習を中心に進める。相手との関係、伝達内容、使用媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目標とする。	
	専門日本語 F II	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。ビジネス場面で使用する日本語表現、異文化ビジネスコミュニケーションについて学ぶ。用意した資料及びタスクシートをもとに講義、ディスカッション等を行う。ビジネス日本語・ビジネスマナー・日本の会社についての知識を得ることによって、日本での就職活動及び就職に必要な知識やスキルを身につけることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	外国人留学生対象科目	日本語会話 F I	講義を理解する際に役立つメモの取り方を学ぶと同時に、アカデミック場面における口頭発表のスキルを養う。さまざまなテーマに関する話を聞き、聞きとった内容をメモした後、その内容について発表する。「①まとまりのある話を聞いて、適切にメモを取ることができる」「②適切な表現を用いて、論理的かつわかりやすい発表ができる」ようになることを目指す。	
		日本語会話 F II	日本・国際社会におけるさまざまな問題や話題について日本語で議論する能力を伸ばす。さまざまな問題・話題に関するニュース等を見て、話し合う方法を進める。また、コースの後半は学生各自が興味のある話題を持ち寄って、話し合う方法をとる。社会的な話題について、日本語で論理的に意見を述べるができるようになることを目指す。	
	帰国学生対象科目	日本事情 R I	年中行事やしきたりなど日常生活に見られる日本の伝統文化から、日本人の価値観や考え方について、体験もまじえながら考察する。用意したスライドやプリントに沿って、テーマについて学び、講義後に理解度の確認小テストを行う。その後、クラス全体でフィードバックを実施する。体験で学んだことはレポートを作成し、学生同士で意見交換を行う。異文化理解を深め、異文化に対する柔軟な見方、態度を養い、日本語の表現能力（技術）を高めることを目指す。	
		日本事情 R II	日本文化・社会について、日本映画を視聴して観察したり考察したりする。また、映画の台詞や使われている場面から日本語の文法や表現についても学ぶ。各映画について、まず映画についての情報・その他背景知識について説明し、映画の場面をいくつか視聴する。その後、内容理解・練習問題・その他の各種タスク問題を行い、テーマについてディスカッションした後、「書く」練習をする。日本文化・社会について観察し、自国の文化・社会及び他の受講生の国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できることを目標とする。	
		日本語読解 R	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。また、読んだ内容を要約したり、口頭で説明する練習を行う。専門分野の文章を読むための読解力の基礎を身につけることを目標とする。	
		日本語文法 R	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回テーマを設け、解説と練習を繰り返しながら進める。中上級～上級の文法項目が運用でき、高度な日本語運用能力を身につけることを目標とする。	
		日本語表現作文 R	本講義ではレポートや論文の基礎を学び、レポート・論文の文体と書き方を身につけることを目指す。レポートや論文の書き方について解説し、書く練習を行う。「①レポート・論文の文体で書ける」「②読んだ内容を要約できる」「③段落分けして書ける」「④経過説明、分類、定義など、書きたい内容に合う表現を使って書ける」「⑤信頼性の高い資料を集め、ルールを守って引用できる」ようになることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	帰国学生対象科目	日本語総合R	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。実際に日本社会で使用されている生教材を使って、速読を行ない、できるだけ速く、自分に必要な情報を読み取るための練習をする。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。	
		専門日本語R	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。Eメールの書き方、自己PRの書き方、話の展開のさせ方を扱い、解説と練習を中心に進める。相手との関係、伝達内容、使用媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目標とする。	
		日本語会話R	日本・国際社会におけるさまざまな問題や話題について日本語で議論する能力を伸ばす。さまざまな問題・話題に関するニュース等を見て、話し合う方法で進める。また、後半は学生各自が興味のある話題を持ち寄って、話し合う方法をとる。社会的な話題について、日本語で論理的に意見を述べるようになることを目指す。	
教職課程の設置により開設する授業科目		理科教育法Ⅰ	理科教育法は中等教育において理科教育を如何に行うかを考え、教育現場で如何に実践していくかを身につける科目である。理科教育法Ⅰでは、高等学校を中心に戦後からの理科教育の流れをみつめ、現代の理科教育のあり方を考えていく。中学校・高等学校学習指導要領に則った教育課程の編成や目標、内容、方法等の基本的必須事項を理解して教授法を身につけ、授業計画や授業設計ができるようになる。高等学校の授業を生徒の立場から体験してもらう目的で、授業担当者が授業展開の実際を示すサンプル授業を実施するので、自身が授業を行うときの参考にしてもらいたい。教育実習等で不可欠な学習指導案の内容、作成の方法などにも触れる。	
		理科教育法Ⅱ	日本の教育問題の1つに理科離れがある。理科の面白さを引き出すためには理科の実験・観察の果たす役割は大きく、実験・手作業を通して身につく“見えない学力”は将来、技術者や研究者についたときの基礎力になる。理科教育法Ⅱは授業で実験・観察を行う意義をとらえ、理科の教科指導と授業力に関する資質と能力の育成をはかり、実験を取り入れた授業を組み立てることを前提に、授業計画や実験の方法について、具体例や実践例を挙げながら授業をすすめる。さらに理科教育法Ⅰと関連付けて指導計画、指導法などを実践の場で具体的に役立つ方法として身につけるために、各自に50分間の学校の模擬授業を実施してもらう。	
		理科教育法Ⅲ	高等学校の理科は選択制が導入されており、中学校理科の果たすべき役割は大きい。そのため、第1分野、第2分野の内容の特徴と小学校、高等学校の接続や内容との関連性について学び、物理、化学、生物、地学の各分野の特徴についての知識も必要となる。理科教育法Ⅲでは中学校の理科教師を目指す学生に、理科教育の内容、指導法に関する基本事項を再確認し、中学校で授業を行うために必要な授業作りの方法を身につける。また、楽しく、わかりやすい授業を行うための知識や技術を習得するとともに、簡単な実験・観察やグループワークなどのアクティブラーニングを積極的に取り入れ、学習者主体の活動的な授業が行えるようにする。また、聞き手である生徒が授業をよりわかりやすく受けることができるための方法や工夫を研究する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	理科教育法Ⅳ	本授業では、中学校や高等学校の授業を想定したうえで決められた時間の模擬授業を実際に行えるような授業実践力を培うことを目標とする。指定された単元の模擬授業を実際に行うことで、授業の難しさ、教材研究の重要性を知る。さらには模擬授業に対する研究協議によって、授業計画や指導法の改善を行う。総括して、教育実習時に十分通用するような授業実践力を培うことを第一目標とする。余裕があれば教授フローチャートを用いた授業計画も体験するものとする。	
	教育原理	「教育」という事象を成り立たせている諸理念・諸概念にはどのようなものがあり、また、それらの諸理念・諸概念が「教育」の思想や歴史のなかでどのように現れ、変遷してきたのかについての基礎的な知識を獲得することを目指す。さらには、その基礎的な知識を踏まえたうえで、現代の「教育」のあるべき姿について、受講者それぞれが自分なりに考えを深め、自分なりの理想の「教育」を構想することができるように、思考力や感性を磨いていく。	
	教師論	教職に関する理解を深め、自己の適性を見つめ直し、最終的に教職をめざすことについて主体的な進路選択を行うための判断材料を提供する。具体的には、「教職の意義とは何か」「教師の役割や求められる資質能力とは何か」「教職の専門性は何によって担保されるのか」「教師の職務とは何か」「教師の身分や身分保障はどのようになっているのか」などについて基礎的な知識を講義し、これに基づき、関連するテーマについてディスカッションを通して理解を深める。	
	教育経営論	本講義では教育課程(カリキュラム)とは何かについて考える。まず教育課程はどのような目的から、どのような内容で編成されているのかについての歴史的経緯を考察する。同時に学校教育システムとの関わりから、その意義や役割を理解する。そして、わが国における学習指導要領の変遷や戦前・戦中・戦後のカリキュラムの実践的開発を知ると共に、これからのカリキュラム開発の課題について考える。特に、これからのカリキュラム開発では新学習指導要領で言われている「社会に開かれた教育課程」、「アクティブラーニング(能動的学修・学習)」そして「カリキュラムマネジメント」に注目し、その意義等について理解する。	
	教育社会学	近年、学校教育現場では様々な問題を抱えるようになってきました。一般的に私たちはそうした問題に対し、学校教育内部でのみ対処し解決しようとする傾向がある。しかしながら、そうした問題の多くは、時に関係のないような社会的、経済的、政治的、そして文化的なシステムと密接な関係性をもっていることが多々ある。そこで本講義では、教育現場で生じている諸問題を、特に社会学的観点からとらえ、検討していくことを目標とする。特に、最近社会問題化している子どもの貧困や教育格差問題等を扱いながら、体系的に現代社会と教育の関係性について学び、教育社会学の理論や概念を学んでいく。	
	教育心理学	学校での教育活動において教師の果たす役割は大きい。学習の質を高めるために、教師が学習者を理解し、さまざまな形で援助していくためにはどうすればよいのか。それを考えていくにあたって必要な基礎的な知識を身につける。具体的には、幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程や意欲、学校における人間関係、個に応じた教育について学ぶ。また、学習活動と関係の深い人間の認知活動についても理解する。その上で、各発達段階における心理的特性を踏まえた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解する。さらに、日常生活の中で行われている学習活動や学校等における問題について、心理学的に説明し、考えることができるようになることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	特別支援教育論	<p>教職課程「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」に対応する科目である。</p> <p>「障害」という概念を再構成するとともに、特別支援教育の理念・制度・方法についての歴史的変遷から最新の動向について整理し、現状と課題について考察する。貧困、被虐待、渡日等の特別な教育ニーズのある子どもに対する指導・支援のあり方についても取り扱う。通常学級で多様な教育的ニーズのある子どもがともに学びともに育つ教育を展望したい。</p>	
	教育課程論	<p>本講義では教育課程(カリキュラム)とは何かについて考える。まず教育課程はどのような目的から、どのような内容で編成されているのかについての歴史的経緯を考察する。同時に学校教育システムとの関わりから、その意義や役割を理解する。そして、わが国における学習指導要領の変遷や戦前・戦中・戦後のカリキュラムの実践的開発を知ると共に、これからのカリキュラム開発の課題について考える。特に、これからのカリキュラム開発では新学習指導要領で言われている「社会に開かれた教育課程」、「アクティブラーニング(能動的学修・学習)」そして「カリキュラムマネジメント」に注目し、その意義等について理解する。</p>	
	道徳教育論	<p>日本や世界の「道徳教育」が歴史的にどのように成立し変遷してきたのか、また、そもそも「道徳教育」を「道徳教育」たらしめている一般的な原理とはいったい何なのか。「道徳教育」の歴史や原理に関するこうした基礎的な知識を身に付けることを目指す。また、この基礎的な知識を踏まえたうえで、さらにはより具体的かつ実践的に、現代の日本の学校における「道徳教育」の目標や内容について理解し、現代の日本の学校において行われる様々な「道徳教育」の指導方法を身に付けていく。</p>	
	特別活動・総合的な学習の時間の理論と指導法	<p>特別活動の歴史と意義、方法論について学ぶ。また、実践上の課題をとらえ、学級活動の指導計画の作成や問題解決に至るかわりについて理解を深める。総合的な学習(探究)の時間の中心である探究的な学習の過程について学ぶ。また、学校が定める目標や内容のもとで総合的な学習(探究)の時間の指導計画の作成や評価について理解を深める。</p> <p>事例をもとに、グループ討議やグループでの即興劇を行い、気付きや変化について意見交換を行う。</p>	
	教育方法論	<p>教職課程「教育の方法及び技術」に対応する科目である。授業は、①教育方法・教育思想の歴史の概観、教育目標、教育内容、学習、発達、学力、教材論、計画、評価等に関する基礎的な理論、②授業の設計から評価に至る授業構成の理解、③学習指導を組織化するための基礎的な授業技術と方略の習得、に関する講義と、④授業実践に関するミニ講座によるワーク、⑤グループでの共同作業による教材開発とマイクロ・ティーチングの実施体験により構成する。</p>	
	生徒指導論(進路指導を含む)	<p>生徒指導、進路指導は、学校教育をすすめるうえで重要な役割を占めている。いじめ、不登校、学級崩壊、暴力行為や非行、受験競争、進路のミスマッチなど、生徒指導・進路指導上の諸問題については、その解決の重要性が認識されている。本科目では、生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義について理解を深め、実践を進める方法原理について基礎的な知識を獲得し、学校組織を構成する教職員、学校外部の専門機関や関係諸団体と協力して解決・改善を目指そうとする素養を養う。</p>	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	教育相談(カウンセリングの基礎を含む)	教育相談は、幼児児童生徒が自己理解を深めたり好ましい人間関係を築いたりしながら、集団の中で適応的に生活する力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。幼児児童生徒の発達の状況に即しつつ、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援するために必要な基礎的知識(カウンセリングの意義、理論や技法に関する基礎的知識を含む)を身に付ける。特に学校における教育相談に焦点を当て、教師が行う教育相談活動の基本的な考え方や教育相談に必要なスキルを身につける。そのために、教育相談のもつ今日的意義を解説し、カウンセリングの基礎知識及びその実践的な手法を紹介する。併せて生徒理解と“問題”への対応について、実践的な取り組み方を考える。	
	教育実習Ⅰ	(1) 教育実習の実際についての情報を提供する。それらに基づいて、受講者は、演習や実習を行う。(2) 教育実習校における実習に必要な教育実践の基本を理解して、教科指導、学級・ホームルーム経営、生徒理解・生徒指導等の実際について有効な指導計画を立案し、効果的な指導をできるようにする。(3) 教育実習の現状と課題についての認識を深めるとともに、教育実習生としての基本的心がまえについて理解を深め、実践できる素養を養う。	共同※講義
	教育実習Ⅱ	「教育実習Ⅱ」では、教育実習校において10日間以上の実習を行う。(1) 教育実習校において、教科指導、特別活動の指導、生徒理解・生徒指導などの実習を行う。また、大学において事前及び事後の指導を受ける。(2) 事前指導では、教育実習講義と個別指導を行う。(3) 教育実習は所定期間内に実習校の指導教員の指導の下で行う。(4) 事後指導では、教育実習体験報告及び反省を行い、教育実習のまとめとして、総括を行う。	共同※講義
	教育実習Ⅲ	「教育実習Ⅲ」では、教育実習校において15日間以上の実習を行う。(1) 教育実習校において、教科指導、特別活動の指導、生徒理解・生徒指導などの実習を行う。また、大学において事前及び事後の指導を受ける。(2) 事前指導では、教育実習講義と個別指導を行う。(3) 教育実習は所定期間内に実習校の指導教員の指導の下で行う。(4) 事後指導では、教育実習体験報告及び反省を行い、教育実習のまとめとして、総括を行う。	共同※講義
	教職実践演習(中・高)	さまざまな学習を通して自身の課題を見つめ直し、教員としての適性や力量について確認する。具体的には、①ガイダンス、②教科における実践上の課題、③教科指導・生徒指導・進路指導の実際、④今日的な教育問題に関する学習からなる。①では、科目の目的等と各自の課題について確認する。②では、教科の専門分野に関する個々の課題についてその分野を専門とする教員の指導、実践上の課題について教科教育法担当教員の指導を受ける。③では、市教育委員会と連携し中学校を2回訪れ、授業見学後、中学校教員の指導を受ける。④では、教職課程教員がそれぞれの専門を活かし、「いじめの現状」「いじめ問題への取り組み」「ジェンダーと教育」「学校の中のマイノリティー」「『甘え』について考える」「『自律』について考える」「体罰について」「授業料無償化と奨学金について」「カウンセリングマインドと生徒対応」「『自分』を知る」をテーマに考察する。	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	地域連携教育活動Ⅰ	大学近隣の小学校あるいは中学校で、年間を通じて授業補助、学習支援、学校行事、課外活動等幅広く体験し、自己の適性を把握する機会をもち、人間的成長や社会意識の向上、教員としての愛情と使命感を深めることを目指す。具体的には、実際の教育現場を知ること、自身の能力や適性を考え課題を自覚すること、社会的倫理観を確立すること、多様な相手に合わせたコミュニケーションがとれることを目標とする。また、こどもの実態を知り、教科指導や生徒指導等を観察、可能であれば参加することで、実践的な指導の基礎固めを行う。	共同※講義
	地域連携教育活動Ⅱ	「地域連携教育活動Ⅰ」を受け、その体験をもとにさらに学びを深める。「地域連携教育活動Ⅰ」と異なる、あるいは同じ大学近隣の小学校あるいは中学校で、年間を通じて授業補助、学習支援、学校行事、課外活動等幅広く体験し、自己の適性を把握する機会をもち、人間的成長や社会意識の向上、教員としての愛情と使命感を深めることを目指す。具体的には、実際の教育現場を知ること、自身の能力や適性を考え課題を自覚すること、社会的倫理観を確立すること、多様な相手に合わせたコミュニケーションがとれることを目標とする。また、こどもの実態を知り、教科指導や生徒指導等を観察、可能であれば参加することで、実践的な指導の基礎固めを行う。	共同※講義

## 授 業 科 目 の 概 要

(農学部 食品栄養学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(概要)</p> <p>自然を改変しながら生物資源を活かし、人類の衣食住を支えてきた「農学」は、人間の諸活動を支える根幹的な学問である。「農学」には持続可能で豊かな人間社会と地球環境の創出を目指して、課題を見出し対応するミッションがある。「農学」は生命を支える食料の科学であり、生命科学とも位置付けられる。さらには、「農学」は生産、加工、流通の6次産業に食栄養を加えた24次産業的視点で捉えることができる。農と食をとりまく環境は大きく変化し、「農学」における食栄養科学・健康科学の重要性も認識されている。本講義はこうした問題意識からテーマを設定し、オムニバス方式の講義により、受講者が「農学」とは何かを理解するとともに、「農学」のミッションに対応する「使命感」、「農学」的視点がもたらす「俯瞰力」「実践力」に関心を持ち、主体的に課題を意識することができることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(32 久保康之／1回)</p> <p>「農学を大学で学ぶとは」をテーマに講義する。「農学」は、自然を改変しながら生物資源を活かし、人間の諸活動を支える根幹的な学問である。持続可能で豊かな人間社会と地球環境の創出を目指して、私たちは何を学び、何をすべきか、「農学」の世界観を俯瞰し、学修する。</p> <p>(36 寺林敏／1回)</p> <p>「農学と社会」をテーマに講義する。「農学」は、安全な食料生産と食料の安定供給、自然環境の保全、食を取り巻く多様化・複雑化する社会への対応、新しい作物生産の場とその生産技術の開発など、社会からの求めに応え、解決する使命を担っている。「農学」が社会とのかかわりの中で、いかなる研究が社会に貢献してきたか、と同時に「農学」の発展と可能性について学修する。</p> <p>(29 川崎通夫／1回)</p> <p>「農業生産技術の進歩」をテーマに講義する。農業生産技術の進歩は、人口増加、自然環境変動、および、社会変化に伴う農業生産課題を解決していく上で重要な要素である。フィールド栽培、施設園芸、植物工場、および、AI(人工知能)やIoT(モノのインターネット)を活用したスマート農業などに関する農業生産技術の進展について学修する。</p> <p>(35 田中樹／1回)</p> <p>「国際農業と開発援助」をテーマに講義する。世界の農業の多様性を踏まえ、発展途上国における農業開発と、それに対する援助のあり方を学修する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(27 小保方潤一／1回) 「ゲノムと農学・生命科学」をテーマに講義する。生物の設計図を読みたい、というのは生物学者の長年の夢だったが、ゲノムの解読技術の飛躍的な発展によって、それは現実のものとなりつつある。ゲノム科学の急速な発展が、農学・生命科学や私たちの生活にどのような影響を与えつつあるのかを概説する。</p> <p>(22 石川幸男／1回) 「農業とケミカルエコロジー」をテーマに講義する。すべての生物は、同種または他種他個体と相互作用を及ぼしあいながら生きており、この相互作用の仲介役として化学物質が大きな働きをしている。植物－昆虫、昆虫－昆虫間の相互作用における化学物質の働きについて、その害虫管理への応用を含めて概説する。</p> <p>(25 奥本裕／1回) 「作物改良のための情報科学」をテーマに講義する。現代の農業は近代育種が改良してきた品種を基盤に成立している。近年のゲノム解読技術と画像解析技術の急速な発展は、育種におけるDNA情報解析と高速フェノタイピングの利用を強く後押ししている。育種の現場で利用が進められているゲノム情報と圃場データ処理を利用する情報科学について概説する。</p> <p>(23 井上亮／1回) 「動物生命科学の新展開」をテーマに講義する。動物を対象とした研究は、農学においては産業動物の生産性向上のため、食品、医療においてはヒトの健康維持・増進、疾病予防・治療のために行われる。これらの動物を対象とした研究には遵守すべきルールや法令が存在する。これら動物を対象とした研究に関する現状を学修する。</p> <p>(37 豊原治彦／1回) 「地球環境と海洋科学」をテーマに講義する。水産業は一次産業の中でも特に天然依存性が高いことから、資源維持のために健全な海洋環境の保全が必須である。最新の増養殖技術の活用も含め、地球環境の保全と海洋科学の進展について学修する。</p> <p>(10 吉井英文／1回) 「食品科学と農業」をテーマに講義する。農林漁業者（1次産業）が生産する農水産物の元々持っている価値をさらに高め農林水産業を活性化させるためには、食品加工（2次産業）は必須の技術である。最新の食品加工にかかわる食品科学技術の進展について学修する。</p> <p>(51 和田大／1回) 「微生物と食品」をテーマに講義する。東洋、西洋を問わず、食品製造に微生物を利用することは長く行われてきた。農産物の2次加工としての微生物利用について概説する。</p> <p>(1 喜多大三／1回) 「食文化と多様性」をテーマに講義する。日本の食文化は大きな変革期にきており、食生活の大部分を外食産業に依存する家庭が急増している。本来、日本の伝統的食文化である「お茶」の歴史、伝統および特質について学修する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(4 黒川通典／1回) 「食栄養科学と健康」をテーマに講義する。現代の栄養事情は欠乏と過剰の二極化といわれている。社会の仕組みが複雑になっている今、社会のあらゆる側面を視野に入れながら、人間栄養学の観点から健康問題を考える。</p> <p>(26 小野雅之／1回) 「食品産業の役割とこれからの方向」をテーマに講義する。消費者への食料供給において重要な役割を担う食品産業、特に食品流通業を取り上げ、その役割とこれからの展開方向を学修する。</p> <p>(31 北川太一／1回) 「これからの食と農を考える」をテーマに講義する。今日の食と農の状況を踏まえながら、これからの食と農の共生のあり方とその方向を考える。</p>	オムニバス方式
		農学基礎演習	福井県と三重県にある農業体験施設を利用し、2日間の演習を行う。主に、我が国のイネ生産と消費の現状、水田の構造、稲作を成立させる農業技術並びに自然環境要因、水田の多面的価値、稲作文化等について学修する。演習内容として、春期の田植えと秋期の稲刈りを行う。日本の主食であるコメの栽培を学び、イネ栽培を体験することで、水田の構造、日本で水田稲作が成立する要因、稲という植物の生育特性を深く理解し、我が国における今後の稲作の在り方について学ぶことを目的とする。	集中・共同
		グローバル農業演習	私達の食生活は、我が国の食料生産だけでは決して支えられているものではなく、他国における食料生産への依存度は高まる一方である。海外に10日間滞在し、その地域や国の農業についての学修や視察により、茶などの工芸作物を含む様々な農作物、野菜や花などの種々園芸作物が他国で、どのような気象・土壌環境で、どのような栽培技術で生産され消費・利用されているかを、それら地域の歴史的、文化的背景、社会情勢の理解とともに学ぶ。	集中・共同
		スマート農業演習	日本農業における就農人口の減少、高齢化、激しい気象変動と異常気象等、農園芸作物生産を取り巻く環境は厳しさを増している。そんな中、高収量・高品質、安定生産、省力・軽作業化、省エネを実現するためのロボット技術やICTを活用した新しい農業スタイル「スマート農業」が動き始めている。本演習ではスマート農業について、その理論と実際を学び、日本農業がかかえる課題と「スマート農業」の可能性とその重要性について正しく認識させる。	共同
		農業気象学	さまざまな気象現象の基礎的な特徴と発生原理等について講義を行い、気象と動植物との関わり、農業や人間生活との関わり等について、具体的な事例を示しながら解説する。それにより、大気の組成や構造、放射過程・熱輸送過程、高・低気圧や前線とその動き、異常気象の発生原理、大気大循環、地球温暖化を含む気候変化とその影響など、さまざまな時間的・空間的スケールで起きる気象現象や気候システムについて、そのメカニズムを修得し、それらの農業への影響や対策等について現実的に考察することが可能となる学力を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	森林生態学	森林のあるところに文明が起り、森林がなくなれば文明も滅びたように、昔から人間は森林を利用して生きてきた。日本は、国土の67%を森林に覆われる世界でも有数の森林国である。森林は、近年の環境問題を解決するための、また持続可能な資源の開発を行うための、大きな鍵となる。本講義では、森林の生態についての知識を得ることを目標にする。また森林生態学を研究する方法や、環境の計測などに関する理解を深める。さらに森林と人間のかかわりや、森林が地球環境に及ぼす影響、日本の林業の問題点などについても考察を行う。	
		農業知的財産	<p>(概要)</p> <p>農林水産業は、生活の根幹を支える重要な産業でありながら、これまで十分な知的財産に関する法的支援が図られていなかった。そこで、農林水産業における知的財産の重要性を認識し、知的財産制度を有効に活用するために、農林水産業と密接に関連する知的財産の基礎的知識や各種制度の在り方、農林水産業における知的財産制度の活用方法の修得を目的とする。具体的には、農林水産分野における知的財産法制の概観、種苗法に基づく品種登録制度の概要（海外での新品種の保護制度を含む）、農林水産品の「地域ブランド」保護制度である地域団体商標制度及び地理的表示制度の内容、農林水産業における品質誤認表示規制の概要、水際措置、食品の安全性確保のための各種手法（GAP、HACCP等）の概要等について修得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(86 犬飼 一博／7回)</p> <p>農林水産業における知的財産権の重要性、知的財産法制の概観、地域団体商標制度の概要、国内及び海外における品種保護制度の概要等について学修する。</p> <p>(90 中世古 裕之／8回)</p> <p>地理的表示制度の概要、農林水産品における品質誤認表示規制の概要、水際措置、農林水産知財における今後の課題・展望等について学修する。</p>	オムニバス方式
専門コア群	基礎系	生物学	栄養学と食品学は、生物学の知識を基に構築されている。栄養学と食品学を学ぶうえでの必要最小限の有機化学の知識を学修した後に、生物学の中の人体に関係する部分を網羅的に学修する。最後に、環境と生態、生物多様性、進化の基礎についても学修する。具体的には、細胞の構造、酵素、生体内での代謝、体内でのたんぱく質の働き、遺伝、血液、主要臓器である肝臓と腎臓の働き、体内環境の維持機構、生体防御機構、神経系、環境と生態、生物多様性、進化についての基礎的知識を学修する。	
		生物学演習	本演習では、「生物学」の講義と連動し、栄養学と食品学を学ぶうえで重要な、人体を中心とした生物学の演習問題に取り組み、基礎的理解を深めるとともに応用能力、問題解決能力を養う。また同時に生物学の基礎に関する様々な問いかけに触れることで、背景となる周辺知識を学び、生物学の根幹となる考え方がどのように生まれてきたかを追体験して、理解を深めることを目的とする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	基礎系	化学	化学的知識・思考は、食品学および栄養学領域における基礎・専門科目を理解する上で欠かせない。本講義では、化学の基礎知識を確実なものとするとともに、大学における専門科目の理解に不可欠な化学の知識を修得することを目的とする。「化学」では、物質の成り立ちから、理論化学、無機化学、有機化学に関する基本事項を学修し、専門課程・卒業論文研究における化学的な課題に対処する能力を身につける。また、同時期開講の「化学演習」において、「化学」にて講義した基本事項について、問題演習を通じて理解する。	
			化学演習	化学的知識・思考は、食品学および栄養学領域における基礎・専門科目を理解する上で欠かせない。本演習では、化学の基礎知識を確実なものとするとともに、大学における専門科目の理解に不可欠な化学の知識を修得することを目的とする。「化学演習」では、同時期開講する「化学」にて講義した基本事項について、問題演習を通じて完全に理解し、専門課程・卒業論文研究における化学的な課題に対処する能力を身につける。	
	社会・環境と健康	公衆衛生学	公衆衛生学とは、社会の組織的な取り組みを通じて疾病を予防し、寿命を延ばし、健康を増進する科学および技術である。本講義では、健康を維持・向上させるための保健、医療、福祉、環境など公衆衛生全般について学修するなかで、健康および公衆衛生の概念や保健・医療・福祉の制度、健康増進や疾病予防の考え方や取り組み、健康・疾病に関わる各種統計資料、健康状態・疾病の測定と評価、健康情報の利用と管理、処理などについて理解する。具体的には、健康や公衆衛生の概念と歴史、わが国の健康の現状と医療保険制度を学修したうえで、食品保健、生活習慣病対策、感染症対策と母子保健、老人保健、環境保健など多岐にわたる公衆衛生分野の理解を深め、公衆衛生における栄養の関わりとともに、疫学概念や手法についても学修する。		
		健康管理概論	健康管理概論は、管理栄養士が地域、職域、学校などで公衆栄養実践活動を営むための基礎科学である。本講義では、公衆栄養活動を科学的根拠に基づいて行うことに対する理解を深めるための知識や考え方を身につけることを目的とする。また、管理栄養士として理解が必要な疾患、特に生活習慣病の病態などを含め講義する。具体的には、健康について概観した上で各種健康づくりと健診・検診について学修する。さらに食事や運動などの生活習慣と生活習慣病との関連性を解説する。		
		医療福祉論	本講義は、わが国における医療福祉の現状と課題を理解することを目的とする。具体的には、医療福祉にかかる各種制度を理解した上で、その実態と課題について学修する。また、医療福祉サービスの提供主体や関係する専門職について理解するほか、諸外国の医療福祉の実態についても学修し、わが国の医療福祉の特徴と課題が説明できるように講義する。医療福祉の関係法令も踏まえながら、医療福祉施策がどのような目的で立案され、実施されているかについても理解する。特に、管理栄養士・栄養士に関する医療福祉制度について理解できるよう、具体的事例等も提示しながら講義する。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	人体の構造と機能及び疾病の成り立ち	解剖生理学	人体の機能とその調節について理解し知識を得ることは、健康の回復・維持・増進について学修する上で不可欠である。本講義では、生体の構造（解剖学）および機能（生理学）を学修し、人体の精密かつ複雑な構造と機能の基本を細胞、組織、臓器・器官、器官系及び個体のレベルで理解することを目的とする。また、卵子、精子の形成から個体形成に至るプロセスの概説を通して、個体としての成長過程・老化について学修する。一方、臓器・器官の協調による生体調節の統合システムについて理解を深めることで、生体における恒常性維持における生理システムを学修する。これらの講義を通して、栄養学を学ぶ上で基礎となる生命の仕組みを理解する能力を養うことを目標とする。	
			臨床医学概論	「臨床医学概論」では、臨床現場で管理栄養士として働くために必要な医学の基礎知識を修得することを目的とする。そのため、基礎医学領域を基礎として、病気とは何か、問診、症候、臨床検査などの疾患診断のプロセスを学修する。また、疾患を人体の構造と機能に関係づけて理解し、生体制御機構と疾患の関連、その診断と治療の基本的な考え方を修得する。さらに医療に従事する者としての基本的な心得、生命倫理や医療安全についても学修する。	
			生化学	生命現象を化学的に探究するのが生化学である。生体の構成成分と代謝を理解するための元素、化合物の特徴に始まり、細胞の構造、糖質、脂質、たんぱく質（アミノ酸）、核酸などの性質、酵素反応の特徴、生体エネルギー論と、講義を展開していく。次に、解糖系、クエン酸回路（TCA回路）、 $\beta$ -酸化、電子伝達系・酸化リン酸化、アミノ基転移反応、酸化的脱アミノ反応、尿素回路を中心とした三大栄養素の代謝と、生体内におけるグリコーゲン、トリグリセライド及びコレステロールの生合成を学修する。さらに、遺伝情報の発現とたんぱく質合成並びに免疫システムの基礎を学修する。	
			微生物学	様々な微生物（細菌、ウイルス、寄生虫など）のうち、人間にとって有用・有益な微生物と、食中毒や食品介在性感染症の原因となる微生物の構造、増殖機構、汚染源、伝播機構などの基本的知識並びにそれらによる感染症の病態や予防に関する知識を得ることを目的とする。また、栄養管理上問題となる感染性疾患（肝炎、腎障害など）の概略についても学修する。	
			分子生物学	遺伝子発現と栄養の関係を理解するための基本的知識として、遺伝子の構造、DNAの塩基配列、複製と修復、リボ核酸（RNA）の合成（転写）、タンパク質の合成（翻訳）と翻訳後修飾、分解などの一連の遺伝子情報の流れとその調節機構を理解することを目的とする。具体的には、がんや生活習慣病を含む様々な疾患と遺伝子多型の関連や、遺伝形質と栄養の相互作用を学修する。また、遺伝子組み換え技術の原理を理解し、臨床医学や創薬・バイオテクノロジー産業への応用に関する基本的知識を修得する。	



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	人体の構造と機能及び疾病の成り立ち	臨床病態学	管理栄養士の臨床業務において、栄養管理や食事療法に基づく治療食を提供する立場にあり、また NST（栄養サポートチーム）の構成スタッフとしても重要な役割を担っている。本講義では、まず栄養疾患の概要から学修し、栄養状態が生態に及ぼす影響について総論的な理解を得た上で、栄養管理や食事療法との関わりが高い疾患の病因、病態（臓器・組織の変化）、検査・診断及び治療についての知識を総合的に理解することを目的とする。具体的には、内因 外因、代謝異常、循環障害、炎症、腫瘍等を対象とする。とくに生活習慣病といわれる糖尿病、高血圧症、動脈硬化症、心筋梗塞、脳卒中、脳梗塞、悪性腫瘍に重点をおいて疾患の成り立ちを代謝異常や循環障害と関連づけて講義する。摂食障害やアレルギー疾患等で、食事成分や栄養が直接関係する疾患についても学修する。	
			運動生理学	ヒトが日常生活において運動やスポーツを実施した場合の生体諸機能の応答や、運動を継続した場合の適応およびそのメカニズムを理解することを目的とする。具体的には、身体活動・運動時のエネルギー代謝および生理的变化の特徴について理解する。各ライフステージにおける健康管理のための身体活動・運動の意義について理解し、望ましい運動の種類や強度、栄養補給法について学修する。健康づくりのための身体活動基準および健康づくりのための身体活動指針（アクティブガイド）の基本概念および科学的根拠について理解する。	
			薬理学	近年、管理栄養士はチーム医療スタッフとして重要な役割を担っている。たとえば、栄養サポートチーム（NST：Nutrition Support Team）における栄養管理や生活習慣病などの栄養指導を進める上で、基本的な医薬品や薬物療法の理解は必要な知識のひとつである。「薬理学」では、医薬品の基本的な体内動態および薬効・薬理作用を解説し、主な疾病に対する薬物療法において使用する医薬品を概説し、臨床現場での実践に向けた管理栄養士に必要な薬物療法の基礎的知識を身につける。	
			解剖生理学実習	本実習では、個体レベル及び個体の機能を構成する組織・器官レベルにおいて正常な人体の仕組みを修得すること、様々な「生命現象」の観察・測定方法や結果の解析方法を修得することを目的とする。並行して開講する解剖学・生理学系の講義と連携しながら、さらなる知識の定着を図る。また、「臨床病態学」の導入として、それらに必要となる基本的知識・手技を修得する。具体的には、人体模型標本・骨格標本、実験動物の解剖を通して生体の器官・臓器の位置を正確な知識として定着させる。また、動物組織標本を光学顕微鏡で観察することで組織の特徴や構造を細胞レベルでも学修する。さらに、実験動物やヒトを対象に、バイタルサインや呼吸機能検査、心電図、など実際臨床で用いられる生理学的検査を通して「生命現象」を観察する。これにより栄養、運動、休養などの基本的な生活・生命活動、および環境変化に対する適応機構を理解する。	
			生化学実験	生命現象を化学的に探究するのが生化学であるが、講義だけで生化学を理解するのは困難である。本科目は実験を通じて生化学の知識を深めることを目的とする。具体的には、pH と緩衝液、糖質の性質、たんぱく質・アミノ酸の性質、脂質の性質、ビタミン・無機質（ミネラル）の性質を学修し、次に動物の臓器を用いて生体中のグリコーゲン、脂質成分、DNA の量を定量する。さらに、酵素の基本的性質と酵素反応速度論並びに生体における酸化反応と電子伝達を学修する。	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	及び 人体の構造と機能 の成り立ち	微生物学実験	人体と微生物や毒性物質との相互作用について、「微生物学実験」を通して学習することを目的とする。具体的には、無菌操作や滅菌、消毒方法、微生物の培養、顕微鏡観察やグラム染色等による分類など基本手技を修得する。また、環境や人体からの微生物の分離同定、抗菌物質の感受性試験、大腸菌を用いた遺伝子組換え実験を通して、感染症の原因となる微生物と人体との関係についての正しい考え方、知識を身につける。	共同
		食 べ 物 と 健 康	食品学総論	栄養管理を行う際に必要であり、健康に欠かせない食品の成分や性質を学び食品の役割・機能を理解することを目的とする。具体的には、食品の一次機能を担うたんぱく質、炭水化物、脂質、ビタミン、無機質など生命維持に必要な食品成分の化学構造・性質、物性等や栄養特性を理解する。また、色素成分、呈味成分、におい成分などおいしさを感じさせる二次機能、及び人の健康の維持・増進に関わる三次機能を有する特定保健用食品等の成分と作用について学修する。	
		食品学各論	一般に利用されている食品を植物性食品、動物性食品、油糧食品等に分類し、個々の食品についてその性状や含有成分（主要成分や微量成分）の理化学的性質を理解することを目的とする。具体的には、甘味料、調味料、香辛料などの食品添加物、調理加工品、バイオ食品の特性についても学修するとともに、食品の基本的性質を基にした利用法（加工と貯蔵への応用や微生物を利用した発酵食品を含む）についても学修する。「食品学総論」での学修と関連付けながら、健康で豊かな食生活を作り上げるための食品及び食品素材の特性に関する知識を高める。また、食品加工のための食品素材の物理的、化学的性質を理解し、「食品加工実習」へと知識、理解をつなげる。		
		食品衛生学	食品に起因する健康被害を未然に防ぎ、食品の安全を守るために、食生活や食品の生産・加工・保存・流通・調理の段階で発生する食品衛生上の健康危害を理解して予防するための知識を修得することを目的とする。具体的には、食品衛生・食品の安全性評価に関する行政制度と関係法規を理解し、病原微生物や農薬、動物性医薬品、食品添加物等の化学物質による食品汚染、動植物に由来する食中毒や食品劣化とその防止法を修得する。また、主な食品添加物の種類と用途を理解し、生産、加工、流通等のフードシステムにおける衛生管理制度・法規を学修する。さらに、食品表示法、食品表示基準や健康や栄養に関する表示制度について理解し、食品の安全性と健全性を確保するための基本知識を学修する。		
		食品加工学	食品加工学は、食品に物理的、化学的処理を施して、その食品の栄養的価値並びに保存性を高めるための理論と方法を学ぶものである。本講義では、食品加工の意義を学ぶと同時に、食品の素材や加工特性、食品劣化の要因、食品の加工法、貯蔵法を学修する。本講義と「食品加工学実習」を並行に学ぶことにより、栄養士・管理栄養士として勤務する上で食のエキスパートとして必要な食品の利用や判別能力を身につけることを目的とする。		
		調理学	調理とは、献立作成から始まり、食品選択・調理操作・供卓までの一連のプロセスを含んでいることを理解し、健全な食生活を送るための調理学の役割と、調理をより効果的に活用するために必要な理論と実際を学修することを目的とする。具体的には、エネルギー源、調理機器、調理操作について大量調理への応用展開も視野に入れて理解し、さらに各種食品の調理性を原理から理解して修得する。また、様々な対象や場面に応じて栄養・嗜好性に加えて経済性や効率性さらには食環境など食を取り巻く生活全体を捉えた食事設計の基礎を学修する。		
科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	

専門科目	専門コア群	食べ物と健康	食品学実験Ⅰ	実際の食品を用いて、食品成分表で用いられている手法に基づいて食品の基本的成分である水分、タンパク質、脂質、炭水化物の分析を行い、重量分析、容量分析、比色分析など食品成分の分析に必要な分析原理や手法を学修し、食品の持つ性質、機能および役割を理解する。実験を通じて、共同実験者とのコミュニケーションをとり自ら実験操作を行う習慣を身につける。また、実験器具や薬品の取り扱い方など食品学実験に必要な基礎知識を修得する。さらに、実験値と食品成分表に記載されている文献値を比較して実験値の意味を理解し、管理栄養士として必携となる食品成分表に記載されている数値の意味の理解を深める。	共同
			食品学実験Ⅱ	「食品学実験Ⅰ」における学修を踏まえて、実際の食品に微量含まれる無機質とビタミンの定量分析を行う。また、比色法によるビタミンC及び鉄の分析、原子吸光法によるマグネシウム、高速液体クロマトグラフィー法によるビタミンCの測定法をそれぞれ修得し、それらの測定原理を理解することを目的とする。具体的には、実験を通じて、食品の栄養特性に関する知識を高める。また、食品機能性の評価指標として抗酸化活性の測定を行い、機能性評価と消化酵素阻害活性における活性測定の意義を理解する。	
			食品衛生学実験	「食品衛生学」で学修した食品衛生の知識を基礎として、食品危害の原因を解明し、飲食に起因する健康被害を未然に防ぐための検査技術を実験を通じて修得することを目的とする。具体的には、手指や調理器具の細菌汚染状況や消毒効果を把握するための検査手法を修得する。また、食品の安全性を評価するために実際の食品を用いて食品添加物や残留農薬の検査を行い、分析機器の原理を理解し、得られた結果から講じるべき衛生管理手法について自ら考察できる力を養う。	共同
			食品加工学実習	「食品加工学実習」は、実際に穀類、砂糖、野菜、果実等の加工食品を作る基礎技術を修得する。食パン、うどん、アイスクリーム、ヨーグルト、ジャム、カスタードクリーム、豆腐ほかの製造を実習しながら、食品素材の加工特性（食品成分の物理的、化学的変化）、食品製造原理や技術について学ぶ。さらに、製造後の製品評価を多角的視点で行う事により、日常生活での加工食品の選択がより安全・安心なものとなり、健やかな食生活基礎を作ることができる。加えて、本実習を通して食への興味を広げ、食の原点を見つめなおし、真に豊かな食生活に貢献することを目的とする。特に、管理栄養士として加工食品の適切な取り扱いと食品開発に関わる基礎的技術の修得も目指す。	
			調理学実習Ⅰ	食品の調理性に関する実践的知識と基本的調理操作に関する基礎的能力を育成すること、および食の様々な場面において必要な基本的マナーと、安全・衛生面に関する正しい理解と認識を深めることを目的とする。具体的には、代表的な調理器具の扱い方と調理操作（ゆでる、煮る、蒸す、炒める、揚げる等）の基本を修得し、食品の特性や調理に伴う栄養の損失を考えた食品の組み合わせ方について学修する。また、調味%を理解することにより、調味の標準化に関する基礎的事項を修得する。さらに、栄養価計算を通して、食品の栄養面の特徴や1食当たりの使用量および食品成分表の理解と活用能力を育成する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	食べ物と健康	調理学実習Ⅱ	「調理学実習Ⅰ」で修得した基礎的知識と技術をもとに、和・洋・中・その他の各様式の食事を題材とした実践的調理実習を通して、食品の調理性、様々な対象や場面に応じて嗜好性、生体利用性等に配慮した食事設計について応用力・発展力を身につけることを目的とする。具体的には、立案した食事計画の実際を経験することにより、食事計画の「計画(Plan)」「実践(Do)」「評価(Check)」「改善(Action)」を行う。さらに、日本の食文化の継承を視野に入れた正月料理などの行事食やもてなしの食事、世界各国の食文化をふまえた各種料理を調理することにより、歴史的背景や伝統を考慮したうえで調理する力を養う。	
			調理学実習Ⅲ	「調理学実習Ⅰ・Ⅱ」で修得した知識と技術をもとに、調理による食品の味、色、香り、物性および成分変化とおいしさとの関係について、より深く理解することを目的とする。具体的には、穀類、野菜類、卵類、肉類などの食材を用いて調理し、でんぷんの糊化と物性との関係、食品に含まれる色素成分の調理による変色と安定化、食品の調理性に対する調味料の影響、調理による成分の変化等について調理実習・調理科学実験を行う事により理解を深める。また、各種官能評価法により食品および調理品の評価を行い、おいしさの評価について学修する。	
	基礎栄養学	基礎栄養学	栄養学の基礎を学ぶ。始めに栄養とは何か、栄養と身体活動とのバランスの重要性を学修し、メタボリックシンドロームと栄養との関係、個々人の身体状況に応じた栄養(テーラーメイドの栄養管理)の大切さを学修する。次に、各栄養素の特徴と代謝の概要を復習し、摂食行動、消化器系の特徴、各栄養素の消化・吸収と体内動態について学修し、たんぱく質、糖質、脂質、ビタミン、無機質(ミネラル)、水・電解質、食物繊維といった各栄養素の栄養について学びを深めていく。さらに、エネルギー代謝並びに遺伝と栄養についても学修する。	共同	
		基礎栄養学実習	栄養現象を、実験を通じて学修することを目的とする。試験管内のIn vitroの実験系と、動物、ヒトを使ったIn vivo実験を用いる。具体的には、In vitroの実験系において唾液とラット小腸膜酵素を用いたときのデンプンの消化性、デンプンとセルロースを消化酵素または硫酸で消化したときの糖の結合様式による分解性の違い、生卵とゆで卵を用いてたんぱく質の加熱変性が消化性に及ぼす影響、脂質消化における胆汁酸の重要性などを学修する。ラットを用いた実験系においては、反転腸管を用いた小腸における栄養素の吸収、食事が肝臓の脂質並びにグリコーゲン濃度に及ぼす影響などを学修する。ヒト試験においては、たんぱく質摂取量が尿中尿素排泄量に及ぼす影響と食後血糖の推移及びエネルギー代謝の測定方法などを学修する。	共同	
		応用栄養学	個人及び集団に応じた適切な栄養管理を行うためには、対象者や対象集団の身体状況や栄養状態を的確に把握し、問題点を明確にする必要がある。栄養管理の基本である栄養スクリーニング、栄養アセスメント、栄養に関連する問題の抽出、栄養介入、栄養モニタリングと栄養管理の評価及びそのフィードバックについて理解することを目的とする。食事摂取基準の各指標の意義、エネルギーや各栄養素の策定の基礎、活用の基礎、栄養評価と栄養介入などを修得する。		

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	応用栄養学	応用栄養学Ⅱ	各器官や機能の発達には決定的に重要な時期が存在し、この時期に正常な発育が妨げられると重大な機能障害を招く恐れがある。現ステージの栄養・健康状態は前ステージの影響を強く受け、次ステージに受け継がれていく。妊娠や発育、加齢など人体の構造や機能の変化に伴う栄養状態等の変化について十分に理解することにより、栄養状態の評価・判定の基本的考え方を修得することを目的とする。健康増進、疾病の発症予防と重症化予防、介護予防に寄与する栄養素の機能等を理解し、健康への影響に関する栄養管理の基本的な考え方や方法について理解する。	
			応用栄養学Ⅲ	<p>(概要)</p> <p>「運動、スポーツ時の栄養・代謝」「運動、スポーツの健康・体力への影響」「トレーニング時の栄養補給法」について理解するとともに特殊環境時における栄養・代謝並びに栄養補給法について理解することを目的とする。生体リズムは、体温や血圧、睡眠やエネルギー代謝などの生命活動と関連がある。生体リズムや生活リズムと栄養・食事の関係について理解する。自然環境、社会環境の変化に応じた栄養状態の特徴を十分に理解し、適切な栄養補給のあり方についても修得する。また、災害時の適切な栄養支援活動についても学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(7 藤林真美／7回)</p> <p>本科目の目的における、スポーツ時の栄養、エネルギー代謝、栄養ケアの立案と実施及びアスリートの栄養ケアについて学修する。</p> <p>(9 山田徳広／7回)</p> <p>本科目の目的における、環境変化に対する生体応答とホメオスタシス、生体リズムと栄養について学修する。また、熱中症、災害時などの特殊環境と栄養ケアについても学修する。</p> <p>(7 藤林真美・9 山田徳広／1回)(共同)</p> <p>最終回として、本科目の復習とまとめを共同で開催し、各分担の講義内容における重要ポイントについて、学修を深める。</p>	オムニバス方式・共同(一部)
			応用栄養学実習	栄養管理の基礎となる考え方を理解し、一連の栄養管理プロセスを学ぶことにより、個人及び集団の栄養管理に必要な基本的技能を修得することを目的とする。応用栄養学で学んだライフステージごとの栄養管理を事例を用いて演習し、栄養管理プロセスの活用技術だけでなく、食品構成から献立作成などを含む一連の栄養管理プロセスの理解を深める。また、運動時の栄養管理では、運動時のエネルギー消費量の推定や運動処方について理解し、栄養処方技術の修得を目指す。	共同
	栄養教育論	栄養教育論Ⅰ	栄養教育の意義と栄養教育に必要な基礎知識と理論を学修することを目的とする。栄養士・管理栄養士が、我が国における栄養教育の進展、並びに国民の健康管理・増進に果たしてきた役割を学ぶとともに、現代人が抱えている食行動・食生活・食環境に関わる様々な課題を日々の食生活に照らして確認する。これら、食の現状を踏まえ、栄養教育の意義、行動科学を中心とする理論に基づき、PDCA(Plan Do Check Action)をはじめとする栄養教育の方法論を修得する。また、栄養教育に必要な関連法規、栄養士・管理栄養士の職務、職域、職業使命感や職業倫理を理解する。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	栄養教育論Ⅱ	個人・集団のライフステージ特性を踏まえ、適正な食生活支援を行う方法論を学修することを目的とする。具体的には、個人対象には栄養カウンセリングやコーチング技法により食行動を把握・評価し、行動目標設定・実践・習慣化を支援し食行動の変容に導くための行動療法の理論を学修する。また、集団対象では共通課題解決に向け、プログラム立案・実施・評価の後、汎用性のあるプログラムの活用法を学修する。ライフステージ別に人々の食行動・食環境の解析、適切な栄養評価・診断を行い、対象者の自覚を促しつつ個人要因修正、食環境整備へと繋ぐ栄養教育の方法論を学修する。	
		栄養教育論Ⅲ	PDCA マネジメントを活用した栄養教育マネジメントと情報解析の修得を目的とする。具体的には、栄養教育実施にむけて健常学生を対象者のモデルとして、日常生活の食物摂取・生活活動・身体活動状況等の基礎情報を収集して評価判定を実施し、データ解析をする。これらの解析にあたり、データ入力・統計処理に関する方法を学ぶことにより、食生活を含む生活診断・評価を行い、科学的根拠に基づく課題解決を促す個別の栄養教育マネジメントを身につける。	
		栄養教育論実習	管理栄養士の主要職務となる対象者を支援するための個別・集団栄養教育の方法を行動科学やカウンセリングなどの理論と応用のスキルを実習を通して修得することを目的とする。具体的には、個別栄養教育では、対象者の食生活実態を把握し、課題抽出・解決にむけての栄養教育計画を立案し、対象者自らの行動修正・変容へ導くために栄養カウンセリングやコーチングの技術を用いてロールプレイングをする。集団栄養教育では、グループ実習により対象集団の食生活をアンケート調査、データ解析（統計処理）を経て実態把握のもと優先課題を抽出し、プライマリヘルスケアに向けての栄養教育プログラムを作成する。さらに、各ライフステージに応じた栄養教育を効果的に行うための指導媒体の作成やプレゼンテーションを通して、管理栄養士に求められる総合マネジメントの能力を身につけることを目標にする。	
	臨床栄養学	臨床栄養学Ⅰ	<p>(概要)</p> <p>臨床栄養学の意義と目的、及び臨床現場における管理栄養士の業務内容、栄養管理の方法などを通して、臨床栄養学の概念の修得を目的とする。具体的には、チーム医療、NST（栄養サポートチーム）における管理栄養士業務と多職種連携の概要、対象者の栄養状態を評価・判定する栄養評価法、栄養介入計画の立案・実施、モニタリング、再評価のPDCAに沿った栄養管理法である栄養管理プロセスの流れを理解する。また、外来や入院患者に対する栄養教育の方法や、栄養ケア記録（PES）、問題志向型システム（POS）を用いた栄養カルテの記載方法について修得する。さらに、薬と栄養・食事の相互作用、医療制度及び介護保険制度について学修する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(14 百木和／8回)</p> <p>臨床栄養学の目的、対象者の栄養状態を評価・判定する栄養評価法、栄養介入計画の立案と実施、栄養補給法について学修する。</p> <p>(11 畦西克己／7回)</p> <p>外来や入院患者に対する栄養教育の方法や、栄養ケア記録（PES）、問題志向型システム（POS）を用いた栄養カルテの記載方法について修得する。さらに、薬と栄養・食事の相互作用、医療制度及び介護保険制度について学修する。</p>	オムニバス方式

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	臨床栄養学	臨床栄養学Ⅱ	「臨床栄養学Ⅰ」で修得した栄養管理プロセスの基礎知識を基に、各器官系の代表的な疾患に対する栄養学的な病態の理解、及び栄養評価・栄養に関連する問題の抽出、栄養介入計画（栄養補給法を考慮した栄養学的治療法と栄養教育法を含む）の立案・実施、モニタリング、再評価のPDCAに沿った栄養管理法の修得を目的とする。代謝系疾患を中心に栄養学的に病態を理解し、疾患に基づいた栄養管理プロセスの修得を目的とする。具体的には、栄養障害、肥満・代謝疾患、循環器疾患、腎疾患、呼吸器疾患、筋・骨格系疾患、小児・妊産婦・高齢期疾患の病態に対応する適切な栄養管理のための知識とその方法を修得する。	
			臨床栄養学Ⅲ	各器官系の代表的な疾患に対する栄養学的な病態の理解ならびに栄養管理プロセスの理解を深め、栄養評価・栄養に関連する問題の抽出、栄養介入計画（栄養補給法を考慮した栄養学的治療法と栄養教育法を含む）の立案・実施、モニタリング、再評価のPDCAに沿った栄養管理法の修得を目的とする。消化器系疾患を中心に栄養学的に病態を理解し、疾患に基づいた栄養管理プロセスの修得を目的とする。具体的には、胃・十二指腸潰瘍および炎症性腸疾患などの胃腸疾患、肝炎および肝硬変などの消化器疾患、咀嚼・嚥下機能低下を伴う口腔疾患、悪性腫瘍、術前・術後、周術期の病態に対応する適切な栄養管理のための知識とその方法を修得する。	
			臨床栄養学Ⅳ	「臨床栄養学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」で修得した栄養管理法の基礎知識を基に、臨床現場における管理栄養士の業務内容の実際を修得することを目的とする。具体的には、症例に対して、栄養管理に必要な情報収集、栄養評価、栄養診断、栄養介入、モニタリング・再評価といった栄養管理法の実際を修得する。また、症例検討により、摂食機能障害、胃切除、炎症性腸疾患、肝硬変、膵疾患、低栄養、術前・術後、周術期、廃用症候群などの病態に対する適切な栄養管理法について修得する。特に、ベッドサイド訪問における面接技法および接遇法や関連職種との連携については、摂食嚥下障害、消化器疾患、癌、手術、周産期の各授業で実施する。さらに、介護施設や在宅における要支援・要介護レベルに応じた栄養管理について学修する。具体的には、咀嚼・嚥下機能低下、口腔疾患、悪性腫瘍、サルコペニア、ロコモティブシンドロームなどによる低栄養症例の栄養管理法および食事指導法を修得するとともに、介護予防についても学修する。加えて、乳幼児期・小児期の栄養管理についても修得する。	
			栄養薬理学	「栄養薬理学」は、管理栄養士として医療現場で汎用される医薬品や静脈経腸栄養に必要な経腸及び経静脈栄養剤について学修する。たとえば、NST（栄養サポートチーム）の一員として実施する栄養管理や栄養指導などにおいて、薬物療法に使用される基本的な医薬品の薬理作用や、経腸・経静脈栄養剤に関する薬剤情報は必要な基礎知識である。本講義では、特に生活習慣病の薬物療法に使用されている医薬品、並びに静脈経腸栄養法に使用される主な経腸・経静脈栄養剤の適正使用に関する知識、栄養管理に必要な食品と薬物との相互作用についての情報などを修得することを目的とする。	
			臨床栄養学実習Ⅰ	「臨床栄養学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の講義で修得した治療食や疾患別栄養管理の考え方を基に、臨床現場における治療食の実際について修得することを目的とする。臨床栄養管理における栄養補給法や食品構成に基づく献立作成、発注、調理を行い、成分栄養別治療食の食事療法の実践を学修する。具体的には、展開食の基本を理解した上で、常食から軟菜食・エネルギーコントロール食・たんぱく質コントロール食への展開および食物アレルギー食の実際について学修する。さらに、治療食の食事療法に用いられる特別治療用食品の実際についても学修する。	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	臨床栄養学	臨床栄養学実習Ⅱ	「臨床栄養学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の講義で修得した栄養管理プロセスや疾患別栄養管理の考え方を基に、臨床現場における管理栄養士の業務内容や栄養管理手法の実際について修得することを目的とする。臨床栄養管理における栄養管理プロセスに用いられる手法である臨床診査、臨床検査、身体計測、食事調査法、必要栄養量の算定方法、栄養補給法の検討や疾患に応じた献立作成など、それぞれの実習を通して、臨床現場において管理栄養士が身につけるべき技術の実際について学修する。	共同
		臨床栄養学実習Ⅲ	「臨床栄養学Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」で修得した病態や栄養状態に基づいた栄養管理法を修得することを目的とする。「臨床栄養学実習Ⅱ」で修得した栄養評価手法を用いて、栄養アセスメントと栄養診断、栄養介入の技術を学修する。各種栄養療法（経口栄養・経腸栄養・静脈栄養）の特徴と実施方法、栄養状態の評価・判定、栄養介入計画の立案・実施、モニタリングや再評価という一連の栄養管理プロセスおよび各種疾患における栄養管理法を修得する。具体的には、肝硬変や膵炎といった消化管疾患、摂食嚥下障害、エネルギーたんぱく質欠乏障害などの症例に対する栄養評価・判定、栄養介入計画の立案・実施、モニタリング、再評価について学修する。さらに必要に応じて、疾患に応じた病態別治療用特殊食品の活用や献立作成および調理を実施する。	共同	
	公衆栄養学	公衆栄養学Ⅰ	我が国や諸外国の健康・栄養問題と主要な健康・栄養施策、栄養に関する各種統計を理解するとともに、地域や職域等の健康・栄養問題とそれを取り巻く自然、社会、経済、文化的要因に関する情報を収集・分析し、それらを総合的に評価・判定する能力を養う。また、さらに各種サービスやプログラムの調整、人的資源など社会的資源の活用、栄養情報の管理、コミュニケーションの管理などの仕組みについて理解する。		
		公衆栄養学Ⅱ	主に我が国の健康・栄養問題と主要な健康・栄養施策を理解するとともに地域や職域等の健康・栄養問題とそれを取り巻く自然、社会、経済、文化的要因に関する情報を収集・分析し、それらを総合的に評価・判定する能力を養う。また、集団の健康・栄養問題について、保健・医療・福祉・介護システムの中で、栄養上のハイリスク集団の特定とともにあらゆる健康・栄養状態の者に対し適切な栄養関連サービスを提供するプログラムの作成・実施・評価の総合的なマネジメントに必要な理論と方法を修得する。		
		公衆栄養学実習	地域や職域等の健康・栄養問題とそれを取り巻く自然、社会、経済、文化的要因に関する情報を収集・分析し、それらを総合的に評価・判定する能力を、具体的な数値を用いた演習により養う。また、保健・医療・福祉・介護システムの中で、栄養上のハイリスク集団の特定とともにあらゆる健康・栄養状態の者に対し適切な栄養関連サービスを提供するプログラムの作成・実施・評価の総合的なマネジメントに必要な実践的手法を修得する。		
	給食経営管理論	給食経営管理論Ⅰ	給食施設における管理栄養士の業務を理解するため、給食運営や経営の方法を修得することを目的とする。具体的には、関連法規、栄養食事管理、情報管理、食材料管理、原価管理、品質管理など、管理栄養士が給食におけるマネジメントを行うために必要な知識と技能を修得するため、特定給食施設において特定多人数に対する食事提供の適切な運営方法について理解する。また、栄養アセスメントの結果に基づき、大量調理の特性を理解した食事計画、安全な食事の提供のための衛生管理、それに対する評価・改善などを学修する。		



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	給食経営管理論Ⅱ	「給食経営管理論Ⅰ」で学修した内容を十分に理解した上で、給食運営管理における基本的マーケティングや組織を管理する際のマネジメントの考え方や方法を学ぶことを目的とする。具体的には、給食部門管理者として効率的かつ安全に運営するための組織管理・人事管理・それにかかる経費やマーケティングに関する基本的知識を学修し、そのシステム構築やマネジメントの知識と技能を修得し、経営管理能力を養う。また、危機管理の対応や、医療施設における給食運営についての実践例について学修し、実践的な解決能力を養う。	
		給食経営管理実習	特定給食施設での給食業務について、「給食経営管理論Ⅰ・Ⅱ」で学んだ知識を活かし、大量調理実習を体験し喫食者に適した食事の提供について栄養面、衛生面、経営面、施設・設備管理など、様々な側面から総合的に考え、自主的に計画・運営できる力を修得することを目的とする。具体的には、特定多数の喫食者に対し、適切な栄養・食事管理を行い、実際に食材の購入・準備から大量調理、食事と栄養情報の提供、提供後の評価・分析を行い、実践に即した能力を修得する。	
	総合演習	臨地実習指導（演習）	<p>（概要）</p> <p>「臨地実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の事前・事後に行う演習科目。事前学習として、実習の意義、目的を理解して、実習に臨む姿勢、知識・技術について横断的かつ、総合的な理解を涵養することにより、様々な状況に対応した研究課題を設定して実習に取り組む姿勢を修得する。事後学習として、「臨地実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」終了後に、各実習において設定した課題についての発表・討議で学修効果を高め、管理栄養士の職域において、連携が必要となる関連職種が兼ね備える基本的な知識や技術を理解し、各職域で連携協働するために必要な能力を修得する。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（6 樽井雅彦／5回）</p> <p>臨地実習オリエンテーションとして、実習の目的・目標・学ぶ姿勢、社会人としてのマナーについて学修する。実習施設の特徴、給食の運営について学修する。実習テーマ設定グループディスカッションを行う。実習ノートについて説明し、提出書類等の確認を行う。</p> <p>（4 黒川通典／5回）</p> <p>公衆栄養臨地実習の目的・意義、地域保健行政機関の概要について学修する。実習を受けるための注意点の確認、誓約書等の書類の作成方法、実習課題への取り組み方について学修する。実習内容の再確認のためのグループ討議を行い、グループごとに報告を行う。</p> <p>（14 百木和・11 畦西克己／5回）（共同）</p> <p>臨床栄養臨地実習の目的・意義、各病院・医療センターの概要について学修する。臨床栄養学実習を受けるための注意点の確認、誓約書等の書類作成、実習課題への取り組み方について学修する。実習内容の再確認のためのグループ討議を行い、グループごとに報告を行う。</p>	集中・オムニバス方式・共同（一部）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	総合演習	<p>管理栄養士総合演習</p> <p>(概要)  これまで修得してきた専門分野及び専門基礎分野等の知識や技能・態度を相互に関連させることにより、管理栄養士業務を円滑に遂行するために必要な総合力を修得することを目的とする。さらに、管理栄養士の職務内容に対応する専門分野を横断的に理解することによって、どのような知識、技能・態度が必要か総合的に学修する。具体的には、基礎栄養学・応用栄養学・臨床栄養学・栄養教育論・公衆栄養学・給食経営管理論を総合して、栄養状態の評価・栄養管理、課題把握・解決に至る栄養ケアプロセスの総合的な能力を養う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(6 樽井雅彦・4 黒川通典・14 百木和・11 畦西克己・16 森美奈子・12 岸本良美・1 喜多大三／1回) (共同)  オリエンテーションとして、QFT(Question Formulation Technique)に基づく質問づくりによるグループ学習方法を学ぶ。</p> <p>(6 樽井雅彦／2回)  「給食における調理工程・提供管理システムについて」をテーマに、給食のオペレーションシステムの中で特に生産(調理)管理及び施設・設備管理について各施設の特徴を交えて解説する。また、「食品業界について(最新情報)」をテーマに、食料を食品として捉え、食品産業(生鮮食品、加工食品、特定保健用食品、外食産業など)の概念から食品産業の生み出す様々な食品素材の製造技術及び新製品の開発状況を紹介する。</p> <p>(4 黒川通典／2回)  「災害時における公衆栄養活動」をテーマに、自然災害発生時における行政栄養士の役割を、実例をもとに考える。また、「健康づくりボランティア」をテーマに、住民の健康増進に寄与する活動を行っているボランティア団体及びその活動について実例をもとに学ぶ。</p> <p>(14 百木和／2回)  「栄養部門の位置づけ」をテーマに、各病院における栄養部の位置づけや役割、診療報酬の考え方について解説した上で、学生自身が課題を発見し、まとめる。また、「栄養指導について」をテーマに、個人栄養指導と集団栄養指導の事例や特徴を解説し、それぞれの指導における利点や問題点、症例を基にした媒体作成等を行う。</p> <p>(11 畦西克己／2回)  「災害時における医療施設の対応」をテーマに、災害時の医療における栄養ケアの問題点と管理栄養士・栄養士の役割について、実例をもとに解説した上で、学生自身が課題を発見し、まとめる。また、「チーム医療について」をテーマに、医療施設におけるNST(栄養サポートチーム)などのチーム医療について、現状の必要性と問題点について理解した上で、学生自身が今後のあり方について検討し、まとめる。</p> <p>(16 森美奈子／2回)  「社会で活用する栄養教育」、「社会に普及する栄養教育」をテーマに、ソーシャルマーケティングやソーシャルイノベーションの知識や技法を活用して、新しい時代のニーズに即した栄養ケアプロセスのための栄養教育を学修する。</p>	オムニバス方式・共同(一部)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	総合演習	<p>管理栄養士総合演習</p> <p>(12 岸本良美／2回) 「食事摂取基準について」をテーマに、各栄養素の策定根拠について復習した上で、疑問や課題だと思ふ点について意見を出し合う。そして、疑問を解決するためにどのように情報を収集すればよいのか、論文の検索方法などを学ぶ。さらに、疑問を解決するために集めた資料（研究論文など）を読み、発表資料をまとめる。</p> <p>(1 喜多大三／2回) 「食事と医薬品の相互作用」をテーマに、食品・栄養素と医薬品との主たる相互作用について学修する。臨床現場での食品・栄養素と医薬品の相互作用の事例について調べ考察する。また、「生活習慣病における薬物治療の特徴について」をテーマに、高血圧、糖尿病、高尿酸血症など生活習慣病における主要な薬物治療について学修する。各医薬品の特徴と重篤な副作用についても学修する。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
		臨地実習	<p>給食運営実習(校外)</p> <p>特定給食施設における栄養士・管理栄養士の役割や業務を理解するために、病院、学校、給食センター、介護福祉施設、事業所等で給食業務を体験し、施設の特性や喫食者に応じた給食の提供方法を修得することを目的とする。具体的には、喫食者の状況に応じた食事の計画や調理を含めた給食サービス提供を実際に体験し学ぶことにより、各施設における栄養士・管理栄養士としての業務について必要な知識、技能・能力を修得し、実践力を高めることをめざす。また、事前学習で計画した自らの課題に沿った実習を行い、実践力を高め、自発的に取り組む能力を修得する。</p>	
		臨地実習Ⅰ（給食経営管理論）	<p>特定給食施設において、給食の提供や適切な給食経営のマネジメントを行うための専門的知識や技術等を体験することによって、管理栄養士の役割と業務を学修する。また、管理栄養士の特定給食施設の業務において、各施設の衛生管理、人事管理、食材管理、食教育、経営分析など給食経営に関するマネジメントの理解とともに、喫食者に応じた給食提供を現場で実践し、修得することをめざす。また、各特定給食施設における関連職種との連携を学び、実践活動の場で管理栄養士が必要とされる知識と技能・能力（態度）を身につける。</p>	
		臨地実習Ⅱ（公衆栄養学）	<p>地域の健康・栄養改善を実践的、総括的に把握するとともに、保健所、保健センターの役割を理解し、PDCA サイクルを基本とした管理栄養士の業務内容を体験学習することにより、栄養行政における管理栄養士の役割や専門性、多職種連携のあり方等について学ぶことを目的とする。また、公衆栄養マネジメントの実践により、地域住民への栄養指導、地域の関係組織・団体などの育成や支援のプロセスについて系統的に学び、これまでに得た専門的知識と実践的に得た技術の統合により、管理栄養士として必要なマネジメント能力を修得するとともに、公衆栄養という実践科学への理解を深める。</p>	
		臨地実習Ⅲ（臨床栄養学）	<p>医療現場において、患者への栄養ケアプロセスのあり方を修得することを主な目的とする。医師、管理栄養士等の指導を受けながら、患者への栄養アセスメントに基づき、学生自らが栄養ケア計画を実際に立案、実施し、評価を行う。講義・実習で学んだ知識をより深く、実践的に理解する。指導者から講義・説明を受けるのみではなく、事前または実習中に課された課題に対して、取り組むことによって、自主的に学習し、行動する姿勢を培う。また、実習の報告会を実施し、より多くの施設における様々な実践、応用例について理解する。</p>	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	臨地実習Ⅳ（臨床栄養学）	医療現場において、患者への栄養ケアプロセスのあり方を修得し、自身で実践することを主な目的とする。医師、管理栄養士等の指導を受けながら、患者への栄養アセスメントに基づき、学生自らが栄養ケア計画を実際に立案、実施し、患者とのコミュニケーションをとりながら効果の評価を行う。講義・実習で学んだ知識をより深く、実践的に理解する。医療現場の指導者から講義・説明を受けるとともに、事前または実習中に課された課題に取り組むことによって、自主的に学習し、行動する姿勢を培う。また、実習の報告会を実施し、より多くの施設における様々な実践、応用例について理解する。	共同	
	専門総合群	農業生産系	園芸の技術	我が国の果樹、野菜、花卉などの園芸作物生産は、限られた土地を有効活用し、なおかつ消費者のニーズに合った高品質な商品を生産するため、種々の特殊な技術を用いて行われている。「園芸の技術」では、実際の園芸作物における生産流通現場で応用されている興味深い「技」に焦点を当てて紹介する。植物生理学的な背景に基づく各技術の概要と、それらの技術を用いることで得られる生産性の向上や市場における付加価値および経済効果について論じる。	
			植物の病気	ヒトや動物と同様に植物も病原菌に感染し、病気にかかる。しかしながら、病原菌だけが原因ではなく、植物の健康状態や品種の違い、周辺の環境などの要因によって発病するかどうかが決まる。本講義では実例を紹介しながら、なぜ植物は病気になるのか、どのようにして植物を病気から守るのか、などの植物病理学の基本事項を修得する。また植物病に関わる微生物、植物、環境等に関する基礎知識の修得を通じて、農作物の持続的・安定的な供給、食品の安全・安心、国際的な食料の流通や消費など学科で学修した諸問題について幅広い視点で議論する。	
			植物の改良	人は植物を食料として利用するだけでなく、家畜の飼料や観賞用、工業用原料、医薬品用原料などさまざまに利用している。そして、人は品種を作るという概念を持つ前から収穫量が多いものや病気に強いものなど、自然に存在する有用な形質を示す植物を選んできた。しかし、メンデルが遺伝の法則を発見したことにより、体系的に植物を改良することが可能となった。本講義では、改良の対象となる植物の形質について概説するとともに、従来おこなわれている植物改良の手法から、今日、注目を集めている遺伝子工学の技術を利用したゲノム編集までを解説し、植物の改良に必要な基礎的な知識を身につける。	
			昆虫とくらし	昆虫の祖先は約4億年前に地球上に現れ、今や地球上の全生物種の70%を超える種数を占めると言われている。この繁栄に成功した理由として、脊椎動物にはないムシが持つ昆虫独特の環境への適応能力が指摘されており、我々ヒトは、ある時はムシと作物を争い、ある時はムシの特性を学び応用することで生活をより豊かなものへと変えていくことに成功した。「昆虫とくらし」では、害虫と益虫というヒトの視点を通したムシの二面性について紹介し、ムシを通じて生態を中立的に見る目を身につける。	
作物とエネルギー生産	作物は、人類が利用するエネルギーの重要な供給源の一つとなっている。「作物とエネルギー生産」では、(1)バイオマスエネルギーにおける生産と利用の現状および課題、(2)エネルギー作物における種類、生態・形態・生理的形質、栽培および利用、(3)バイオ燃料の種類、製造法および利用などについて概説する。作物とエネルギー生産との係わり合いやエネルギー作物に関する現状、重要性と課題を理解し、それらを説明する上で必要な基礎知識を身につける。				

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門総合群	農業生産系	<p>生きている土壌</p> <p>作物の生産基盤として、土壌の役割は重要である。土壌中には微生物を含めて多くの生物が生息しており、物質循環をはじめとした機能面で役割を担っているほか、土壌自身も外部からの影響により変化しており、まさに土壌は生きているといえる。また、作物などの植物生育と関連していることから、他の生物の生命活動にも影響をおよぼしているほか、周辺環境のかかわりも深い。本講義では、上記の観点から、土壌自身の生物性、特性の変化、作物生育や周辺環境とのかかわりなど、幅広い観点から土壌の役割について講義する。</p>	
		応用生物系	<p>分子からみた植物の働き</p> <p>人類は、野生植物の役立つ性質を伸ばし、不要な性質を失わせたり変化させることで、野菜や作物を作り出してきた。これを野生植物の栽培化とよぶ。古代の人類はこれを経験的に行ったが、植物分子の知識が蓄積した現代は、望みの性質をもつ植物をデザインすることも可能になりつつある。本講義では、食糧生産の基盤となる植物の働きに関して分子レベルの知識を得ることを目標として、植物の様々な形質や機能に関する分子を紹介し、その働きを解説する。また、植物の最も基本的な機能「光合成」の分子基盤も説明する。</p>	
			<p>ゲノムと生命</p> <p>ゲノムとは何か？この問いに対する答えは一つではない。ゲノムの定義は時代とともに何度も変わってきた。一口にゲノムと言っても、生物種、調べる現象、解析の技術や手法などによって、ゲノムのもつ様々な側面や性質が見えてくる。本講義では、ゲノムの一般的な性質や機能と、生命を操作する「ゲノム科学」の先端技術などを紹介するだけでなく、ゲノムの科学史、風変わりなゲノムを持つ生物、ゲノムに関わるユニークな現象などを紹介しながら、ゲノムとは何かを考え、ゲノム研究がこれからの人々や社会にどのような影響を与えていくのかを、自然観や生命観に対する影響も含めて、考察する。</p>	
			<p>生物の多様性と進化</p> <p>(概要)</p> <p>約 40 億年前に地球上に生命が誕生し、その後、地球環境の変化に伴い生命は進化して、現在、地球上にみられる多様な生物が生まれた。この間に多くの生物が絶滅していったことが化石研究から知られており、現存する生物は、私たちも含めて過酷な自然淘汰を生き残った一部の生物群である。また、人類は植物や動物を食糧として利用するために育種交配、また最近では遺伝子組換え技術を利用して人為淘汰し、生物の形質を変換させてきた。「生物多様性と進化」においては、植物、動物、微生物、海洋生物、及び昆虫について、これらの生物の多様性と進化について、自然淘汰と人為淘汰の観点から解説する。</p> <p>(オムニバス方式／全 15 回)</p> <p>(27 小保方潤一／4 回)</p> <p>植物に関して、地球の歴史と生命の誕生、藻類の多様性、陸上植物の進化、進化のメカニズムについて学修する。</p> <p>(51 和田大／3 回)</p> <p>微生物に関して、微生物の多様性「古細菌、原核微生物、真核微生物」、原核微生物、真核微生物の多様性とその利用、産業微生物とその品種改良について学修する。</p> <p>(23 井上亮／4 回)</p> <p>動物に関して、脊椎動物の起源、脊椎動物の進化、動物の多様性、産業動物の品種改良について学修する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門総合群	応用生物系	生物の多様性と進化 (37 豊原治彦／4回) 海洋生物に関して、海洋環境の多様性、海洋無脊椎動物の進化と多様性、魚類の進化と多様性、海洋生物の品種改良について学修する。	オムニバス方式
		動物とくらし	我々のくらしは様々な動物と関係して成り立っている。例えば、日々の食事は家畜や家禽などの産業動物によって支えられており、犬や猫などのペット（コンパニオン・アニマル）は日々の安寧な暮らしの重要なサポート役となっている。「動物とくらし」では、我々のくらしに、産業動物やコンパニオン・アニマルがどのように関わっているのかを学ぶとともに、それぞれの動物の生態や生理について説明し、くらしで関わる動物に関する基本的な知識を身につける。	
		微生物とくらし	有用微生物およびその利用に関して講義を行う。微生物には「バイ菌」という言葉に代表されるように、ネガティブなイメージがあるが、本講義では人類に役立つ微生物バイオテクノロジーについて広く述べる。具体的には、1) 各種発酵食品製造における微生物の役割、2) 有用物質生産の実例として微生物を用いたアミノ酸、核酸等の発酵生産および、抗生物質の発酵生産について、3) ニューバイオテクノロジーによる微生物機能の有効利用の事例として、遺伝子工学の利用によるタンパク質の生産、代謝工学等について、4) 環境修復のためのバイオテクノロジーについて、などである。また、それらを自らが展開していくために必要な考え方、今後の発展の方向などについて講義する。	
		海洋生物とくらし	海洋は地球の表面積の約7割を占め、更に深海など人類にとって未踏の領域も含むフロンティアである。このように広大かつ深遠な領域に住む海洋生物は独自の世界を形成し、直接的或いは間接的に我々の暮らしと関わっている。「海洋生物とくらし」では、水圏の成り立ちから海洋生物の分類、生理、生態について概説し、特に我々の暮らしとの関わりが深い「魚介類」に対する理解を深めることを目的とする。我々にとって身近な魚介類について、その旬、味、などの背景について、化学的な視点から考察する。	
	食農ビジネス系	食と農の倫理を学ぶ (概要) 食と農をめぐる様々な問題が存在するが、そのなかには解決・緩和に向けて倫理的な考え方や行動規範が有効なものがある。本講義では、食と農をめぐる倫理的な考え方や行動規範を「食と農の倫理」と捉え、食と農をめぐる諸問題の所在を理解したうえで、食と農の倫理の思想と理念への認識を深めるとともに、その視点から課題の解決・緩和のための具体的行動や制度を知ることを目的とする。  (オムニバス方式／全15回)  (26 小野雅之・63 谷口葉子／1回) (共同) 食と農の倫理について、それぞれの領域において分担して概説する。  (26 小野雅之／7回) 食への権利と倫理的消費、食料安全保障と食分配の不均衡、食品ロス、食料アクセス問題、企業の倫理とコンプライアンス、ソーシャルビジネスとCSV、農福連携と社会的包摂をテーマに学修する。  (63 谷口葉子／7回) 寄付文化と応援消費、食のオルタナティブ運動、環境保全型農業、公正と社会正義、アニマルウェルフェア、海と森林の保全、スローフードをテーマに学修する。	オムニバス方式	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門総合群	食農ビジネス系		
		食と農の経済を学ぶ	食料は人間が生きていく上で必要不可欠であるが、個人の消費能力には限界がある。このような食料の必需性と飽和性、さらには自然条件に左右される農業生産の不安定性や乏しい貯蔵性等から、農業や食料関連産業は、一般の商工業とは異なる特徴を有している。本講義では、このような食料・農業の特殊性を踏まえながら、食料消費の動向、農業及び食料関連産業の現状と問題点・課題等について、経済学的な考え方にに基づき、理解し考察する。	
		食と農の共生を考える	近年、さまざまな側面から「食と農の距離の拡大」（食と農の乖離）の問題が指摘されている。私たちが真に豊かな食を実現し、日本の農業を守り発展させていくためには、食と農の距離を少しでも短くすること、すなわち食と農を結び両者が「共生」していく道筋を考えていかなければならない。本講義は、さまざまな分野で農学を学ぶ立場から「食と農の距離」の問題を考え、生産者と消費者、農村（むら）と都市（まち）、産地と食卓を結ぶ食農共生の課題や方向性について理解し、考えていく。	
		フードシステムを学ぶ	現在、我が国のフードシステムはスーパーチェーン主導といわれている。本講義ではフードシステムの仕組みを概観したうえで、とくにスーパーチェーンの誕生、成長、成熟過程を取り上げる。具体的には、スーパーチェーンが我が国に誕生した高度経済成長期以降のフードシステムの変遷とその背景、さらにスーパーチェーン主導が確立した1990年代以降、フードシステムにどのような問題が生じているか、その中でも価格形成メカニズムに着目し、そのしわ寄せが生産者に及んでいることを学ぶ。また、「買い物難民」などフードシステムの新たな問題も取り上げ、スーパーチェーンの評価（功罪）について複眼的思考を学ぶ。さらに、「地域ブランド化」や「六次産業化」の取り組みなど地域問題についても理解を深める。	
	農業の多様性を学ぶ	さまざまな気候、生態環境、歴史、文化、社会・経済状況などを反映し、世界各地や日本で多様な農業（農耕、牧畜、狩猟採集、林業、漁業などを幅広く含む生業）が営まれている。本講義では、多様性をキーワードに、これらの農業の成り立ちや特徴を理解し、私たちが直面している地域・地球環境問題（例えば、貧困問題、環境荒廃、過疎化など）の解決に向けたアイデアや取り組みについて考える。		
		食と農の歴史を学ぶ	今日のわが国の農業・農村社会や食生活・食料消費の現状と特徴、課題を知るためには、歴史的な視点を持つことが必要である。本講義では、近代（明治）以降のわが国の農業・農村社会と食生活・食料消費の歴史を、いくつかの段階に区分し、それぞれの段階における経済・社会の状況、農業と食生活の状況と特徴、課題について、特に現代（第2次世界大戦後）を中心に講述する。そのことにより、わが国の食料・農業の歴史的な変遷に関する理解を深めることを目的とする。	
	ゼミ・卒業研究	基礎ゼミナール	本ゼミナールは、新生者が学部・学科での学修を不安なくスタートし、目標を持って大学での勉学に励むために必要な基礎的知識・技能・態度を修得する教育プログラムである。すなわち、学生が大学での学修に必要な基本的知識や主体的で深い学びの方法を修得し、自ら大学での学びをデザインするとともに、将来の目標について考えることを目的とする。各専任教員による少人数ゼミナールを基本とし、教員と学生が密接にかつ自由に、相談・議論しながら進める。教材として全学共通教材である「First Year Study Guide」を活用し、大学として共通する項目を学修するとともに、教員独自の教材を用いて学修を深める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	ゼミ・卒業研究	食品栄養学研究	本科目は、卒業研究に先立って各研究室での基礎的な研究活動を通して、自らが主体的に能力、適性、志望に応じた進路を選択できるようになることを目的とする。「食品栄養学研究」は、大学4年間の学修の集大成としての卒業研究を円滑に行うため、これまでに学修した専門的知識・技能および汎用的能力を基本に、各分野の研究の遂行に必要な情報の収集方法を修得するとともに、問題発見力および解決力を身につける。	
		卒業研究	これまでに学修した専門的知識・技能および汎用的能力をさらに深めて大学4年間の学修の集大成としての卒業研究を行う。卒業研究では、学生が研究テーマの設定、研究方法の策定、研究調査の実施、研究成果の解析・まとめを行い、卒業論文を作成するとともに、発表会において発表・ディスカッションを行う。これらを通して、学術研究における倫理的規範、課題の発見（研究テーマの設定）と解決（研究の進め方）、思考力・判断力（研究結果のまとめ）、表現力（論文作成およびプレゼンテーション）を身につける。さらに、教員とのディスカッションや共同研究などを通して多様な人々と協働する力を養う。	



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	共通系	大学教養入門	本科目の内容は、大学生としての教養を身につけるスタートラインに立つことにあり、自らが主体的に知識を獲得し、対話を通して理解を深め、表現するための技術等を修得することである。本講義では教養入門書を用いて ABD（アクティブ・ブック・ダイアログ）読書法や協働学習の習慣を身につけるとともに、チームワーク能力、コミュニケーション能力を身につけることを目標とする。	集中・共同
	語学系	日本語表現法	我々は日本語を用いて、何をどのように表現しているのだろうか、そして表現できるのだろうか。本科目では、日本人が日本語を用いて、どのように表現してきたのか、そしてどのような表現が可能なのかを、様々な事例を通して考える。それによって、言語に対する感覚を研ぎ澄まし、言葉にこだわる人間になることを目指す。日本語表現の特徴について、具体的に説明できること、日本語表現を客観的にとらえ、他の言語とも比較しつつ、多様な視点から考えることができるようになることを目標とする。	
		基礎英語 I a	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題についての平易なパッセージを読んで理解できるようになる。また、ゆっくり、はっきりと発声（再生）できれば音声だけでも理解できるようになる。読む・聞くことについては、CEFR-J[A2-1]を目標とする。	
		基礎英語 I b	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題についての平易なパッセージを読んで理解できるようになる。また、ゆっくり、はっきりと発声（再生）できれば音声だけでも理解できるようになる。読む・聞くことについては、CEFR-J[A2-2]を目標とする。	
		基礎英語 II a	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題について、基本的な語彙や表現を用いた英文を書けるようになる。また、前もって用意すれば同じ内容を口頭で発話できるようになる。書く・話すことについては、CEFR-J[A1.1-A1.2]を目標とする。	
		基礎英語 II b	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題について、基本的な語彙や表現を用いた英文を書けるようになる。また、前もって用意すれば同じ内容を口頭で発話できるようになる。書く・話すことについては、CEFR-J[A1.3]を目標とする。	
		実践英語 I	これまでに学修した英語のスタディスキルをさらに向上させる。ICT 等を用いて、より高度な 4 技能統合型の演習を行う。インプット活動のみならず、アウトプット活動を取り入れ、各技能の基礎力および応用力を養う。読む・聞くことについては、CEFR-J[B1.1]を目標とし、自分に関連する内容（日常生活、学校生活など）の英文に関する基本的な情報を理解できるようになる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	語学系	実践英語Ⅱ	これまでに学修した英語のスタディスキルをさらに向上させる。ICT等を用いて、より高度な4技能統合型の演習を行う。インプット活動のみならず、アウトプット活動を取り入れ、各技能の基礎力および応用力を養う。書く・話すことについては、CEFR-J[A2.1]を目標とし、海外研修、留学、ホームステイ、観光、あるいは海外からの訪問客への対応など、日本の大学生が英語を使用する現実的かつ具体的な場面と相手を想定しながら、複数の英文を連続して発話できるスピーキング力、複数の英文を組み合わせてパラグラフを構成できるライティング力を身につけるためのトレーニングを行う。	
		英語基礎会話 a	本科目では、基本的な英会話力の向上を目指す。日常における様々なシーンを想定し、会話がスムーズにできるように練習する。ペアワークやグループワークなどを通じて、自分のことを一方的に話すだけでなく、相手の話を聞いてそれに受け答えできるように訓練をする。また様々な英語表現に触れ、会話の幅を広げることも目的の一つとしている。	
		英語基礎会話 b	本科目では、英語基礎会話 a に引き続き、基本的な英会話力の向上を目指す。様々なシチュエーションを想定し、より深い内容の会話ができるように練習をする。ペアワークやグループワークなどを通じて、会話のキャッチボールがスムーズにできるように訓練を行う。文法の再確認も目的の一つとしている。	
		中国語Ⅰ	中国語を初めて学ぶ者にとって、中国語の基本的な発音や文法を理解し、一定の語彙数を早期に修得することが重要である。本科目では、中国語の発音や文法について学習するとともに、日常における中国語の表現方法の学習を通して、読む・書く・聴く・話すための基礎的な能力を修得する。	
		中国語Ⅱ	正確な発音と中国語文法の基礎を学習し、読む・聴く・話す・書くの四つの力を総合的にバランスよく修得する。1年間の学習を通じて初級中国語がマスターできる。単語を覚え、基礎文法を学び、簡単な文型を運用して、会話や作文ができるなど、基礎的な中国語能力の修得を目指す。	
		海外語学研修	本研修は、語学力（英語力）の向上と研修地の歴史・文化およびそこで生活する人々に触れ、国際的な知識と理解を深め、広範囲な国の人々と協力し合える国際感覚を身につけることを目的とする。事前に研修先の歴史や文化を調査することで、現地での研修を深められるようにする。研修先では、月曜日から金曜日に講義・演習を実施し、語学力別に分けたクラスで行う。研修に参加する学生同士で協力し合い、研修の目標達成を目指す。	集中
情報系	情報リテラシーⅠ	近年、高等教育機関での勉学や社会人としての仕事において、パソコンを使えるスキルは必要不可欠である。本科目では、パソコン初心者者を想定し、パソコンでの文書作成ソフトや表計算ソフトの基本的な使い方、また発表の場で広く使用されるようになったプレゼンテーション資料作成ソフトの使い方を中心に学ぶ。実践力をつけるため課題を中心に演習を進め、レポートや発表資料の作成が適切に行えるようにする。さらに情報セキュリティやモラルについても事例を通して学ぶ。		
	情報リテラシーⅡ	卒業研究で数値データを扱う場合、その統計処理に関する知識は必要不可欠である。情報技術の有効利用の中でも、科学技術分野においてとりわけ重要であるデータの処理と分析のための種々の数学的処理技法を理解する。本科目では、情報リテラシーⅠで用いた代表的かつ標準的な表計算ソフトを用い、基本的な統計処理の方法を学ぶとともに、統計の基本を理解し、正しい統計処理方法の選択や結果の解釈を行うための基礎力を身につける。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	体育系	スポーツ科学Ⅰ	生涯を通じて明るく活気のある生活を営むために、スポーツ・身体運動は極めて重要な役割を果たす。運動技術の修得およびスポーツの楽しさを理解するとともに、自らの生活行動の中にスポーツ・身体運動を実践する能力を育成することを目的とする。本科目では、スポーツ・身体運動を通して①健康の維持・増進をはかる②運動技能を向上させることができる③マナーやルールを理解することができる④コミュニケーション能力やリーダーシップを培うことを目指す。	
		スポーツ科学Ⅱ	「スポーツ科学Ⅰ」で培った学修内容を応用し、心技体のさらなる向上を目標とする。①<心>スポーツ活動を通じた成功体験や規範遵守、主体性、自己統制、表現力、協調性、他者受容意識の向上など人間力の醸成を目指す。②<技>スポーツ科学Ⅰよりも高度なスポーツ技術の獲得を目指す。③<体>運動やスポーツが身体へ及ぼす影響やそのメカニズムについて理解し、自らの生活行動の中にスポーツを実践できる能力の育成を目指す。	
	人文系	心理学	心理学はその行動法則を明らかにする行動の科学として、広い領域に関係している。実際に見ることができる、観察可能な行動から、人間の“こころ”の動きを検討したり、目で見て確認できないものについても、観察・実験・調査といった様々な方法を用いて客観的なデータを集め、心の働きを研究している。本講義では、これまでに行われてきた多くの実証研究を学修することによって、心理学の基礎知識を身につけることを目的とする。	
		倫理学	現代の社会システムに関する理解を通じて、倫理的規範/価値観の変容について学修する。日本の高度成長期には「消費は美德」という言葉が流行し「大量生産/大量消費社会」を賛美したものであった。一方で、現代社会で時代をリードしているのは「Mottainai (もったいない)」というエコロジーを軸においたものであるが、本当にこのような価値観の転換に成功しているだろうか。本講義では、20世紀の半ば以降、今日に至るまで社会を動かしている経済のシステムを理解した上で、それを変革するための道を探る。	
		哲学から学ぶ	哲学的な知の営みは、他の学問と比較してどのような独自性、特徴を持つであろうか。本講義では哲学的に問うことの本質を明らかにしながら、いくつかの哲学的・倫理学的問題を取り上げ、共に考えていく。「人間の心と動物の心」「悪」「人生と時間」といったテーマを中心に論じる。哲学的に考えるとはどういうことであるかを理解し、講義で取り上げる個々の哲学・倫理学のテーマに関して、自分なりによく考え、それを論理的に文章にまとめる力を身につける。	
		地誌学	本講義の目的は、地誌学の学修を通して、地理学的(空間的)な視点を用いて、世界各地の諸問題や地理的現象を把握する能力を身につけ、地域的な特徴や地域が抱える問題点を的確に理解することである。本講義では、世界各地の地誌について学修しながら、上記の能力の修得を目指していく。	
		人文地理学	窓の外にひろがる風景、大学が立地する町並み、人びとが抱くイメージなど。これらをどのように捉えることができるのか、また、どのように捉えてきたのか。それが本講義のテーマである。言い換えると、本講義は地理学史の流れに沿いながら、<地理学的なもの見方・考え方>について幅広く解説するものである。この見方・考え方は、意識されていない場合も多いが、実はわたしたちの生活のさまざまなところに活用されている。本講義を通して、身近な問題を新たな視点から捉え直すきっかけを提供していく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	人文系	文学から学ぶ	日本の近代文学の短編を読む。なお、明治から敗戦までの作品を近代文学と位置づける。文学作品を読むことは、それだけで我々の心を豊かにしてくれる。作品を読むことで、近代の日本人が何を考え、発見し、何に悩んでいたのか、共に考えていく。文学作品への抵抗をなくし、作品を読んで考える習慣を身につけることを目的とする。毎回、1編の短編作品を取り上げて講義し、作品を鑑賞する中で、その文学的特徴を説明できるようになることを目指す。	
		文化人類学	人類学はこれまで、世界中のさまざまな人々の多様な生の理解を通して、私たち人類が地球上に生き、存在するということがどのような事態なのかを探求してきた。本講義では、人類学の基礎的な概念や方法を概説し、人類学がどのような学問なのかを示した上で、そのような人類学的な見方の成立と歴史的展開をあとづける。そのうえで、人類学的思考がどのようなものであるか、人類学誕生以来の学説史的な展開、流れについて理解することを目指す。	
		女性学	女性学とは、男女ともが、社会のしくみについて考える場である。社会の「主人公」が男性であることが自明であった時代、「見えない存在」とされていた女性のあり方に目を向けることが女性学のきっかけとなった。しかし、それは、性別によって個人が生き方を決められてしまう社会のしくみそのものを問う学問および活動を意味する。現在では、性をめぐる社会のしくみは、男女それぞれの個人としての「生きにくさ」と何かしら関係があるのかもしれないと捉えられる一方、「もはや性別による不都合など存在しない」という意見も多く見られる。本講義では、1970年代以降、今日に至るまで、女性学において語られてきた様々なトピックをヒントに、性をめぐっての、今日的な社会のしくみについて、家族、恋愛、仕事、セクシュアリティなど様々な角度から理解を深める。	
	社会系	ボランティア活動論	本講義は、「ボランティアとは何か」をさまざまな角度から考察することを通じて、自己と社会の関係の理解を深めることを目指す。とりわけ、ボランティア活動の意義に関する複数の理解の各々を批判的に考察しながら、根本的な意味で〈互いに支え合う存在〉であるところの人間存在のあり方をつかむことを目標とする。本講義を通じて、現在行なわれているさまざまなボランティア活動の具体的な内容を知るだけでなく、ボランティアの意義の理解を深めることによって人間理解（すなわち私たちの自己理解）も深めることができる。	
		経済学入門	経済現象を理解するために必要な基本的知識や経済学的な考え方、現実の経済現象を事例として参照しながら、解説することを目的とする。戦後日本経済の歴史の大まかな流れや、雇用、企業組織、財政、社会保障といった日本経済の動きに関わる基本的な事項について説明でき、日々の経済ニュースを理解できるようになることを目指す。そのうえで、日本経済が抱える諸問題について、その重要性を理解し、異なる立場の議論を比較することができる力を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	社会系	日本の政治	人間が集団で生活している限り、法や条例、公共事業の影響を避けて生きることはできない。それらを決定するのが政治であり、皆政治に参加することによって自分自身の生活をより善いものに作りかえることができる。しかし逆に、政治に参加しないことによってより悪いものになってしまう可能性も否定できない。本講義では、有権者である学生に日本の政治についての基本的な知識を与えることを目的とする。政治学の区分で言うところの政治体制論、政治過程論、日本政治史、国際政治、地方自治の内容について、日本の政治を概観していく。また、最近のニュースが理解できるように、政治的な時事問題についても紹介し、解説する。	
		法学入門	法は私たちの日常生活と密接な関係にあり、私たちが普段あまり意識しないで行動をしても、その行為の裏には法律関係若しくは法律問題のあるものが沢山ある。法を学ぶことは世の中を知ることもつながる。本講義では、法学の基礎から始め、身近な具体的事例をとりあげ、民法、商法、刑事法、民事訴訟法などの基礎を解説する。日常生活において必要、有益な法律の知識を得て、身近な法律問題を法的な立場から考えるようになることを目指す。	
		経営学入門	基本的な企業経営の仕組みについて講義する。資本主義社会における企業の役割を踏まえて、現代企業の経営活動を理解することを目標とする。本講義では、組織論・管理論・戦略論の基本的な用語と概念を学び、それらを用いて具体的な経営現象を説明していく。経営学の基本的な理論と概念を理解することで、国家公務員一般職試験および地方上級職試験における専門試験で出題される「経営学」を理解できる程度の知識を修得することを目指す。	
		観光学	近年、日本への外国人観光客が急速に増加しているが、これは日本だけの現象ではなく、世界的に国際観光が盛んになっている。少子高齢化の時代を迎え、交流人口の増加を期待される観光は日本の重要政策に位置づけられ、今後ますますその必要性が高まってくると考えられる。本講義では、観光経済を学ぶうえでの観光の基礎知識を修得することを目的とする。観光振興の意義を理解し、観光現象について書かれた記事や文献を理解できるようになることを目標とする。	
	日本国憲法	本講義では、日本国憲法の意義、および基礎的知識を修得することを目的とし、講義テーマに関連する憲法上の問題を取りあげ、これと関わりのある基本事項、判例、学説を解説・検討する。さらにその知識を活用して、社会における多様な問題について、憲法の視点を踏まえて自分の言葉で発言できるようになることを目標とする。できるだけ身近な素材を利用し講義を進めることで、「憲法」と日常生活との関わりについて考えてもらえる機会とする。また、憲法をめぐるさまざまな考え方にふれ、物事を多角的にみる能力を養う。		
	自然系	教養数学	本講義では、農学部専門的知識を学ぶ上で必要となる、統計学などの応用数学と言われる知識を修得するための基礎的・基本的な数学の知識や考え方を扱う。それらを学び、理解することを通じて、論理的思考能力・判断力・表現力といった素養を身につける。さらにそのような数学的素養を活かし、農学領域やそれを取り巻く様々な分野に対しても応用できるような基本的技能を習得することを本講義の目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	自然系	生命倫理	農学の学びにおいて「総合科学」の基礎となる幅広い知識の修得に加え、倫理観をもった豊かな人間性を涵養する教育が必要であり、農学分野における生命科学の倫理的配慮が社会的、科学的、技術的側面などから求められている。なかでも、農学分野において、ゲノム解析、各種細胞の研究利用、遺伝子組み換えによる品種改良など生命に係る技術利用が行われ、人類に有益な結果をもたらす一方で、予期せぬ有害な影響なども予測される。本授業では、生命科学分野で配慮されるべき生命倫理観及びその行動を学ぶ。「ヒトの生死や生命とは何か」、「人間とは何か」など根源的な問いに向き合いながら、農学における生命科学の最新技術をヒトや地球環境に及ぼす影響を考察しながら、倫理的行動について学修することを目的としている。	
		生物と環境	環境をめぐる諸問題は、ニュースでみない日はないほど私達にとって身近な話題となっている。環境を理解するためには、さまざまな知識や考え方が必要である。本講義では、生物（ヒトも含む）と環境の関わりを学ぶことを通して、私達の身の回りにある環境・環境問題を正しく理解できるようになることを目指す。そして、これからの時代を生きる人類にとって避けて通れない環境問題の解決を模索していく上で必要になる考え方を身につけ、自身で情報を見わけることができるようになることを目標とする。	
		地学	地学の大きな柱である固体地球、岩石鉱物、地質・地史、大気・海洋、天文の諸分野に関して、実際のデータや写真など、具体的な資料を用いて、我々の住む地球や我々を取り巻く宇宙に関する知見を深め、我々が経験する自然現象がいろいろな法則や原理によって説明できることを学ぶ。扱う範囲は広いが、単に広く浅い知識を修得するのではなく、自らの手で資料を検討することによって少し深い知見も得られるよう進める、また今まきに行われている研究についても紹介する。	
		地学実験	地学実験では、地球物理学・天文学・地質鉱物学における基本的事項について修得する。天文学分野では、天文に関する知識を実地の観測結果と結びつけて考察できるようにし、観測者である自分の空間位置を太陽系と恒星の世界の中で把握できるようにすることを目的とする。また地質鉱物学分野では、直接生の岩石や堆積物、化石などに触れることによって地球の歴史や各自の生活の基盤になっている大地の生い立ちを考察できるようになることを目的とする。	共同
キャリア系	キャリアデザインⅠ	就職や人生設計の前提として、「大学生」として大学生活をプランニングする。「基礎ゼミナール」と連携しつつ、「摂南大学」の学生として必要な知識や技能を修得する。専門の学びとの接続となるよう基本的なスタディスキルを修得する。講義と並行して、グループワークを実施し、課題やメンバー構成などの所与の条件に対してグループとして処していく力を養成する。社会の変化を知り、調べ、考え、発表するための技能についての理解を深めることを講義目標とする。		
	キャリアデザインⅡ	現代社会で生じているさまざまな事象を、氾濫する情報からの確にとらえ、それらを起点に思考し、自らの活かし方、伸ばすべきポイントについて考える。将来、就きたい職業を模索し、そのために今何を行うべきかを自ら考え、宣言できるようになることを目指す。講義だけでなく、グループワークや個人で考えるワークを織り交ぜて行い、来るべき就職活動に向けて、自分に必要な能力を自覚し学び、計画を実行に移せるようにする。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	キャリア系	数的能力開発	社会に出るにあたり必要とされる数的能力を学修する。社会人として数的能力が必要となる場面は多く、就職活動でも筆記試験で算数・数学はよく使われる。本講義では、将来のキャリア形成に活かせるよう、社会人として必要となる数的能力を高めることを目的とする。自力で解く、講師による解説、類題を解くという流れで、段階的に実践問題に取り組む。さまざまな問題を確実に理解し、解ける力を身につけていく。	
		インターンシップ	インターンシップの目的は、実際の仕事現場の一員として業務を担当することで、そこで働く人々がどのような考え方で働いているのか、特に「1) 仕事の社会における役割」「2) 仕事の成果とは」「3) 仕事の責任と充実感」を直接肌で感じることである。事前学習として、ビジネス組織のあり方、マナーや常識を修得する。インターンシップ先での実習参加の機会を最大限に活用し、自分や社会をより理解し、将来の選択肢や可能性を広げること、職業観の涵養に努めることを目標とする。事後学習も行う。	集中※講義
		臨床医療演習	医療の標準化と作業の効率化を推進し、入院日数の短縮をはかることに開発・導入されたクリニカルパス（CP）は、近年では医療の質改善のためのツールとして重要な役目を担っている。医療現場ではチーム医療が重要な役目を担っており、他職種で協働に実施するNST（栄養サポートチーム）などの管理栄養士が重要な役割を担う栄養管理においても、CPの重要性が高まっている。本科目では、CPを使った患者、看護師とのロールプレイを通し、チーム医療におけるコミュニケーションのあり方を修得し、医療現場での管理栄養士の役割を学修することを目的とする。	
		臨床医療実践演習	本科目は、多業種および地域医療機関などにおける協働や連携に関して、現状を把握し、今後の地域医療のあり方を考察することを目的としている。将来、管理栄養士、栄養士として、チーム医療を支える看護師、薬剤師との連携、各職種の役割分担と機能を理解するため、チーム医療が行われる実践の場での活動例や体験などから実践的に修得する。具体的には、地域医療を展開するために必要とされる基本的な知識の獲得方法や、地域で暮らす人とその家族の生活、地域社会と健康などについて実践的に学修する。また、パートナーシップを形成する基本的態度、他者との双方向コミュニケーションの実践、情報収集・提供の多様な基本的な技能などを身につけ、状況に応じて適切に使うことができる能力を修得する。	
		セルフメディケーション演習	セルフメディケーションとは、「自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当てすること」と定義されている。近年、我が国では、高齢化の進展、生活習慣病等の増加、地域包括ケアシステムの構築等によって、予防医学やセルフメディケーションの重要性が指摘されている。管理栄養士は国民の健康維持・増進、疾病の予防において、食生活、栄養指導の中心的役割を担っている。本科目は、薬局・ドラッグストアにおけるセルフメディケーションのあり方、クライアントや薬剤師等とのコミュニケーションなどについて修得し、管理栄養士の地域医療における役割を学修する。	共同

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	外国人留学生対象科目	日本事情 F I	年中行事やしきたりなど日常生活に見られる日本の伝統文化から、日本人の価値観や考え方について、体験もまじえながら考察する。日本の年中行事やしきたりについて理解を深め、考察したことや体験を通して学んだことを日本語で表現する力を身につける。日本文化・社会と自国の文化・社会及び他国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できるようになることを目標とする。	
		日本事情 F II	日本文化・社会について、日本映画を視聴して観察したり考察したりする。また、映画の台詞や使われている場面から日本語の文法や表現についても学ぶ。日本文化・社会について観察し、自国の文化・社会及び他の受講生の国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できることを目標とする。映画についての情報・その他背景知識についてまず説明し、映画の場面をいくつか視聴する中で内容理解・練習問題・その他の各種タスク問題を出し、テーマについてディスカッションをした後、「書く」練習を行う。	
		日本語読解 F I	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。読んだ内容を要約したり、口頭で説明する練習を行うことで、語彙力を向上させる。	
		日本語読解 F II	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。読んだ内容を要約し、口頭で説明する練習を行う。語彙力を向上させ、専門分野の文章を読むための読解力の基礎を身につける。	
		日本語文法 F I	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回、講義テーマを決め、教員による解説と練習を繰り返しながら進め、中上級～上級の文法項目が運用できるようになることを目標とする。	
		日本語文法 F II	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回、講義テーマを決め、教員による解説と練習を繰り返しながら進め、高度な日本語運用能力を身につけることを目標とする。	
		日本語表現作文 F I	本講義ではレポートや論文の基礎を学び、レポート・論文の文体と書き方を身につけることを目指す。レポートや論文の書き方について解説し、書く練習を行う。「①レポート・論文の文体で書ける」「②読んだ内容を要約できる」「③段落分けして書ける」「④経過説明、分類、定義など、書きたい内容に合う表現を使って書ける」「⑤信頼性の高い資料を集め、ルールを守って引用できるようになる」ことを目標とする。	



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	外国人留学生対象科目	日本語表現作文 F II	本講義では、実際にレポートを作成することを通し、レポート・論文の書き方を守ってレポートが作成できるようになることを目指す。テーマを決め、実際にレポートを作成していく。「①レポート・論文の文体で書ける」「②レポート・論文の書き方を守って書ける」「③アウトラインに沿って書ける」「④信頼性の高い資料を集められる」ことを目標とする。	
		日本語総合 F I	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。JLPTのN1に合格していない場合には、その対策も行なう。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。	
		日本語総合 F II	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。JLPTのN1に合格していない場合には、その対策も行なう。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。実際に日本社会で使用されている生教材を使って速読を行ない、できるだけ速く、自分に必要な情報を読み取る練習をする。	
		専門日本語 F I	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。本科目では、Eメールの書き方、自己PRの書き方、話の展開のさせ方を扱い、解説と練習を中心に進める。相手との関係、伝達内容、使用媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目標とする。	
		専門日本語 F II	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。ビジネス場面で使用する日本語表現、異文化ビジネスコミュニケーションについて学ぶ。用意した資料及びタスクシートをもとに講義、ディスカッション等を行う。ビジネス日本語・ビジネスマナー・日本の会社についての知識を得ることによって、日本での就職活動及び就職に必要な知識やスキルを身につけることを目標とする。	
		日本語会話 F I	講義を理解する際に役立つメモの取り方を学ぶと同時に、アカデミック場面における口頭発表のスキルを養う。さまざまなテーマに関する話を聞き、聞きとった内容をメモした後、その内容について発表する。「①まとまりのある話を聞いて、適切にメモを取ることができる」「②適切な表現を用いて、論理的かつわかりやすい発表ができる」ようになることを目指す。	
		日本語会話 F II	日本・国際社会におけるさまざまな問題や話題について日本語で議論する能力を伸ばす。さまざまな問題・話題に関するニュース等を見て、話し合う方法で進める。また、コースの後半は学生各自が興味のある話題を持ち寄って、話し合う方法をとる。社会的な話題について、日本語で論理的に意見を述べるができるようになることを目指す。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	帰国学生対象科目	日本事情R I	年中行事やしきたりなど日常生活に見られる日本の伝統文化から、日本人の価値観や考え方について、体験もまじえながら考察する。用意したスライドやプリントに沿って、テーマについて学び、講義後に理解度の確認小テストを行う。その後、クラス全体でフィードバックを実施する。体験で学んだことはレポートを作成し、学生同士で意見交換を行う。異文化理解を深め、異文化に対する柔軟な見方、態度を養い、日本語の表現能力(技術)を高めることを目指す。	
		日本事情R II	日本文化・社会について、日本映画を視聴して観察したり考察したりする。また、映画の台詞や使われている場面から日本語の文法や表現についても学ぶ。各映画について、まず映画についての情報・その他背景知識について説明し、映画の場面をいくつか視聴する。その後、内容理解・練習問題・その他の各種タスク問題を行い、テーマについてディスカッションした後、「書く」練習をする。日本文化・社会について観察し、自国の文化・社会及び他の受講生の国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できることを目標とする。	
		日本語読解R	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。また、読んだ内容を要約したり、口頭で説明する練習を行う。専門分野の文章を読むための読解力の基礎を身につけることを目標とする。	
		日本語文法R	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回テーマを設け、解説と練習を繰り返しながら進める。中上級～上級の文法項目が運用でき、高度な日本語運用能力を身につけることを目標とする。	
		日本語表現作文R	本講義ではレポートや論文の基礎を学び、レポート・論文の文体と書き方を身につけることを目指す。レポートや論文の書き方について解説し、書く練習を行う。「①レポート・論文の文体で書ける」「②読んだ内容を要約できる」「③段落分けして書ける」「④経過説明、分類、定義など、書きたい内容に合う表現を使って書ける」「⑤信頼性の高い資料を集め、ルールを守って引用できる」ようになることを目標とする。	
		日本語総合R	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。実際に日本社会で使用されている生教材を使って、速読を行ない、できるだけ速く、自分に必要な情報を読み取るための練習をする。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	帰国学生対象科目	専門日本語R	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。Eメールの書き方、自己PRの書き方、話の展開のさせ方を扱い、解説と練習を中心に進める。相手との関係、伝達内容、使用媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目標とする。	
		日本語会話R	日本・国際社会におけるさまざまな問題や話題について日本語で議論する能力を伸ばす。さまざまな問題・話題に関するニュース等を見て、話し合う方法で進める。また、後半は学生各自が興味のある話題を持ち寄って、話し合う方法をとる。社会的な話題について、日本語で論理的に意見を述べるができるようになることを目指す。	
教職課程の設置により開設する授業科目		学校栄養指導論Ⅰ	栄養教諭は、栄養に関する専門性と教職に関する専門性を身につける必要がある。食育基本法や学校給食法を理解しながら、学校における食育推進の在り方や学校給食管理の方法について学修し、栄養教諭の職務内容について考える。また、児童・生徒を取り巻く社会環境の変化に伴う食生活の乱れや健康に関して懸念される事項や食料自給率の問題、あるいは地産地消、食文化や郷土料理の継承といった面から、学校給食をどのように生かしていくべきなのかを考える。また、実態把握やその指導法など栄養教諭にとって必要な知識と実践力を修得し、児童・生徒の豊かな食生活と健康を創造できる栄養教諭を目指す。	
		学校栄養指導論Ⅱ	栄養教諭は、栄養に関する専門性と教職に関する専門性を身につける必要がある。子供の発育や発達、あるいは行動特性や教科等の特性を学びながら、食育の全体計画を作成し、子供の発達段階に応じ系統立った食育の模擬授業を行う。また、学校、家庭、地域と連携し、学校給食を生きた教材として活用した食育の推進や、肥満、るい瘦、食物アレルギーといった個別指導の実践につながる取り組みを行い、栄養教諭にとって必要な知識と実践力を修得し、児童・生徒の豊かな食生活と健康を創造できる栄養教諭を目指す。	
		教育原理	「教育」という事象を成り立たせている諸理念・諸概念にはどのようなものがあり、また、それらの諸理念・諸概念が「教育」の思想や歴史のなかでどのように現れ、変遷してきたのかについての基礎的な知識を獲得することを目指す。さらには、その基礎的な知識を踏まえたうえで、現代の「教育」のあるべき姿について、受講者それぞれが自分なりに考えを深め、自分なりの理想の「教育」を構想することができるように、思考力や感性を磨いていく。	
		教師論	教職に関する理解を深め、自己の適性を見つめ直し、最終的に教職をめざすことについて主体的な進路選択を行うための判断材料を提供する。具体的には、「教職の意義とは何か」「教師の役割や求められる資質能力とは何か」「教職の専門性は何によって担保されるのか」「教師の職務とは何か」「教師の身分や身分保障はどのようになっているのか」などについて基礎的な知識を講義し、これに基づき、関連するテーマについてディスカッションを通して理解を深める。	
		教育経営論	本講義では教育課程(カリキュラム)とは何かについて考える。まず教育課程はどのような目的から、どのような内容で編成されているのかについての歴史的経緯を考察する。同時に学校教育システムとの関わりから、その意義や役割を理解する。そして、わが国における学習指導要領の変遷や戦前・戦中・戦後のカリキュラムの実践的開発を知ると共に、これからのカリキュラム開発の課題について考える。特に、これからのカリキュラム開発では新学習指導要領で言われている「社会に開かれた教育課程」、「アクティブラーニング(能動的学修・学習)」そして「カリキュラムマネジメント」に注目し、その意義等について理解する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	教育社会学	近年、学校教育現場では様々な問題を抱えるようになってきました。一般的に私たちはそうした問題に対し、学校教育内部でのみ対処し解決しようとする傾向がある。しかしながら、そうした問題の多くは、時に関係のないような社会的、経済的、政治的、そして文化的なシステムと密接な関係性をもっていることが多々ある。そこで本講義では、教育現場で生じている諸問題を、特に社会学的観点からとらえ、検討していくことを目標とする。特に、最近社会問題化している子どもの貧困や教育格差問題等を扱いながら、体系的に現代社会と教育の関係性について学び、教育社会学の理論や概念を学んでいく。	
	教育心理学	学校での教育活動において教師の果たす役割は大きい。学習の質を高めるために、教師が学習者を理解し、さまざまな形で援助していくためにはどうすればよいのか。それを考えていくにあたって必要な基礎的な知識を身につける。具体的には、幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程や意欲、学校における人間関係、個に応じた教育について学ぶ。また、学習活動と関係の深い人間の認知活動についても理解する。その上で、各発達段階における心理的特性を踏まえた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解する。さらに、日常生活の中で行われている学習活動や学校等における問題について、心理学的に説明し、考えることができるようになることを目標とする。	
	特別支援教育論	教職課程「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」に対応する科目である。 「障害」という概念を再構成するとともに、特別支援教育の理念・制度・方法についての歴史的変遷から最新の動向について整理し、現状と課題について考察する。貧困、被虐待、渡日等の特別な教育ニーズのある子どもに対する指導・支援のあり方についても取り扱う。通常学級で多様な教育的ニーズのある子どもがともに学びともに育つ教育を展望したい。	
	教育課程論	本講義では教育課程(カリキュラム)とは何かについて考える。まず教育課程はどのような目的から、どのような内容で編成されているのかについての歴史的経緯を考察する。同時に学校教育システムとの関わりから、その意義や役割を理解する。そして、わが国における学習指導要領の変遷や戦前・戦中・戦後のカリキュラムの実践的開発を知ると共に、これからのカリキュラム開発の課題について考える。特に、これからのカリキュラム開発では新学習指導要領で言われている「社会に開かれた教育課程」、「アクティブラーニング(能動的学修・学習)」そして「カリキュラムマネジメント」に注目し、その意義等について理解する。	
	道徳教育論	日本や世界の「道徳教育」が歴史的にどのように成立し変遷してきたのか、また、そもそも「道徳教育」を「道徳教育」とらしている一般的な原理とはいったい何なのか。「道徳教育」の歴史や原理に関するこうした基礎的な知識を身に付けることを目指す。また、この基礎的な知識を踏まえたうえで、さらにはより具体的かつ実践的に、現代の日本の学校における「道徳教育」の目標や内容について理解し、現代の日本の学校において行われる様々な「道徳教育」の指導方法を身に付けていく。	
	特別活動・総合的な学習の時間の理論と指導法	特別活動の歴史と意義、方法論について学ぶ。また、実践上の課題をとらえ、学級活動の指導計画の作成や問題解決に至るかわりについて理解を深める。総合的な学習(探究)の時間の中心である探究的な学習の過程について学ぶ。また、学校が定める目標や内容のもとで総合的な学習(探究)の時間の指導計画の作成や評価について理解を深める。 事例をもとに、グループ討議やグループでの即興劇を行い、気付きや変化について意見交換を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	教育方法論	教職課程「教育の方法及び技術」に対応する科目である。授業は、①教育方法・教育思想の歴史の概観、教育目標、教育内容、学習、発達、学力、教材論、計画、評価等に関する基礎的な理論、②授業の設計から評価に至る授業構成の理解、③学習指導を組織化するための基礎的な授業技術と方略の習得、に関する講義と、④授業実践に関するミニ講座によるワーク、⑤グループでの共同作業による教材開発とマイクロ・ティーチングの実施体験により構成する。	
	生徒指導論(進路指導を含む)	生徒指導、進路指導は、学校教育をすすめるうえで重要な役割を占めている。いじめ、不登校、学級崩壊、暴力行為や非行、受験競争、進路のミスマッチなど、生徒指導・進路指導上の諸問題については、その解決の重要性が認識されている。本科目では、生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義について理解を深め、実践を進める方法原理について基礎的な知識を獲得し、学校組織を構成する教職員、学校外部の専門機関や関係諸団体と協力して解決・改善を目指そうとする素養を養う。	
	教育相談(カウンセリングの基礎を含む)	教育相談は、幼児児童生徒が自己理解を深めたり好ましい人間関係を築いたりしながら、集団の中で適応的に生活する力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。幼児児童生徒の発達の状況に即しつつ、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援するために必要な基礎的知識(カウンセリングの意義、理論や技法に関する基礎的知識を含む)を身に付ける。特に学校における教育相談に焦点を当て、教師が行う教育相談活動の基本的な考え方や教育相談に必要なスキルを身につける。そのために、教育相談のもつ今日的な意義を解説し、カウンセリングの基礎知識及びその実践的な手法を紹介する。併せて生徒理解と“問題”への対応について、実践的な取り組み方を考える。	
	栄養教育実習 I	本実習で行う事前指導は、教育実習を円滑かつ効果的に実施するために、実習校の担当指導教員と連絡、調整する基本的なマナーなどを理解するとともに、栄養教諭として身につけるべき専門知識と技術の統合をはかるものである。教育実習の目的や内容を習熟するとともに、指導案や実習日誌の書き方について学ぶ。また、学校経営、学級経営の原理と方法、児童生徒を理解するための適切な方法、生徒指導や学修指導の原理と方法を具体的に理解し、指導上必要な技能と態度を修得し、栄養教諭として行う食に関する指導を具体的に理解し技能と方法を修得する。さらに、教育実習終了後の成果発表の方法やまとめ方を学修する。	※講義
	栄養教育実習 II	本実習は小学校・中学校の役割や組織について知り、栄養教諭としての職務を理解し、その使命感や責任感を養うことを目標とする。また、児童・生徒への理解や関係づくりや指導に関する実践力を養う。大学で学んだ理論と教育現場での実践とを結び付けてリフレクションし、栄養教諭を目指す自己の課題を見極め、さらに向上を目指して知識と技能の修得に努める。教育実習終了後には、実習の反省・問題点の整理を行い、報告会を実施することにより、今後の課題を確認し、教育実習の体験を児童・生徒の豊かな食生活と健康を創造できる栄養教諭を目指す。	※講義
教職実践演習(栄養教諭)	本演習は、栄養教諭となるために必要な知識技能を修得したことを確認するものである。よって、昨今の食に関する問題や教育実習でつかんだ児童・生徒の状況を踏まえ、これらの問題を解決するための手立てを、給食の時間や授業、家庭や地域との連携の場合について考えていく。さらに、考えた手立てを学習指導案や給食だよりといった具体的な指導に結び付け、模擬授業や親子料理教室などへ展開していく。児童・生徒が抱える食の課題に対する効果的な指導となるように実践的な手立てを修得し、豊かな食生活と健康を創造できる栄養教諭を目指す。	共同	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職課程の設置により開設する授業科目	地域連携教育活動Ⅰ	大学近隣の小学校あるいは中学校で、年間を通じて授業補助、学習支援、学校行事、課外活動等幅広く体験し、自己の適性を把握する機会をもち、人間的成長や社会意識の向上、教員としての愛情と使命感を深めることを目指す。具体的には、実際の教育現場を知ること、自身の能力や適性を考え課題を自覚すること、社会的倫理観を確立すること、多様な相手に合わせたコミュニケーションがとれることを目標とする。また、こどもの実態を知り、教科指導や生徒指導等を観察、可能であれば参加することで、実践的な指導の基礎固めを行う。	共同※講義
	地域連携教育活動Ⅱ	「地域連携教育活動Ⅰ」を受け、その体験をもとにさらに学びを深める。「地域連携教育活動Ⅰ」と異なる、あるいは同じ大学近隣の小学校あるいは中学校で、年間を通じて授業補助、学習支援、学校行事、課外活動等幅広く体験し、自己の適性を把握する機会をもち、人間的成長や社会意識の向上、教員としての愛情と使命感を深めることを目指す。具体的には、実際の教育現場を知ること、自身の能力や適性を考え課題を自覚すること、社会的倫理観を確立すること、多様な相手に合わせたコミュニケーションがとれることを目標とする。また、こどもの実態を知り、教科指導や生徒指導等を観察、可能であれば参加することで、実践的な指導の基礎固めを行う。	共同※講義

## 授 業 科 目 の 概 要

（農学部 食農ビジネス学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>（概要）</p> <p>自然を改変しながら生物資源を活かし、人類の衣食住を支えてきた「農学」は、人間の諸活動を支える根幹的な学問である。「農学」には持続可能で豊かな人間社会と地球環境の創出を目指して、課題を見出し対応するミッションがある。「農学」は生命を支える食料の科学であり、生命科学とも位置付けられる。さらには、「農学」は生産、加工、流通の6次産業に食栄養を加えた24次産業的視点で捉えることができる。農と食をとりまく環境は大きく変化し、「農学」における食栄養科学・健康科学の重要性も認識されている。本講義はこうした問題意識からテーマを設定し、オムニバス方式の講義により、受講者が「農学」とは何かを理解するとともに、「農学」のミッションに対応する「使命感」、「農学」的視点がもたらす「俯瞰力」「実践力」に関心をもち、主体的に課題を意識することができることを目的とする。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（25 久保康之／1回）</p> <p>「農学を大学で学ぶとは」をテーマに講義する。「農学」は、自然を改変しながら生物資源を活かし、人間の諸活動を支える根幹的な学問である。持続可能で豊かな人間社会と地球環境の創出を目指して、私たちは何を学び、何をすべきか、「農学」の世界観を俯瞰し、学修する。</p> <p>（29 寺林敏／1回）</p> <p>「農学と社会」をテーマに講義する。「農学」は、安全な食料生産と食料の安定供給、自然環境の保全、食を取り巻く多様化・複雑化する社会への対応、新しい作物生産の場とその生産技術の開発など、社会からの求めに応え、解決する使命を担っている。「農学」が社会とのかかわりの中で、いかなる研究が社会に貢献してきたか、と同時に「農学」の発展と可能性について学修する。</p> <p>（22 川崎通夫／1回）</p> <p>「農業生産技術の進歩」をテーマに講義する。農業生産技術の進歩は、人口増加、自然環境変動、および、社会変化に伴う農業生産課題を解決していく上で重要な要素である。フィールド栽培、施設園芸、植物工場、および、AI(人工知能)やIoT(モノのインターネット)を活用したスマート農業などに関する農業生産技術の進展について学修する。</p> <p>（3 田中樹／1回）</p> <p>「国際農業と開発援助」をテーマに講義する。世界の農業の多様性を踏まえ、発展途上国における農業開発と、それに対する援助のあり方を学修する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(20 小保方潤一／1回) 「ゲノムと農学・生命科学」をテーマに講義する。生物の設計図を読みたい、というのは生物学者の長年の夢だったが、ゲノムの解読技術の飛躍的な発展によって、それは現実のものとなりつつある。ゲノム科学の急速な発展が、農学・生命科学や私たちの生活にどのような影響を与えつつあるのかを概説する。</p> <p>(16 石川幸男／1回) 「農業とケミカルエコロジー」をテーマに講義する。すべての生物は、同種または他種の他個体と相互作用を及ぼしあいながら生きており、この相互作用の仲介役として化学物質が大きな働きをしている。植物－昆虫、昆虫－昆虫間の相互作用における化学物質の働きについて、その害虫管理への応用を含めて概説する。</p> <p>(19 奥本裕／1回) 「作物改良のための情報科学」をテーマに講義する。現代の農業は近代育種が改良してきた品種を基盤に成立している。近年のゲノム解読技術と画像解析技術の急速な発展は、育種におけるDNA情報解析と高速フェノタイピングの利用を強く後押ししている。育種の現場で利用が進められているゲノム情報と圃場データ処理を利用する情報科学について概説する。</p> <p>(17 井上亮／1回) 「動物生命科学の新展開」をテーマに講義する。動物を対象とした研究は、農学においては産業動物の生産性向上のため、食品、医療においてはヒトの健康維持・増進、疾病予防・治療のために行われる。これらの動物を対象とした研究には遵守すべきルールや法令が存在する。これら動物を対象とした研究に関する現状を学修する。</p> <p>(30 豊原治彦／1回) 「地球環境と海洋科学」をテーマに講義する。水産業は一次産業の中でも特に天然依存性が高いことから、資源維持のために健全な海洋環境の保全が必須である。最新の増養殖技術の活用も含め、地球環境の保全と海洋科学の進展について学修する。</p> <p>(43 吉井英文／1回) 「食品科学と農業」をテーマに講義する。農林漁業者（1次産業）が生産する農水産物の元々持っている価値をさらに高め農林水産産業を活性化させるためには、食品加工（2次産業）は必須の技術である。最新の食品加工にかかわる食品科学技術の進展について学修する。</p> <p>(44 和田大／1回) 「微生物と食品」をテーマに講義する。東洋、西洋を問わず、食品製造に微生物を利用することは長く行われてきた。農産物の2次加工としての微生物利用について概説する。</p> <p>(24 喜多大三／1回) 「食文化と多様性」をテーマに講義する。日本の食文化は大きな変革期にきており、食生活の大部分を外食産業に依存する家庭が急増している。本来、日本の伝統的食文化である「お茶」の歴史、伝統および特質について学修する。 養学の観点から健康問題を考える。</p>	オムニバス方式



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(26 黒川通典／1回) 「食栄養科学と健康」をテーマに講義する。現代の栄養事情は欠乏と過剰の二極化といわれている。社会の仕組みが複雑になっている今、社会のあらゆる側面を視野に入れながら、人間栄養学の観点から健康問題を考える。</p> <p>(1 小野雅之／1回) 「食品産業の役割とこれからの方向」をテーマに講義する。消費者への食料供給において重要な役割を担う食品産業、特に食品流通業を取り上げ、その役割とこれからの展開方向を学修する。</p> <p>(2 北川太一／1回) 「これからの食と農を考える」をテーマに講義する。今日の食と農の状況を踏まえながら、これからの食と農の共生のあり方とその方向を考える。</p>	オムニバス方式
		農学基礎演習	福井県と三重県にある農業体験施設を利用し、2日間の演習を行う。主に、我が国のイネ生産と消費の現状、水田の構造、稲作を成立させる農業技術並びに自然環境要因、水田の多面的価値、稲作文化等について学修する。演習内容として、春期の田植えと秋期の稲刈りを行う。日本の主食であるコメの栽培を学び、イネ栽培を体験することで、水田の構造、日本で水田稲作が成立する要因、稲という植物の生育特性を深く理解し、我が国における今後の稲作の在り方について学ぶことを目的とする。	集中・共同
		グローバル農業演習	私達の食生活は、我が国の食料生産だけでは決して支えられているものではなく、他国における食料生産への依存度は高まる一方である。海外に10日間滞在し、その地域や国の農業についての学修や視察により、茶などの工芸作物を含む様々な農作物、野菜や花などの種々園芸作物が他国で、どのような気象・土壌環境で、どのような栽培技術で生産され消費・利用されているかを、それら地域の歴史的、文化的背景、社会情勢の理解とともに学ぶ。	集中・共同
		スマート農業演習	日本農業における就農人口の減少、高齢化、激しい気象変動と異常気象等、農園芸作物生産を取り巻く環境は厳しさを増している。そんな中、高収量・高品質、安定生産、省力・軽作業化、省エネを実現するためのロボット技術やICTを活用した新しい農業スタイル「スマート農業」が動き始めている。本演習ではスマート農業について、その理論と実際を学び、日本農業がかかえる課題と「スマート農業」の可能性とその重要性について正しく認識させる。	共同
		農業気象学	さまざまな気象現象の基礎的な特徴と発生原理等について講義を行い、気象と動植物との関わり、農業や人間生活との関わり等について、具体的な事例を示しながら解説する。それにより、大気の組成や構造、放射過程・熱輸送過程、高・低気圧や前線とその動き、異常気象の発生原理、大気大循環、地球温暖化を含む気候変化とその影響など、さまざまな時間的・空間的スケールで起きる気象現象や気候システムについて、そのメカニズムを修得し、それらの農業への影響や対策等について現実的に考察することが可能となる学力を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	森林生態学	森林のあるところに文明が起り、森林がなくなれば文明も滅びたように、昔から人間は森林を利用して生きてきた。日本は、国土の67%を森林に覆われる世界でも有数の森林国である。森林は、近年の環境問題を解決するための、また持続可能な資源の開発を行うための、大きな鍵となる。本講義では、森林の生態についての知識を得ることを目標にする。また森林生態学を研究する方法や、環境の計測などに関する理解を深める。さらに森林と人間のかかわりや、森林が地球環境に及ぼす影響、日本の林業の問題点などについても考察を行う。	
		農業知的財産	<p>(概要)</p> <p>農林水産業は、生活の根幹を支える重要な産業でありながら、これまで十分な知的財産に関する法的支援が図られていなかった。そこで、農林水産業における知的財産の重要性を認識し、知的財産制度を有効に活用するために、農林水産業と密接に関連する知的財産の基礎的知識や各種制度の在り方、農林水産業における知的財産制度の活用方法の修得を目的とする。具体的には、農林水産分野における知的財産法制の概観、種苗法に基づく品種登録制度の概要（海外での新品種の保護制度を含む）、農林水産品の「地域ブランド」保護制度である地域団体商標制度及び地理的表示制度の内容、農林水産業における品質誤認表示規制の概要、水際措置、食品の安全性確保のための各種手法（GAP、HACCP等）の概要等について修得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(71 犬飼 一博／7回)</p> <p>農林水産業における知的財産権の重要性、知的財産法制の概観、地域団体商標制度の概要、国内及び海外における品種保護制度の概要等について学修する。</p> <p>(75 中世古 裕之／8回)</p> <p>地理的表示制度の概要、農林水産業における品質誤認表示規制の概要、水際措置、農林水産知財における今後の課題・展望等について学修する。</p>	オムニバス方式
専門コア群	基礎系	食農ビジネス学概論	<p>(概要)</p> <p>食農ビジネス学とは新しい学問領域であり、他の大学にはない本学に独自の領域である。また、食農ビジネス学には多様な専門分野が含まれる。したがって、これから食農ビジネス学科で学ぶべき課題を見だし、主体的に取り組むうえで、まず食農ビジネス学とはどのような専門分野から成り立っているのかを理解する必要がある。本講義では、食農ビジネス学科の主な専門分野からテーマを設定し、オムニバス方式の講義により食農ビジネス学とは何かを理解し、主体的に取り組む課題を見だせるようになることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(1 小野雅之／2回)</p> <p>「食農ビジネス学を学ぶために」をテーマに、科目全体のガイダンス、食農ビジネス学の目的と専門領域などについて概説する。また、「食と農の変遷と現在」をテーマに、食と農がどのように変遷してきたのかを概説したうえで、今日の食と農の姿について講義する。</p> <p>(7 吉井邦恒／1回)</p> <p>「わが国と世界の食料需給の農産物貿易」をテーマに、わが国と世界の食料需給と農産物貿易の現状と課題について講義する。</p>	オムニバス方式

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	基礎系	食農ビジネス学概論	<p>(6 柳村俊介／1回) 「農業経営の発展方向」をテーマに、わが国の農業と農業経営の動向を踏まえて、今後の農業経営の発展方向について講義する。</p> <p>(4 成耆政／1回) 「農の6次産業化」をテーマに、農業・農村の活性化の方向として期待されている6次産業化の意義と課題について講義する。</p> <p>(8 浦出俊和／1回) 「地域のマネジメント」をテーマに、農村地域が抱える諸問題と、その解決をめざす取り組みについて講義する。</p> <p>(5 濱田英嗣／1回) 「フードシステムと食品産業」をテーマに、フードシステムの全体像と、構成する産業の相互関係について講義する。</p> <p>(12 戴容秦思／1回) 「農畜産物の流通」をテーマに、農畜産物の流通のしくみと課題について講義する。</p> <p>(9 副島久実／2回) 「水産物の流通」をテーマに、水産物の流通のしくみと課題について講義する。また、「農水産物のマーケティング」をテーマに、マーケティングの理論と農水産物への応用について講義する。</p> <p>(11 中塚華奈／2回) 「食品の表示と認証」をテーマに、食品表示・認証のしくみと意義について講義する。また、「都市と農業」をテーマに、都市と農業の関係と、その今後のあり方について講義する。</p> <p>(3 田中樹／1回) 「農業と環境・生態系」をテーマに、農業と環境・生態系の関わりについて講義する。</p> <p>(10 谷口葉子／1回) 「循環型農業の理念と取り組み」をテーマに、持続可能な農業のための循環型農業の理念と取り組みについて講義する。</p> <p>(2 北川太一／1回) 「協同の理念と役割」をテーマに、食と農の共生のための協同の取り組みの理念と意義について講義する。</p>	オムニバス方式
			食と農の倫理	<p>(概要) 食と農をめぐる様々な問題が存在するなかで、その解決に向けた行動規範として、食と農の倫理がある。これは、食（消費者）と農（生産者・供給者）の双方の倫理的な行動によって、問題の解決につなげようとするものである。本講義では、食と農をめぐる諸問題の所在を理解したうえで、食と農の倫理の思想と理念への認識を深めるとともに、その視点から課題の解決・緩和のための取り組みや制度を知ることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(1 小野雅之・10 谷口葉子／1回) (共同) 食と農の倫理について、それぞれの領域において分担して概説する。</p>	オムニバス方式・共同（一部）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	基礎系	食と農の倫理	<p>(1 小野雅之／7回) 食への権利と倫理的消費、食分配の不均衡、食品ロス、食料アクセス問題、企業の倫理とコンプライアンス、ソーシャルビジネスと CSV、農福連携と社会的包摂をテーマに学修する。</p> <p>(10 谷口葉子／7回) 寄付文化と応援消費、食のオルタナティブ運動、環境保全型農業、公正と社会正義、アニマルウェルフェア、海と森林の保全、スローフードをテーマに学修する。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
			基礎経済学	「ミクロ経済学」と「マクロ経済学」の事前基礎科目として本講義では、まず経済と経済学の基礎理論(原理と手法など)について講義を行う。その上で、我々を取り巻く現実の複雑な経済現象とさまざまな経済問題などについての分析と応用の能力を農学の視点から養う。また、現代経済における経済主体、すなわち家計、企業、そして政府の意思決定(経済活動)と役割に関する理論と手法、および国際経済学の理論と実態についても講義する。	
			アグロ・エコロジー論	人びとの暮らしを支える農業(農耕、牧畜、狩猟採集、林業、漁労などを幅広く含む生業)は、それぞれの地域の気候や生態系および社会・経済・文化との密接な関わりの中で成立している。また、「風土」という言葉があるように、私たちが親近感(安らぎ、美しさなど)を感じる景観や生態系は、農業などの暮らしの営みのなかで形づくられてきた。本講義では、日本国内や海外の幾つかの地域の農業を参照して、それらと気候や資源・生態系(地形、植生、土壌など)および人びとによる働きかけとの関係を理解する。	
			基礎統計学	統計学は世の中で起きている事象を限られたデータから本質的に理解する上で役立つ重要なツールであり、社会で幅広く活用されている。本講義では、データのまとめ方(記述統計)や確率分布に関する理論的背景の学修を基礎として、標本データから母平均や母比率を推定する方法や、2つの標本の代表値の差を検定する方法について農学の視点から学ぶ。また、相関分析や回帰分析を用いて2つの標本の相関や因果関係を検定する方法を学ぶ。	
			食と農の近現代史	今日のわが国の農業・農村社会や食生活・食料消費は歴史的に形作られてきたものであり、その現状の特徴や課題を理解するためには、農業・農村社会や食生活・食料消費の歴史的な変遷について理解すること必要である。本講義では、近現代のわが国の農業・農村社会と食生活・食料消費の歴史的な変遷を画期区分し、それぞれの段階における経済・社会の状況、農業と食生活の状況と特徴、課題について、特に現代(第2次世界大戦後)を中心に講述する。そのことにより、今日の食料・農業の姿が形づくられてきた歴史的な経過に関する理解を深めることを目的とする。	
			ミクロ経済学	経済学とは、現実の経済(生きるために必要な財・サービスを生産し、分配し、消費すること)を説明する学問であり、特にミクロ経済学では、個々の企業や家計といった経済主体の行動の分析や、市場における需要と供給の分析を通じて、現実の経済を理解する。本講義では、需要および供給の特質、市場における需要と供給の調整のしくみ、経済主体である家計および企業の行動を学ぶとことを通じて、ミクロ経済学の基本的知識と考え方を農学の視点から理解することを目的とする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	基礎系	マクロ経済学	マクロ経済学は個別経済主体の相互作用の結果で発生する国民経済の総体的な現象を研究対象とする経済学の一分野で、分析対象は国民経済、または国家経済全体である。したがって、「基礎経済学」「ミクロ経済学」受講後となる本講義では、まずマクロ経済学的視点で、経済学の基礎理論(原理と手法など)について講義する。その上で、我々を取り巻く現実の複雑な経済現象とさまざまな経済問題などについての分析と応用の能力を農学の視点から養う。そして、現実経済において非常に重要なテーマである株式や投資信託などへの投資、公的年金、医療などの社会保障などについても講義と分析を行う。	
			農業簿記・会計学	農業経営を営む主体にとって、現在の経営の状態を正確に把握することは必須であり、それを計数で把握するためのツールが農業簿記であり、農業簿記・会計は、経営活動を取引として記録・分類・計算・整理に加えて、それらを評価して財務諸表を作成することを対象としている。本講義では、複式農業経営簿記を取り上げ、農業簿記会計に関する基礎的知識とその意義、農業特有の取扱いを踏まえた簿記記帳、決算時の会計処理、財務諸表の作成・分析について学ぶ。	
			社会調査論	社会調査の方法はさまざまである。本講義では調査目的にあわせて調査方法を決定し、調査を設計、実施し、分析しうる形にまで整理していく具体的な手法を学ぶ。調査対象者の選定、全数調査と標本調査、標本調査に際してのさまざまな手法、調査票の作り方、調査の配布回収方法、調査データの整理方法などについて、実践的な例をとりあげつつ解説していく。	
			食農ビジネス最前線	今日の食料や農業に関しては、農林水産物の生産や加工食品の製造と流通に関わる農林漁業者と食品産業(食品製造業、食品流通業、フードサービス業)に加えて、都道府県と市町村の行政、農林漁業者や消費者の協同組合など、さまざまな主体が関係している。そのため、食農ビジネスについて実践的に学ぶためには、これらの主体が現在どのような取り組みを行っているのかを知ることが重要である。また、就職先を考えるうえでも、食農ビジネスの最前線で活躍している人たちや行政、協同組合の職員の活動に触れることは有益である。本講義は、農林漁業者や食品産業の社員、都道府県や市町村の職員、協同組合の職員など、食農ビジネスの最前線で活躍している人たちをゲストスピーカーとして招き、その経験や現在の取り組みについて講義を行う。	
	農業経済・経営・政策系	農業経営学	農業経営のあり方は、商工業と異なる特徴をもつとともに、国や地域毎の個性も強く表れる。農業経営に関する多様な事象を認識するためには一般理論が欠かせない。本講義では、近代の農業経営の発展に関する理論を解説することを第一の目的とする。ただし、農業経営学の学ぶ目的は実際の農業経営活動やそこに潜む問題を認識することであり、理論はそのためのものである。また、実態認識に裏付けられてこそ理論に対する深い理解が可能になることから、我が国や諸外国を題材に農業経営に関わる様々な事象を取り上げ、実態と理論の関係を重視して講義を行う。		
		食料・農業経済学	食料は人間が生きていく上で必要不可欠であるが、個人の消費能力には限界がある。このような食料の必需性と飽和性、さらには自然条件に左右される農業生産の不安定性や乏しい貯蔵性等から、農業や食料関連産業は、一般の商工業とは異なる特徴を有している。本講義では、このような食料・農業の特殊性を踏まえながら、食料消費の動向、農業及び食料関連産業の現状と問題点・課題等について、経済学的な考え方に基づき、理解し考察する。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	農業経済・経営・政策系	食料・農業・農村政策論	日本をはじめ、アメリカやEU等の先進国では、国内総生産に占める農業の割合は低くなっているものの、農業・農村を守るため、多額の予算が投入されている。食料自給率が4割を下回り、農業従事者も減少・高齢化する等、日本の農業は様々な課題を抱えているが、一方で良質で安全安心な農産物の供給や地域社会の維持・活性化に寄与している。本講義では、わが国の食料・農業・農村の現状を把握した上で、諸問題に対応するために講じられている政策について、内容を整理し、経済的効果を考察する。	
			農業経営管理論	現代の農業経営は、家業の継続にとどまらず、周到かつ発展的な経営戦略を確立し、それを実行することが求められている。その基礎をなすのが経営管理である。本講義では、経営の基本となるモノ・ヒト・カネに関わる管理分野を取り上げ、経営管理問題が顕在化した背景と経営管理の課題・方法について解説する。農業経営管理は1990年代以降に論じられるようになった領域である。企業的農業経営が広がり、積極的な事業展開が見られるようになったことが、農業経営管理論の創成を促した。本講義では、1990年代以降の農業経営の動向に注意を払いながら、一般経営学における経営管理論と共通する領域と農業経営の特質を反映した独自の領域とを識別し、農業経営管理を体系的に論じる。	
			農村社会学	イエとムラを軸に形成された我が国の伝統的な農村社会は長期にわたる安定性を示し、日本社会の基層をなしてきた。このような我が国農村の特質を海外と比較しながら認識するとともに、急激な変化を示す農村の実態をとらえること、そして政府の政策を含め、新たな農村づくりに向けた諸々の取り組みについて理解を深めることが本講義の目的である。イエとムラをどのように理解するかは、長い歴史をもつ我が国農村社会学の最大のテーマであり、多くの研究蓄積がある。これら学説の要点を説明しながら、我が国の伝統的な農村社会を説明する。一方、このような伝統社会は安定的であったがゆえに、変化が始まるとその速度は急激である。その様相を説明しながら農村コミュニティの近未来像を描写する。農村の内外にわたる多様な主体が農業と農村社会に関わりながら、農業・農村の多面的機能を維持・発展させるためにつくられる仕組みを考察する。	
			6次産業経営論	本講義では、主に、日本農業における大きな可能性ともいえる6次産業（1次産業：生産物の生産×2次産業：農産加工・製造業など×3次産業：生産物や外注加工品の流通その他の利用など）を対象にさまざまな経営学的手法と理論からアプローチを行う。そして、6次産業の制度的仕組み、政策的支援、実態と課題、今後の可能性などについて講義を行う。	
			地域マネジメント論	社会経済構造の大きな変化により、地域における複雑かつ多様な諸問題に対して、地域の「自立」「活性化」の重要性が高まっている。そこでは、地域資源を見直し、その適正な利用・管理、すなわち、マネジメントが必要である。本講義では、地域マネジメントの考え方とその対象が有する特質を整理した上で、農村地域における活性化への具体的な取組み（グリーン・ツーリズム、地域ブランド化、バイオマスの利活用）について、地域マネジメントの視点から考察する。	
			食農ビジネス実践論	農業経済・経営・政策系で実践的に学修し、卒業研究を行うためには、食農ビジネスの実践事例から学ぶことが不可欠である。本講義では、食農ビジネスの経営に関する基本的な考え方に対する理解を深めるとともに、先進的な実践事例を取り上げ、その実践の背景、目的、取り組みの過程と内容を調べ、その成果と意義について考察を行う。	共同

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	食品産業・流通系	フードシステム論	農漁業生産からそれら生産物を取り扱う流通業を経由して、川下の食品小売業、外食産業さらに最終需要者である消費者に至る食料品全体の流れをフードシステムとして理解する。生産現場から食卓に至る過程を社会的分業という視点にたつて、フードシステムを構成している生産者、中間流通業者、小売業者それぞれがどのような役割(機能分担)を演じているのかを総合的に学ぶ。さらに、魚離れ問題に代表される日本人の食生活・食文化の崩壊・食品需要の縮減の中で、新たに取り組みされている農水産物の輸出や消費者に対する食育についても理解を深める。	
			食品産業論	農漁業、食品製造業、外食産業、食品流通業等で構成される食品産業の就業者数は我が国産業全体の約 20%を占め、重要な産業として位置している。本講義では食品産業の多様性や特徴について、個別業種の技術革新や競争構造さらに市場戦略などを含め総合的に学び、食品ビジネスに関する理解を深める。また、食生活に密着した食品産業の特色として、その盛衰が消費者ニーズの変化に大きく関係していることから、家庭・家族の変容(単身世帯・高齢化・女性の社会進出等)や食生活の変化に食品産業がどのように対応してきたかについても論じる。	
			食料・農業市場論	今日の市場経済のもとでは、農業経営や食品製造業、さらには消費者も、さまざまな側面で市場との関係を持っており、食農ビジネス学を学ぶうえで、食料・農業市場に関する知識を身につける必要がある。本講義は、食料・農業市場に関して、第一に、食料・農産物の市場と流通に関する基礎理論を踏まえて、その特徴と構造、現状について講義するとともに、第二に、農業経営に関連する諸市場の構造の特徴と、生産資材流通の現状について講義する。さらに、食料・農業市場の今後のあり方について講義する。	
			農畜産物流通論	TPP やメガ EPA など関税削減・撤廃の動きは、より多くの安価な海外産農畜産物が日本に輸入されることを意味する。消費者にとって安価かつ多様な食材が手に入るという安易な考え方もある。しかし中長期的にみれば、食料自給率のさらなる低下に拍車がかかり、日本農業がほぼ完全に国際競争にさらされ、国内の食料生産基盤が存続の危機に直面することが、次世代の食卓に関わってくる重大な問題である。特に関税収入などによる補助金支援の下で成り立っている畜産部門が大きな衝撃を受ける。畜産物のフードシステムは、採れた状態で流通できる青果物と異なり、繁殖や肥育、と畜、搾乳などの工程を必要のため、加工流通業者など非農業資本の企業的動きが大きな影響をもたらす。本講義では、こうした背景と特徴をもつ農畜産物とりわけ食肉や卵、牛乳・乳製品など馴染みのある品目の流通システムについて理解する。海外の畜産流通についてもふれる。	
			水産物流通論	水産業の現状と課題、水産物の商品特性、水産物流通の仕組みを学び、水産物流通の特徴(産地市場と消費地市場の制度や機能等)や現代的な特徴(市場外流通の拡大、産地販売力の強化、水産物ブランド化の取り組み、6次産業化、量販店における水産物販売の動向等)について理解する。また、現代的な水産物消費の動向とその背景や要因、水産物流通・消費の中の輸入水産物の浸透等についても学び、これからの日本の水産物流通や水産物消費のあり方について検討していく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	食品産業・流通系	農水産物マーケティング論	これまで構築されてきたマーケティング理論は「作った製品を売るのではなく、売れる製品を作る」という発想からなされてきた。そのため、農水産物にはなじまないという指摘もある。しかし、たとえ農水産物にはなじまない側面があるとしても、基本的なマーケティングの考え方と基本的な理論を理解していなければ、そうした側面に気づくことができない。そこで本講義ではマーケティングの考え方と基本的な理論を学ぶことを通じて、随時、農水産物マーケティングの事例を盛り込み、農水産物マーケティングのあり方について検討していく。	
			食品表示・認証論	食品表示とは、農林水産業で生産された一次産品およびそれらの加工品を消費者が購入する時に、品質や内容を見極める重要な情報源である。我が国の食品の表示は、平成 27 年に施行された食品表示法およびそれに関連する検査・認証システムによって、一定のルールに基づいて付されている。現在の食品表示法は、消費者が食品を摂取する際の安全性及び一般消費者の自主的かつ合理的な食品選択の機会を確保することを目的とし、食品衛生法、J A S 法、健康増進法の食品表示に関する規定を統合した一元的な制度となっている。本講義では、情報経済学の理論を用いた食品表示の意義とその内容や検査・認証システム、その他、食品にまつわるシグナリングおよび海外の制度との整合性等について、専門的な知識を修得する。	
			女性起業論	農山漁村地域では地域資源を活かした起業活動が活発に繰り広げられている。中でも農山漁村女性による起業活動は地域活性化にも大いに期待されているものである。また、起業活動の中には、農水産物加工や直売、レストラン、体験事業、民宿など様々なタイプがある。本講義では、農山漁村女性による起業に着目し、その成立と展開、実態、課題等について実態分析を通じて理論的に学ぶ。さらに、起業活動をはじめめるにあたって必要な事業計画、資金調達、経理、労務管理など起業や経営に必要なノウハウについても学ぶことで、農林水産物と地域をつなぐビジネスに必要な基礎知識を身につける。	
			食品産業経営戦略論	食品産業・流通系で実践的に学修し、卒業研究を行うためには、食品産業（食品製造業、食品卸売業、食品流通業、フードサービス産業）の経営戦略を学ぶことが不可欠である。本講義では、経営戦略の代表的な考え方に対する理解を深めるとともに、食品産業のなかから代表的な企業を取り上げ、その業界の構造と特徴を把握したうえで、企業の経営展開と経営戦略の具体的な内容と、どのような経営成果が得られたのかを調べ、食品産業の経営の分析と考察を行う。	共同



科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	食農共生・循環型農業系	食農共生論	近年、さまざまな側面から「食と農の距離の拡大」（食と農の乖離）の問題が指摘されている。私たちが真に豊かな食を実現し、日本の農業を守り発展させていくためには、食と農の距離を少しでも短くすること、すなわち食と農を結び両者が「共生」していく道筋を考えていかなければならない。本講義は、食農共生・循環型農業論系の概論として「食と農の距離」の問題を考えながら、生産者と消費者、農村（むら）と都市（まち）、産地と食卓を結ぶ食農共生の課題や方向性について理解し、考えていく。	
			循環型農業論	農業やその川下のフードシステムにおける持続可能性の追究が国内外で重要性・緊急性を増してきている。本講義では、農業がもたらしてきた様々な環境問題を学ぶと共に、環境問題の解消や緩和のための循環型農業の取り組みについて、その効果、技術、関連政策の学修を通して深く理解することを目的とする。また、循環型農業に取り組む経営の学修を通して、環境に配慮した農業生産の技術の実際や施策の活用実態について理解を深める。	
			食農教育論	食農教育とは、「食」が有する多様な役割の大切さを伝える「食育」に、「食」を育む根本である農林水産業に関する知識や体験を含めた総合教育のことである。2005年に施行された食育基本法では、国民の「食」に関する考え方を育み、健全な食生活の実現を目標とし、都市と農山漁村の共生・対流をすすめ、「食」に関する消費者と生産者との信頼関係を構築して、地域社会の活性化、豊かな食文化の継承及び発展、環境と調和のとれた食料の生産及び消費の推進並びに食料自給率の向上に寄与することが期待されている。本講義では、食農教育とは何かを理解し、自らで食農教育プログラムを企画する知識を修得する。	
			協同組合論	最近「農協改革」という言葉をよく耳にする。農協は民間の企業（株式会社）とは異なる「協同組合」だが、ではいったい協同組合とはどういうものであるのか。本講義では、食料・農業・フードシステム等の問題と深いかかわりがある農協（農業協同組合：JA）を中心に、協同組合の存在・役割が、日本の農業・食料や農山村をはじめとする地域の経済・社会、さらには私たちのくらしの問題と密接に関わっていることを理解していく。	
			都市農業論	都市農業とは、市街化区域内農地とその周辺で営まれる農業のことである。市街化区域内農地は、国内の全農地の約2%しかないが、都市農家の戸数や販売金額は全国の約10%を占めており、食料生産をはじめ、環境保全、景観形成、文化の継承、食農教育、防災空間、福祉との連携などにおいて様々な機能を有している。都市政策における都市農地の位置づけや税制措置は、高度経済成長期の「宅地化すべきもの」から、都市農業振興基本法が施行された近年では「都市にあるべきもの」へと目まぐるしく変化してきた。本講義では、都市農業の成立経緯や都市農業が有する多面的機能、都市農業の実践事例について学ぶとともに、ディベートやワークショップを通して、都市農業に対する自らの知見を深める。	
			非営利協同論	近年、協同組合やNPOなど、非営利協同組織に対する関心が高まっており、実際に農村を中心とした地域づくり、農業や食の分野も含む地域経済に関わる事業を行う非営利協同組織や非営利協同組織どうしの連携（非営利協同組織間協同）の取り組みが各地で展開しつつある。本講義では、こうした非営利協同組織の問題を取り上げて、その活動が日本の農業・食料や農山村をはじめとする地域の経済・社会、さらには私たちのくらしの問題と密接に関わっていることを理解していく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	食農共生・循環型農業系	有機農業論	本講義は、国内外における有機農業の定義や思想の系譜および有機農産物の品質上の特性を学ぶとともに、有機農業に特徴的に見られる生産・流通・消費・政策上の特性を社会科学的な視点より理解することを目的とする。また、講義中のディスカッションを通して、残留農薬による健康危害のような科学的不確実性を伴う事象や、有機農業を推進するための方法論等、答えのない問いに対する自らの考え方を整理し、論理的に説明する力を養う。	
			農村コミュニティビジネス論	食農共生・循環型農業系で食と農の共生のあり方やしくみの構築について実践的に学修し、卒業研究を行うためには、農村コミュニティビジネスの実践事例から学ぶことが不可欠である。本講義では、農村コミュニティビジネスの基本的な考え方に対する理解を深めるとともに、代表的な実践事例を取り上げ、その実践の背景、目的、取り組みの過程と内容を調べ、その成果と意義について考察を行う。	共同
	国際農業系	比較農業論	さまざまな気候・生態環境、文化・歴史、社会・経済状況を背景に、世界各地には多様な農業が見られる。本講義では、国内外の農耕文化の類型や特徴、系譜と変遷、気候や生態環境および社会・経済状況との関わりを知り、それらを比較し相対化することでそれぞれの農業の成り立ちおよび気候や地域性を越えた共通性について理解する。多角的・多層的・俯瞰的に捉えることを通じて、農業や環境についての知識や理解を豊かにする。		
		国際農業論	日本是世界有数の農産物輸入国であり、国民への食料供給を確保するためには、貿易交渉等を通じて、国内農業の生産力の維持と農産物輸入の安定化を図ることが重要である。また、世界の農産物貿易では、アメリカ、EU等の先進国が輸出・輸入ともに、主要なプレーヤーとなっており、先進国の農業事情や農業政策は世界の食料需給に大きな影響を与えている。本講義では、世界の食料需給、先進国の農業事情・農業政策、農産物に関する貿易交渉について、経済学的な考え方にに基づき、理解し考察する。		
		農業開発論	人口増加や偏在（都市集中や過疎化）や人間活動の拡大、気候変動などを背景に、アジアやアフリカあるいは日本国内の地域社会は、貧困、水質や大気汚染、生態系の劣化、自然災害、在来文化や相互扶助の仕組みの消失など数多くの問題に直面している。農業開発は、それらの諸問題の解決や未来社会の形成に関わる取り組みである。本講義では、農業開発の理論と系譜および世界各地の農業と生態環境との関わりを理解したうえで、農業開発をめぐる学術研究や社会実践の事例から問題解決や未来社会の形成に果たす農業の役割と可能性を考える。		
		現代韓国農業論	本講義では、韓国農業を対象に、幅広い、さまざまなテーマを取り上げ、講義を進める。まず、韓国農業の一般的な概況（農業従事者数と農家戸数の推移、農業生産額、食料需給など）について講義を行う。そして、韓国の主な農業政策を農業構造政策、食料需給政策、農村振興政策に大きく分けて解説・評価を行う。韓国人と日本人は外見としては似ているものの、内面は相当違うように、韓国農業と日本農業はその中身をみると相当異なる。隣国である韓国農業を知ることによって、日本農業について見つけ直し、一層理解を深めるきっかけとなることを主な目的とする。		

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	国際農業系	現代中国農業論	国土も人口も大きく、近隣諸国のなかでも多大な影響力を持つ中国では、急速な経済発展によって、食料需給や農村の社会構造が大きく変化し、集約的で多様な農業形態への移行が進行している。本講義では、日本のフードシステムに密接に関わってきた中国の農業の発展動向について学ぶ。食料・農産物の多くを中国に依存している日本の現状を省みると、中国の農業・農村の動向を正確に理解することが大きな意味を持つ。日本と中国は、地理的条件をはじめ、経済発展パターンや経済構造において共通性が強く、農業も家族経営が主で、経営規模は零細という点でよく似通っており、経済発展にともなう農業の比較優位の低下、農業人口の高齢化、食料自給率の低下など、中国農業が直面する問題も日本と相通ずるものになっている。中国の経済政策体制の基礎知識にふれながら、現代中国の農業・農村における特徴的な変化について解説する。	
	専門総合群	農業生産系	園芸の技術	我が国の果樹、野菜、花卉などの園芸作物生産は、限られた土地を有効活用し、なおかつ消費者のニーズに合った高品質な商品を生産するため、種々の特殊な技術を用いて行われている。「園芸の技術」では、実際の園芸作物における生産流通現場で応用されている興味深い「技」に焦点を当てて紹介する。植物生理学的な背景に基づく各技術の概要と、それらの技術を用いることで得られる生産性の向上や市場における付加価値および経済効果について論じる。	
			植物の病気	ヒトや動物と同様に植物も病原菌に感染し、病気にかかる。しかしながら、病原菌だけが原因ではなく、植物の健康状態や品種の違い、周辺の環境などの要因によって発病するかどうかが決まる。本講義では実例を紹介しながら、なぜ植物は病気になるのか、どのようにして植物を病気から守るのか、などの植物病理学の基本事項を修得する。また植物病に関わる微生物、植物、環境等に関する基礎知識の修得を通じて、農作物の持続的・安定的な供給、食品の安全・安心、国際的な食料の流通や消費など学科で学修した諸問題について幅広い視点で議論する。	
			植物の改良	人は植物を食料として利用するだけでなく、家畜の飼料や観賞用、工業用原料、医薬品用原料などさまざまに利用している。そして、人は品種を作るという概念を持つ前から収穫量が多いものや病気に強いものなど、自然に存在する有用な形質を示す植物を選んできた。しかし、メンデルが遺伝の法則を発見したことにより、体系的に植物を改良することが可能となった。本講義では、改良の対象となる植物の形質について概説するとともに、従来おこなわれている植物改良の手法から、今日、注目を集めている遺伝子工学の技術を利用したゲノム編集までを解説し、植物の改良に必要な基礎的な知識を身につける。	
		昆虫とくらし	昆虫の祖先は約4億年前に地球上に現れ、今や地球上の全生物種の70%を超える種数を占めると言われている。この繁栄に成功した理由として、脊椎動物にはないムシが持つ昆虫独特の環境への適応能力が指摘されており、我々ヒトは、ある時はムシと作物を争い、ある時はムシの特性を学び応用することで生活をより豊かなものへと変えていくことに成功した。「昆虫とくらし」では、害虫と益虫というヒトの視点を通じたムシの二面性について紹介し、ムシを通じて生態を中立的に見る目を身につける。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門総合群	農業生産系	作物とエネルギー生産 作物は、人類が利用するエネルギーの重要な供給源の一つとなっている。「作物とエネルギー生産」では、(1)バイオマスエネルギーにおける生産と利用の現状および課題、(2)エネルギー作物における種類、生態・形態・生理的形質、栽培および利用、(3)バイオ燃料の種類、製造法および利用などについて概説する。作物とエネルギー生産との係わり合いやエネルギー作物に関する現状、重要性と課題を理解し、それらを説明する上で必要な基礎知識を身につける。	
			生きている土壌 作物の生産基盤として、土壌の役割は重要である。土壌中には微生物を含めて多くの生物が生息しており、物質循環をはじめとした機能面で役割を担っているほか、土壌自身も外部からの影響により変化しており、まさに土壌は生きているといえる。また、作物などの植物生育と関連していることから、他の生物の生命活動にも影響をおよぼしているほか、周辺環境のかかわりも深い。本講義では、上記の観点から、土壌自身の生物性、特性の変化、作物生育や周辺環境とのかかわりなど、幅広い観点から土壌の役割について講義する。	
	応用生物系	分子からみた植物の働き 人類は、野生植物の役立つ性質を伸ばし、不要な性質を失わせたり変化させることで、野菜や作物を作り出してきた。これを野生植物の栽培化とよぶ。古代の人類はこれを経験的に行ったが、植物分子の知識が蓄積した現代は、望みの性質をもつ植物をデザインすることも可能になりつつある。本講義では、食糧生産の基盤となる植物の働きに関して分子レベルの知識を得ることを目標として、植物の様々な形質や機能に関する分子を紹介し、その働きを解説する。また、植物の最も基本的な機能「光合成」の分子基盤も説明する。		
		ゲノムと生命 ゲノムとは何か？この問いに対する答えは一つではない。ゲノムの定義は時代とともに何度も変わってきた。一口にゲノムと言っても、生物種、調べる現象、解析の技術や手法などによって、ゲノムのもつ様々な側面や性質が見えてくる。本講義では、ゲノムの一般的な性質や機能と、生命を操作する「ゲノム科学」の先端技術などを紹介するだけでなく、ゲノムの科学史、風変わりなゲノムを持つ生物、ゲノムに関わるユニークな現象などを紹介しながら、ゲノムとは何かを考え、ゲノム研究がこれからの人々や社会にどのような影響を与えていくのかを、自然観や生命観に対する影響も含めて、考察する。		
		生物の多様性と進化 (概要) 約 40 億年前に地球上に生命が誕生し、その後、地球環境の変化に伴い生命は進化して、現在、地球上にみられる多様な生物が生まれた。この間に多くの生物が絶滅していったことが化石研究から知られており、現存する生物は、私たちも含めて過酷な自然淘汰を生き残った一部の生物群である。また、人類は植物や動物を食糧として利用するために育種交配、また最近では遺伝子組換え技術を利用して人為淘汰し、生物の形質を変換させてきた。「生物多様性と進化」においては、植物、動物、微生物、海洋生物、及び昆虫について、これらの生物の多様性と進化について、自然淘汰と人為淘汰の観点から解説する。  (オムニバス方式／全 15 回)  (20 小保方潤一／4 回) 植物に関して、地球の歴史と生命の誕生、藻類の多様性、陸上植物の進化、進化のメカニズムについて学修する。	オムニバス方式	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門総合群	応用生物系	生物の多様性と進化	(17 井上亮 / 4回) 動物に関して、脊椎動物の起源、脊椎動物の進化、動物の多様性、産業動物の品種改良について学修する。  (30 豊原治彦 / 4回) 海洋生物に関して、海洋環境の多様性、海洋無脊椎動物の進化と多様性、魚類の進化と多様性、海洋生物の品種改良について学修する。	オムニバス方式
			動物とくらし	我々のくらしは様々な動物と関係して成り立っている。例えば、日々の食事は家畜や家禽などの産業動物によって支えられており、犬や猫などのペット（コンパニオン・アニマル）は日々の安寧な暮らしの重要なサポート役となっている。「動物とくらし」では、我々のくらしに、産業動物やコンパニオン・アニマルがどのように関わっているのかを学ぶとともに、それぞれの動物の生態や生理について説明し、くらしで関わる動物に関する基本的な知識を身につける。	
			微生物とくらし	有用微生物およびその利用に関して講義を行う。微生物には「バイ菌」という言葉に代表されるように、ネガティブなイメージがあるが、本講義では人類に役立つ微生物バイオテクノロジーについて広く述べる。具体的には、1)各種発酵食品製造における微生物の役割、2)有用物質生産の実例として微生物を用いたアミノ酸、核酸等の発酵生産および、抗生物質の発酵生産について、3)ニューバイオテクノロジーによる微生物機能の有効利用の事例として、遺伝子工学の利用によるタンパク質の生産、代謝工学等について、4)環境修復のためのバイオテクノロジーについて、などである。また、それらを自らが展開していくために必要な考え方、今後の発展の方向などについて講義する。	
			海洋生物とくらし	海洋は地球の表面積の約7割を占め、更に深海など人類にとって未踏の領域も含むフロンティアである。このように広大かつ深遠な領域に住む海洋生物は独自の世界を形成し、直接的或いは間接的に我々の暮らしと関わっている。「海洋生物とくらし」では、水圏の成り立ちから海洋生物の分類、生理、生態について概説し、特に我々の暮らしとの関わりが深い「魚介類」に対する理解を深めることを目的とする。我々にとって身近な魚介類について、その旬、味、などの背景について、化学的な視点から考察する。	
	食品栄養系	食品学入門	食品学入門は、食品の一般的特質、その食品の栄養的価値並びに保存性を高めるためにどのような加工がなされているか、食品の栄養成分の構造、性質を学ぶものである。本講義では、食品の1次機能(食品成分の化学)、2次機能(嗜好成分の化学)、および3次機能(食品の生理機能性)について学ぶとともに、食品の加工法、貯蔵法を学修する。本講義と一般的な化学や生化学を並行して学ぶことにより、食品加工手法と食品の一般的知識を身につけることを目的とする。		
		食品の安全性	食品は、貴重な栄養源であり生きていく上で欠かせないものである。この食品の安全性を守るとは健康を維持する上で重要である。本講義では、リスク分析の考えに基づき、食品の安全性がどのような制度、規制によって守られているのかについて学修するとともに、食品の安全性を脅かす有害要因およびそのリスクの評価方法について学ぶ。また、輸入食品の安全管理体制や食品の製造から食卓に至る各過程における安全管理体制について学び、リスク管理の理解を深める。さらに、食品の安全から安心を得るために大切なリスクコミュニケーションを模擬体験し、リスクバランスについて考える。近年、海外からインターネット販売による輸入が増加している健康食品の安全性についても学ぶ。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門総合群	食品栄養系	旬の食材と薬膳	近年、少子高齢化や医療の高度化による医療費の増加は、国民健康保険制度などの医療保険体制の見直しや、国民一人ひとりが健康増進を図り、国民保健の向上すること目的とした健康増進法の施行にまで至っている。近年、薬膳や漢方などの基礎にある中医学的捉え方について、ヒトの体質、季節などに対応した健康を維持する食生活として注目されている。本講義では、身近な薬草および食薬の種類、効果、効能について中医学的捉え方を学修したうえで、薬膳や漢方方剤の知識を学修する。	
			栄養とスポーツ	専門分野で学修した知識・技能を、人々の生活の質向上や健康社会の実現へと展開するために、栄養・スポーツ分野におけるエビデンスに基づいた情報を理解する、具体的には、健康の維持・増進のための栄養・スポーツの基礎知識、運動不足や栄養の過多・不足がもたらす身体への影響、栄養摂取や運動トレーニングによる生体の適応およびそのメカニズムを理解する。さらに身体のみならずこころの健康のために望ましい運動や栄養、運動トレーニング法について理解し、さまざまなライフステージにおける心身の健康を維持・増進するための総合的学修を行う。	
			栄養と健康	巷には食と健康に関する情報があふれているが、その情報が正しかどうかを判断する事は難しい。栄養とは何か、カロリーとは何かに始まり、食生活に影響する諸因子、食生活と病気との関係、各栄養素の特徴と過不足の害、各食品群の栄養、食物アレルギーへと講義を展開して行く。後半は健康になるためには栄養と運動と休養（ストレス発散）が三本柱であることを学ぶとともに、栄養と健康に関する質問に答える。	
			病気の予防と食生活	日本人の死亡原因は、脳卒中や虚血性心疾患（心筋梗塞など）の循環器病とがんの割合が多くなっている。それらの多くの病気に関わっているのが生活習慣病である。生活習慣病とは、食事や運動、ストレス、喫煙、飲酒などの生活習慣がその発症・進行に深く関与する病気の総称をいう。その病因として、日々の食事や運動の生活習慣の乱れなどが考えられている。本講義では病気の予防と食生活、特に生活習慣病について学修する。	
	ゼミ・卒業研究		基礎ゼミナール	本ゼミナールは、新入生が学部・学科での学修を不安なくスタートし、目標を持って大学での勉学に励むために必要な基礎的知識・技能・態度を修得する教育プログラムである。すなわち、学生が大学での学修に必要な基本的知識や主体的で深い学びの方法を修得し、自ら大学での学びをデザインするとともに、将来の目標について考えることを目的とする。各専任教員による少人数ゼミナールを基本とし、教員と学生が密接にかつ自由に、相談・議論しながら進める。教材として全学共通教材である「First Year Study Guide」を活用し、大学として共通する項目を学修するとともに、教員独自の教材を用いて学修を深める。	
		食農ビジネス学基礎演習 I	大学における学修・研究活動や社会におけるビジネス活動において、PC の利用は一般的であり、また、様々な情報がインターネットを通じて簡単に取得できるようになっている。本演習では、情報を正しく利用するための情報リテラシー、情報倫理を学修し、PC を使用するための基本的な知識と技能（特に、Word、Excel、PowerPoint の基本的操作方法）を修得するとともに、Excel による経済データの基礎的な加工方法について学修する。各演習では、学修内容を補完するための課題を出し、知識・技能の定着を目指す。	共同	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	ゼミ・卒業研究	食農ビジネス学基礎演習Ⅱ	本演習は、食農ビジネス学科での専門的な学修を本格的に始めるにあたって、わが国や世界の食料・農業・農村の動向と現状、解決すべき課題の所在について認識を深めるとともに、基礎的な知識を修得することを目的とする。具体的には、「食料・農業・農村白書」をはじめとする基礎的な文献をテキストにして、輪読、発表、ディスカッションを行うことによって、理解をより深めるとともに、主体的な学修の姿勢を身につけることを目的とする。	共同
		食農ビジネス学基礎演習Ⅲ	本演習は、食農ビジネス学科での専門的な学修をより深めるために、わが国や世界の食料・農業・農村の動向と現状、解決すべき課題の所在と解決の方向について認識をさらに深めるとともに、専門的な知識と考え方を修得することを目的とする。具体的には、より専門的な文献をテキストにして、輪読、発表し、ディスカッションを行うことによって、テキストの内容に関する理解をより深めるとともに、主体的な学修の姿勢を身につけることを目的とする。	共同
		食農ビジネス学研究Ⅰ	本科目は、食農ビジネス学科の各分野での専門的な学修を進めるために、それぞれの指導教員のもとで、学生の具体的な研究課題の設定につながるように、各指導教員の指導のもとで学生がテーマを設定し、それに関連する文献の読解を通して専門的な知識や考え方を修得するとともに、文献の内容をまとめ、論理的に考察し、発表できる能力を身につけることを目的とする。また、データの検索方法と集計・分析方法、フィールドワークの方法などを身につけることを目的とする。	
		食農ビジネス学研究Ⅱ	本科目は、食農ビジネス学科の各分野での専門的な学修を深めるとともに、それを応用して調査・分析できるようにするために、それぞれの指導教員のもとで、学生が具体的な調査・分析課題を設定し、その課題に関連する文献の読解を通してより専門的な知識や考え方を修得するとともに、データの検索方法と集計・分析方法、フィールドワークの実施方法などを身につけ、調査・分析に取り組む。これらを通して、卒業研究で取り組む課題を設定する。	
		卒業研究	これまでに学修した専門的知識・技能および汎用的能力をさらに深めて大学4年間の学修の集大成としての卒業研究を行う。卒業研究では、学生が研究テーマの設定、研究方法の策定、研究調査の実施、研究成果の解析・まとめを行い、卒業論文を作成するとともに、発表会において発表・ディスカッションを行う。これらを通して、学術研究における倫理的規範、課題の発見（研究テーマの設定）と解決（研究の進め方）、思考力・判断力（研究結果のまとめ）、表現力（論文作成およびプレゼンテーション）を身につける。さらに、教員とのディスカッションや共同研究などを通して多様な人々の協働する力を養う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	共通系	大学教養入門	本科目の内容は、大学生としての教養を身につけるスタートラインに立つことにあり、自らが主体的に知識を獲得し、対話を通して理解を深め、表現するための技術等を修得することである。本講義では教養入門書を用いて ABD（アクティブ・ブック・ダイアログ）読書法や協働学習の習慣を身につけるとともに、チームワーク能力、コミュニケーション能力を身につけることを目標とする。	集中・共同
	語学系	日本語表現法	我々は日本語を用いて、何をどのように表現しているのだろうか、そして表現できるのだろうか。本科目では、日本人が日本語を用いて、どのように表現してきたのか、そしてどのような表現が可能なのかを、様々な事例を通して考える。それによって、言語に対する感覚を研ぎ澄まし、言葉にこだわる人間になることを目指す。日本語表現の特徴について、具体的に説明できること、日本語表現を客観的にとらえ、他の言語とも比較しつつ、多様な視点から考えることができるようになることを目標とする。	
		基礎英語 I a	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題についての平易なパッセージを読んで理解できるようになる。また、ゆっくり、はっきりと発声（再生）されれば音声だけでも理解できるようになる。読む・聞くことについては、CEFR-J[A2-1]を目標とする。	
		基礎英語 I b	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題についての平易なパッセージを読んで理解できるようになる。また、ゆっくり、はっきりと発声（再生）されれば音声だけでも理解できるようになる。読む・聞くことについては、CEFR-J[A2-2]を目標とする。	
		基礎英語 II a	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題について、基本的な語彙や表現を用いた英文を書けるようになる。また、前もって用意すれば同じ内容を口頭で発話できるようになる。書く・話すことについては、CEFR-J[A1.1-A1.2]を目標とする。	
		基礎英語 II b	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題について、基本的な語彙や表現を用いた英文を書けるようになる。また、前もって用意すれば同じ内容を口頭で発話できるようになる。書く・話すことについては、CEFR-J[A1.3]を目標とする。	
		実践英語 I	これまでに学修した英語のスタディスキルをさらに向上させる。ICT 等を用いて、より高度な 4 技能統合型の演習を行う。インプット活動のみならず、アウトプット活動を取り入れ、各技能の基礎力および応用力を養う。読む・聞くことについては、CEFR-J[B1.1]を目標とし、自分に関連する内容（日常生活、学校生活など）の英文に関する基本的な情報を理解できるようになる。	



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	語学系	実践英語Ⅱ	これまでに学修した英語のスタディスキルをさらに向上させる。ICT等を用いて、より高度な4技能統合型の演習を行う。インプット活動のみならず、アウトプット活動を取り入れ、各技能の基礎力および応用力を養う。書く・話すことについては、CEFR-J[A2.1]を目標とし、海外研修、留学、ホームステイ、観光、あるいは海外からの訪問客への対応など、日本の大学生が英語を使用する現実的かつ具体的な場面と相手を想定しながら、複数の英文を連続して発話できるスピーキング力、複数の英文を組み合わせてパラグラフを構成できるライティング力を身につけるためのトレーニングを行う。	
		英語基礎会話 a	本科目では、基本的な英会話力の向上を目指す。日常における様々なシーンを想定し、会話がスムーズにできるように練習する。ペアワークやグループワークなどを通じて、自分のことを一方的に話すだけでなく、相手の話を聞いてそれに受け答えできるように訓練をする。また様々な英語表現に触れ、会話の幅を広げることも目的の一つとしている。	
		英語基礎会話 b	本科目では、英語基礎会話 a に引き続き、基本的な英会話力の向上を目指す。様々なシチュエーションを想定し、より深い内容の会話ができるように練習をする。ペアワークやグループワークなどを通じて、会話のキャッチボールがスムーズにできるように訓練を行う。文法の再確認も目的の一つとしている。	
		中国語Ⅰ	中国語を初めて学ぶ者にとって、中国語の基本的な発音や文法を理解し、一定の語彙数を早期に修得することが重要である。本科目では、中国語の発音や文法について学習するとともに、日常における中国語の表現方法の学習を通して、読む・書く・聴く・話すための基礎的な能力を修得する。	
		中国語Ⅱ	正確な発音と中国語文法の基礎を学習し、読む・聴く・話す・書くの四つの力を総合的にバランスよく修得する。1年間の学習を通じて初級中国語がマスターできる。単語を覚え、基礎文法を学び、簡単な文型を運用して、会話や作文ができるなど、基礎的な中国語能力の修得を目指す。	
		海外語学研修	本研修は、語学力（英語力）の向上と研修地の歴史・文化およびそこで生活する人々に触れ、国際的な知識と理解を深め、広範囲な国の人々と協力し合える国際感覚を身につけることを目的とする。事前に研修先の歴史や文化を調査することで、現地での研修を深められるようにする。研修先では、月曜日から金曜日に講義・演習を実施し、語学力別に分けたクラスで行う。研修に参加する学生同士で協力し合い、研修の目標達成を目指す。	集中
情報系	情報リテラシーⅠ	近年、高等教育機関での勉学や社会人としての仕事において、パソコンを使えるスキルは必要不可欠である。本科目では、パソコン初心者进行を想定し、パソコンでの文書作成ソフトや表計算ソフトの基本的な使い方、また発表の場で広く使用されるようになったプレゼンテーション資料作成ソフトの使い方を中心に学ぶ。実践力をつけるため課題を中心に演習を進め、レポートや発表資料の作成が適切に行えるようにする。さらに情報セキュリティやモラルについても事例を通して学ぶ。		
	情報リテラシーⅡ	卒業研究で数値データを扱う場合、その統計処理に関する知識は必要不可欠である。情報技術の有効利用の中でも、科学技術分野においてとりわけ重要であるデータの処理と分析のための種々の数学的処理技法を理解する。本科目では、情報リテラシーⅠで用いた代表的かつ標準的な表計算ソフトを用い、基本的な統計処理の方法を学ぶとともに、統計の基本を理解し、正しい統計処理方法の選択や結果の解釈を行うための基礎力を身につける。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	体育系	スポーツ科学Ⅰ	生涯を通じて明るく活気のある生活を営むために、スポーツ・身体運動は極めて重要な役割を果たす。運動技術の修得およびスポーツの楽しさを理解するとともに、自らの生活行動の中にスポーツ・身体運動を実践する能力を育成することを目的とする。本科目では、スポーツ・身体運動を通して①健康の維持・増進をはかる②運動技能を向上させることができる③マナーやルールを理解することができる④コミュニケーション能力やリーダーシップを培うことを目指す。	
		スポーツ科学Ⅱ	「スポーツ科学Ⅰ」で培った学修内容を応用し、心技体のさらなる向上を目標とする。①<心>スポーツ活動を通じた成功体験や規範遵守、主体性、自己統制、表現力、協調性、他者受容意識の向上など人間力の醸成を目指す。②<技>スポーツ科学Ⅰよりも高度なスポーツ技術の獲得を目指す。③<体>運動やスポーツが身体へ及ぼす影響やそのメカニズムについて理解し、自らの生活行動の中にスポーツを実践できる能力の育成を目指す。	
	人文系	心理学	心理学はその行動法則を明らかにする行動の科学として、広い領域に関係している。実際に見ることができる、観察可能な行動から、人間の“こころ”の動きを検討したり、目で見て確認できないものについても、観察・実験・調査といった様々な方法を用いて客観的なデータを集め、心の働きを研究している。本講義では、これまでに行われてきた多くの実証研究を学修することによって、心理学の基礎知識を身につけることを目的とする。	
		倫理学	現代の社会システムに関する理解を通じて、倫理的規範/価値観の変容について学修する。日本の高度成長期には「消費は美德」という言葉が流行し「大量生産/大量消費社会」を賛美したものであった。一方で、現代社会で時代をリードしているのは「Mottainai (もったいない)」というエコロジーを主軸としたものであるが、本当にこのような価値観の転換に成功しているだろうか。本講義では、20世紀の半ば以降、今日に至るまで社会を動かしている経済のシステムを理解した上で、それを変革するための道を探る。	
		哲学から学ぶ	哲学的な知の営みは、他の学問と比較してどのような独自性、特徴を持つであろうか。本講義では哲学的に問うことの本質を明らかにしながら、いくつかの哲学的・倫理学的問題を取り上げ、共に考えていく。「人間の心と動物の心」「悪」「人生と時間」といったテーマを中心に論じる。哲学的に考えるとはどういうことであるかを理解し、講義で取り上げる個々の哲学・倫理学のテーマに関して、自分なりによく考え、それを論理的に文章にまとめる力を身につける。	
		地誌学	本講義の目的は、地誌学の学修を通して、地理学的(空間的)な視点を用いて、世界各地の諸問題や地理的現象を把握する能力を身につけ、地域的な特徴や地域が抱える問題点を的確に理解することである。本講義では、世界各地の地誌について学修しながら、上記の能力の修得を目指していく。	
		人文地理学	窓の外にひろがる風景、大学が立地する町並み、人びとが抱くイメージなど。これらをどのように捉えることができるのか、また、どのように捉えてきたのか。それが本講義のテーマである。言い換えると、本講義は地理学史の流れに沿いながら、<地理学的なものの方・考え方>について幅広く解説するものである。この見方・考え方は、意識されていない場合も多いが、実はわたしたちの生活のさまざまなところに活用されている。本講義を通して、身近な問題を新たな視点から捉え直すきっかけを提供していく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	人文系	文学から学ぶ	日本の近代文学の短編を読む。なお、明治から敗戦までの作品を近代文学と位置づける。文学作品を読むことは、それだけで我々の心を豊かにしてくれる。作品を読むことで、近代の日本人が何を考え、発見し、何に悩んでいたのか、共に考えていく。文学作品への抵抗をなくし、作品を読んで考える習慣を身につけることを目的とする。毎回、1編の短編作品を取り上げて講義し、作品を鑑賞する中で、その文学的特徴を説明できるようになることを目指す。	
		文化人類学	人類学はこれまで、世界中のさまざまな人々の多様な生の理解を通して、私たち人類が地球上に生き、存在するということがどのような事態なのかを探求してきた。本講義では、人類学の基礎的な概念や方法を概説し、人類学がどのような学問なのかを示した上で、そのような人類学的な見方の成立と歴史的展開をあとづける。そのうえで、人類学的思考がどのようなものであるか、人類学誕生以来の学説史的な展開、流れについて理解することを目指す。	
		女性学	女性学とは、男女ともが、社会のしくみについて考える場である。社会の「主人公」が男性であることが自明であった時代、「見えない存在」とされていた女性のあり方に目を向けることが女性学のきっかけとなった。しかし、それは、性別によって個人が生き方を決められてしまう社会のしくみそのものを問う学問および活動を意味する。現在では、性をめぐる社会のしくみは、男女それぞれの個人としての「生きにくさ」と何かしら関係があるのかもしれないと捉えられる一方、「もはや性別による不都合など存在しない」という意見も多く見られる。本講義では、1970年代以降、今日に至るまで、女性学において語られてきた様々なトピックをヒントに、性をめぐっての、今日的な社会のしくみについて、家族、恋愛、仕事、セクシュアリティなど様々な角度から理解を深める。	
	社会系	ボランティア活動論	本講義は、「ボランティアとは何か」をさまざまな角度から考察することを通じて、自己と社会の関係の理解を深めることを目指す。とりわけ、ボランティア活動の意義に関する複数の理解の各々を批判的に考察しながら、根本的な意味で〈互いに支え合う存在〉であるところの人間存在のあり方をつかむことを目標とする。本講義を通じて、現在行なわれているさまざまなボランティア活動の具体的な内容を知るだけでなく、ボランティアの意義の理解を深めることによって人間理解（すなわち私たちの自己理解）も深めることができる。	
		経済学入門	経済現象を理解するために必要な基本的知識や経済学的な考え方、現実の経済現象を事例として参照しながら、解説することを目的とする。戦後日本経済の歴史の大まかな流れや、雇用、企業組織、財政、社会保障といった日本経済の動きに関わる基本的な事項について説明でき、日々の経済ニュースを理解できるようになることを目指す。そのうえで、日本経済が抱える諸問題について、その重要性を理解し、異なる立場の議論を比較することができる力を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	社会系	日本の政治	人間が集団で生活している限り、法や条例、公共事業の影響を避けて生きることはできない。それらを決定するのが政治であり、皆政治に参加することによって自分自身の生活をより善いものに作りかえることができる。しかし逆に、政治に参加しないことによってより悪いものになってしまう可能性も否定できない。本講義では、有権者である学生に日本の政治についての基本的な知識を与えることを目的とする。政治学の区分で言うところの政治体制論、政治過程論、日本政治史、国際政治、地方自治の内容について、日本の政治を概観していく。また、最近のニュースが理解できるように、政治的な時事問題についても紹介し、解説する。	
		法学入門	法は私たちの日常生活と密接な関係にあり、私たちが普段あまり意識しないで行動をしても、その行為の裏には法律関係若しくは法律問題のあるものが沢山ある。法を学ぶことは世の中を知ることもつながる。本講義では、法学の基礎から始め、身近な具体的事例をとりあげ、民法、商法、刑事法、民事訴訟法などの基礎を解説する。日常生活において必要、有益な法律の知識を得て、身近な法律問題を法的な立場から考えるようになることを目指す。	
		経営学入門	基本的な企業経営の仕組みについて講義する。資本主義社会における企業の役割を踏まえて、現代企業の経営活動を理解することを目標とする。本講義では、組織論・管理論・戦略論の基本的な用語と概念を学び、それらを用いて具体的な経営現象を説明していく。経営学の基本的な理論と概念を理解することで、国家公務員一般職試験および地方上級職試験における専門試験で出題される「経営学」を理解できる程度の知識を修得することを目指す。	
		観光学	近年、日本への外国人観光客が急速に増加しているが、これは日本だけの現象ではなく、世界的に国際観光が盛んになっている。少子高齢化の時代を迎え、交流人口の増加を期待される観光は日本の重要政策に位置づけられ、今後ますますその必要性が高まってくると考えられる。本講義では、観光経済を学ぶうえでの観光の基礎知識を修得することを目的とする。観光振興の意義を理解し、観光現象について書かれた記事や文献を理解できるようになることを目標とする。	
		日本国憲法	本講義では、日本国憲法の意義、および基礎的知識を修得することを目的とし、講義テーマに関連する憲法上の問題を取りあげ、これと関わりのある基本事項、判例、学説を解説・検討する。さらにその知識を活用して、社会における多様な問題について、憲法の視点を踏まえて自分の言葉で発言できるようになることを目標とする。できるだけ身近な素材を利用し講義を進めることで、「憲法」と日常生活との関わりについて考えてもらえる機会とする。また、憲法をめぐるさまざまな考え方にふれ、物事を多角的にみる能力を養う。	
	自然系	教養数学	本講義では、農学部専門的知識を学ぶ上で必要となる、統計学などの応用数学と言われる知識を修得するための基礎的・基本的な数学の知識や考え方を扱う。それらを学び、理解することを通じて、論理的思考能力・判断力・表現力といった素養を身につける。さらにそのような数学的素養を活かし、農学領域やそれを取り巻く様々な分野に対しても応用できるような基本的技能を習得することを本講義の目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	自然系	生命倫理	農学の学びにおいて「総合科学」の基礎となる幅広い知識の修得に加え、倫理観をもった豊かな人間性を涵養する教育が必要であり、農学分野における生命科学の倫理的配慮が社会的、科学的、技術的側面などから求められている。なかでも、農学分野において、ゲノム解析、各種細胞の研究利用、遺伝子組み換えによる品種改良など生命に係る技術利用が行われ、人類に有益な結果をもたらす一方で、予期せぬ有害な影響なども予測される。本授業では、生命科学分野で配慮されるべき生命倫理観及びその行動を学ぶ。「ヒトの生死や生命とは何か」、「人間とは何か」など根源的な問いに向き合いながら、農学における生命科学の最新技術をヒトや地球環境に及ぼす影響を考察しながら、倫理的行動について学修することを目的としている。	
		生物と環境	環境をめぐる諸問題は、ニュースでみない日はないほど私達にとって身近な話題となっている。環境を理解するためには、さまざまな知識や考え方が必要である。本講義では、生物（ヒトも含む）と環境の関わりを学ぶことを通して、私達の身の回りにある環境・環境問題を正しく理解できるようになることを目指す。そして、これからの時代を生きる人類にとって避けて通れない環境問題の解決を模索していく上で必要になる考え方を身につけ、自身で情報を見わけることができるようになることを目標とする。	
		地学	地学の大きな柱である固体地球、岩石鉱物、地質・地史、大気・海洋、天文の諸分野に関して、実際のデータや写真など、具体的な資料を用いて、我々の住む地球や我々を取り巻く宇宙に関する知見を深め、我々が経験する自然現象がいろいろな法則や原理によって説明できることを学ぶ。扱う範囲は広いが、単に広く浅い知識を修得するのではなく、自らの手で資料を検討することによって少し深い知見も得られるよう進める、また今まに行われている研究についても紹介する。	
		地学実験	地学実験では、地球物理学・天文学・地質鉱物学における基本的事項について修得する。天文学分野では、天文に関する知識を実地の観測結果と結びつけて考察できるようにし、観測者である自分の空間位置を太陽系と恒星の世界の中で把握できるようにすることを目的とする。また地質鉱物学分野では、直接生の岩石や堆積物、化石などに触れることによって地球の歴史や各自の生活の基盤になっている大地の生い立ちを考察できるようになることを目的とする。	共同
キャリア系	キャリアデザインⅠ	就職や人生設計の前提として、「大学生」として大学生活をプランニングする。「基礎ゼミナール」と連携しつつ、「摂南大学」の学生として必要な知識や技能を修得する。専門の学びとの接続となるよう基本的なスタディスキルを修得する。講義と並行して、グループワークを実施し、課題やメンバー構成などの所与の条件に対してグループとして処していく力を養成する。社会の変化を知り、調べ、考え、発表するための技能についての理解を深めることを講義目標とする。		
	キャリアデザインⅡ	現代社会で生じているさまざまな事象を、氾濫する情報からの確にとらえ、それらを起点に思考し、自らの活かし方、伸ばすべきポイントについて考える。将来、就きたい職業を模索し、そのために今何を行うべきかを自ら考え、宣言できるようになることを目指す。講義だけでなく、グループワークや個人で考えるワークを織り交ぜて行い、来るべき就職活動に向けて、自分に必要な能力を自覚し学び、計画を実行に移せるようにする。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	キャリア系	数的能力開発	社会に出るにあたり必要とされる数的能力を学修する。社会人として数的能力が必要となる場面は多く、就職活動でも筆記試験で算数・数学はよく使われる。本講義では、将来のキャリア形成に活かせるよう、社会人として必要となる数的能力を高めることを目的とする。自力で解く、講師による解説、類題を解くという流れで、段階的に実践問題に取り組む。さまざまな問題を確実に理解し、解ける力を身につけていく。	
		インターンシップ	インターンシップの目的は、実際の仕事現場の一員として業務を担当することで、そこで働く人々がどのような考え方で働いているのか、特に「1) 仕事の社会における役割」「2) 仕事の成果とは」「3) 仕事の責任と充実感」を直接肌で感じることである。事前学習として、ビジネス組織のあり方、マナーや常識を修得する。インターンシップ先での実習参加の機会を最大限に活用し、自分や社会をより理解し、将来の選択肢や可能性を広げること、職業観の涵養に努めることを目標とする。事後学習も行う。	集中※講義
外国人留学生対象科目		日本事情 F I	年中行事やしきたりなど日常生活に見られる日本の伝統文化から、日本人の価値観や考え方について、体験もまじえながら考察する。日本の年中行事やしきたりについて理解を深め、考察したことや体験を通して学んだことを日本語で表現する力を身につける。日本文化・社会と自国の文化・社会及び他国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できるようになることを目標とする。	
		日本事情 F II	日本文化・社会について、日本映画を視聴して観察したり考察したりする。また、映画の台詞や使われている場面から日本語の文法や表現についても学ぶ。日本文化・社会について観察し、自国の文化・社会及び他の受講生の国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できることを目標とする。映画についての情報・その他背景知識についてまず説明し、映画の場面をいくつか視聴する中で内容理解・練習問題・その他の各種タスク問題を出し、テーマについてディスカッションをした後、「書く」練習を行う。	
		日本語読解 F I	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。読んだ内容を要約したり、口頭で説明する練習を行うことで、語彙力を向上させる。	
		日本語読解 F II	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。読んだ内容を要約し、口頭で説明する練習を行う。語彙力を向上させ、専門分野の文章を読むための読解力の基礎を身につける。	
		日本語文法 F I	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回、講義テーマを決め、教員による解説と練習を繰り返しながら進め、中上級～上級の文法項目が運用できるようになることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	外国人留学生対象科目	日本語文法 F II	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回、講義テーマを決め、教員による解説と練習を繰り返しながら進め、高度な日本語運用能力を身につけることを目標とする。	
		日本語表現作文 F I	本講義ではレポートや論文の基礎を学び、レポート・論文の文体と書き方を身につけることを目指す。レポートや論文の書き方について解説し、書く練習を行う。「①レポート・論文の文体で書ける」「②読んだ内容を要約できる」「③段落分けして書ける」「④経過説明、分類、定義など、書きたい内容に合う表現を使って書ける」「⑤信頼性の高い資料を集め、ルールを守って引用できるようになる」ことを目標とする。	
		日本語表現作文 F II	本講義では、実際にレポートを作成することを通し、レポート・論文の書き方を守ってレポートが作成できるようになることを目指す。テーマを決め、実際にレポートを作成していく。「①レポート・論文の文体で書ける」「②レポート・論文の書き方を守って書ける」「③アウトラインに沿って書ける」「④信頼性の高い資料を集められる」ことを目標とする。	
		日本語総合 F I	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。JLPTのN1に合格していない場合には、その対策も行なう。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。	
		日本語総合 F II	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。JLPTのN1に合格していない場合には、その対策も行なう。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。実際に日本社会で使用されている生教材を使って速読を行ない、できるだけ速く、自分に必要な情報を読み取る練習をする。	
		専門日本語 F I	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。本科目では、Eメールの書き方、自己PRの書き方、話の展開のさせ方を扱い、解説と練習を中心に進める。相手との関係、伝達内容、使用媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目標とする。	
		専門日本語 F II	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。ビジネス場面で使用する日本語表現、異文化ビジネスコミュニケーションについて学ぶ。用意した資料及びタスクシートをもとに講義、ディスカッション等を行う。ビジネス日本語・ビジネスマナー・日本の会社についての知識を得ることによって、日本での就職活動及び就職に必要な知識やスキルを身につけることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	外国人留学生対象科目	日本語会話F I	講義を理解する際に役立つメモの取り方を学ぶと同時に、アカデミック場面における口頭発表のスキルを養う。さまざまなテーマに関する話を聞き、聞きとった内容をメモした後、その内容について発表する。「①まとまりのある話を聞いて、適切にメモを取ることができる」「②適切な表現を用いて、論理的かつわかりやすい発表ができる」ようになることを目指す。	
		日本語会話F II	日本・国際社会におけるさまざまな問題や話題について日本語で議論する能力を伸ばす。さまざまな問題・話題に関するニュース等を見て、話し合う方法で進める。また、コースの後半は学生各自が興味のある話題を持ち寄って、話し合う方法をとる。社会的な話題について、日本語で論理的に意見を述べるができるようになることを目指す。	
	帰国学生対象科目	日本事情R I	年中行事やしきたりなど日常生活に見られる日本の伝統文化から、日本人の価値観や考え方について、体験もまじえながら考察する。用意したスライドやプリントに沿って、テーマについて学び、講義後に理解度の確認小テストを行う。その後、クラス全体でフィードバックを実施する。体験で学んだことはレポートを作成し、学生同士で意見交換を行う。異文化理解を深め、異文化に対する柔軟な見方、態度を養い、日本語の表現能力(技術)を高めることを目指す。	
		日本事情R II	日本文化・社会について、日本映画を視聴して観察したり考察したりする。また、映画の台詞や使われている場面から日本語の文法や表現についても学ぶ。各映画について、まず映画についての情報・その他背景知識について説明し、映画の場面をいくつか視聴する。その後、内容理解・練習問題・その他の各種タスク問題を行い、テーマについてディスカッションした後、「書く」練習をする。日本文化・社会について観察し、自国の文化・社会及び他の受講生の国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できることを目標とする。	
		日本語読解R	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。また、読んだ内容を要約したり、口頭で説明する練習を行う。専門分野の文章を読むための読解力の基礎を身につけることを目標とする。	
		日本語文法R	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回テーマを設け、解説と練習を繰り返しながら進める。中上級～上級の文法項目が運用でき、高度な日本語運用能力を身につけることを目標とする。	
		日本語表現作文R	本講義ではレポートや論文の基礎を学び、レポート・論文の文体と書き方を身につけることを目指す。レポートや論文の書き方について解説し、書く練習を行う。「①レポート・論文の文体で書ける」「②読んだ内容を要約できる」「③段落分けして書ける」「④経過説明、分類、定義など、書きたい内容に合う表現を使って書ける」「⑤信頼性の高い資料を集め、ルールを守って引用できる」ようになることを目標とする。	



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	帰国学生対象科目	日本語総合R	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。実際に日本社会で使用されている生教材を使って、速読を行ない、できるだけ速く、自分に必要な情報を読み取るための練習をする。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。	
		専門日本語R	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。Eメールの書き方、自己PRの書き方、話の展開のさせ方を扱い、解説と練習を中心に進める。相手との関係、伝達内容、使用媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目標とする。	
		日本語会話R	日本・国際社会におけるさまざまな問題や話題について日本語で議論する能力を伸ばす。さまざまな問題・話題に関するニュース等を見て、話し合う方法で進める。また、後半は学生各自が興味のある話題を持ち寄って、話し合う方法をとる。社会的な話題について、日本語で論理的に意見を述べるようになることを目指す。	

## 学校法人常翔学園 設置認可等に関する組織の移行表

平成 31 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	平成 32 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	変更の事由
<b>摂南大学</b>				<b>摂南大学</b>				
<b>理工学部</b>	<b>500</b>	<b>30</b>	<b>2,060</b>	<b>理工学部</b>	<b>500</b>	<b>30</b>	<b>2,060</b>	
生命科学科	90	5	370	生命科学科	90	5	370	
住環境デザイン学科	70	5	290	住環境デザイン学科	70	5	290	
建築学科	70	5	290	建築学科	70	5	290	
機械工学科	110	5	450	機械工学科	110	5	450	
電気電子工学科	90	5	370	電気電子工学科	90	5	370	
都市環境工学科	70	5	290	都市環境工学科	70	5	290	
<b>外国語学部</b>	<b>220</b>	<b>5</b>	<b>890</b>	<b>外国語学部</b>	<b>220</b>	<b>5</b>	<b>890</b>	
外国語学科	220	5	890	外国語学科	220	5	890	
<b>経営学部</b>	<b>270</b>	<b>8</b>	<b>1,096</b>	<b>経営学部</b>	<b>270</b>	<b>8</b>	<b>1,096</b>	
経営学科	170	4	688	経営学科	170	4	688	
経営情報学科	100	4	408	経営情報学科	100	4	408	
<b>薬学部</b>	<b>220</b>	<b>-</b>	<b>1,320</b>	<b>薬学部</b>	<b>220</b>	<b>-</b>	<b>1,320</b>	
薬学科	220	-	1,320	薬学科	220	-	1,320	
<b>法学部</b>	<b>250</b>	<b>5</b>	<b>1,010</b>	<b>法学部</b>	<b>250</b>	<b>5</b>	<b>1,010</b>	
法律学科	250	5	1,010	法律学科	250	5	1,010	
<b>経済学部</b>	<b>250</b>	<b>4</b>	<b>1,008</b>	<b>経済学部</b>	<b>250</b>	<b>4</b>	<b>1,008</b>	
経済学科	250	4	1,008	経済学科	250	4	1,008	
<b>看護学部</b>	<b>100</b>	<b>-</b>	<b>400</b>	<b>看護学部</b>	<b>100</b>	<b>-</b>	<b>400</b>	
看護学科	100	-	400	看護学科	100	-	400	
				<b>農学部</b>	<b>340</b>	<b>-</b>	<b>1,360</b>	学部の新設置 (認可申請)
				農業生産学科	80	-	320	
				応用生物科学科	80	-	320	
				食品栄養学科	80	-	320	
				食農ビジネス学科	100	-	400	
<b>計</b>	<b>1,810</b>	<b>52</b>	<b>7,784</b>	<b>計</b>	<b>2,150</b>	<b>52</b>	<b>9,144</b>	

平成 31 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	平成 32 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	変更の事由
<b>摂南大学大学院</b>				<b>摂南大学大学院</b>				
<b>薬学研究科</b>	<b>4</b>	<b>-</b>	<b>16</b>	<b>薬学研究科</b>	<b>4</b>	<b>-</b>	<b>16</b>	
医療薬学専攻 (D)	4	-	16	医療薬学専攻 (D)	4	-	16	
<b>理工学研究科</b>	<b>38</b>	<b>-</b>	<b>80</b>	<b>理工学研究科</b>	<b>38</b>	<b>-</b>	<b>80</b>	
社会開発工学専攻 (M)	12	-	24	社会開発工学専攻 (M)	12	-	24	
生産開発工学専攻 (M)	12	-	24	生産開発工学専攻 (M)	12	-	24	
生命科学専攻 (M)	10	-	20	生命科学専攻 (M)	10	-	20	
創生工学専攻 (D)	2	-	6	創生工学専攻 (D)	2	-	6	
生命科学専攻 (D)	2	-	6	生命科学専攻 (D)	2	-	6	
<b>経済経営学研究科</b>	<b>10</b>	<b>-</b>	<b>20</b>	<b>経済経営学研究科</b>	<b>10</b>	<b>-</b>	<b>20</b>	
経済学専攻 (M)	5	-	10	経済学専攻 (M)	5	-	10	
経営学専攻 (M)	5	-	10	経営学専攻 (M)	5	-	10	
<b>法学研究科</b>	<b>5</b>	<b>-</b>	<b>10</b>	<b>法学研究科</b>	<b>5</b>	<b>-</b>	<b>10</b>	
法律学専攻 (M)	5	-	10	法律学専攻 (M)	5	-	10	
<b>国際言語文化研究科</b>	<b>5</b>	<b>-</b>	<b>10</b>	<b>国際言語文化研究科</b>	<b>5</b>	<b>-</b>	<b>10</b>	
国際言語文化専攻 (M)	5	-	10	国際言語文化専攻 (M)	5	-	10	
<b>看護学研究科</b>	<b>6</b>	<b>-</b>	<b>12</b>	<b>看護学研究科</b>	<b>6</b>	<b>-</b>	<b>12</b>	
看護学専攻 (M)	6	-	12	看護学専攻 (M)	6	-	12	
<b>計</b>	<b>68</b>	<b>-</b>	<b>148</b>	<b>計</b>	<b>68</b>	<b>-</b>	<b>148</b>	

平成 31 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	平成 32 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	変更の事由
<b>大阪工業大学</b>				<b>大阪工業大学</b>				
<b>工学部</b>	<b>900</b>	<b>40</b>	<b>3,680</b>	<b>工学部</b>	<b>900</b>	<b>40</b>	<b>3,680</b>	
都市デザイン工学科	100	5	410	都市デザイン工学科	100	5	410	
建築学科	150	5	610	建築学科	150	5	610	
機械工学科	140	5	570	機械工学科	140	5	570	
電気電子システム工学科	125	5	510	電気電子システム工学科	125	5	510	
電子情報システム工学科	110	5	450	電子情報システム工学科	110	5	450	
応用化学科	130	5	530	応用化学科	130	5	530	
環境工学科	75	5	310	環境工学科	75	5	310	
生命工学科	70	5	290	生命工学科	70	5	290	
<b>ロボティクス&amp;デザイン工学部</b>	<b>280</b>	<b>15</b>	<b>1,150</b>	<b>ロボティクス&amp;デザイン工学部</b>	<b>280</b>	<b>15</b>	<b>1,150</b>	
ロボット工学科	90	5	370	ロボット工学科	90	5	370	
システムデザイン工学科	90	5	370	システムデザイン工学科	90	5	370	
空間デザイン学科	100	5	410	空間デザイン学科	100	5	410	
<b>情報科学部</b>	<b>420</b>	<b>20</b>	<b>1,720</b>	<b>情報科学部</b>	<b>420</b>	<b>20</b>	<b>1,720</b>	
情報知能学科	105	5	430	情報知能学科	105	5	430	
情報システム学科	105	5	430	情報システム学科	105	5	430	
情報メディア学科	105	5	430	情報メディア学科	105	5	430	
ネットワークデザイン学科	105	5	430	ネットワークデザイン学科	105	5	430	
<b>知的財産学部</b>	<b>140</b>	<b>10</b>	<b>580</b>	<b>知的財産学部</b>	<b>140</b>	<b>10</b>	<b>580</b>	
知的財産学科	140	10	580	知的財産学科	140	10	580	
<b>計</b>	<b>1,740</b>	<b>85</b>	<b>7,130</b>	<b>計</b>	<b>1,740</b>	<b>85</b>	<b>7,130</b>	

平成 31 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	平成 32 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	変更の事由
<b>大阪工業大学大学院</b>				<b>大阪工業大学大学院</b>				
<b>工学研究科</b>	<b>116</b>	<b>-</b>	<b>238</b>	<b>工学研究科</b>	<b>116</b>	<b>-</b>	<b>238</b>	
建築・都市デザイン工学専攻 (M)	30	-	60	建築・都市デザイン工学専攻 (M)	30	-	60	
建築・都市デザイン工学専攻 (D)	2	-	6	建築・都市デザイン工学専攻 (D)	2	-	6	
電気電子・機械工学専攻 (M)	50	-	100	電気電子・機械工学専攻 (M)	50	-	100	
電気電子・機械工学専攻 (D)	2	-	6	電気電子・機械工学専攻 (D)	2	-	6	
化学・環境・生命工学専攻 (M)	30	-	60	化学・環境・生命工学専攻 (M)	30	-	60	
化学・環境・生命工学専攻 (D)	2	-	6	化学・環境・生命工学専攻 (D)	2	-	6	
<b>ロボティクス&amp;デザイン工学研究科</b>	<b>32</b>	<b>-</b>	<b>66</b>	<b>ロボティクス&amp;デザイン工学研究科</b>	<b>32</b>	<b>-</b>	<b>66</b>	
ロボティクス&デザイン工学専攻 (M)	30	-	60	ロボティクス&デザイン工学専攻 (M)	30	-	60	
ロボティクス&デザイン工学専攻 (D)	2	-	6	ロボティクス&デザイン工学専攻 (D)	2	-	6	
<b>情報科学研究科</b>	<b>45</b>	<b>-</b>	<b>95</b>	<b>情報科学研究科</b>	<b>45</b>	<b>-</b>	<b>95</b>	
情報科学専攻 (M)	40	-	80	情報科学専攻 (M)	40	-	80	
情報科学専攻 (D)	5	-	15	情報科学専攻 (D)	5	-	15	
<b>知的財産研究科</b>	<b>30</b>	<b>-</b>	<b>60</b>	<b>知的財産研究科</b>	<b>30</b>	<b>-</b>	<b>60</b>	
知的財産専攻 (P)	30	-	60	知的財産専攻 (P)	30	-	60	
<b>計</b>	<b>223</b>	<b>-</b>	<b>459</b>	<b>計</b>	<b>223</b>	<b>-</b>	<b>459</b>	

平成 31 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	平成 32 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	変更の事由
<b>広島国際大学</b>				<b>広島国際大学</b>				
<b>保健医療学部</b>	<b>200</b>	-	<b>800</b>	<b>保健医療学部</b>	<b>220</b>	-	<b>880</b>	
診療放射線学科	70	-	280	診療放射線学科	70	-	280	
医療技術学科	130	-	520	医療技術学科	100	-	400	定員変更 (△30)
(臨床工学専攻)				(臨床工学専攻)				
(臨床検査学専攻)				(臨床検査学専攻)				
(救急救命学専攻)				救急救命学科	50	-	200	学科の設置 (届出)
<b>総合リハビリテーション学部</b>	<b>160</b>	-	<b>640</b>	<b>総合リハビリテーション学部</b>	<b>180</b>	-	<b>720</b>	
リハビリテーション学科	130	-	520	リハビリテーション学科	180	-	720	定員変更 (50)
(理学療法学専攻)				(理学療法学専攻)				
(作業療法学専攻)				(作業療法学専攻)				
(言語聴覚療法学専攻)				(言語聴覚療法学専攻)				
リハビリテーション支援学科	30	-	120		0	-	0	平成32年4月学生募集停止
(義肢装具学専攻)								
<b>医療福祉学部</b>	<b>100</b>	<b>10</b>	<b>420</b>		<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	平成32年4月学生募集停止
医療福祉学科	100	10	420		0	0	0	平成32年4月学生募集停止
(医療福祉学専攻)								
(介護福祉学専攻)								
(保育学専攻)								
<b>医療経営学部</b>	<b>90</b>	-	<b>360</b>		<b>0</b>	-	<b>0</b>	
医療経営学科	90	-	360		0	-	0	平成32年4月学生募集停止
<b>心理学部</b>	<b>90</b>	<b>10</b>	<b>380</b>		<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	
心理学科	90	10	380		0	0	0	平成32年4月学生募集停止
<b>看護学部</b>	<b>120</b>	<b>10</b>	<b>500</b>	<b>看護学部</b>	<b>120</b>	<b>10</b>	<b>500</b>	
看護学科	120	10	500	看護学科	120	10	500	
<b>薬学部</b>	<b>120</b>	-	<b>720</b>	<b>薬学部</b>	<b>120</b>	-	<b>720</b>	
薬学科	120	-	720	薬学科	120	-	720	
<b>医療栄養学部</b>	<b>60</b>	-	<b>240</b>		<b>0</b>	-	<b>0</b>	
医療栄養学科	60	-	240		0	-	0	平成32年4月学生募集停止
				<b>健康科学部</b>	<b>350</b>	-	<b>1,400</b>	学部 <sup>1</sup> の設置 (届出)
				医療福祉学科	100	-	400	
				(医療福祉学専攻)				
				(介護福祉学専攻)				
				(保育福祉学専攻)				
				医療経営学科	90	-	360	
				心理学科	100	-	400	
				医療栄養学科	60	-	240	
				<b>健康スポーツ学部</b>	<b>70</b>	-	<b>280</b>	学部 <sup>2</sup> の設置 (認可申請)
				健康スポーツ学科	70	-	280	
<b>計</b>	<b>940</b>	<b>30</b>	<b>4,060</b>	<b>計</b>	<b>1,060</b>	<b>10</b>	<b>4,500</b>	

平成 31 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	平成 32 年度	入学 定員	3年次 編入学 定員	収容 定員 (完成年度)	変更の事由
<b>広島国際大学大学院</b>				<b>広島国際大学大学院</b>				
<b>看護学研究科</b>	<b>13</b>	<b>-</b>	<b>29</b>	<b>看護学研究科</b>	<b>13</b>	<b>-</b>	<b>29</b>	
看護学専攻 (M)	10	-	20	看護学専攻 (M)	10	-	20	
看護学専攻 (D)	3	-	9	看護学専攻 (D)	3	-	9	
<b>医療・福祉科学研究科</b>	<b>22</b>	<b>-</b>	<b>46</b>	<b>医療・福祉科学研究科</b>	<b>22</b>	<b>-</b>	<b>46</b>	
医療工学専攻 (M)	10	-	20	医療工学専攻 (M)	10	-	20	
医療工学専攻 (D)	2	-	6	医療工学専攻 (D)	2	-	6	
医療福祉学専攻 (M)	5	-	10	医療福祉学専攻 (M)	5	-	10	
医療経営学専攻 (M)	5	-	10	医療経営学専攻 (M)	5	-	10	
<b>心理科学研究科</b>	<b>22</b>	<b>-</b>	<b>46</b>	<b>心理科学研究科</b>	<b>22</b>	<b>-</b>	<b>46</b>	
臨床心理学専攻 (D)	2	-	6	臨床心理学専攻 (D)	2	-	6	
コミュニケーション学専攻 (M) ※平成 31 年 4 月学生募集停止予定	0	-	0					
実践臨床心理学専攻 (P)	20	-	40	実践臨床心理学専攻 (P)	20	-	40	
<b>薬学研究科</b>	<b>2</b>	<b>-</b>	<b>8</b>	<b>薬学研究科</b>	<b>2</b>	<b>-</b>	<b>8</b>	
医療薬学専攻 (D)	2	-	8	医療薬学専攻 (D)	2	-	8	
<b>計</b>	<b>59</b>	<b>-</b>	<b>129</b>	<b>計</b>	<b>59</b>	<b>-</b>	<b>129</b>	